(財)東大阪市文化財協会概報集

１９８８年度

1989．3

財団法人　東大阪市文化財協会

はしがき

本協会が、昭和57年２月に発足し、早や７年が過ぎようとしています。この間、東大阪市域の文化財調査・保存を主たる業務に活動を続けてまいりました。特に、埋蔵文化財発掘調査事業は東大阪市教育委員会の依頼にもとづいて実施いたしており、ここ数年の調査件数は増加の傾向にありますが、発掘調査後のぼう大な量の整理作業は困難な状況におかれています。

今回報告の運びとなりました稲葉遺跡・西ノ辻遺跡・千手寺山遺跡・若江遺跡・弥刀遺跡・西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・段上遺跡それぞれの調査も、本協会が昭和57年発足以後に調査を実施してまいったものとそれ以前に実施した調査報告をも合わせて刊行するものです。収録した内容は、東大阪市のみならず、河内・近畿地方の歴史研究の上で欠くことのできない貴重な資料であります。各々の調査で得られた数多くの調査成果が、広く市民に利用され、文化財に対するご理解と保存に役立てば幸いかと存じます。

最後に、各々の調査でご協力を賜わった関係各位に心からお礼を申しあげるとともに今後とも、ご支援・ご指導をお願いする次第です。

平成元年３月31日

財団法人　東大阪市文化財協会
理事長　木　寺　　宏

例　　言

1．本書は、財団法人東大阪市文化財協会及び旧東大阪市遺跡保護調査会が実施した稲葉遺跡・西ノ辻遺跡・千手寺山遺跡・若江遺跡・弥刀遺跡・西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・段上遺跡の発掘調査概報集である。

2．調査並びに本報告書については以下の事務局体制で実施した。（平成元年３月31日現在）

事務局長　寺澤　勝
事務局付　河本　正
調査部長　原田　修
調査副部長　福永　信雄
調査副部長　芋本　隆裕
調査部員　上野　節子
庶務部長　下村　晴文
庶務副部長　勝田　邦夫
庶務部員　安藤　紀子

3．調査の担当及び報告書執筆は以下のとおりである。

稲葉遺跡第１次発掘調査概報……上野利明
西ノ辻遺跡第24次発掘調査概報……吉村博恵・中西克宏
千手寺山遺跡第２次発掘調査概報……中西克宏
若江遺跡第28次発掘調査概報……才原金弘
弥刀遺跡第５次発掘調査概報……芋本隆裕
西岩田遺跡第11次発掘調査概報……芋本隆裕
瓜生堂遺跡発掘調査概報……芋本隆裕
段上遺跡の調査……原田　修
瓜生堂遺跡の調査……原田　修
西岩田遺跡第８次発掘調査概報……松田順一郎

4．調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準じた。

本 文 目 次

稲葉遺跡第１次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 1
Ⅱ．位置と環境…… 2
Ⅲ．調査の概要…… 4
1．層位…… 4
2．遺構…… 4
3．微化石分析…… 6
Ⅳ．まとめ…… 14
西ノ辻遺跡第24次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 15
Ⅱ．位置と環境…… 16
Ⅲ．調査の概要…… 16
1．層位…… 18
2．遺構…… 18
3．出土遺物…… 21
Ⅳ．まとめ…… 23
千手寺山遺跡第２次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 25
Ⅱ．位置と環境…… 26
Ⅲ．調査の概要…… 28
1．層位…… 28
2．遺構…… 33
3．遺物…… 34
Ⅳ．珠文鏡の材質調査…… 40
Ⅴ．まとめ…… 42
若江遺跡第28次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 43
Ⅱ．位置と環境…… 44
Ⅲ．調査の概要…… 46
1．調査の方法…… 46
2．層位…… 46
3．遺構…… 48

4．出土遺物…… 53
Ⅳ．まとめ…… 71
弥刀遺跡第５次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 73
Ⅱ．位置と環境…… 74
Ⅲ．調査結果…… 75
1．層序…… 75
2．遺構…… 76
3．出土遺物…… 82
Ⅳ．まとめ…… 85
西岩田遺跡第11次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 87
Ⅱ．遺跡の立地環境…… 88
Ⅲ．調査の概要
1．層序…… 91
2．遺構…… 92
3．出土遺物…… 94
Ⅳ．まとめ…… 101
瓜生堂遺跡発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 103
Ⅱ．位置と環境…… 104
Ⅲ．調査の概要…… 106
1．層序…… 106
2．遺構…… 107
3．出土遺物…… 113
Ⅳ．まとめ…… 130
段上遺跡の調査
Ⅰ．遺跡の位置…… 133
Ⅱ．調査の経過…… 134
Ⅲ．調査結果 …… 134
Ⅳ．まとめ…… 137
瓜生堂遺跡の調査ーガソリンスタンド建設に伴う調査 …… 139
Ⅰ．調査の経過…… 139
Ⅱ．調査の結果…… 140
Ⅲ．出土遺物…… 141

Ⅳ．まとめ…… 142
西岩田遺跡第８次発掘調査概報
Ⅰ．調査に至る経過…… 147
Ⅱ．位置と環境…… 148
Ⅲ．調査の概要…… 149
Ⅳ．まとめ…… 154

図 版 目 次

稲葉遺跡第１次調査報告

図版１　稲葉遺跡遺構　１．水田畦畔（東より）　２．水田畦畔東半部（北より）

図版２　稲葉遺跡遺構　１．水田畦畔（西より）　２．調査地点全景

図版３　遺構・微化石　１．上部水田畦畔断面

図版４　微化石

西ノ辻遺跡第24次発掘調査概報

図版５　西ノ辻遺跡遺構　１．弥生時代中期遺構（西より）

２．弥生時代中期遺構（南より）

図版６　西ノ辻遺跡遺構　１．弥生時代中期遺構（北より）　２．溝２（南より）

図版７　西ノ辻遺跡遺物　１．溝１出土土器　２．溝１出土土器

図版８　西ノ辻遺跡遺物　１．溝２出土土器　２．溝１・２出土打製石鏃

３．溝２出土土器

千手寺山遺跡第２次発掘調査概報

図版９　千手寺山遺跡調査地遠景

図版10　千手寺山遺跡遺構　１．段検出状況　２．段検出状況

図版11　千手寺山遺跡遺構　１．４ライン東西断面　２．トレンチ北壁断面

図版12　千手寺山遺跡遺構　１．遺物出土状況　２．土器出土状況（部分）

図版13　千手寺山遺跡遺構　１．土器出土状況（部分）　２．珠文鏡出土状況

図版14　千手寺山遺跡遺構　１．地山上面遺構検出状況　２．土坑１検出状況

図版15　千手寺山遺跡遺構　１．Ｐｉｔ検出状況　２．Ｐｉｔ立ち割り状況

図版16　千手寺山遺跡遺構　１．池検出状況（西より）　２．池堆積状況（北より）

図版17　千手寺山遺跡遺物　１．第６層出土土器　２．第６層出土土器

図版18　千手寺山遺跡遺物　１．珠文鏡　２．珠文鏡

若江遺跡第28次発掘調査概報

図版19　若江遺跡遺構　１．溝１～４　２．溝１

図版20　若江遺跡遺構　１．溝２・３　２．溝２・３

図版21　若江遺跡遺構　１．遺構全景　２．遺構全景

図版22　若江遺跡遺構　１．井戸１・２、土坑１～３　２．井戸１・２、土坑３

図版23　若江遺跡遺構　１．井戸１・２、土坑３　２．井戸３、ピット群

図版24　若江遺跡遺構　１．井戸２　２．井戸２瓦積み状況

図版25　若江遺跡遺構　１．井戸２内遺物出土状況　２．井戸２内曲物

図版26　若江遺跡遺構　１．井戸１内曲物１～３　２．井戸１内曲物１・３

図版27　若江遺跡遺構　1．井戸1内曲物2　2．井戸1内曲物3
図版28　若江遺跡遺構　1．井戸1内曲物1
2．井戸1、曲物1内遺物出土状況
図版29　若江遺跡遺構　1．井戸4　2．井戸4タガ検出状況
図版30　若江遺跡遺構　1．井戸3　2．井戸3内曲物
図版31　若江遺跡遺構　1．土坑2　2．土坑3
図版32　若江遺跡遺構　1．土坑4　2．溝5・6
図版33　若江遺跡遺物　1．井戸1出土土器　瓦器皿、土師器皿・ミニチュア羽釜・箸置き
図版34　若江遺跡遺物　1．井戸2出土土器　瓦器椀
図版35　若江遺跡遺物　1．井戸2出土土器　瓦器椀
図版36　若江遺跡遺物　1．井戸2・3、土坑3出土土器　瓦器椀・皿、土師器皿・台付皿杯
図版37　若江遺跡遺物　1．土坑2、溝4、包含層出土土器　土師器皿、瓦器皿・火舎
図版38　若江遺跡遺物　1．包含層出土土器　土師器小皿、瓦器椀・台付皿
図版39　若江遺跡遺物　1．井戸1出土土器　瓦器椀・鉢
2．井戸1出土土器　瓦器椀・小型椀、須恵器捏鉢、土師器羽釜、白磁椀
図版40　若江遺跡遺物　1．井戸1出土土器　土師器皿
2．井戸1出土土器　土師器皿、瓦器椀
図版41　若江遺跡遺物　1．井戸1出土土器　土師器皿・羽釜、瓦器椀、白磁椀
2．井戸2出土土器　瓦器椀・皿・羽釜、須恵器捏鉢、土師器羽釜、白磁椀
図版42　若江遺跡遺物　1．井戸3・4出土土器　土師器皿・甕、瓦器椀・羽釜、白磁椀
2．土坑1出土土器　土師器皿、瓦器椀・皿
図版43　若江遺跡遺物　1．土坑2出土土器　土師器皿・瓦器椀・皿、青磁椀
2．土坑3出土土器　土師器皿・杯・羽釜・甕　黒色土器椀・把手付鉢、須恵器捏鉢
図版44　若江遺跡遺物　1．溝4出土土器　青磁椀・皿、白磁椀
2．溝4出土土器　瓦器火舎・擂鉢、備前焼擂鉢、陶器椀・鉢、須恵器甕
図版45　若江遺跡遺物　1．溝4出土土器　瓦器羽釜

2．溝4出土土器　瓦器椀・羽釜・香炉、須恵器壷、
土師器皿・羽釜

図版46　若江遺跡遺物　1．溝1・2・5・6出土土器　瓦器椀・羽釜・甕、
土師器皿、陶器天目椀、備前焼摺鉢、
須恵器捏鉢、布留式甕

図版47　若江遺跡遺物　1．包含層出土土器　土師器杯・皿、瓦器椀・皿
2．包含層出土土器　白磁椀・皿、青磁椀

図版48　若江遺跡遺物　1．軒平瓦・軒丸瓦

図版49　若江遺跡遺物　1．包含層出土土器　土師器皿
2．包含層出土土器　土師器皿

図版50　若江遺跡遺物　1．円筒埴輪　　2．土製品、石製品

弥刀遺跡第5次発掘調査概報

図版51　弥刀遺跡遺構　1．弥刀遺跡第5次調査地全景（北東より）
2．調査風景（南より）

図版52　弥刀遺跡遺構　1．A地区全景（南より）
2．B地区全景（南より）

図版53　弥刀遺跡遺構　1．E地区全景（東より）
2．C地区全景（南より）

図版54　弥刀遺跡遺構　1．D地区全景（南より）
2．D地区柱根出土状況

図版55　弥刀遺跡遺構　1．D地区井戸
2．D地区井戸（井戸枠検出状況）

図版56　弥刀遺跡遺構　1．D地区井戸（桶側の井戸枠検出状況）
2．C地区瓦器椀・土師器皿出土状況

図版57　弥刀遺跡遺物　1．弥刀遺跡第5次調査出土土器(1)　土師器・瓦器

図版58　弥刀遺跡遺物　1．弥刀遺跡第5次調査出土土器(2)　瓦器・青磁
2．弥刀遺跡第5次調査出土土器(3)　須恵器・土師器・
黒色土器・製塩土器

図版59　弥刀遺跡遺物　1．弥刀遺跡第5次調査出土土器(4)　土師器・瓦器
2．弥刀遺跡第5次調査出土土器(5)　須恵器・瓦器・陶器

西岩田遺跡第11次発掘調査概報

図版60　西岩田遺跡遺構　1．西岩田遺跡第11次調査地（北より）
2．第3層下面におけるピット検出状況

図版61　西岩田遺跡遺構　1．人孔部分全景（北より）
2．人孔部分第4層内の広口壷・甕出土状態

図版62　西岩田遺跡遺構　1．掘立柱建物の柱穴検出状態
2．溝検出状態（南より）
図版63　西岩田遺跡遺構　1．調査風景
2．江戸時代の畑跡
図版64　西岩田遺跡遺物　1．第4層出土土器
図版65　西岩田遺跡遺物　1．第4層出土土器
図版66　西岩田遺跡遺物　1．第4層出土土器　2．第3層出土土器
図版67　西岩田遺跡遺物　1．第4層出土土器　2．第4層出土土器

瓜生堂遺跡発掘調査概報

図版68　瓜生堂遺跡遺構　1．瓜生堂遺跡第11次調査地全景（西より）
2．調査地の土層全景（東より）
図版69　瓜生堂遺跡遺構　1．西壁断面と弥生時代中期の遺構（東より）
2．弥生時代中期の遺構（調査地西部）
図版70　瓜生堂遺跡遺構　1．北壁断面（調査地中央西半部）
2．弥生時代中期の遺構（調査地中央西半部）
図版71　瓜生堂遺跡遺構　1．北壁断面（調査地中央東半部）
2．弥生時代中期の遺構（調査地中央東半部）
図版72　瓜生堂遺跡遺構　1．北壁断面（調査地東部）
2．弥生時代中期の遺構（調査地東部）
図版73　瓜生堂遺跡遺構　1．土坑1上部及び南肩部出土の弥生土器（南より）
2．土坑1下部出土の手網枠（東より）
図版74　瓜生堂遺跡遺構　1．井戸1と底部より出土した水差形土器
2．北壁内で検出された掘立柱の柱根
図版75　瓜生堂遺跡遺構　1．土坑2内出土の弥生土器（南より）
2．土坑2（遺物取上げ後）
図版76　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　壺・器台
図版77　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　台付鉢・水差・高杯・無頸壺
図版78　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　甕・高杯・脚台・土製紡錘車
図版79　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　壺
2．弥生土器　壺
図版80　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　壺
2．弥生土器　壺・水差・台付無頸壺
図版81　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　甕
2．弥生土器　甕
図版82　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　甕

2．弥生土器　甕
図版83　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　甕
2．弥生土器　甕
図版84　瓜生堂遺跡遺物　1．弥生土器　台付鉢・高杯
2．弥生土器　鉢・高杯・ミニチュア土器
図版85　瓜生堂遺跡遺物　1．打製石鏃・磨製石鏃・磨製石剣・石錐未成品
2．石槍・石錐・石器未成品
図版86　瓜生堂遺跡遺物　1．石庖丁・大型三角形石庖丁
2．紡錘車・石斧・砥石

段上遺跡の調査
図版87　段上遺跡遺構　1．調査地遠景
2．弥生土器（中期）出土状況
図版88　段上遺跡遺物　1．弥生土器
図版89　段上遺跡遺物　1．弥生土器

瓜生堂遺跡の調査－ガソリンスタンド建設に伴う調査－
図版90　瓜生堂遺跡遺物　1．子持勾玉、須恵器、土師器、緑釉陶器

西岩田遺跡第８次発掘調査概報
図版91　西岩田遺跡遺構　1．調査地風景　2．調査風景
図版92　西岩田遺跡遺構　1．第１トレンチ断面　2．第２トレンチ断面
図版93　西岩田遺跡遺構　1．第３トレンチ断面　2．第４トレンチ断面
図版94　西岩田遺跡遺構　1．第５トレンチ断面　2．第６トレンチ断面
図版95　西岩田遺跡遺構　1．第７トレンチ断面　2．第８トレンチ断面
図版96　西岩田遺跡遺構　1．第９トレンチ断面　2．第10トレンチ断面

挿　図　目　次

稲葉遺跡第１次調査概報

第 1 図　調査地点位置図（1/2500）…… 1
第 2 図　遺跡分布図（1/50000）…… 2
第 3 図　遺跡周辺地形図（1/40000）…… 3
第 4 図　遺構平面図、断面実測図…… 5
第 5 図　稲葉遺跡花粉分析試料採取地点土層模式柱状図…… 8
第 6 図　稲葉遺跡試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム…… 10

西ノ辻遺跡第24次発掘調査概報

第 7 図　西ノ辻遺跡調査地点図…… 15
第 8 図　遺跡周辺図…… 17
第 9 図　層位図…… 19
第 10 図　遺構平面実測図…… 20
第 11 図　溝1出土土器実測図…… 21
第 12 図　溝2出土土器実測図…… 22
第 13 図　打製石鏃実測図…… 23
第 14 図　弥生時代中期遺構略図…… 24

千手寺山遺跡第2次発掘調査概報

第 15 図　調査地点位置図…… 25
第 16 図　遺跡分布図…… 27
第 17 図　調査区断面図…… 29～30
第 18 図　調査地点地区割図…… 31
第 19 図　調査地点遺物包含層平面分布図…… 32
第 20 図　第6層遺物出土状況実測図…… 33
第 21 図　土坑1実測図…… 34
第 22 図　地山上面遺構検出状況…… 35
第 23 図　Ｐｉｔ群実測図…… 36
第 24 図　出土遺物実測図…… 38
第 25 図　鏡実測図…… 38
第 26 図　螢光Ｘ線分析法（非破壊法）による材質の比較…… 41

若江遺跡第28次発掘調査概報

第 27 図　調査地点位置図…… 43
第 28 図　遺跡周辺図…… 45
第 29 図　断面実測図…… 47
第 30 図　遺構実測図…… 49～50
第 31 図　井戸1～4実測図…… 52
第 32 図　井戸1出土土器実測図…… 54
第 33 図　井戸1、曲物1・2・3出土土器実測図…… 55
第 34 図　井戸2出土土器実測図…… 57
第 35 図　井戸3・4出土土器実測図…… 59
第 36 図　土坑1・2・3出土土器実測図…… 60
第 37 図　溝4出土土器実測図…… 62
第 38 図　溝4出土土器実測図…… 63

第 39 図　溝1・2・5・6出土土器実測図…… 64
第 40 図　包含層出土土器実測図…… 65
第 41 図　包含層出土土器実測図…… 67
第 42 図　瓦・土製品実測図…… 69
第 43 図　石製品・埴輪実測図…… 70

弥刀遺跡第5次発掘調査概報

第 44 図　弥刀遺跡位置図…… 74
第 45 図　弥刀遺跡第5次調査トレンチ配置図…… 75
第 46 図　A・D・F地区の層序（1/80）…… 77
第 47 図　B地区・F地区土層断面図（1/80）…… 78
第 48 図　A地区・F地区平面図（1/80）…… 79
第 49 図　D地区・F地区平面図（1/80）…… 80
第 50 図　H・L・M地区の層序と遺構…… 81
第 51 図　出土土器(1)…… 83
第 52 図　出土土器(2)…… 84
第 53 図　「綿圃要務」に描かれた新田での綿作風景…… 85

西岩田遺跡第11次発掘調査概報

第 54 図　遺跡分布図…… 89
第 55 図　河内湖1の時代（左）、河内湖2の時代（右）における西岩田遺跡の位置 … 90
第 56 図　西岩田遺跡第11次調査地（人孔部分）の層序…… 92
第 57 図　検出された遺構…… 93
第 58 図　第4層出土土器…… 95
第 59 図　第4層・第3層出土土器…… 97
第 60 図　東海系台付甕（1/2）…… 98

瓜生堂遺跡発掘調査概報

第 61 図　遺跡分布図…… 105
第 62 図　調査地西壁断面図（1/60）…… 107
第 63 図　瓜生堂遺跡調査地平面図・北壁断面図（1/100）…… 108
第 64 図　土坑1出土土器1（1/4）…… 115
第 65 図　土坑1出土土器2（1/4）…… 116
第 66 図　土坑1出土土器3（1/4）…… 117
第 67 図　遺構内出土土器4（1/4）…… 119
第 68 図　遺物包含層（第10層）出土土器1（1/4）…… 120
第 69 図　遺物包含層出土土器2（1/4）…… 121
第 70 図　遺物包含層出土土器3（1/4）…… 122

第 71 図　遺物包含層出土土器 4 （1/4） …… 123
第 72 図　打製石器実測図（1/2） …… 125
第 73 図　打製石器・磨製石器・土製品実測図（1/2） …… 126
第 74 図　磨製石器実測図（1/2） …… 127
第 75 図　手網枠実測図（1/5） …… 128
第 76 図　上層出土遺物…… 129

段上遺跡の調査

第 77 図　段上遺跡調査地点と周辺の遺跡…… 133
第 78 図　調査地点位置図…… 134
第 79 図　調査地点の層序…… 135
第 80 図　人孔部弥生土器（中期）出土状況略測図（1/30） …… 135
第 81 図　弥生土器（中期1/4） …… 136
第 82 図　弥生土器（後期1/4） …… 137

瓜生堂遺跡の調査－ガソリンスタンド建設に伴う調査－

第 83 図　瓜生堂遺跡と調査地点…… 139
第 84 図　調査地点周辺図…… 140
第 85 図　調査地点の層序断面図…… 141
第 86 図　調査地平面図…… 141
第 87 図　須恵器・土師器（1/4） …… 142
第 88 図　子持勾玉（1/2） …… 142
第 89 図　市内出土の子持勾玉…… 143

西岩田遺跡第 8 次発掘調査概報

第 90 図　西岩田遺跡周辺図…… 147
第 91 図　トレンチ位置図…… 148
第 92 図　第 1 トレンチ北側断面図…… 149
第 93 図　第 2 トレンチ北側断面図…… 150
第 94 図　第 3 トレンチ南側断面図…… 150
第 95 図　第 4 トレンチ北側断面図…… 151
第 96 図　第 5 トレンチ北側断面図…… 151
第 97 図　第 6 トレンチ北側断面実測図…… 152
第 98 図　第 7 トレンチ南側断面図…… 152
第 99 図　第 8 トレンチ南側断面図…… 153
第 100 図　第 9 トレンチ北側断面図…… 153
第 101 図　第10トレンチ北側断面図…… 154

表　目　次

稲葉遺跡第１次調査報告
表１　稲葉遺跡試料花粉分析結果…… 9
表２　検出花粉・胞子化石一覧表…… 11～13
千手寺山遺跡第２次発掘調査概報
表３　検出遺構一覧表…… 37
瓜生堂遺跡発掘調査概報
表４　土坑・ピット計測値一覧表 …… 111～112
瓜生堂遺跡の調査－ガソリンスタンド建設に伴う調査－
表５　瓜生堂遺跡調査一覧 …… 144～146

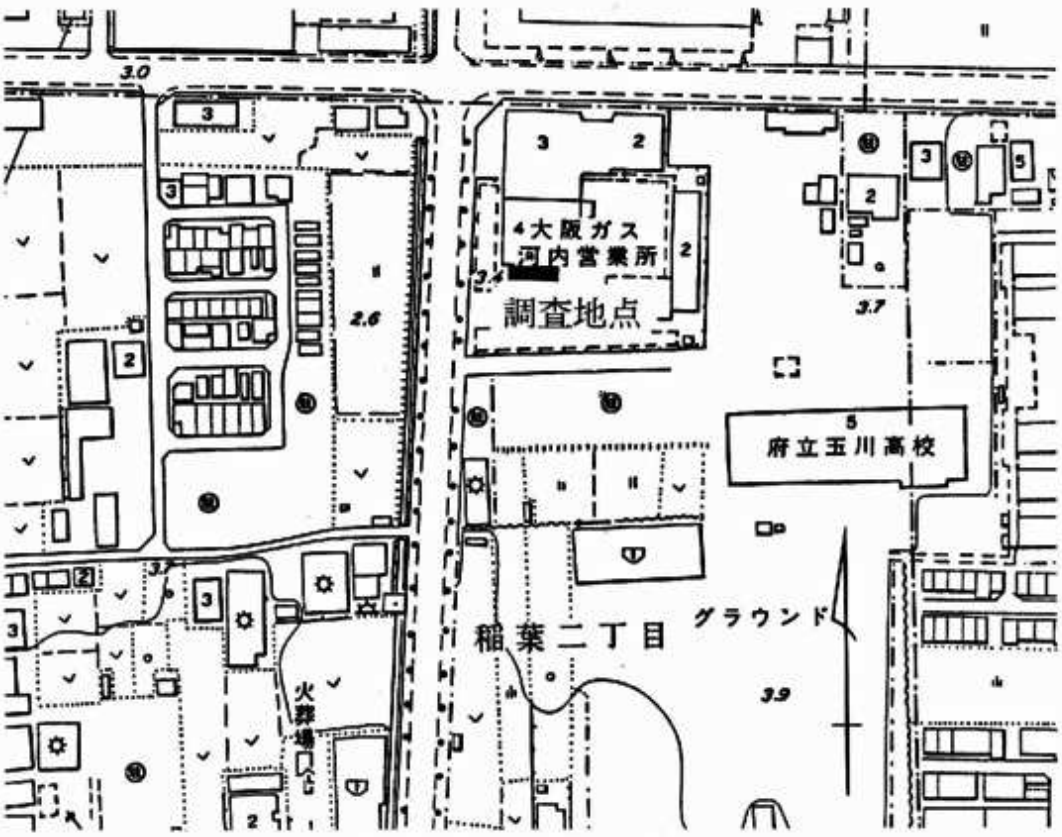
稲葉遺跡第１次発掘調査報告

Ⅰ　調査に至る経過

稲葉遺跡は、昭和58年、大阪府立玉川高等学校の建設に際して発見され、新遺跡として周知せられるようになった。遺跡の範囲は、同高校を中心として東大阪市稲葉・古田にまたがって広がると考えられている。発掘調査は昭和58・59年と実施され、弥生時代前期より近代に至る遺構、遺物が検出されている。特に、弥生時代前期の遺構は、東大阪市域では山賀遺跡・鬼塚遺跡・鬼虎川遺跡など生駒山麓部、及び、楠根川（第２寝屋川）の流域に確認されているのみである。このような点から、河内地域における遺跡の立地条件を考えるうえで、当遺跡の発見は重要な意味をもつとされていた。

今回、大阪ガス株式会社東部支社の増築が計画され、東大阪市教育委員会との協議が行われた。その結果、計画地点が玉川高校から西へ約100ｍという近距離にあることから、遺構の存在が予想されたため、発掘調査の実施が決定した。

発掘調査は、約114㎡を対象として、昭和59年８月17日より開始し、９月21日に終了した。



第１図　調査地点位置図（1/2500）

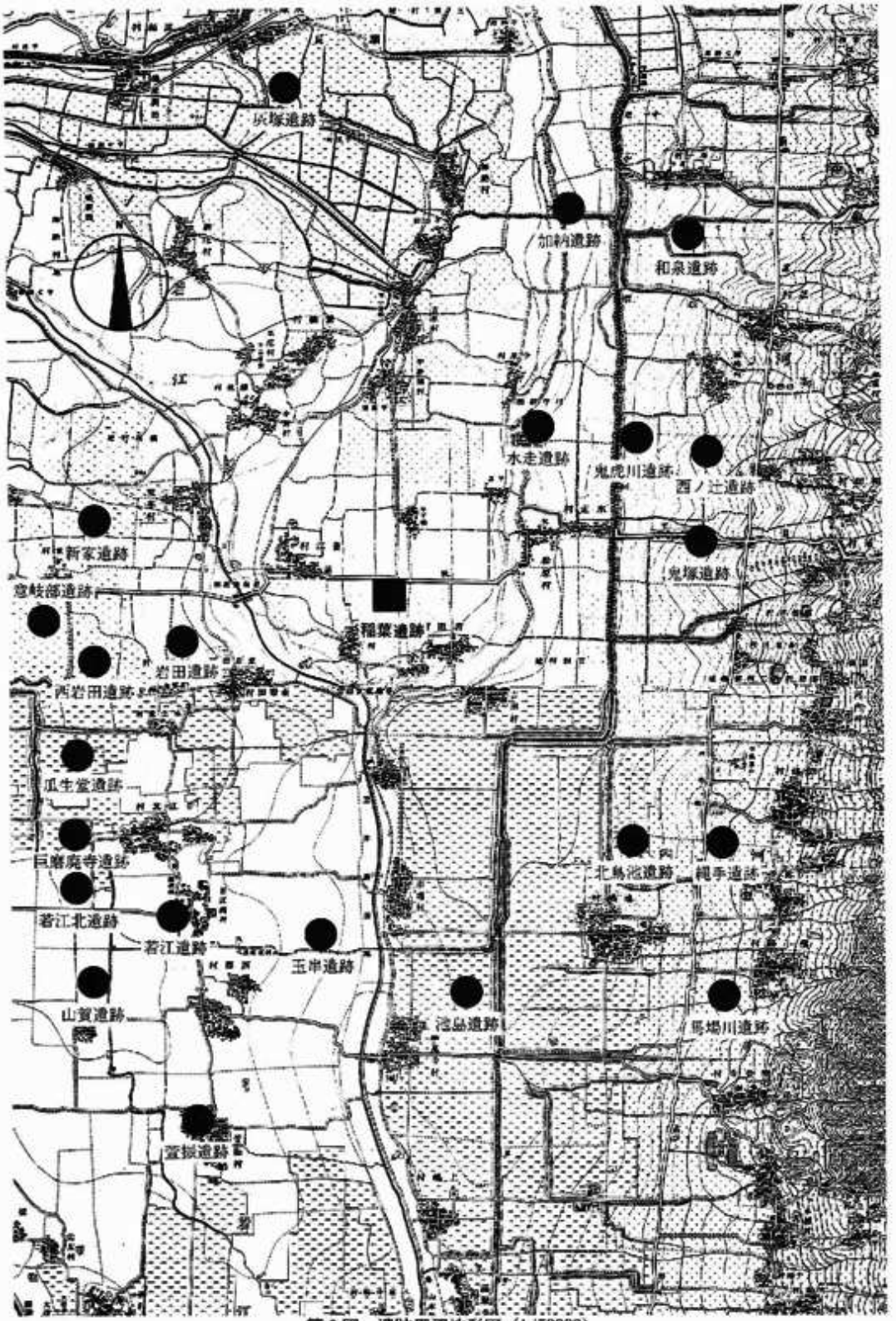
II　位置と環境

今回の調査地点は、東大阪市のほぼ中央、標高４ｍ前後の平地に位置する。行政区画では、東大阪市稲葉２丁目にあたる。周辺は、近年まで耕作地としての利用が盛んなところであったが、近畿日本鉄道奈良線と東大阪線に挟まれた地域であることから、開発の波が押し寄せ、現在では住宅地として急激な変貌をとげている。

この付近の開発が遅れていた原因には、交通の便が悪いだけではなく、地盤が悪いことが大きく作用している。周知されているように東大阪市の平地の大半は、約7000年前に始まる気温の上昇により河内湾となっており、その後の水性堆積物による沖積平野によって形成されている。東大阪における開発や土地利用は、このように古環境に大きく影響されていることがうかがわれる。

弥生時代前期頃の古環境は、河内湾に引き続き、河内潟となった状態が指摘されている。河内潟の状態における遺跡の分布は、大きく２つにわけられる。１つは生駒山地西麓に位置する縄文時代晩期の日下遺跡、晩期から弥生時代前期の鬼虎川遺跡・鬼塚遺跡などである。そして旧楠根川流域に山賀遺跡が位置している。このような遺跡の分布状態は中期以降も同様であるが、分布範囲を広げていく傾向になる。稲葉遺跡は、この２つの地域には含まれず、玉串川の旧河道周辺に位置していることは、平野部における遺跡の立地を考えるうえで、今後の調査に重要な問題を提起したといえるであろう。

第２図　遺跡分布図（1/50000）



第3図　遺跡周辺地形図（1/50000）
（明治20年測図　参謀本部陸軍部測量局「京阪地方仮製二万分一地形図」使用）

III　調査の概要

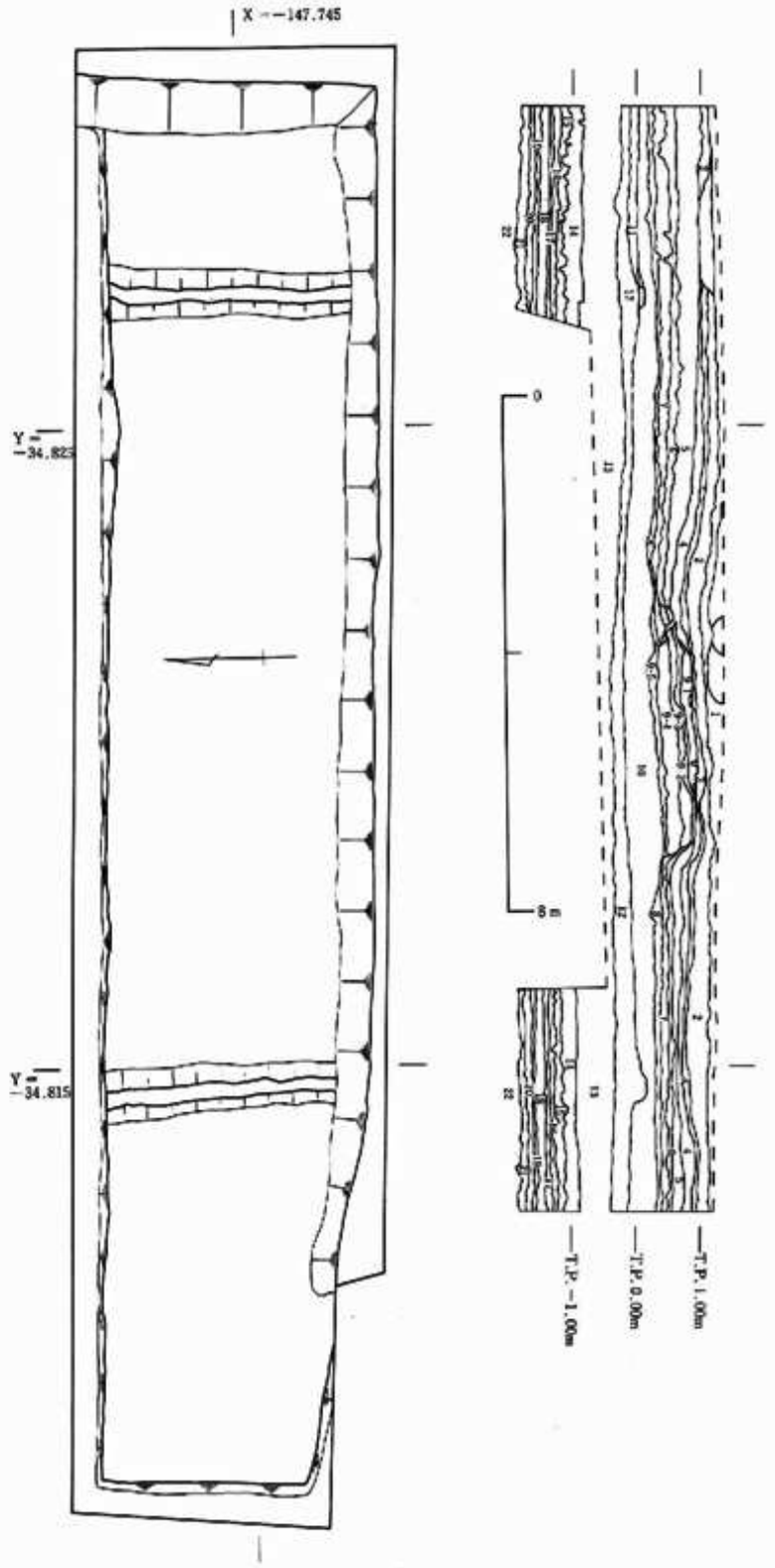
1　層位

調査地点の層位は下記のとおりである。現在の地表面の標高はT.P.2.7m前後である。第1層までは盛土である。

第1層　灰オリーブ色砂質（7.5Y5/2）シルト（やや粘性あり）、明褐色砂質（7.5YR5/6）シルト多量に混じる。
第2層　灰オリーブ色（7.5Y5/2）砂層、粗粒砂～細礫多量に混じる。
第3層　にぶい黄色（2.5Y6/4）シルトとオリーブ灰色（2.5GY5/1）粘質シルトの互層。
第4層　にぶい黄色（2.5Y6/4）極細砂～粗粒砂、下部にいくほど粒子が細かい。
第5層　緑灰色（10G5/1）シルト、暗緑灰色（5G4/1）粘質シルトのラミナ、植物遺体ラミナあり。
第6層　暗緑灰色(10GY4/1)シルト質粘土と緑灰色(5G5/1)シルトの互層。
第7層　暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土、粗粒砂～細礫混じる。　} 水田の耕作土
第8層　緑灰色（10GY5/1）粘土、細粒砂と粗粒砂～細礫多量に混じる。
第9－1～4層　第5～6層の混合。
第9－5層　暗緑灰色（10GY4/1）粘土。　} 水田畦畔の盛土
第10層　暗緑灰色(10GY4/1)砂、上部細粒砂、中部極細粒砂～細礫、下部中～細粒砂。
第11層　暗緑灰色（7.5GY3/1）粘土、シルトのラミナあり。
第12層　暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土、細粒砂～細礫多量に混じる。
第13層　灰色（7.5Y4/1）砂。
第14層　灰色（7.5Y4/1）粘土、細～中粒砂少量混じる。
第15層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土、緑灰色(7.5GY6/1)粘土のブロック多量に混じる。
第16層　緑灰色(10GY5/2)粘土とオリーブ黒色(10Y4/1)粘土の互層、植物遺体多量に含む。
第17層　上部、オリーブ黒色（5Y3/1）粘土、下部は第16層と同じ。
第18層　灰色（7.5Y4/1）粘土、植物遺体多量に含む。
第19層　灰色（7.5Y4/1）粘土、植物遺体、炭化物少量含む。
第20層　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土、炭化物少量含む。
第21層　黒色(2.5GY2/1)粘土、下部においては緑灰色(7.5GY5/2)粘土ブロック混じる。
第22層　緑灰色（7.5GY5/1）粘土、植物遺体多量に含む。

2　遺構

今回の調査で検出した遺構は、大半が耕作関係である。第1層上面では溝3条を検出した。



第4図　遺構平面図・断面実測図

幅は20㎝～90㎝、深さ約10～20㎝を測る。いずれも明確な時期は不明であるが、近代以降のものであろう。第９層は水田の畦畔と考えられる。畦畔の幅約3.7m、高さ0.6mを測る。第６～７層は、水田の耕作土である。第５層及び第６層上面では足跡を多数検出した。これらの足跡は、第５層上面から深く踏み込まれたものが第６層に達したと考えられる。

第12層では幅30～40㎝の畦畔を検出した。畦畔の方向は、いずれもほぼ南北である。両畦畔の間隔は12.4mを測り、東側畦畔の東部を除き多数の足跡が認められる。出土遺物は無く、時期は不明である。

3　微化石分析

パリノ・サーヴェイ株式会社　微化石分析報告

１）試料は、稲葉遺跡の自然堆積層より採取された８点である。時代は弥生時代中期以降から平安時代ぐらいまでの堆積物とされている。各試料の層位及び岩質を第５図に示した。

２）化石の抽出

花粉・胞子化石の抽出は、試料10g（湿重）を秤量し、48％ＨＦ－重液分離（ＺｎＢｒ₂：比重2.15）－アセトリシス処理－10％ＫＯＨの順に物理・化学的処理を行った。残渣グリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

３）分析結果及び考察

計数においては、プレパラート全域を走査し、その間に出現したすべての分類群とその個数を表１に示した。出現したすべての花粉・胞子については、花粉ダイアグラムとして示した（第６図）。基数は、樹木花粉総数、草本・胞子は全花粉・胞子化石数をもとに百分率で示した。図表中複数の分類群をハイフォンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。

主要樹木花粉の出現傾向をもとに、２つの局地花粉群集帯を設定した。下位よりＩＢ－Ｉ・II帯とする。

ＩＢ－Ｉ帯（№８～４）

アカガシ亜属が高率に出現し、優占する。スギ属が増加傾向を示す。イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が比較的高率に出現する。草本・胞子では、イネ科が高率に出現し、中上部で増加する。カヤツリグサ科が各属で同率の出現を示す。水性植物のガマ属・オモダカ属・コナギ属・ヒシ属・サンショウモなどが、上部で多く出現する。

ＩＢ－II帯（№３～１）

前花粉帯で優占していたアカガシ亜属が比較的減少するが、依然高率に出現する。スギ属が

増加し、マツ属が漸増の傾向を示す。シイノキ属も僅かに増加する。草本・胞子ではイネ科が下部で減少し、上部に向かって増加する。カヤツリグサ科は下部で急増し、全試料に高率に出現する。水生植物のガマ属・オモダカ属・シダ類胞子のミズワラビ属及びササンショウモなどが出現する。

ＩＢ－Ｉ帯では、アカガシ亜属が高率に出現し、シイノキ属などの暖温帯樹種を伴うことから、生駒山系のような後背山地や丘陵地にカシ・シイ類を中心とした照葉樹林が発達していたと考えられる。

遺跡周辺は水生植物や、低率ではあるがハンノキ属などの低湿な所を好む植物の出現から沼地的な環境が推定される。イネ科が比較的高率に出現していること、水田雑草の分類群を有するオモダカ属・コナギ属・サンショウモなどが出現しているとから水田耕作が行われていた可能性が高い。

ＩＢ－II帯になると、アカガシ亜属が減少し、スギ属が増加する。この変化が直接スギの分布拡大を意味しているかどうかは現状では言い切れない。草本花粉ではカヤツリグサ科が増加する。イネ科も比較的高率に出現する。ガマ・ヒシ各属、サンショウモなどの水生植物や、湿地の藪などに成育するツル草のゴキヅルも出現することから沼沢地的な環境が続いていたと考えられるが、カヤツリグサ科を中心とした低湿地に変化したと思われる。水田雑草の分類群を有するオモダカ属、サンショウモなどの出現から水田耕作が行われていた可能性がある。

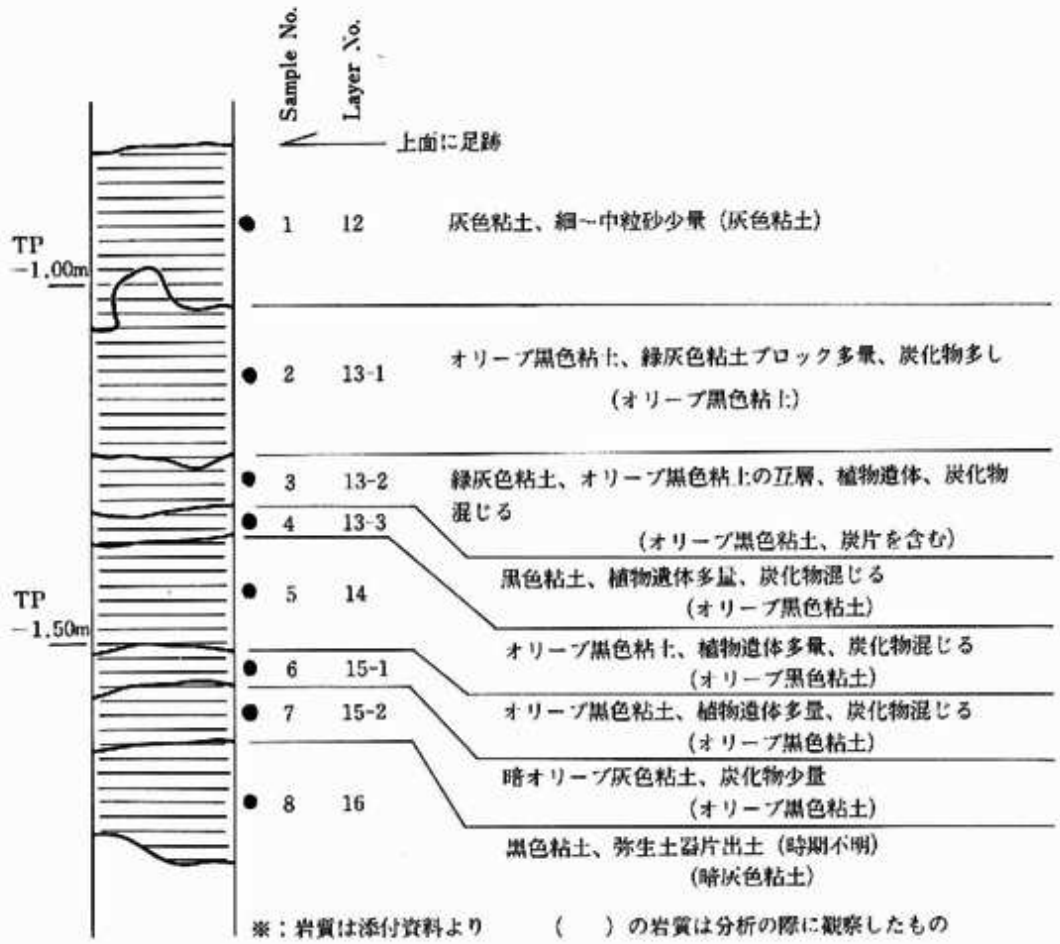
今回の結果では針葉樹の花粉が比較的多く出現している。このことは、降雨量が多かったため、暖温帯～冷温帯針葉樹が成育できたということに原因を求めるのが妥当であると思われる。これらの針葉樹は周辺山地や丘陵地に分布していたと考えられ、コウヤマキ・マツ・ヒノキ・ツガなどは栄養分の少ないやせ尾根や露岩地に、スギなどは比較的湿った土壌を好んで成育していたと考えられる。

今回の結果と近接した鬼虎川遺跡（パリノ・サーヴェイKK, 1985）の結果とを比較する。鬼虎川遺跡での花粉の出現傾向は、ＯＫ－Ｉ帯ではアカガシ亜属が優占し、ＯＫ－II帯に入るとアカガシ亜属は優占するが、緩やかに減少し、シイノキ属が増加する。ＯＫ－III帯になるとスギ属が増加し、マツ属が漸増する傾向を示す。時代は、ＯＫ－Ｉ帯が縄文時代後期から晩期、ＯＫ－II帯が縄文時代晩期から弥生時代後期、ＯＫ－III帯が弥生時代後期から12世紀末以降である。今回の最下層の試料No.８は遺物の時代から弥生時代中期のものであるとしている。このことと、今回の花粉の出現傾向からＩＢ－Ｉ帯はＯＫ－II帯に、ＩＢ－II帯はＯＫ－III帯に相当すると考えられる。しかし、今回の結果では、ＯＫ－II帯でみられるシイノキ属の増加は認められない。またＩＢ－Ｉ帯からＩＢ－II帯に移行するときアカガシ亜属は急激に減少している。このことからＩＢ－Ｉ帯とＩＢ－II帯の間に不整合が存在した可能性が考えられる。このことから、今回のＩＢ－Ｉ帯の試料は弥生時代中期から後期にかけてのものであると推定される。ＩＢ－II帯の試料は弥生時代以降のものであると考えられるが、花粉の出現傾向からは断

定することはできない。以上の考察は鬼虎川遺跡の結果をもとにして行ったものである。よって、近接した多くの地点を分析することによって新しい見解が得られると思われる。今後の研究に期待したい。

引用文献

パリノ・サーヴェイKK　(1985)　水走遺跡第8次調査（鬼虎川遺跡）土壌試料花粉分析報告．（財）東大阪市文化財協会



第5図　稲葉遺跡花粉分析試料採取地点土層模式柱状図

表1　稲葉遺跡試料花粉分析結果

Sample No.	1	2	3	4	5	6	7	8
Podocarpus	2	3	3	3	2	1	1	–
Abies	12	9	9	9	18	19	19	9
Tsuga	26	14	14	14	3	8	8	7
Pinus (Unknown)	58	28	28	28	14	20	20	14
Sciadopitys	36	22	22	22	7	24	24	26
Cryptomeria	122	89	89	89	31	42	42	50
T.–C.	42	28	28	28	22	45	45	50
Salix	5	5	5	5	1	5	5	4
Myrica	1	–	–	–	–	–	–	–
Pterocarya	4	–	–	–	2	–	–	3
Juglans	–	1	1	1	–	–	–	–
Carpinus–Ostrya	9	2	2	2	9	10	10	9
Corylus	1	–	–	–	–	1	1	–
Betula	2	1	1	1	1	–	–	–
Alnus	–	–	–	–	1	4	4	2
Fagus	1	–	–	–	5	3	3	1
Quercus Subgen. Lepidobalanus	22	24	24	24	10	21	21	15
Quercus Subgen. Cyclobalanopsis	112	74	74	74	68	134	134	105
Castanea	2	–	–	–	1	1	1	3
Castanopsis	19	23	23	23	5	14	14	15
Ulmus–Zelkova	4	2	2	2	2	6	6	5
Celtis–Aphananthe	2	2	2	2	4	2	2	5
Moraceae	–	–	–	–	1	1	1	–
Leguminosae	–	1	1	1	–	–	–	–
Ilex	–	1	1	1	–	–	–	–
Acer	1	–	–	–	–	–	–	–
Aesculus	–	–	–	–	–	1	1	1
Vitis	–	6	6	6	–	–	–	–
cf. *Styrax*	–	–	–	–	–	–	–	–
Ligustrum	1	–	–	–	–	–	–	–
Abelia	–	–	–	–	–	–	–	–
Typha	86	26	26	26	29	9	9	3
Potamogeton	2	–	–	–	–	–	–	–
Sagittaria	38	28	28	28	7	3	3	–
Gramineae	295	176	176	176	168	113	113	99
Cyperaceae	343	156	156	156	54	64	64	51
Monochoria	–	–	–	–	1	–	–	–
Polygonum sect. Persicaria–Echino.	22	4	4	4	2	2	2	3
Fagopyrum	1	–	–	–	–	–	–	–
Chenopodiaceae	1	–	–	–	–	1	1	–
Caryophyllaceae	–	–	–	–	–	–	–	–
Ranunculaceae	–	4	4	4	1	–	–	–
Cruciferae	2	–	–	–	1	1	1	–
Sanguisorba	–	–	–	–	–	–	–	–
Rotala	–	–	–	–	–	–	–	–
Trapa	–	–	–	–	1	–	–	–
Haloragis	–	1	1	1	–	–	–	–
Umbelliferae	5	–	–	–	1	–	–	–
Labiatae	1	–	–	–	–	–	–	–
Actinodemma	14	17	17	17	–	–	–	–
Artemisia	13	2	2	2	2	6	6	3
Cardnoideae	1	–	–	–	–	2	2	–
Unknown	7	4	4	4	6	7	7	6
Ceratopteris	–	1	1	1	–	–	–	–
Salvinia natans	3	1	1	1	–	–	–	–
Other Pteridophyta	7	24	24	24	9	5	5	1
A P	484	335	335	335	207	362	362	324
N A P	824	414	414	414	267	201	201	159
Unknown	7	4	4	4	6	7	7	6
F S	10	26	26	26	9	5	5	1
TOTAL	1325	779	779	779	489	575	575	490

第6図　稲葉遺跡試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム

表2　検出花粉・胞子化石一覧表

検出花粉・胞子化石名（学名）	和　　名
AP－1（針葉樹花粉）	
Cinkgo	イチョウ属
Podocarpus	マキ属
Abies	モミ属
Tsuga sieboldii	ツガ
Tsuga diversifolia	コメツガ
Tsuga	ツガ属
Picea	トウヒ属
Pseudotsuga	トガサワラ属
Larix subgen. Haploxylon	ゴヨウマツ亜属
Pinus subgen. Diploxylon	ニヨウマツ亜属
Pinus	マツ属
Sciadopitys	コウヤマキ属
Cryptomeria	スギ属
T.－C.	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科
Ephedra	マオウ属
Metasequoia	メタセコイア属
Sequoia	セコイア属
Taxodiaceae	スギ属
Dacrydium	リムノキ属
Pinaceae	マツ科
AP－2（広葉樹花粉）	
Myrica	ヤマモモ属
Juglans	クルミ属
Pterocarya	サワグルミ属
Platycarya	ノグルミ属
Carya	ペカン属
Salix	ヤナギ属
Alnus	ハンノキ属
Betula	カバノキ属
Carpinus－*Ostrya*	クマシデ属－アサダ属
Corylus	ハシバミ属
Castanea	クリ属
Castanopsis	シイノキ属
Fagus	ブナ属
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ亜属
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属
Aphananthe	ムクノキ属
Celtis	エノキ属
Ulmus	ニレ属
Zelkova	ケヤキ属
Moraceae	クワ科

検出花粉・胞子化石名（学名）	和　　名
Viscum	ヤドリギ属
Magnoliaceae	モクレン科
Illicium	シキミ属
Euptelea	フサザクラ属
Nandina	ナンテン属
Akebia	アケビ属
Cercidiphyllum	カツラ属
Theaceae	ツバキ科
Camellia	ツバキ属
Hamamelidaceae	マンサク科
Hamamelis	マンサク属
Corylopsis	トサミズキ属
Saxifraga	ユキノシタ属
Rosaceae	バラ科
Prunus	サクラ属
Daphniphyllum	ユズリハ属
Leguminosae	マメ科
Albizzia	ネムノキ属
Sapium	シラキ属
Mallotus	アカメガシワ属
Fagara	イヌサンショウ属
Phellodendron	キハダ属
Melia	センダン属
Orixa	コクサギ属
Skimmia	ミヤマシキミ属
Rhus	ウルシ属
Acer	カエデ属
Aesculus	トチノキ属
Ilex	モチノキ属
Euonymus	ニシキギ属
Buxus	ツゲ属
Vitis	ブドウ属
Parthenocissus	ツタ属
Rhamnaceae	クロウメモドキ科
Tilia	シナノキ属
Malvaceae	アオイ科
Elaeagnus	グミ属
Cornus	ミズキ属
Clethra	リョウブ属
Aucuba	アオキ属
Araliaceae	ウコギ科
Ericaceae	ツツジ科
Diospyros	カキ属
Styrax	エゴノキ属
Oleaceae	モクセイ科

検出花粉・胞子化石名（学名）	和　　名
Osmanthus	ヒイラギ属
Symplocos	ハイノキ属
Ligustrum	イボタノキ属
Fraxinus	トネリコ属
Trachelospermum	テイカカズラ属
Clerodendron	クサギ属
Lonicera	スイカズラ属
Viburnum	ガマズミ属
Weigela	タニウツギ属
Rutaceae	ミカン科
Abelia	ツクバネウツギ属
Liquidambar	フウ属
Illicium	ツキミ属
Nyssa	ヌマミズキ属
Zanthoxylum	サンショウ属
Pinus	カラタチ属
Adodendron	サカキカヅラ属
NAP（草本花粉）	
Humulus	カナムグラ属
Polygonum sect. Persicaria	サナエタデ節
Polygonum sect. Echinocaulon	ウナギツカミ節
Polygonum sect. Bistorta	イブキトラノオ節
Polygonum sect. Reynoutria	イタドリ節
Polygonum sect. Tovara	ミズヒキ節
Polygonum	タデ属
Fagopyrum	ソバ属
Rumex	ギシギシ属
Portulaca	スベリヒユ属
Caryophyllaceae	ナデシコ科
Chenopodiaceae	アカザ科
Neluonbo	ハス属
Amaranthaceae	ヒユ科
Thalictrum	カラマツソウ属
Ranunclaceae	キンポウゲ科
Ranunculus	キンポウゲ属
Nymphaeaceae	スイレン科
Nymphaea	スイレン属
Aconitum	トリカブト属
Nyphar	コオホネ属
Euryale	オニバス属
Macleaya	タケニグサ属
Cruciferae	アブラナ科
Potentilla	キジムシロ属
Sanguisorba	ワレモコウ属

検出花粉・胞子化石名（学名）	和　　名
Rosaceae	バラ科
Leguminosae	マメ科
Azukia	アズキ属
Vicia	ソラマメ属
Dunbaria	ヒメクズ属
Geranium	フウロソウ属
Euphorbiaceae	トウダイグサ科
Euphorbia	トウダイグサ属
Polygala	ヒメハギ属
Impatiens	ツリフネソウ属
Carcharopsis	カラスノゴマ属
Malva	ゼニアオイ属
Actinostemma	ゴキヅル属
Campanula	ホタルブクロ属
Trapa	ヒシ属
Lythrum	ミソハギ属
Rotala	キカシグサ属
Epilobium	アカバナ属
Ludwigia	チョウジタデ属
Haloragis	アリノトウグサ属
Myriophyllum	フサモ属
Umbelliferae	セリ科
Peaderia	ヘクソカズラ属
Utricularia	タヌキモ属
Nymphoides	アサザ属
Galium	ヤエムグラ属
Gentiana	リンドウ属
Monotropastrum	ギンリョウソウ属
Rubiaceae	アカネ科
Rubia	アカネ属
Calystegia	ヒルガオ属
Cuscuta	ネナシカズラ属
Labiatae	シソ科
Mosla	ヤマジソ属
Solanum	ナス属
Justicia	キツネノマゴ属
Plantago	オオバコ属
Ottelia	ミズオオバコ属
Patrinia	オミナエシ属
Scabiosa	マツムシソウ属
Campanulaceae	キキョウ科
Adenophora	ツリガネニンジン属
Platycodon	キキョウ属
Carduoideae	キク亜科
Artemisia	ヨモギ属
Diaspananthus	クサヤツデ属

検出花粉・胞子化石名（学名）	和　　名
Cichorioideae	タンポポ亜科
Xanthium	オナモミ属
Sagittaria	オモダカ属
Caldesia	マルバオモダカ属
Hydrilla	クロモ属
Alisma	サジオモダカ属
Hlyxa	スブタ属
Potamogeton	ヒルムシロ属
Liliaceae	ユリ科
Monochoria	ミズアオイ属
Urticaceae	イラクサ科
Iridaceae	アヤメ科
Aneilema	イボクサ属
Eriocaulon	ホシクサ属
Gramineae	イネ科
Sparganium	ミクリ属
Typha	ガマ属
Cyperaceae	カヤツリグサ科
Zea	トウモロコシ属
Polygalaceae	ヒメハギ科
Polemoniaceae	ハナシノブ科
Menyanthes	ミツガシワ属
Phyllanthus	コミカンソウ属
Gossypium	ワタ属
ＦＰ（形態分類花粉）	
Inaperturate pollen	無口型花粉
Monoporate pollen	単孔型花粉
Trizonoporate pollen	三孔型花粉
Trizonocolpate pollen	三溝型花粉
Trizonocolporate pollen	三溝孔型花粉
Polypantoporate pollen	多散孔型花粉
Tetrazonoporate pollen	四孔型花粉
Tetrazonocolpate pollen	四溝型花粉
Tetrazonocolporate pollen	四溝孔型花粉
ＦＳ（羊歯類胞子・形態分類胞子）	
Lycipodiaceae	ヒカゲノカズラ科
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属
Selaginellaceae	イワヒバ科
Selaginella	イワヒバ属
Ophioglossum	ハナヤスリ属
Osmundaceae	ゼンマイ科
Osmunda	ゼンマイ属

検出花粉・胞子化石名（学名）	和　　名
Lygodium	カニクサ属
Hymenophyllaceae	コケシノブ科
Pteris	イノモトソウ属
Ceratopteris	ミズワラビ属
Polypodiaceae	ウラボシ科
Salvinia natans	サンショウモ
Isoetes	ミズニラ属
Marsilea	デンジソウ属
Azolla	アカウキクサ属
Monolete spore	単条溝型胞子
Trilete spore	三条溝型胞子
	和名なし
その他の微化石	
Pseudoschizaea	淡水生藻類
Botryococcus	緑藻類
Dinoflagellates	渦鞭藻類
Pediastrum	クンショウモ属

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、一部水田関係の遺構を検出したものの、遺物は確認できず、各土層や遺構の時期は確定できなかった。この章では、昭和58・59年度に実施された大阪府立玉川高等学校の調査結果を参考にして考えてみたい。

1．第21層より弥生土器片が出土している。この層の微化石分析では、アカガシ亜属が高率に出現し、弥生時代の時期が推定されている。また、イネ科、及び水田雑草の類も確認されている。玉川高校では、弥生時代前期の遺構がT.P.－1.3m前後にあり、当調査地点の標高と大きな差はなく、このことから、第21層が弥生時代前期から中期にかけての堆積と推定できる。

2．第12層の水田畦畔は、玉川高校の結果をもとにすると、標高及び前後の堆積状況より平安時代頃と考えられる。

3．第９層の水田畦畔は、同様の状況から、室町時代後半と考えられる。

4．微化石分析は第14層以下を行ったが、全体として水田関係の微化石が多く検出されている。この結果から、稲葉遺跡周辺が玉串川の反乱の繰り返しのなかで、水田等の耕作地として位置づけられていたことが推定される。

参考文献

『稲葉遺跡発掘調査概要・Ⅰ』　大阪府教育委員会　1986
那須孝悌　樽野博幸他『河内平野の生いたち』　大阪市立自然史博物館　1972
梶山彦太郎　市原実『大阪平野のおいたち』　青木書店　1986

調査・整理参加者

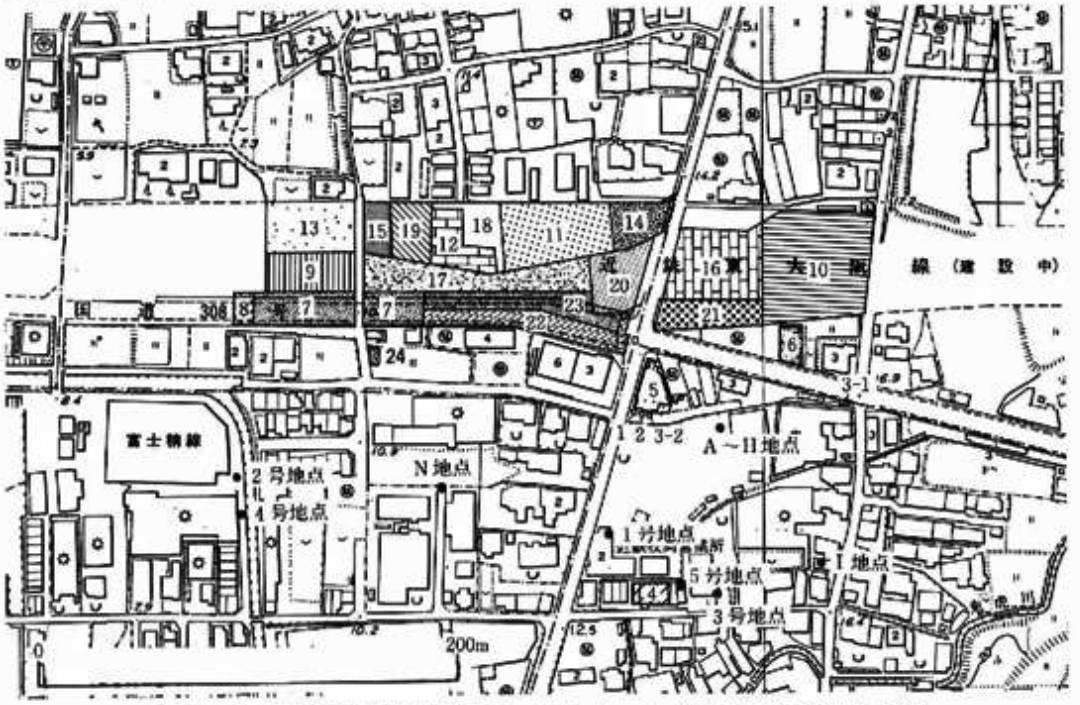
有山淳司　辻本秀　森田浩成　石井正明　岸村茂樹　若原伸宏　大西純子　清水真美子　石原和美　本田けい子　吉川越子　広瀬実佐江　岩尾好淑　梁村加奈子　大和久仁子　藤井元子　成川珠美　今井喬子　金弘美

西ノ辻遺跡第24次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

西ノ辻遺跡は東大阪市西石切町１丁目・３丁目、東山町、弥生町にひろがる弥生時代から室町時代に亘る複合遺跡である。近年、国道308号線沿で、近鉄東大阪線建設工事、阪神高速建設工事、道路拡幅工事などに伴う広範囲の発掘調査が実施されてきた。これによる本遺跡の調査は、隣接する鬼虎川・植附・神並各遺跡の調査とともに重要な遺構・遺物が検出され、多大の成果をあげている。本遺跡は上述の調査をはじめ、昭和51年以降、下水管埋設、住宅建設などに伴う調査が毎年のように行われ、昭和63年度まで25次に及んでいる。

今回報告する第24次発掘調査の調査地は、西石切町151－１にあたる。昭和62年５月２日、共同住宅建設に伴う届出があり、５月13日、東大阪市教育委員会によって試掘調査が実施された。調査は建設予定地内の２ヶ所について行われたが、遺構・遺物はまったく検出されなかった。しかし、当該地の北約15mの発掘調査（第７次調査）において弥生時代の方形周溝墓、室町時代の柱穴群・土壙・溝などの遺構とそれに伴う遺物を検出していたことから、担当者は建設工事時の７月24日、再度調査を実施した。この調査で、建設地の西部分において弥生時代中期の土器および遺構を確認した。その結果、急拠、建設地西側の基礎工事部分約35㎡について発掘調査を実施した。調査は昭和62年８月４日から12日まで行った。（吉村）



第７図　西ノ辻遺跡調査地点図（１号～５号　A～Ⅰ．N地点は荻田論文による）

II. 位置と環境

西ノ辻遺跡は、近畿日本鉄道東大阪線の新石切駅周辺、行政区分では東大阪市西石切町３丁目に所在する。本遺跡は、南北方向に連なる生駒山地の西側山麓部に発達した中位段丘上の標高７～20mに立地している。

本遺跡は、昭和16年に木村武夫氏によって発見されて以来、大阪府史蹟調査委員会、大阪府教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会、財団法人東大阪市文化財協会などによって発掘調査が実施されている。これらの発掘調査によって、本遺跡は東西約800m・南北約1200mの範囲におよぶものと推定でき、これまでに多くの遺物や遺構を確認している。特に昭和16・17年の調査の時、A～H地点で出土した弥生時代後期の土器は、近畿地方の当期の標式資料として重要な位置を占めている。また、近年の鉄道工事等に伴う発掘調査によって、谷内からの縄文時代後・晩期の土器の出土、弥生時代中期の方形周溝墓群、古墳時代中期末頃の導水水利施設、鎌倉時代から南北朝頃の溝・掘立柱建物群・井戸・土坑墓など各時期の遺構・遺物を検出し、新たな調査成果をあげている。

西ノ辻遺跡の周辺には、各時期の遺跡が多数分布している。

旧石器時代の遺物は、千手寺山遺跡、正興寺山遺跡や本遺跡に西接する鬼虎川遺跡から出土している。

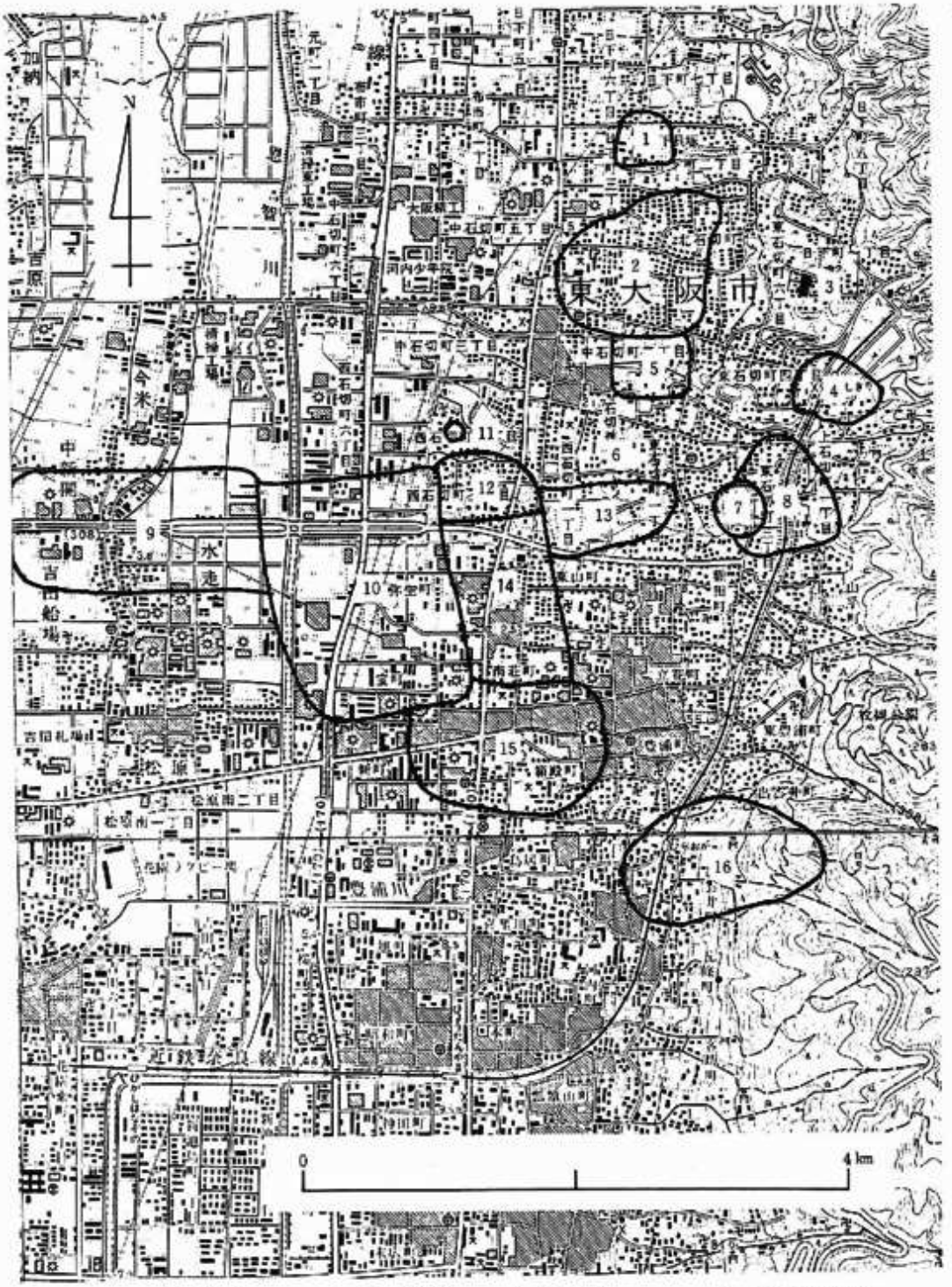
縄文時代の遺跡には、早期の押型文土器や土偶の出土している神並遺跡、前期における河内湾の汀線を確認している鬼虎川遺跡、晩期の埋葬人骨をはじめ環状列墓を検出している日下遺跡や芝ヶ丘遺跡、鬼塚遺跡などがある。

弥生時代の遺跡には、前期の貝塚から縄文時代晩期の長原式土器と畿内第Ⅰ様式中段階の土器が共伴して出土した鬼虎川遺跡、中期の大溝、掘立柱建物、井戸、貝塚、方形周溝墓などを検出している鬼虎川遺跡のほか鬼塚遺跡・植附遺跡、後期の焼失した竪穴住居１軒を確認している鬼塚遺跡がある。

古墳時代では、中期の塚山古墳、横穴式石室を内部主体とする前方後円墳の芝山古墳のほか神並古墳群、みかん山古墳群、墓尾古墳群、出雲井古墳などの後期の群集墳が多数存在する。また、掘立柱建物、導水水利施設・造り付けカマドの痕跡をもつ竪穴住居などを神並遺跡や植附遺跡で確認している。

奈良から平安時代には、神並遺跡で掘立柱建物群が検出されているほか、穂積氏の氏寺と推定されている法通寺が所在する。また、『石清水文書』の記載によると石清水八幡宮領の「神並荘」が存在している。

鎌倉時代から南北朝期には、溝・掘立柱建物群・井戸・土坑・土坑墓などの遺構を神並遺跡、植附遺跡、水走遺跡で確認している。（中西）



1．日下遺跡　2．芝ヶ丘遺跡　3．芝山古墳　4．千手寺山遺跡
5．辻子谷遺跡　6．法通寺跡　7．正興寺山遺跡　8．神並古墳群
9．水走遺跡　10．鬼虎川遺跡　11．塚山古墳　12．植附遺跡
13．神並遺跡　14．西ノ辻遺跡　15．鬼塚遺跡　16．出雲井古墳群

第8図　遺跡周辺図

III. 調査の概要

調査地を含む建設地は、建築作業に伴う基礎部の掘削をほとんど終えており、すでにパイルが打ち込まれていた。基礎は3m×2mの方形の東西2列のパイル部と、東西・南北に直行してつながる幅1mの連結部からなっていた。パイル部でGL－1～1.2m、連結部で0.6～0.7mがすでに掘削されていて、ほとんどの地域で地山が露出していた。

調査は建設地西側のパイル部4ヶ所と連結部6ヶ所の10ヶ所について実施した。調査するにあたって、北西隅のパイル部をA地区、東南の連結部をJ地区とし、10地区を西から北→南方向にA～Jとして調査を行った。

1．層位

調査において、遺構以外の基本層位は以下のとおりである。

第1層　第1'層　盛土

第2層　オリーブ灰色シルト質土（旧耕土）　0.1～0.5cmの砂粒を若干含む。

第3層　暗灰黄色シルト質土（床土上層）　赤褐色を呈する鉄分を多く含む。

第4層　オリーブ褐色シルト質土（床土下層）　土師器、弥生土器の小片含む。

第5層　暗褐色土　炭、弥生土器の小片含む。古墳時代以後の遺構面。

第6層　明黄褐色細粒砂

第7層　にぶい橙色細・中粒砂

第8層　明黄褐色粘質土　黒色粘質土のブロック、0.2～0.5cmの砂粒を若干含む。

第9層　黄褐色砂質土　0.2～0.5cmの砂粒を多く含む。

第10層　黄橙色シルト

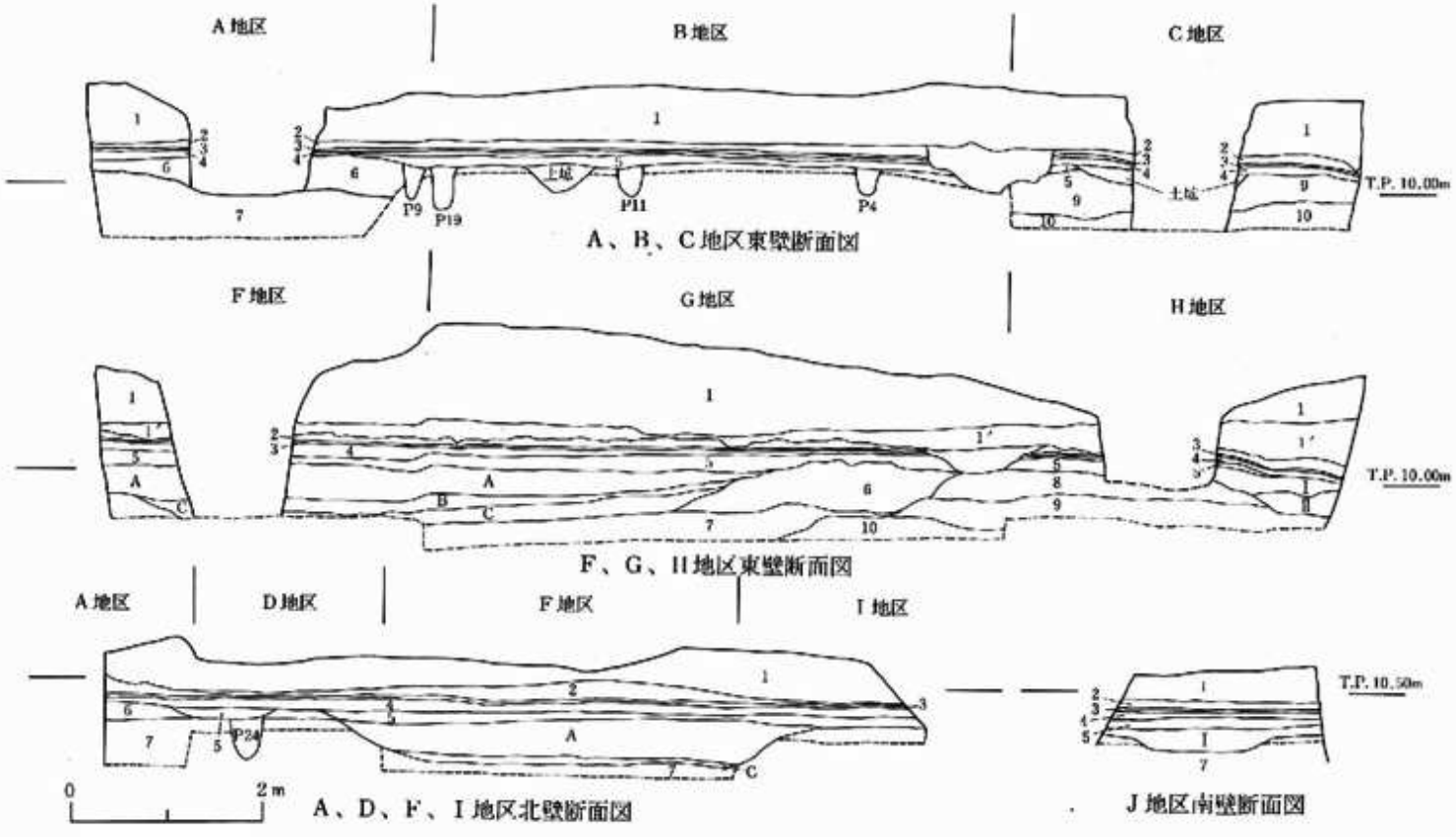
第6層以下は弥生時代以前の自然堆積層であり、弥生時代中期の遺構検出面をなしている。

2．遺構

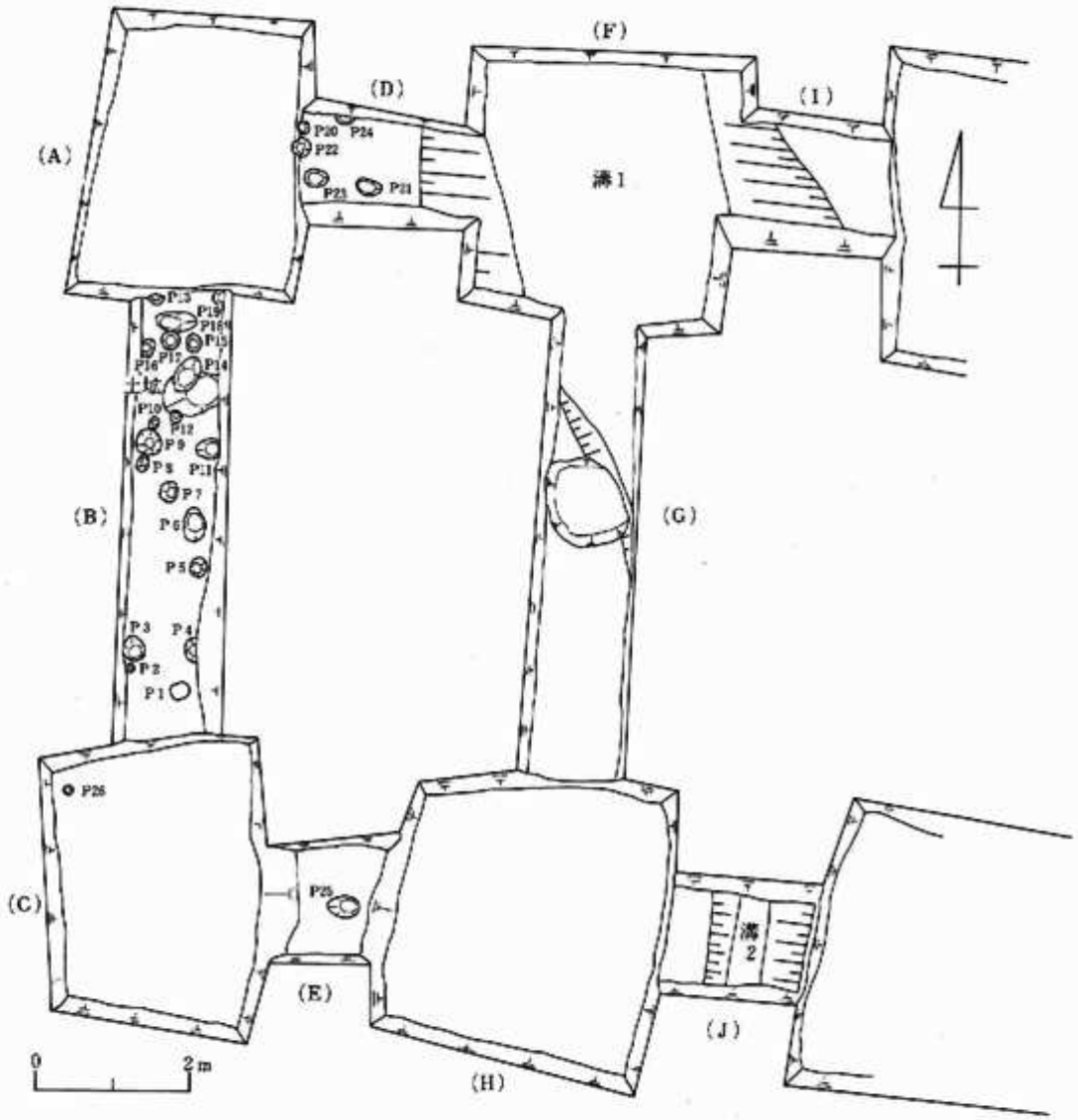
調査地A～Jのほとんどの地区は建築の基礎工事に伴う掘削によって、弥生時代以前の自然堆積層が露出していた。とくにパイル部のA、C、H地区は地山を深く掘り込んでおり、C地区北西隅で1ピット（P26）の底部を検出したのみであった。また、B、C地区東断面において第5層を掘り込んだ黒褐色土（7.5Y R3/1）を埋土とする、幅185cm、深さ16cm以上の遺構（土坑）を確認した。形状および用途は不明であるが、遺構断面内より炭、焼土とともに須恵器の小片が出土し、古墳時代後期以降のものである。

各地区で検出した遺構は、溝2条（溝1、溝2）、ピット26個、土坑1基である。

溝1はD、F、G、I地区にわたる。D、F地区において西肩、I地区で東肩の一部を検出した。G地区の西肩は近代以降の撹乱によって大きく刳られていた。溝は幅4.5m、深さ0.5m以上を測り、南南東から北方向へ延びていた。溝内は上から黒褐色砂質シルト（A）、灰色砂



第1層　第1'層　盛土
第2層　オリーブ灰色シルト質土（10Y 4/2）
第3層　暗灰黄色シルト質土（2.5Y 5/2）
第4層　オリーブ褐色シルト質土（2.5Y 4/4）
第5層　暗褐色土（10YR 3/3）
第6層　明黄褐色細粒砂（10YR 6/6）
第7層　にぶい橙色細・中粒砂（7.5YR 6/4）
第8層　明黄褐色粘質土（10YR 6/8）
第9層　黄褐色砂質土（10YR 6/5）
第10層　黄橙色シルト（7.5YR 7/8）
溝1　A　黒褐色砂質シルト（7.5Y 2/2）
溝1　B　灰色砂質土（7.5Y 1/4）
溝1　C　暗オリーブ灰色シルト（2.5GY 1/3）
溝2　I　黒色粘土質シルト（7.5YR 1.7/1）
溝2　II　黒褐色シルト（2.5Y 1/3）



第10図　遺構平面実測図

質土（B）、暗オリーブ灰色シルト（C）の3層に分かれていた。各層から弥生土器は出土したが、とくにF地区・B層内からは壺、高杯、鉢、蓋、甕などの多くの弥生土器とともに打製石鏃が出土した。出土土器は畿内第Ⅲ様式のものである。

溝2はJ地区で検出した。上部は工事に伴う掘削によって削平されていた。検出面（第16層上面）で幅1.1m、深さ0.15mを測り、南から北方向へ延びていた。溝内ー黒色粘質土ーからは壺、甕、蓋、鉢などの弥生土器片とともに打製石鏃が出土した。溝はH地区東・南断面でも確認しており、本来、幅1.8m以上、深さ0.25m以上の南南西から北へ延びていたと考えられる。弥生時代中期の溝である。

ピットはB、C、D、E地区で26検出し、A地区東断面で1ピット確認した。A、C地区にも数多くあったと考えられるが、工事によってすでに深く掘削されていて確認できなかった。

各ピットは大きさおよび形態がそれぞれ異なる。平面形は50～20cmの円または楕円形を呈し、10～46cmの深さをもつ。これらのピットは柱穴と考えられる。各ピット内の埋土は細かい炭を含むオリーブ黒色砂質シルトであり、P4、11、19などからは弥生土器の小片を検出した。

土坑はB地区北側にあり、0.5m×0.8m以上の変形の楕円を呈し、深さ16cmを測る。土坑内－黒褐色砂質土－からは焼土、炭片とともに弥生土器小片が出土した。（吉村）

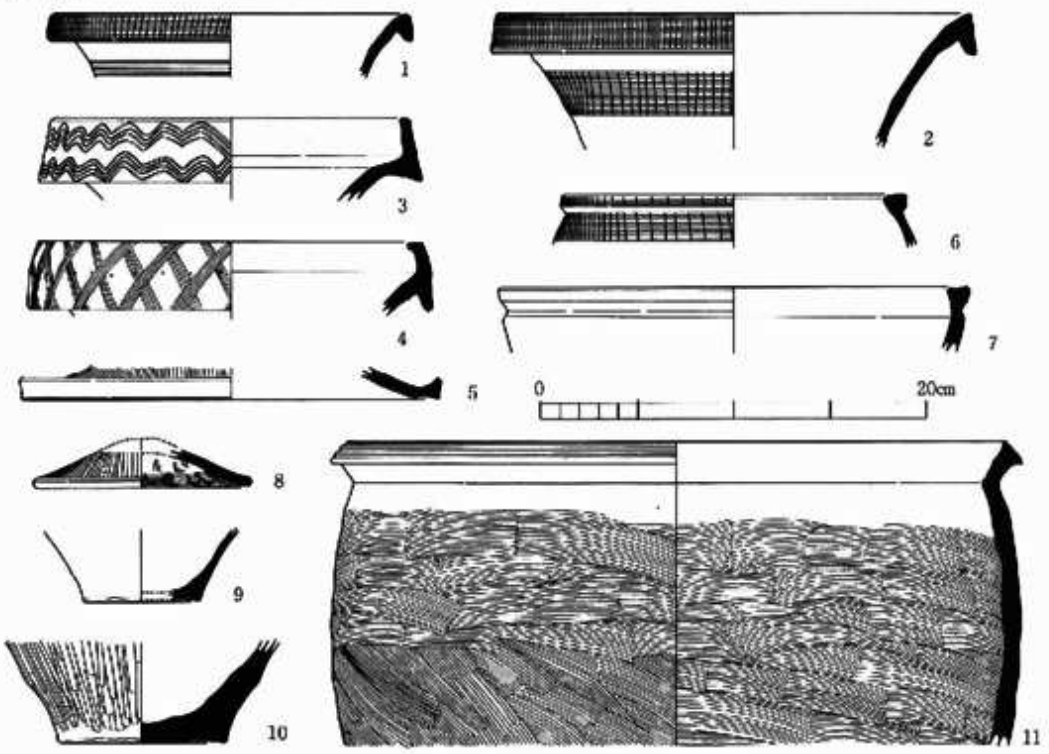
3．出土遺物

遺物は、溝1・2、柱穴などの遺構のほか、第5層から弥生土器・打製石鏃がコンテナ1箱程度出土している。これらのなかで溝1・2からは比較的まとまって遺物を検出しているものの、柱穴内や第5層出土遺物には図示できるものはほとんどない。以下では、溝1および溝2の出土遺物を中心に記述してゆく。

溝1出土遺物（第11図）

溝1からは、弥生土器をはじめ打製石鏃1点が出土している。弥生土器には、壺A・B・C、鉢、高杯、蓋などを含むが、すべて小破片化しており全形態の判明するものはない。

壺A（1・2）の口頸部は外上方にひらき、口縁端部を斜め下方におり曲げる。口頸部内外面はナデて調整する。口縁部端面には、櫛描き簾状文を施しさらに円形の刺突文を加えるものもある。頸部外面には櫛描き直線文や櫛描き簾状文がある。（1・2）ともに生駒西麓の胎土である。



第11図　溝1出土土器実測図

壺B（3）は、漏斗状にひらく口頸部からやや内傾して上方にのみたちあがる口縁部につづく形態を呈する。口縁端部は、丸くおさめる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整によって仕上げる。口縁部外面には、2帯の櫛描き波状文を施す。胎土は、生駒西麓のものである。

壺C（4）の形態は、外反してひらく口頸部にやや内傾気味に上下両方にのびる口縁部を貼り付ける。口縁端部には、平坦な面を構成する。口縁部内外面には、ヨコナデ調整を施す。口縁部外面には、斜格子文を施文後さらに円形の刺突文を加える。生駒西麓の胎土である。

高杯（5）は、脚裾部片である。脚端部は、上方に肥厚し面を構成する。外面は縦方向のヘラミガキ調整を施して仕上げる。脚裾部内面は、ナデて調整する。胎土は、生駒西麓のものである。

鉢（6・7）の口縁部は段をなし、端部に平坦な面を構成する。口縁部内外面には、ヨコナデ調整を加える。（6）の口縁部端面および体部外面には櫛描き簾状文を施す。両者とも生駒西麓の胎土である。

蓋（8）は、壺用のもので復原口径10.8cmを測る。形態は「ハの字」形の体部から丸くおさめる口縁端部につづく。つまみ部分の形態は不明。調整手法は、外面を縦方向のヘラミガキ調整、内面を横方向のハケメ調整する。口縁部内面の周囲約1cmにわたって煤が付着している。胎土は、生駒西麓のものである。

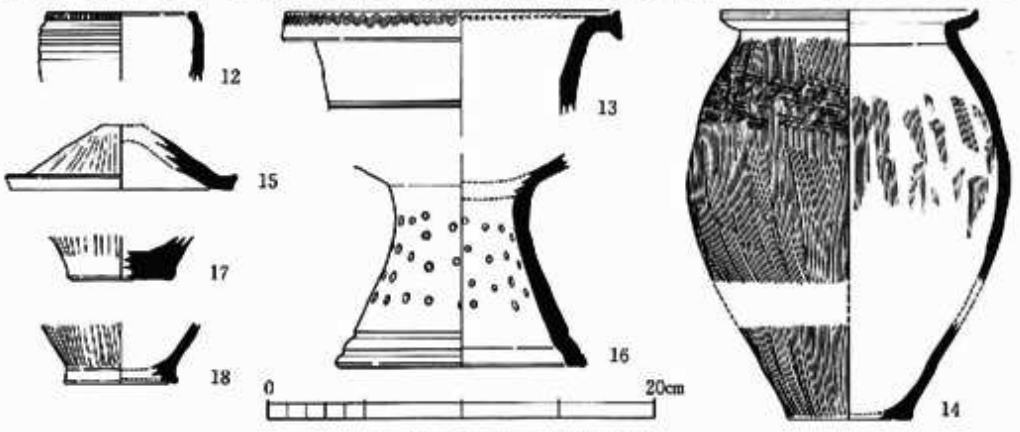
甕（11）の口縁部は短く外反し、端部を上下にやや拡張する。体部は、やや張りをもつ。体部内外面は、横方向のハケメ調整で仕上げる。口縁部端面には、3条の凹線文を巡らす。胎土は生駒西麓のものである。

（9）は甕の底部片である。器壁は薄い。内外面の調整手法は、磨滅が著しいため不明。（10）は、壺の底部である。底部は、平底を呈し体部からほとんど突出しない。体部外面には、縦方向のヘラミガキ調整を施す。また底面には、一定方向のヘラミガキ調整を加えて仕上げる。

打製石鏃（第13図19）は、平基無茎式のサヌカイト製である。両面から細部調整を施す。全長3.9cm・幅2.2cm・最大厚6mm、重量6.0gを測る。

溝2出土遺物（第12図）

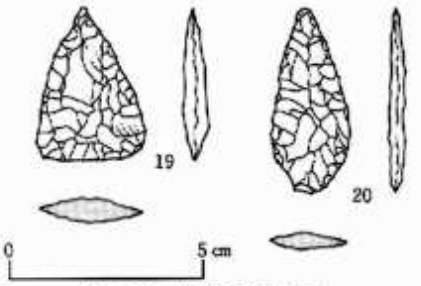
溝2からは、壺D・E、甕、蓋、鉢などの弥生土器と打製石鏃1点が出土している。弥生土



第12図　溝2出土土器実測図

器はいずれも細片化しており、完形に復原できるものは少ない。

壺D（12）は、口縁部が内彎気味にたちあがり、端部をやや内側に肥厚する面でおさめる。口縁部内外面はヨコナデ調整で仕上げる。口縁部外面には、4条の凹線文、端部外面にはヘラ状工具による刻み目を加える。胎土は、他地域のものである。



第13図　打製石鏃実測図

壺E（13）の口縁部は、外反して上方にのび先端で水平方向にひらく。口縁端部は上下両方向に肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整によって仕上げる。口縁部端面に櫛描き波状文、口頸部外面に櫛描き直線文、口縁部内面に羽状列点文を施し装飾する。他地域の胎土である。

甕（14）の形態は短く外反する口縁部からゆるやかにふくらみをもつ体部につづく。口縁端部は上方にやや肥厚し、端面に凹線を加える。体部は、中央やや上位で最も張る。底部は、平底を呈する。外面調整は、口縁部をヨコナデ調整する。体部は、縦方向のハケメ調整で仕上げるものの体部上位に左上がりの斜方向のタタキメを残す。内面調整は、体部中央に縦方向のハケメ調整を局部的に施し、他の部位をナデて仕上げる。外面調整後、体部上位に2段の刺突文を加える。胎土は、生駒西麓のものである。

蓋（15）は、壺用のものである。口縁端部は斜め上方に肥厚する。つまみ部分は欠損するため形態不明である。体部外面はヘラミガキ調整を施す。生駒西麓の胎土である。

鉢（16）は、脚部のみの破片である。脚部は、「ハの字」形にゆるくひらき、脚裾部でやや内彎する。脚端部は、内側に肥厚する。器表面の磨滅が著しいため調整手法は不明である。脚部全体には、小円孔を縦一列に4孔または3孔を交互に配する。脚裾部には、2条の凹線文を巡らす。胎土は、他地域のものである。

（17・18）は底部片である。（18）の底部は、体部からやや突出する。底部外面は、いずれも縦方向のヘラミガキ調整を施す。内面は、ナデて仕上げる。

打製石鏃（第13図20）は、茎部を欠損するものの凸基有茎式である。石材は、サヌカイト製である。両面から細部調整を加え仕上げる。現存長4.8cm・幅2.0cm・最大厚5mm、重量4.7gを測る。

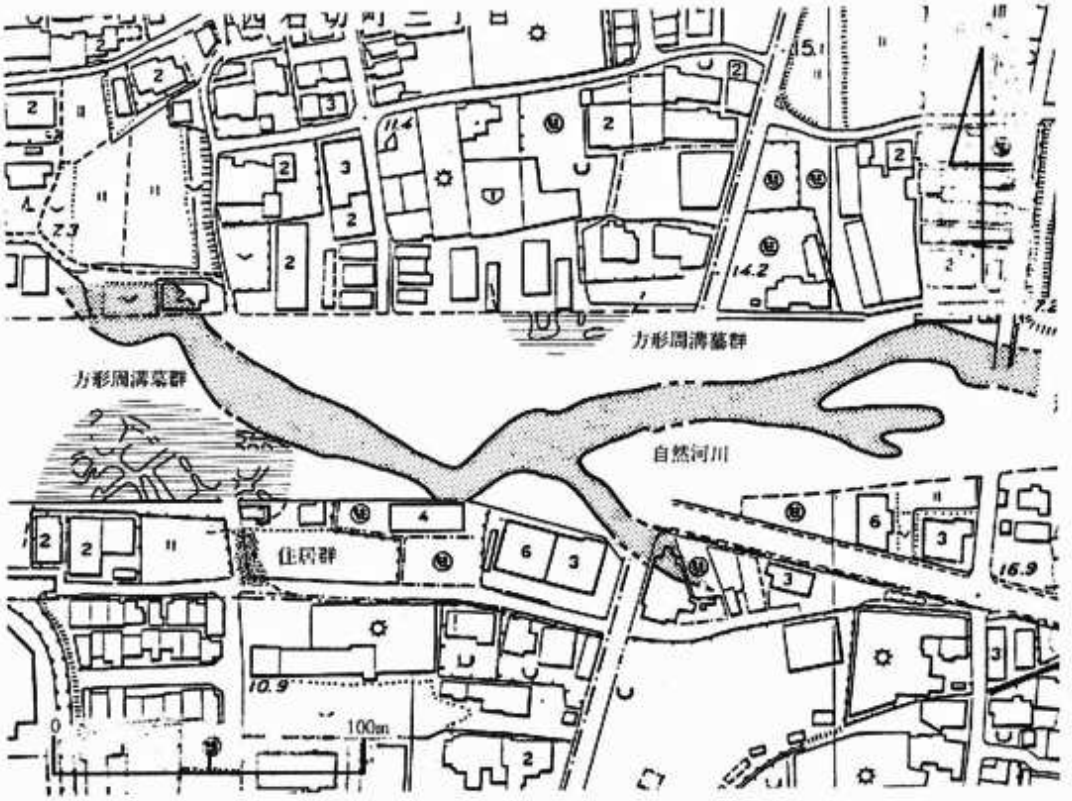
（中西）

Ⅳ. まとめ

今回の調査では弥生時代中期の溝、柱穴などのピット、弥生土器、石鏃、須恵器、サヌカイト片などの遺物を検出し、古墳時代後期の土坑（？）を確認した。次に検出した遺構についてまとめておく。

1．溝は2条（1・2）ある。調査範囲が限られていたため、切り合い状況は不明であるが、出土遺物から見て溝1の方が古く、一連のものではない。

2．検出した27ピットのうち16ピットは柱穴であり、本遺跡における弥生時代中期の集落の一角をなすものと考えられる。調査範囲が狭く、建物の状態および性格は不明である。



第14図　弥生時代中期遺構略図

西ノ辻遺跡は昭和16年に発見されて以来、大阪府、東大阪市教育委員会、(財)東大阪市文化財協会などによって調査が行われてきた[1]（第７図参照）。特に近年の近鉄東大阪線建設などに伴う国道308号線沿の発掘調査では多大の成果を上げている。第14図は本遺跡においてこれまでの調査で確認された弥生時代中期の自然河川（谷筋）と方形周溝墓の略図である。以下、今回の検出遺構との関係を若干記しておきたい。

自然河川は縄文時代から奈良時代まで流路の方向および規模を変えながらも残存していた。弥生時代中期には二又に分かれた東から延びる川と南東から延びる川があり、本遺跡北側中央部で合流していた。河川内からは弥生土器など多量の遺物が出土している。川幅は15～30m、深さ２m以上を測る。河川南西岸で11基以上の方形周溝墓（第７、９、17次調査）、北岸で２基の方形周溝墓、壺棺など（第11次調査[2]）を検出している。この二群の墓は自然河川を挟むことなどから別集落のものと考えられる。今回の調査で検出した柱穴群は南西岸方形周溝墓群の南約15mに位置している。また試掘調査において本調査地の東側では遺構・遺物を確認していない。このことから自然河川南側の弥生時代中期の集落は、今回の調査地点を北限として東側を溝で画し、南に広がっていたと考えられ、北西部に墓地を形成していたと思われる。（吉村）

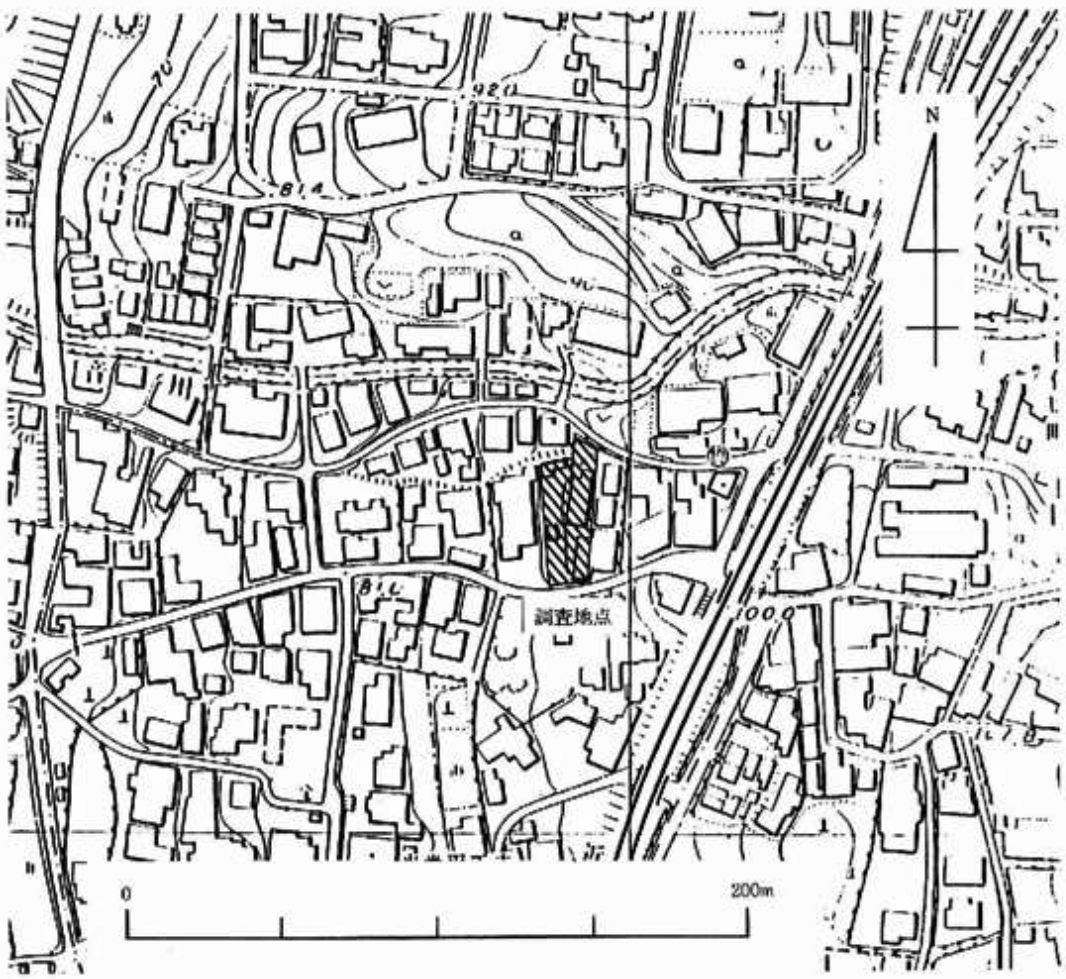
調査、整理にあたっては多くの人々の協力を得た[3]。感謝いたします。

注（１）荻田昭次　「西ノ辻遺跡」　『東大阪市文化財協会ニュース』Ｖｏｌ２、Ｎｏ１　1986年。
（２）『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅱ』　大阪府教育委員会　1986年。
（３）有山淳司　村田行生　為井通子　堀尾元美　大和久仁子

千手寺山遺跡第２次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

昭和62年度、周知の千手寺山遺跡の南西端部分にあたる東大阪市東石切町３丁目372・375番地に共同住宅の建設が計画された。このために、建設工事に先立って東大阪市教育委員会が昭和62年12月11日に建設予定地内の３ヶ所で試掘調査を実施したところ、試掘トレンチNo.２で古墳時代前半期の遺物包含層と遺構の存在することを確認した。試掘調査をうけ、原因者と協議を重ねた結果、予定地内全域を対象に発掘調査・記録保存することになった。発掘調査は、原因者の委託を受けて、財団法人東大阪市文化財協会が、昭和63年２月22日から昭和63年４月２日まで現場作業を行ない、以後平成１年３月31日まで整理作業を実施した。



第15図　調査地点位置図

II. 位置と環境

南北方向に連なる生駒山地は、大阪府と奈良県の境界線に位置している。この生駒山地の西側斜面には、東大阪市域だけでも北から善根寺谷、辻子谷、額田谷、豊浦谷、客坊谷、鴨川谷、浄土寺谷など多くの谷がある。これらの谷に集まった水は、西流して山麓部に土砂を堆積させ扇状地を形成している。千手寺山遺跡は、辻子谷を流れる音川の南北両側、標高120~90mに位置する。

千手寺山遺跡は、昭和36年から37年頃に旧石器時代のナイフブレイドや奈良時代の火葬骨を収めた須恵器の蔵骨器が発見されたことを契機として周知されるようになり、現在では、東大阪市東石切町を中心に東西約500m・南北約600mの範囲にひろがる旧石器時代および奈良時代の遺跡と推定されている。

本遺跡の発掘調査は、昭和57年に当遺跡の範囲内に所在する千手寺の本堂と同寺の境内に残存する弁天塚古墳（神並6号墳）の発掘調査を1度実施しているのみである。（千手寺山遺跡第1次調査）したがって本遺跡の実態については、いまだ不明な点が多い。今回の第2次発掘調査地点は、千手寺山遺跡の推定範囲の南西端部分で辻子谷の南側、標高87m付近にあたる。

本遺跡の周辺には、多くの遺跡の存在することが知られている。以下に時期別に記述してゆく。

旧石器時代の遺跡としては、本遺跡のほか芝坊主山遺跡や正興寺山遺跡でナイフ形石器、削器の採集例が知られている。

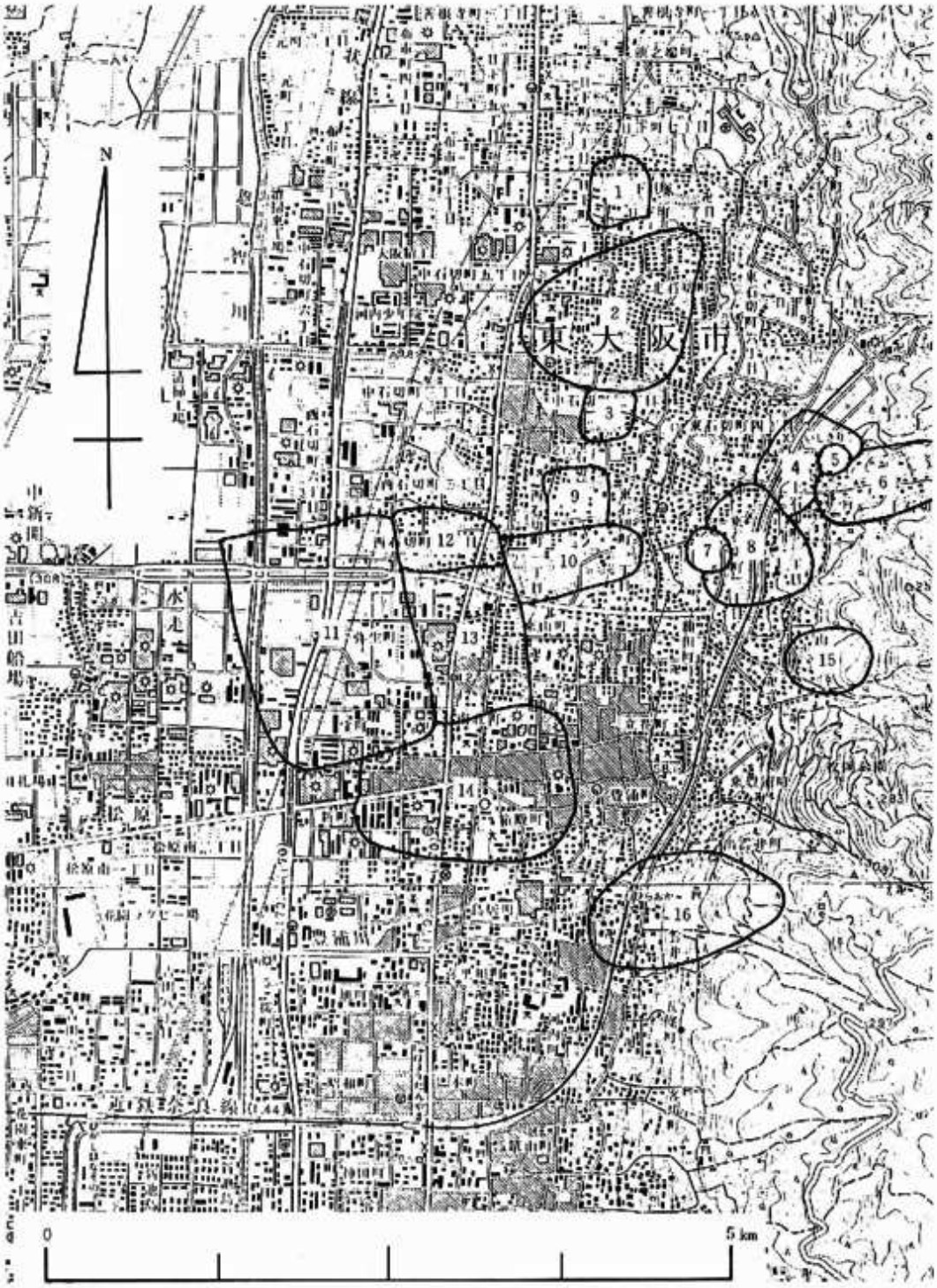
縄文時代には、早期の焼石土坑や押型文土器・土偶などを検出している神並遺跡や音川によって形成された扇状地上に立地する芝ヶ丘遺跡で後期から晩期の土器が出土している。

弥生時代では、標高20~15mの扇状地上に占地する芝ヶ丘遺跡・神並遺跡・西ノ辻遺跡・植附遺跡などで中期から後期の遺構や多量の遺物が確認されている。

古墳時代においては、現在までのところ、本遺跡の周辺部では前期の遺構や遺物はほとんど検出していない。しかし、扇状地上に立地する芝ヶ丘遺跡で中期末頃の掘立柱建物、神並遺跡や、西ノ辻遺跡で同期の貯水水利遺構や掘立柱建物、植附遺跡や馬場遺跡で同時期の竪穴住居址を確認しているのをはじめ、辻子谷遺跡・鬼虎川遺跡などでも中期から後期の遺物を多量に検出している。また、当遺跡の北方約500mの小丘上に占地する横穴式石室を内部主体とする前方後円墳の芝山古墳や辻子谷の北側の尾根上に立地する辻子谷古墳群・墓尾古墳群、辻子谷の南側に神並古墳群・額田山古墳群など後期の古墳が多数存在する。

奈良時代には、当遺跡をはじめ周辺に位置する正法寺山遺跡・墓尾古墳群・辻子谷遺跡で火葬骨をおさめた蔵骨器や墓誌板・土器棺などが集中的に確認されている。また、木積氏の氏寺と推定される法通寺も本遺跡の西方の扇状地上に存在している。

平安時代以降、興法寺や三味尾山遺跡などがしられている。



1．月下遺跡　2．芝ヶ丘遺跡　3．辻子谷遺跡　4．千手寺山遺跡
5．蟹尾古墳群　6．辻子谷古墳群　7．正興寺山古墳群　8．神並古墳群
9．法通寺跡　10．神並遺跡　11．鬼虎川遺跡　12．植附遺跡
13．西ノ辻遺跡　14．鬼塚遺跡　15．額田山古墳群　16．出雲井古墳群

第16図　遺跡分布図

III. 調査の概要

今回の千手寺山遺跡第2次発掘調査は、東大阪市東石切町3丁目372・375番地の共同住宅建設予定地の全面にわたる544㎡を対象範囲とした。発掘調査は、調査地内に国家座標杭を設置して、これを基準に地区割りを行なった。現場では、南北方向の基準ラインを東から西へAライン、Bライン、Cラインとし、東西方向を北から順に5m間隔に1ラインから7ラインと仮称した。遺構平面図および断面図の作成は、この基準ラインにしたがっている。

なお、表土層、盛土層、耕土の除去には、機械を使用し、以下の層位については人力掘削によって精査した。

1. 層位

調査地区内は、東南方向から北西方向へむかっている傾斜地を平坦地化して民家が調査実施以前に既に建設されていたことから、大部分の遺物包含層が削平され、多数の撹乱孔が存在する。調査区内に堆積する地層を上から順に記述してゆく。

第1層　表土。調査区全域を覆う。厚さ約10cm。機械によって除去。なお調査地区内の東寄り部分では、表土層を除去すると地山を検出。

第2層　浅黄色（5Y7/4）砂質土。盛土。調査区内のほぼCライン以西に認められる。民家建設以前に田畑の耕作に伴う段があり、この段を民家の建設の際に整地したものと考える。層厚約30cm。調査地区の北西端部分は、東西方向にさらに一段低くなり、整地層が厚く堆積する。機械によって掘削。

第3層　黄褐色（2.5Y5/3）砂質土。耕土。第2層の下部に堆積する。厚さ約10cm。微量の瓦器・須恵器・土師器などの細片が出土。機械によって掘削。

第4層　黄褐色（10YR7/8）砂質土。床土。層厚約3cmを測る。機械によって除去。

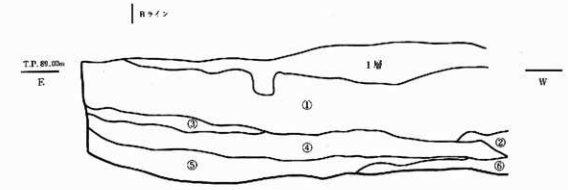
第5層　明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土。1cm以下の礫を少量含む。調査地区の中央部分に南北へのびる段の縁辺部3ラインから5ラインのやや北側付近に堆積する。層厚は最も厚い部分で約30cm。段の造成によってほとんどを削り取られる。出土遺物には、少量の土師器片がある。

第6層　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト。1cm以内の礫を多量に含む。第5層と同様に南北方向の段の縁辺部から調査区のほぼ中央付近にかけて堆積する。本層は、東から西にむかってしだいに厚くなる。西端部での層厚は約30cm。多量の奈良時代の須恵器、古墳時代の土師器、弥生土器・サヌカイト片のほか仿製珠文鏡2面が出土。

第7層　褐色10YR4/6シルト。地山。

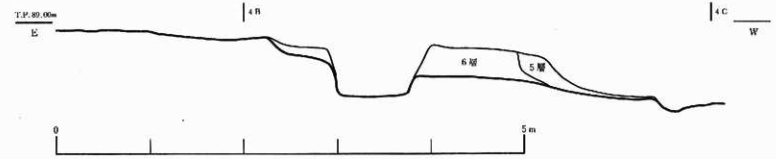
これらの堆積土層のうち、遺物を含む地層は第5層ならびに第6層である。ここでは、比較的まとまって遺物を検出している第6層の遺物の出土状況について記述しておく。

第6層は地山の上に堆積するもので、既に著しく削平されているものの前述したように調査

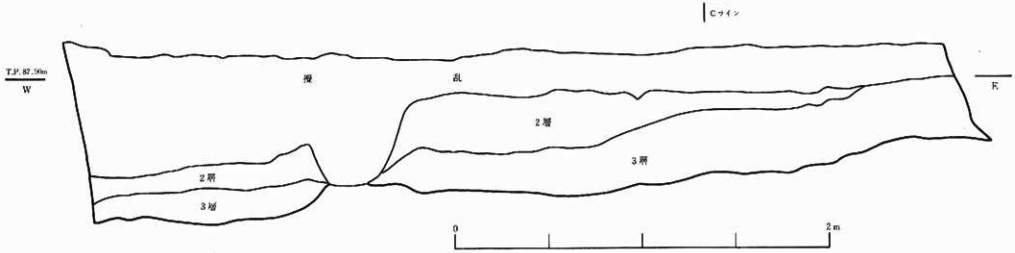


① 明黄褐色10YR7/6シルト（3cm～1mm径の礫を含み地山の土をうめたてる）
② 灰オリーブ色7.5Y6/2シルト
③ 灰オリーブ色5Y4/2砂質シルト（5～1cm程度の礫、瓦、ガラスを含む）
④ 青灰色5BG5/1シルト（オリーブ灰色10Y6/2粗粒砂を含む少量の炭、植物遺体を含む）
⑤ 暗青灰色10BG4/1シルト（オリーブ灰色10Y6/2粗粒砂を含む）
⑥ 明黄褐10YR7/6シルト（灰色10Y5/1シルトのラミナ、植物遺体を少量含む）

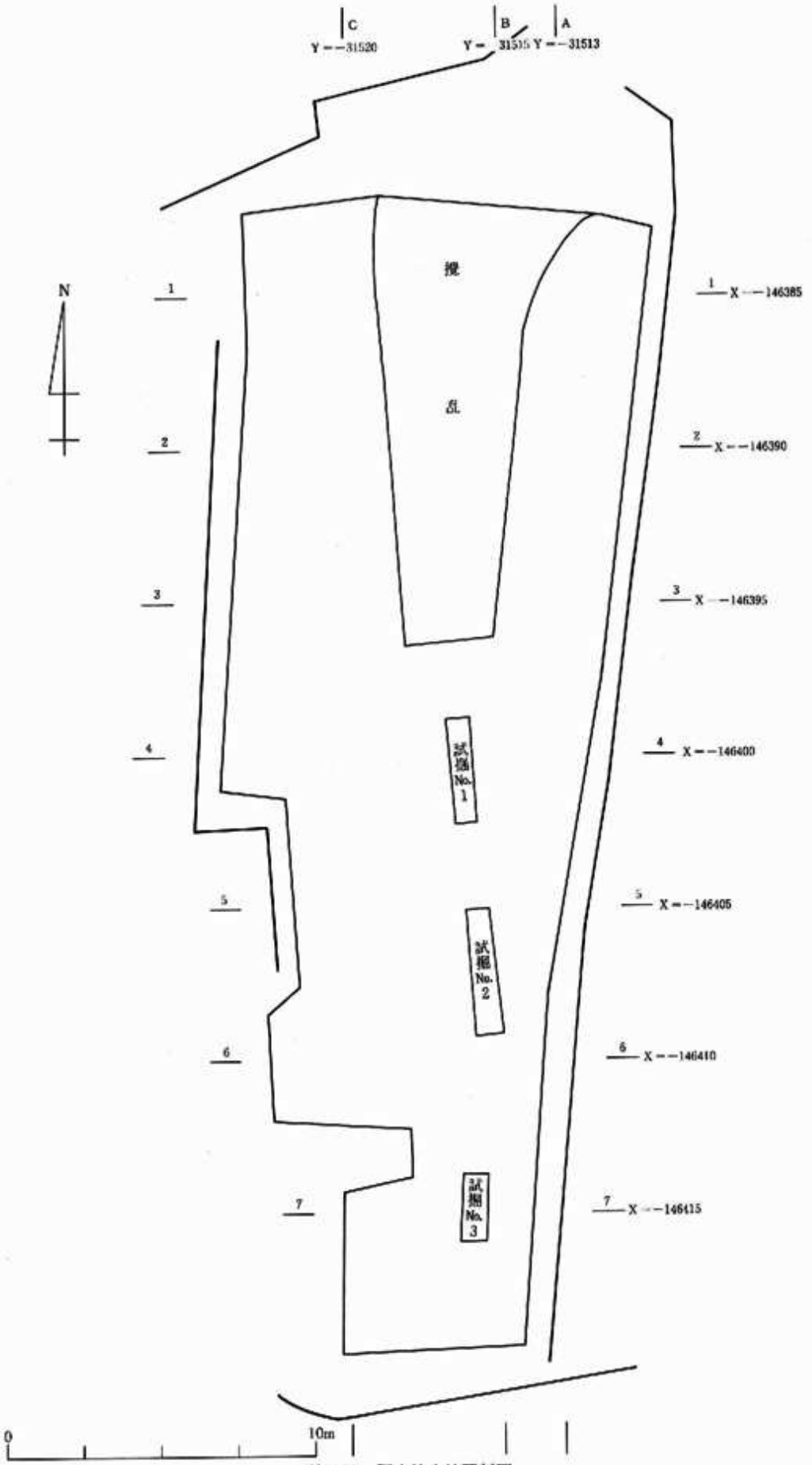
調査区南壁断面



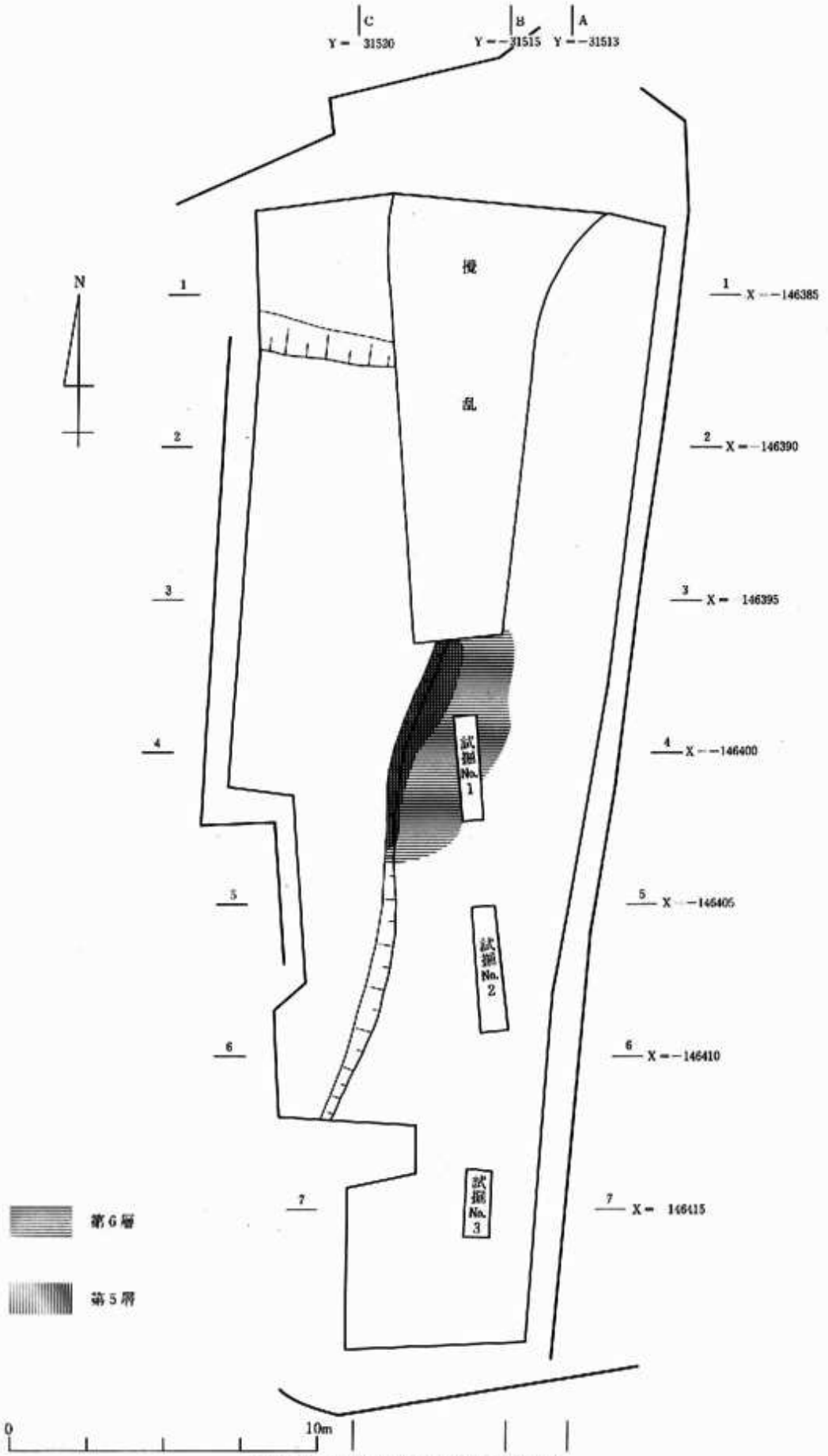
4ライン東西断面



第17図　調査区断面図



第18図　調査地点地区割図



第19図　調査地点遺物包含層平面分布図

第20図　第６層遺物出土状況実測図

地区のほぼ中央部に東西約３ｍ・南北約7.5mのほぼ長円形の範囲に分布し、地山の傾斜にそって東から西へ傾いて堆積する。出土遺物には土師器・須恵器・弥生土器などの土器類のほか鏡・サヌカイト片がある。土器はいずれも細片化しており、しかも著しく磨滅しているものが多く、保存状態の良好なものではない。したがって、土器はほとんど接合せず、完形品をまったく含まない。土器は、主に４ライン以北の段の縁辺部付近からまとまって出土している。出土土器のうち最も多いものは土師器である。須恵器は数点出土しているのみである。土師器には、壺・甕・高杯などの器種がある。このうち土体を占めるのは高杯で甕や壺は少量にすぎない。２面の鏡は、土器を多量に検出している地点から約1.5m南側において約40cm離れて検出している。鏡の出土地点およびその周辺からは、特別な施設を検出することはできなかった。２面の鏡のうち北側の鏡は（10）背面が上向きの状態で、南側のもの（11）は、表面が上を向いた状態で出土している。

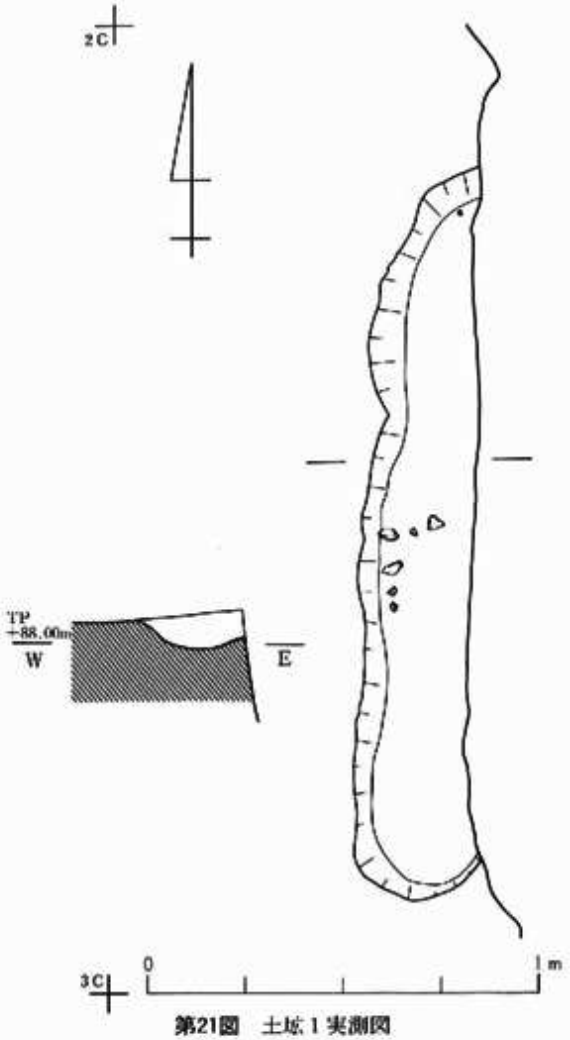
２．遺構

今回の第２次調査で検出できた遺構は、遺物包含層である第５層および第６層上面ではまったく確認できず、すべて地山上面において確認している。

検出できた遺構には、池状遺構１・土坑１・柱穴９がある。これらの遺構はその上面を既に削平されており、良好な遺存状況ではない。以下順に遺構の概略を記述してゆくことにする。

池状遺構は、調査地区の南端部分において検出している。池状遺構は北辺部の一部約６ｍを確認しているのみで、東西両方向とも調査区外にさらにのびる。深さは約0.7ｍを測る。底面は、ほぼ平坦である。池状遺構の北肩は南側にむかって急角度に傾斜するものの、途中に幅約40㎝の段を設ける。段の部分には、瓦質の土管を入れ子状に連結して１列に埋設している。土管は、調査地区内では20個検出ができた。土管は直径約14.5㎝・長さ約28.5㎝・厚み約1.0㎝を測る。池の堆積状況を調査区南端部の東西方向の断面で観察すると、池の埋土は大きく上下にわけることができる。池の下部には、青灰色（5BG5/1）シルトなどが堆積する。この層位からは、陶磁器類とともに昭和13年の十銭銅貨が出土している。上部は、周辺の地山を削平して人為的に埋めたものである。

土坑１は、調査地区の中央北寄りの地点で検出している。土坑の東半分は既に撹乱によって削り取られている。土坑の形状は、現状で南北方向に長軸とする長円形を呈するものである。底面は、ほぼ平坦な面をなす。土坑の規模は南北３ｍ77㎝・東西は現状で57㎝。深さ17.5㎝を測る。土坑内には暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト層が堆積し、細片化した微量の古墳時代の土師器片を含む。



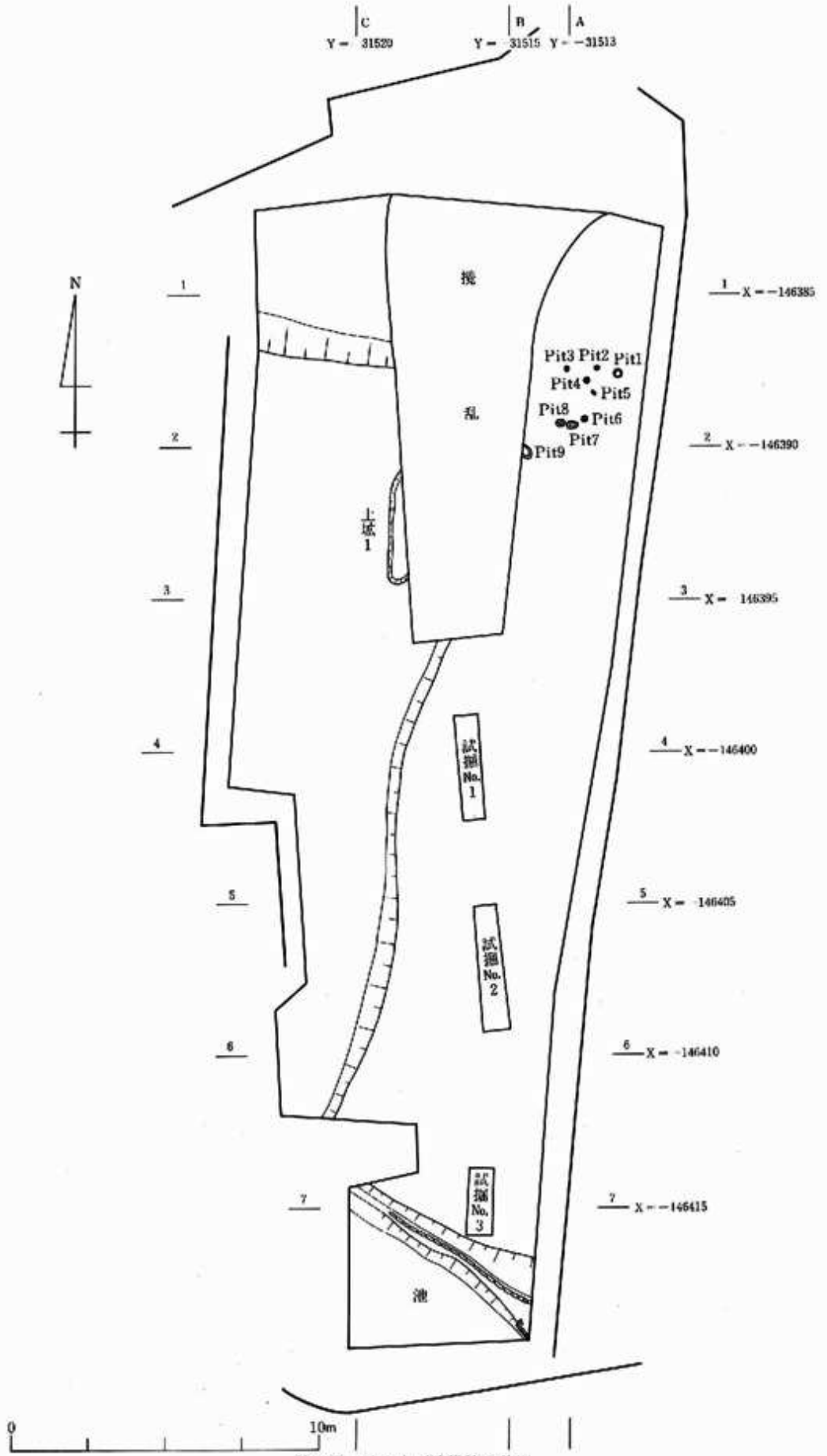
第21図　土坑１実測図

柱穴は、調査地区の北東部にまとまって９個検出しているものの建物を復原するにはいたっていない。柱穴の規模はすべて直径30㎝前後の小規模のものである。柱穴内の埋土は３種類に分けることができる。しかし、各柱穴には重複関係や出土遺物がないために、これらの柱穴の先後関係は不明である。柱穴内からは柱根や根石などをまったく検出することはできなかった。

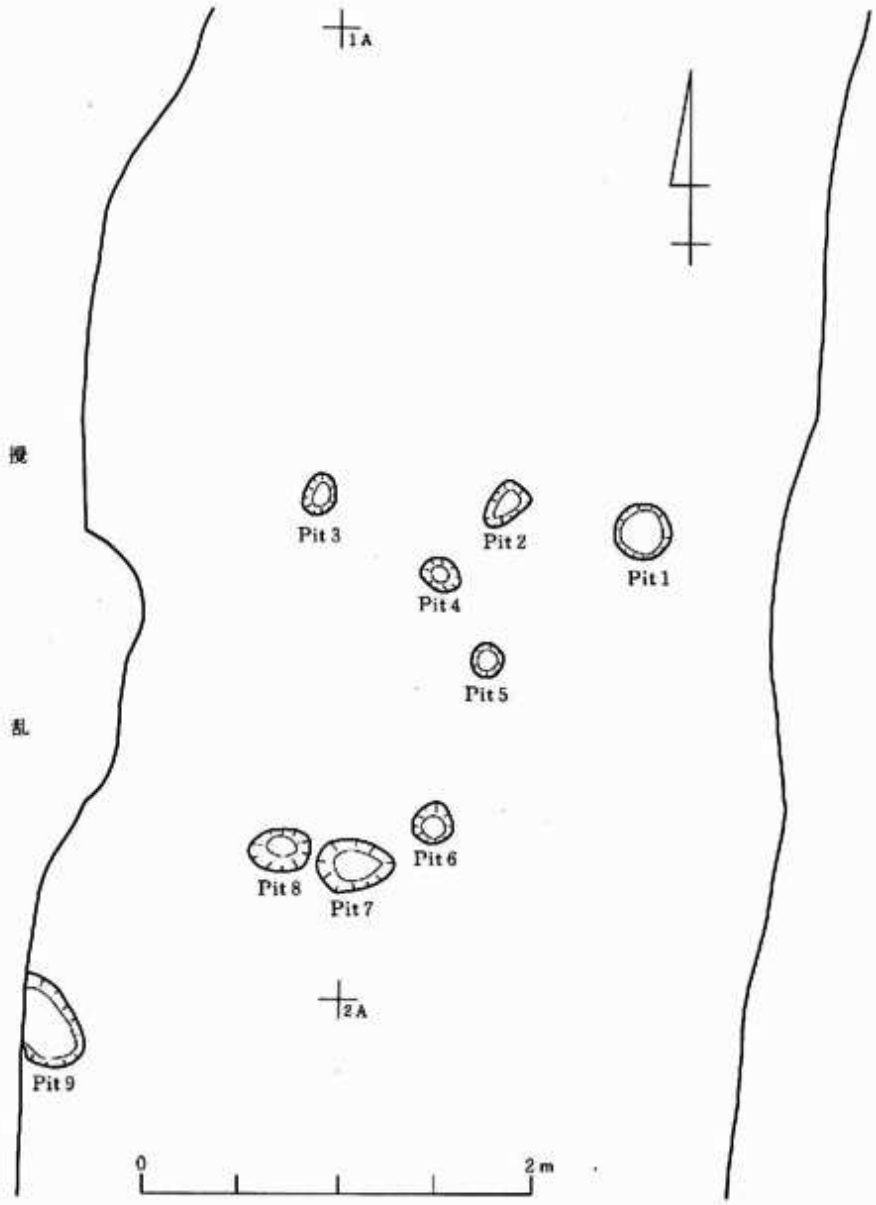
３．出土遺物

遺物は、第５層、６層および土坑１から出土している。このうち、第５層および土坑１の出土遺物は、小破片化した古墳時代の土師器を微量検出しているのみであり図示できるものはない。したがって以下では、第６層の出土遺物を中心として記述することにする。

第６層出土遺物には、土師器・須恵器・弥生土器などの土器類のほか、仿製珠文鏡２面・サヌカイト片がある。このうち土器



第22図　地山上面遺構検出状況



第23図　Pit群実測図

類は、コンテナに2箱ほど出土している。土器はいずれも細片化しており、図ポできるものは少ない。遺物の出土状況については前述したとおりである。出土土器のうち最も量的に多いのは土師器である。

土師器

土師器には、壺・甕・高杯などの器種が認められる。このうち高杯が最も多く甕や壺は少ない。土師器は、著しく磨滅しているため、調整法の不明なものも多い。

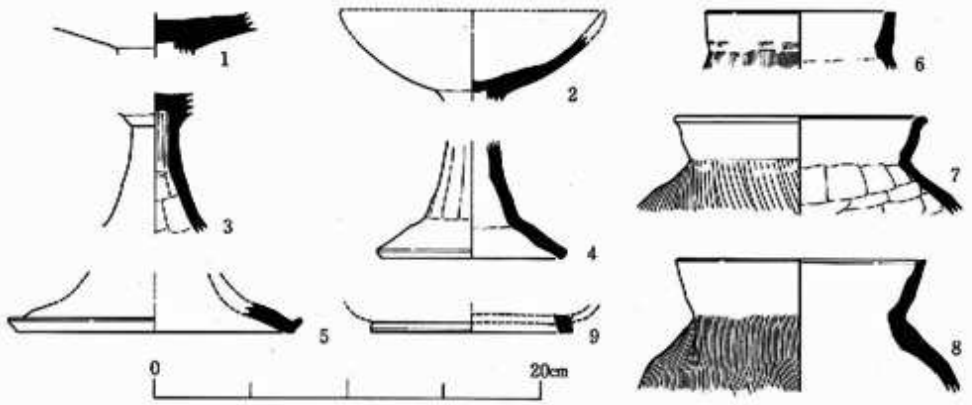
高杯（1～5、12～15）　出土した土師器のうち最も多い器種である。他の器種と同様に磨滅が著しく完形に復原できるものはない。1は、直線的に斜め上方にのびる杯底部の破片であ

第3表　検出遺構一覧表

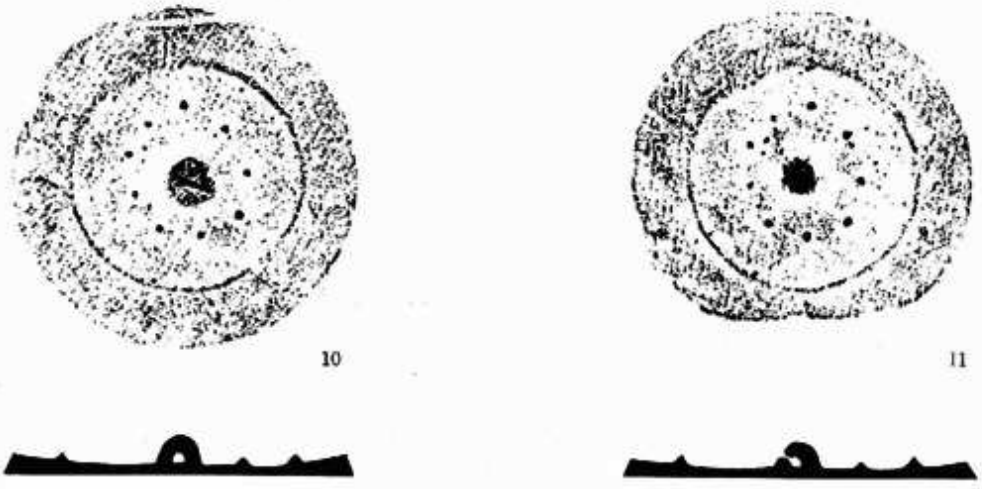
遺構名	規模 (cm) 長径 × 短径 × 深さ	形態	埋土	出土遺物	備考
Pit 1	29 × 29 × 5	円形	不明	なし	
Pit 2	26 × 16 × 3.4	三角形	不明	なし	
Pit 3	22 × 17 × 44.2	楕円形	褐色10YR4/4シルト（1cm以下の礫を少量含む）	なし	
Pit 4	21 × 17 × 21.4	楕円形	灰黄色2.5Y6/2シルト（1cm以下の礫を少量含む）	なし	
Pit 5	18 × 16 × 6	円形	黄灰色2.5Y4/1砂質土	なし	
Pit 6	22 × 20 × 13.9	円形	灰黄色2.5Y6/2シルト（1cm以下の礫を少量含む）	なし	
Pit 7	40 × 25 × 21.1	三角形	灰黄色2.5Y6/2シルト（1cm以下の礫を少量含む）	なし	
Pit 8	30 × 25 × 30.8	楕円形	黄灰色2.5Y6/2シルト（1cm以下の礫を少量含む）	なし	
Pit 9	50 × 31以上 × 20.5	楕円形	灰オリーブ色5Y5/2砂質土	なし	西側撹乱により削平
土坑1	377以上 × 57以上 × 17.5	長円形	暗灰黄色2.5Y4/2シルト（5cm以下の礫を少量含む）	土師器片	東側半分撹乱により削平

る。杯底部と口縁部との境界は、12のような稜または13のような段によって区画する。脚部の形態は不明。1・12の調整手法は器表面の磨滅が著しいために不明である。13の口縁部内面には、左上がりの斜方向のハケメ調整を施す。1・12・13は胎土内に多量の長石・くさり礫を含み、橙色の色調を呈することから他地域からの搬入品と考えることができる。2は、椀形を呈する杯部の破片で口縁端部を欠損する。杯部内外面の調整法は磨滅のため不明。杯部と脚部との接合は、杯部に脚部上端を挿入し、さらに境界部分に粘土を貼り付けて補強している。脚部の筒部以下を欠損するため形態・調整法は不明である。胎土内にくさり礫・長石粒を含み、黄橙色の色調を呈する。3は脚部片で裾部を欠損する。筒部は細長く、「ハ」の字形にひらき、ゆるやかに裾部へつづく。外面調整は器表面の磨滅のため不明。内面では下半部を横方向のヘラケズリ調整によって仕上げるものの、上半部には縦方向のシボリメが残存する。胎土や色調は他の高杯と同様の特徴を持つ。4・14は、脚部片である。筒部は「ハ」の字形にひろがり、裾部で傾きをかえさらに大きくひらく。脚端部は四角くおさめ面を構成する。脚部には円孔を施さない。筒部外面には、ヘラ状工具でナデて仕上げるため弱い面をなす。脚部内面には、ナデ調整を加える。4は胎土内にくさり礫を多量に含み、橙色を呈する。他地域産の土器である。5・15は脚裾部の破片である。5の脚径は約14.2cmを測る。脚端部は、上方にやや拡張し面をなす。内外面の調整法は、ヨコナデで仕上げている。胎土や色調の特徴は、他の高杯と同一である。

甕（6～8、16～21）　6は口径9.8cmを測る小型の甕である。口縁部はほぼ直立し、端部



第24図　出土遺物実測図



第25図　鏡実測図

に平坦な面を構成する。口縁部から体部には、ゆるやかに移行する。体部外面には縦方向のハケメ調整を施す。口縁部内外面はヨコナデ調整によって仕上げる。7は口径12.9cmを測る。口縁部は内彎気味に外上方へのび、先端で短く外反する。口縁端部は、内傾する面をもつ。口縁部と体部との境界には稜をもつ。体部外面は、やや左上がりの斜方向に粗いハケメ調整する。口縁部内外面は、ヨコナデによって調整する。体部内面は、横方向のヘラケズリ調整を時計回りに施す。8の口径は、12.9cmである。口縁部は内彎気味に外上方にのびる。口縁端部は内側に傾斜し、肥厚する。口縁部と体部を分ける稜は鋭い。口縁部内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。体部外面は、縦方向の細かいハケメ調整を施す。体部内面には、指オサエ痕がある。灰白色の色調を呈し他地域産の土器である。17・18の口縁部の形態は8と同一であり、出土した甕のうち主体を占めるものである。17は、灰白色を呈し他地域から搬入品である。18は、胎土内に角閃石・雲母粒を多量に含み明赤褐色の色調であることから生駒山西麓産と考えることが

できる。

図示できなかった甕のうち、16は口縁部が鋭く外反し、端部を上方につまみ上げる。口縁部外面はヨコナデ調整、内面を横方向のハケメ調整によって仕上げる。灰白色の色調を呈し、他地域産のものである。19～21は口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめるものである。19・20は口縁部内外面にヨコナデ調整を加える。21は口縁部外面をヨコナデ調整、内面を横方向のハケメ調整を施す。いずれも橙色の色調で、胎土内に角閃石・雲母粒を含み地元産のものと考えることができる。

壺（22）　壺は1点検出しているのみである。22は口縁部下半部の破片で、口縁端部および体部は欠損する。口縁部は外上方へ直線的にのびる。体部は類例から推測して扁球形を呈するものと思われる。口縁部外面には、縦方向のヘラミガキ調整を加えている。胎土は精良で、橙色を呈する。

須恵器

出土した須恵器には、杯B・甕が数点認められるにすぎない。いずれも細片化しており図示できるものは杯B（9）1点のみである。

杯B（9）　高台部の破片で杯部を欠損する。高台部は直径10.4cm・高さ5㎜を測る。高台はやや外方へ張り出す。底面は平坦な面をなす。全面ヨコナデ調整によって仕上げる。

甕（23）　体部の小破片である。外面の調整は、擬格子状タタキメによって器壁を叩き締めた後、部分的にカキメ調整を加える。内面には同心円状の当て具痕を残す。

珠文鏡

出土した2面の珠文鏡のうち10は完形品で保存状況の良好なものである。11は、鈕の一部と鏡面の一部を欠損するものの、全形を知り得る。保存状態は10にくらべややおとる。なお、2面の珠文鏡の成分分析を奈良国立文化財研究所の御協力を得て実施している。結果は別項に譲ることにする。

10は、面径4.5cm・面厚2.0cm・鈕径0.6cm・鈕高0.4cm・重量14.7gを測る。縁は素文で平縁である。縁より0.7cm内側の位置には、内区と区画する圏線を1帯巡らす。圏線は断面三角形を呈するが、一部に型くずれがある。内区には、内区のほぼ中央に位置する径1.6cmの円周に沿って一列にほぼ同大の9個の珠文を約0.6cm間隔で均等に配する。肉眼観察では、鏡面や鈕の部分には朱または、布などが付着していた痕跡はない。

11は、鏡面の一部を欠損するものの面径4.5cm、面厚2.0cm・鈕径0.6cm・鈕高0.4cm・重量12.6gを測り、10とまったく同一の大きさである。また、圏線の位置や型くずれ、内区の珠文の位置・数・間隔などについても10と一致する。このようなことから10と11とは同笵の珠文鏡と考えることができる。

以上のように第6層出土遺物には、時間的な幅がある。すなわち、16の甕口縁端部の形態は庄内式甕の特徴をもつ。7・8・17・18は、口縁端部が内側に肥厚する面をもつ特徴から古墳時代前期から中期初め頃の布留式の新しい時期にあたる。また、1～5・12～15の高杯は形態

的・製作技法的な特徴からみてこれらの甕とほぼ同時期の布留式の新しい時期から6世紀初頭頃のものと考えることができる。6・19～21は、口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめることから須恵器出現後の古墳時代後期の土師器と考えることができる。9の須恵器は、高台をもつ杯Bで奈良時代頃と考えることができる。このほかに微量の弥生土器も認められる。

したがって第6層には、弥生時代から奈良時代までの遺物を含んでいる。量的には古墳時代前期から中期初め頃の布留式の時期の土器が最も多い。珠文鏡の時期は、共伴した土器のうえからでは限定することはできないが、第6層出土土器のうち、最も出土量の多い時期である古墳時代中期頃の可能性が高いものと推定しておく。

Ⅳ　珠文鏡の材質調査

奈良国立文化財研究所　肥塚隆保

今回の発掘調査により出土した珠文鏡2面は、肉眼的な観察の結果、同笵鏡であると判定されたものである。ここでは、材質調査をおこないどのような類似性が得られるか、調べたのでその結果を報告する。

1．分析試料について

分析試料は珠文鏡2面で、いずれも褐色ないし褐緑色の平滑状態の錆が鏡面を覆っておりにぶいガラス状光沢を呈するものである。いずれの鏡とも保存状態は似ている。2面の鏡のうち1面は完形であり重量は約14g であった（以下A鏡とする）。他の1面は外縁部の一部が欠損している。重量は約12g であった（以下B鏡とする）。

2．分析の方法について

材質の特徴を得るため、蛍光X線分析法による測定をおこなった。これは、非破壊測定が条件となったためである。また、鏡の保存状態から推察すると地金金属が残存している可能性がきわめて期待できなかった事にもよる。

まず、各々の鏡について全角定性および半定量測定を行い比較検討をおこなった。次いで同一鏡の異なった複数箇所について銅－錫－鉛の各元素のX線相対強度を測定し、各箇所の錫／銅（SnKα／CuKβII），鉛／銅（PbLγ／CuKβII）の値を求めて散布図に示し、1次回帰式を求め比較をおこなった[11]。

なお、蛍光X線分析測定条件は以下にしめす。

X線管球：　Cγ（クロム）
管電圧　：　50Kv　　管電流　：　50mA
分光結晶：　LiF（200）（フッカリチウム）
検出器　：　SC（シンチレーションカウンター）

走査範囲：　5°～117°（2θ）　試料室　：　真空

装置　　：　理学電機社製3370C型

分析結果について

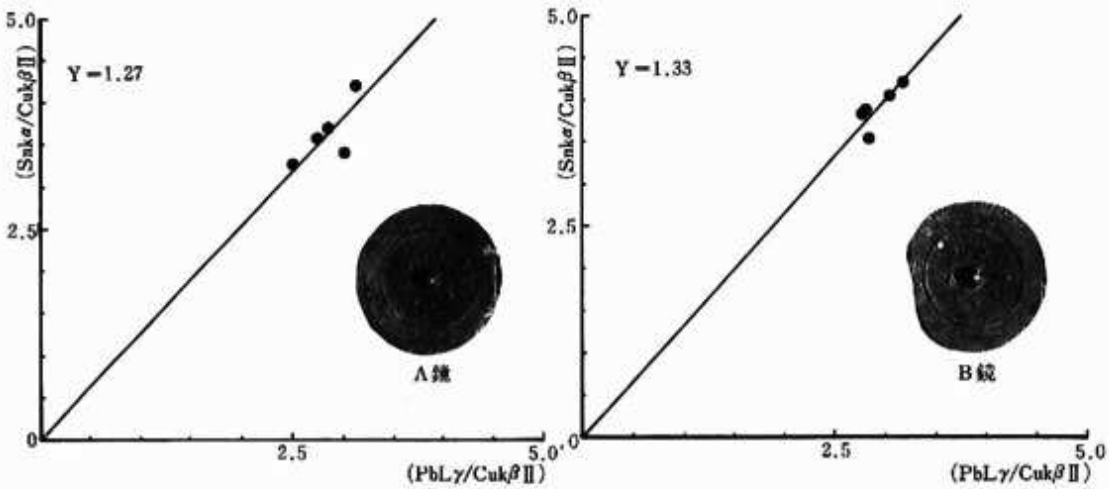
定性分析の結果、A，B鏡ともCu（銅）、Pb（鉛）Sn（錫）を主成分とする青銅製であった。その他、不純物あるいは副成分としてAg（銀）、As（砒素）、Fe（鉄）を検出した。錆層に覆われているデータではあるが、Agの含有量は約0.1%、Asは約1.5%、Feは約0.5%であり両者の不純物あるいは副成分の含有量は良く一致する結果をしめした。ただし、地金を分析できなかったので、本来の含有量は不明である。同様に錆層のSnは15～20%、Pbは2～3%で両者の値は良くにているといえる。平滑状を呈する錆層の場合、地金のSn含有量にくらべ2～4倍程度高くなるというデータがあり[1]、今回測定した鏡2面はいずれも従来から言われている舶載鏡のようにSn成分の高い青錆鏡ではない。また、Pb含有量に関しては、錆層と地金ではあまり変動がないか、若干錆層のほうが減少する事が報告されている[2]。

同一鏡の異なった複数箇所について錫／銅（SnKα／CuKβII）〔Y成分〕、鉛／鉛（PbLr／CuKβII）〔X成分〕の値を求めてX－Y散布図上にプロットし回帰分析を行いY＝aXの式を求めた結果、A鏡のa値は1.27であり、B鏡のa値は1.33であり、両者ともa値は約1.3という結果が得られた（第26図）。

以上の結果から、今回出土した珠文鏡2面は、主成分や不純物、副成分がきわめて類似しており、同じ材料で製作したと考えてもよい結果を得た。

参考、引用文献

（1）沢田正昭（1986）「遺物の非破壊調査法」、奈良国立文化財研究所保存科学研究集会、P89～108



第26図　蛍光X線分析法（非破壊法）による材質の比較

V．まとめ

今回の調査地点では、すでに民家や耕作に伴う段が造成されていたため、著しい削平・撹乱をうけていた。しかしながら局部的に残存する遺物包含層と少数の遺構を検出することができた。以下、本調査によって判明したことを列記してまとめとしたい。

1．千手寺山遺跡は、従来近畿日本鉄道奈良線の石切駅周辺の辻子谷の北側に立地する旧石器時代および奈良時代の遺跡と考えられてきた。今回の調査地点は、辻子谷の南側の標高約90m付近にあたる。このことは、当遺跡の範囲を辻子谷をはさんだ南側の低位置にまで拡大する必要があることを示している。

2．地山上面で検出できた遺構は、近代の池状遺構1、古墳時代の土壙1である。柱穴からは出土遺物がなく時期を限定できない。古墳時代の遺構を確認できたことや珠文鏡が出土していることから、調査地周辺部に同期の古墳や祭祀場などの遺構が存在することも十分考えることができる。

3．出土遺物には、奈良時代から古墳時代の土器のほか珠文鏡2面などがある。このうち出土量の最も多いのは、布留式期の土師器である。しかし、これらの遺物は、同一層位から出土しており、良好な出土状況ではない。

4．2面の珠文鏡は、面径、圏線および珠文の位置や数、型くずれなどから同笵と考えることができる。近畿地方出土の他例と比較すると、面径が小型であり、外区の鋸歯文を省略していること、珠文が点状を呈し小型であることなどから珠文鏡としては、極めて退化したものである。成分分析の結果、2面の鏡の成分はほぼ同一で、仿製であることが判明した。また、成分中にヒ素を含むことは、注目される。このような同笵の小型鏡が同時に出土する例は、3組の小型内行花文鏡を副葬していた羽曳野市御旅山古墳がある。大型の同笵鏡に関する研究にくらべ、小型仿製の同笵鏡に対する研究は、これまでほとんど試みられていない。今後、小型の同笵鏡についても分布状況や時期について再考する必要がある。

調査参加者は、今井樹彦、小田正行、松本隆弘、山崎史郎である。また、遺構・遺物の製図は為井通子がおこなった。

現地での調査については、奈良大学教授水野正好氏ならびに奈良大学講師木下密運氏の御指導を得た。また、珠文鏡の鑑定と成分分析については、奈良国立文化財研究所調査部長田中琢氏、同沢田正昭氏、同肥塚隆保氏の御指導、御協力を得、玉稿を賜った。文末ながら記して感謝申し上げます。

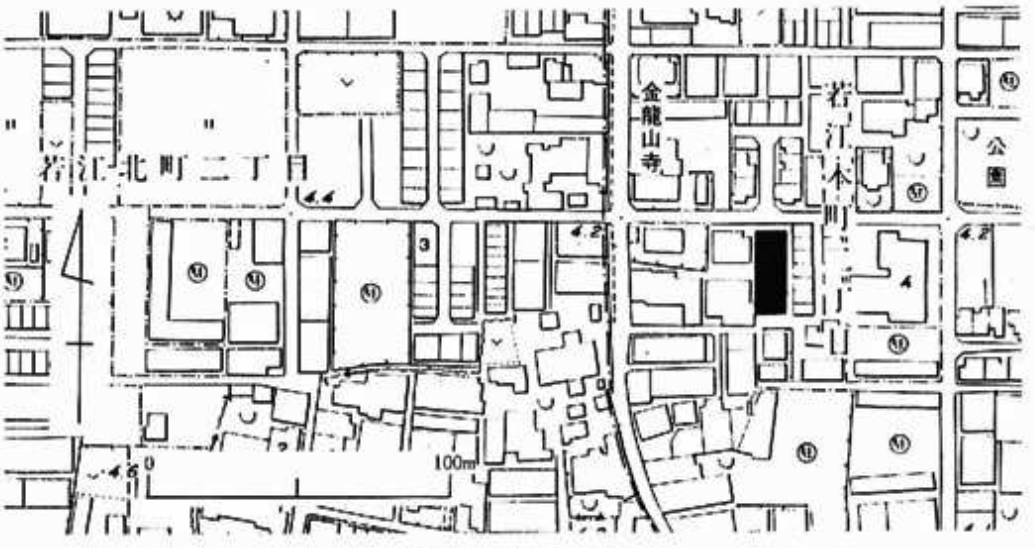
若江遺跡第28次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

若江遺跡は東大阪市若江本町、若江北町、若江南町一帯にひろがる弥生時代から近世に至る複合遺跡である。本遺跡の周辺は開発がすでに進み、ほとんどが住宅地となっている。

若江遺跡は昭和９年の楠根川改修工事の際に弥生土器、土師器、須恵器などが採集され、周知されるようになった[1]。また、昭和42年には若江公民館建設工事の際に土釜積み井戸も見つかっている。若江遺跡で本格的な調査が実施されたのは昭和47年の若江小学校校舎増築工事に先だってであった。調査では鎌倉～室町時代の井戸、土坑、溝、柱穴の遺構や土器、瓦、石製品などの遺物が多量に出土した。その後、公共下水道管埋設工事、住宅建設工事、国庫補助事業に伴う調査が実施され、今回で第28次調査に及ぶ。特に大阪・東大阪線（旧四条・長堂線）拡幅工事に伴う調査は昭和49年より毎年継続的に実施され、多くの成果が得られている[2]。調査では若江城関連の堀、建物跡などが見つかっている。若江遺跡は今日までの調査で範囲や性格などが遅々にではあるが明らかになりつつある。

今回、若江本町２丁目162番地で共同住宅建設工事が実施されることになった。工事予定地は若江遺跡内にあり、東大阪市教育委員会文化財課が試掘調査を実施した結果、遺構、遺物が存在することが確認され、事前の発掘調査が必要との見解が出された。原因者と東大阪市教育委員会で協議した結果、発掘調査を実施することになった。発掘調査は財団法人東大阪市文化財協会に委託しておこなった。調査面積は254㎡であり、昭和59年３月５日～４月13日まで実施した。



第27図　調査地点位置図

II. 位置と環境

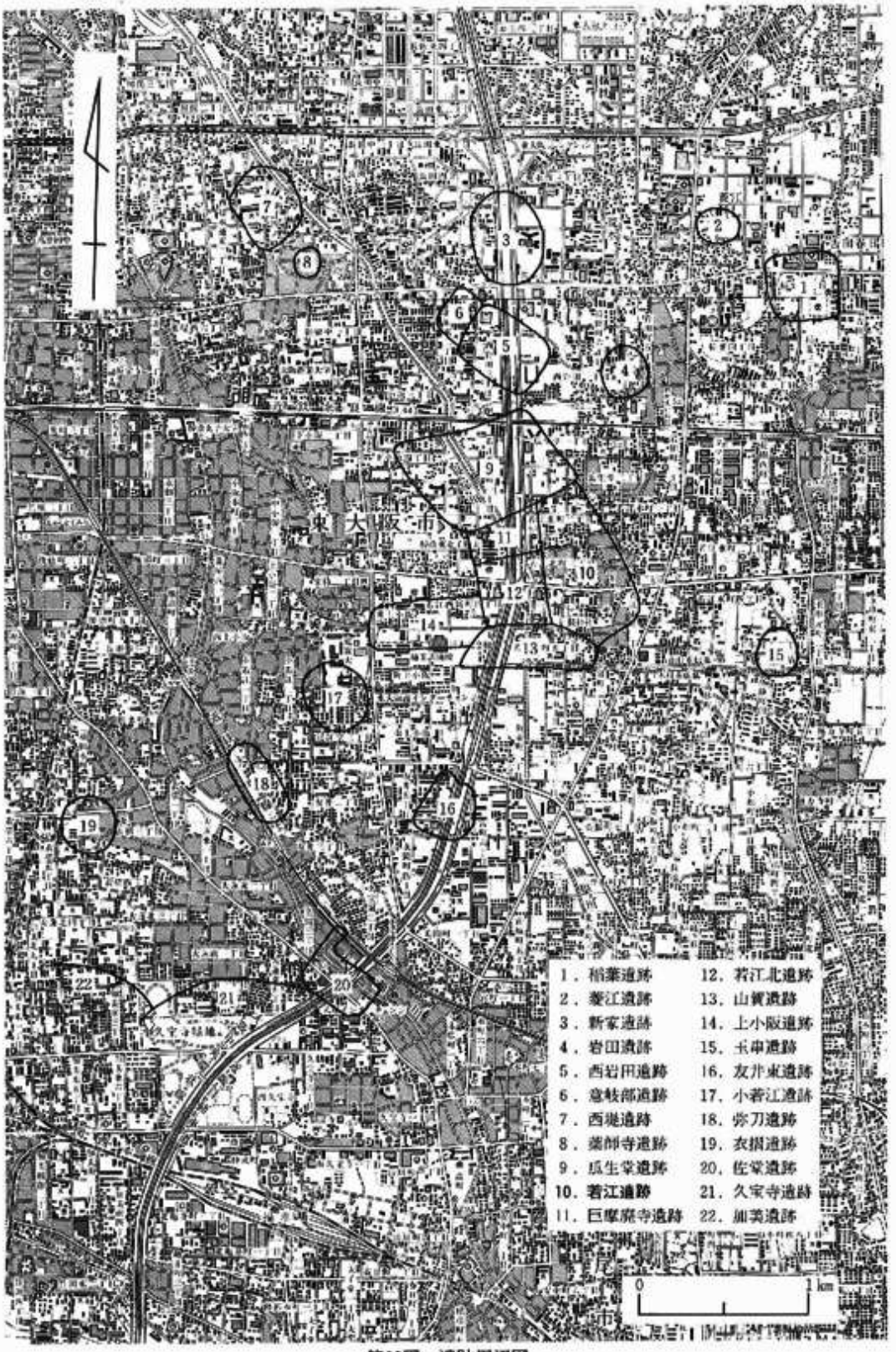
若江周辺に人々が住み始めるのは弥生時代前期からである。若江遺跡の南西約0.3㎞に山賀遺跡があり、北西約0.7㎞には瓜生堂遺跡、さらに西約3.5㎞には高井田遺跡などが出現する。当時、若江遺跡の北に河内湖が広がっており、大小５本からなる旧大和川（恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川）が南から、淀川が北から流れ込んでいた。旧大和川と淀川より流出する土砂によって河内平野は形成された。当時の人々は自然堤防や微高地上に集落を営み、後背湿地を水田として利用していた。平野部以外にも当時代の遺跡は出現し、東に位置する生駒山西麓の扇状地や扇状地から平野部へ移行する地点などにある。中垣内、鬼虎川、縄手遺跡などがあげられる。これらの遺跡は中期～後期まで続くものが多い。若江遺跡では遺構は検出していないが、後期の土器が出土しており、この時期には集落が存在していたと考えられる。

若江遺跡周辺の古墳時代の遺跡は山賀、瓜生堂、西岩田、意岐部遺跡などがある。古墳時代の人々も前代の人々と同条件の場所を選び集落を営んでいた。若江遺跡では明確な遺構は見つかっていないが、同時期の遺物が多量に出土していることから、集落があったと考えられている。生駒山西麓の扇状地にも点々と集落が存在しており、掘立柱建物や竪穴住居などが検出されている。また、古墳時代中期～後期には多くの古墳が造営されており、生駒山西麓の各尾根筋に群集墳が点在する。出雲井、山畑、花草山、五里山古墳などがあげられる。

奈良時代以降になると若江遺跡では人々の生活が活発になったらしく、多量の遺物や遺構が検出されている。若江の地には若江寺、若江郡衙、若江城が存在したと考えられており、これらの遺構や遺物が見つかっている。若江寺は白鳳時代に創建された寺院である。明確な遺構は見つかっていないが同時期から平安時代の瓦が多量に出土していることから推測できる。東大阪市域で若江寺と同時期の寺院は河内寺、法通寺、石凝寺などがあげられ、河内寺や法通寺では遺構も検出されている。また、河内国若江郡をおさめる郡衙も若江にあったと推定される。

若江城は明徳元年（1390年）、畠山基国が河内の守護になったころ、守護代遊佐氏の本拠として築かれた城である。応仁の乱以後、若江城は幾度も戦乱に巻き込まれていることが文献によってわかっている。また、天正９年（1581年）、宣教師ルイス＝フロイスが本国のローマに書き送った「日本耶蘇会年報」の一節には若江城が姿を消したことが伝えられており、この年より以前に若江城は廃城になったと考えられる。近年の調査では若江城のものと考えられる遺構が多く見つかっている。東西方向に伸びる堀の中には数十本の逆茂木が打たれており、また南北方向に伸びる堀も見つかっており、幅が10m以上、深さが２～３ｍあることがわかっている。若江城の礎石と考えられるものや付属施設の堺立建物も見つかっている。以前に検出されていた礎石建物や堺列についても再考され、若江城関連の遺構と考えられている。

若江遺跡は若江寺、若江郡衙、若江城を中心にして、中世の集落も営なまれており、建物跡、井戸、溝、土坑などの遺構が検出されている。


1．稲葉遺跡
2．菱江遺跡
3．新家遺跡
4．岩田遺跡
5．西岩田遺跡
6．意岐部遺跡
7．西堤遺跡
8．薬師寺遺跡
9．瓜生堂遺跡
10．若江遺跡
11．巨摩廃寺遺跡
12．若江北遺跡
13．山賀遺跡
14．上小阪遺跡
15．玉串遺跡
16．友井東遺跡
17．小若江遺跡
18．弥刀遺跡
19．衣摺遺跡
20．佐堂遺跡
21．久宝寺遺跡
22．加美遺跡
0
1 km

第28図　遺跡周辺図

III. 調査の概要

1．調査の方法

昭和58年、若江遺跡第27次調査で設定した地区割を踏襲した[8]。国土座標に準拠する地区割であり、東大阪市西岩田（X＝－148.5、Y＝－36.5）を起点とする。100mを大区画とし、東西方向（Y軸）を東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ……、南北方向（X軸）を南へA・B・C……とした。さらに大区画を細分し、東南隅の交点を地区名とした。大区画と同一方向にY軸を1・2・3……、X軸をa・b・c……とした。今回の調査地はVF2p～VG4p、VF4p～VG4cにあたる。

地表下約30cmは盛土であるので機械掘削をおこなった。また、当初予定していた下部の人力掘削の内、北側の1/3は、すでに近代の撹乱を受けているのが判明したので再度、機械掘削をおこなった。撹乱は中世の遺構面下部まで至っていた。南側2/3は人力掘削をおこない、第4層上面と第5・6層上面で遺構の精査を実施した。

2．層位（第29図）

断面実測は南壁と東壁でおこなった。東壁の北側部は近代の撹乱を受けていたので実測はおこなわなかった。以下、各層ごとに特徴を記す。

第1層　盛土。層厚30～40cm。

第2層　黒褐色（2.5Y3/2）砂質シルト層。1～5㎜大の砂礫を多量に含む。炭片を多く含む。層厚10～20cm。遺物包含層。

第3層　黄褐色（2.5Y5/4）砂質シルト層。極細～細砂を少量、1～5㎜大の砂礫を多量に含む。層厚5～20cm。遺物包含層。

第4層　オリーブ褐色（2.5Y5/3）砂質シルト層。褐色（7.5YR4/3）砂質シルトが小ブロック（5㎜大）で多量に混じる。3～10㎜大の細礫を多量に含む。層厚40～60cm。整地層。近世の遺構面。

第5層　灰オリーブ色（5Y4/2）砂質シルト層。オリーブ色（5Y6/5）シルトが小ブロックで多量に混じる。1～3㎜大の細礫を多量、炭片を少量含む。層厚20～30cm。整地層。中世の遺構面。

第6層　灰オリーブ色（7.5Y4/2）砂質シルト層。オリーブ黄色（5Y6/4）シルトが小ブロックで多量に混じる。1～3㎜大の細礫を多量に含む。層厚20～30cm。第5層と同等の層。整地層。中世の遺構面。

A層　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト、オリーブ黄色（5Y6/4）シルト、褐色（10YR4/4）シルト、褐色（7.5YR4/3）シルトがブロックで混じる層。下部に炭片を少量含む。土坑2の埋土。

B層　オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト質粘土層。1～3㎜大の細礫を含む。土坑2の堆積土。

C層　灰黄色（10YR4/2）砂質シルト層。黒褐色（7.5YR3/2）砂質シルトの小ブロックが多量に混じる。1～3㎜大の細礫を多量に含む。土坑3の堆積土。

D層　灰色（5Y4/1）シルト質粘土層。灰オリーブ色（7.5Y6/2）シルトと明黄褐色（2.5Y6/6）シルトの小ブロック（3～5㎝大）が混じる。極細砂を少量含む。土坑3の堆積土。

E層　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト層。1～3㎜大の細礫を多量に含む。ピット1の埋土。

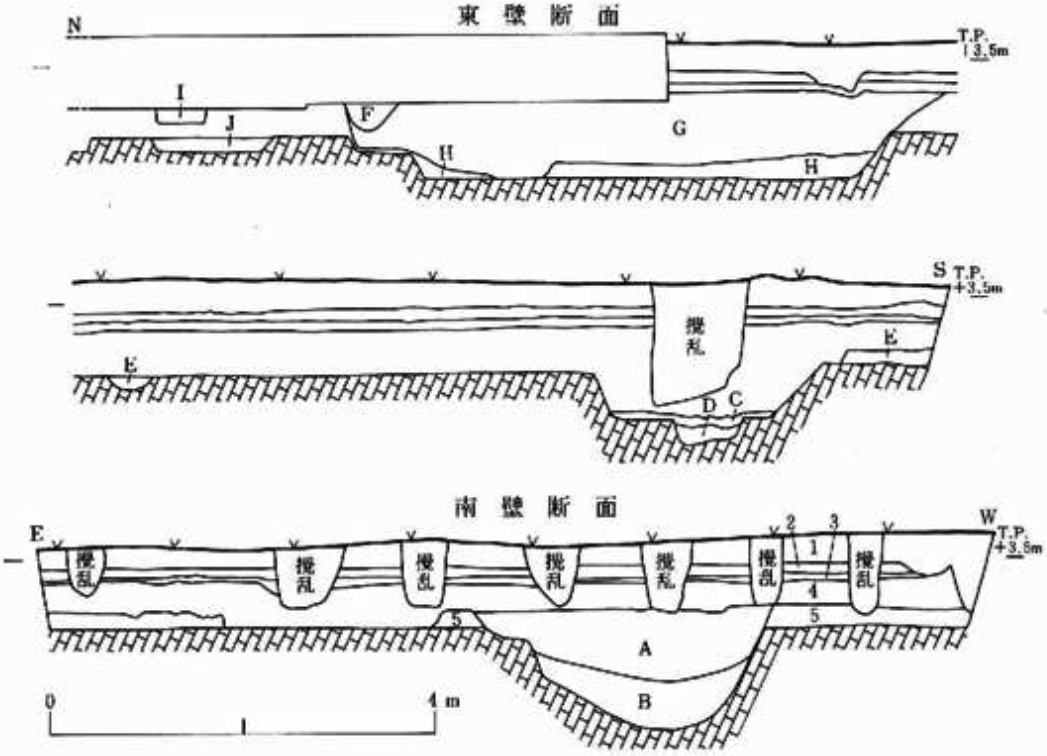
F層　黄褐色（2.5Y5/3）砂質シルト層。1～5㎜大の細礫を多量に含む。溝2の堆積土。

G層　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト層。1～5㎜大の細礫を多量、極細～細砂を多量、1㎝大の礫を少量含む。溝4の堆積土。

H層　黄褐色（10YR5/6）中～粗粒砂層。灰オリーブ色（5Y5/2）シルトのラミナあり。極細礫を含む。溝4の堆積土。

I層　暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質シルト層。中～粗粒砂を多量に含む。溝3の堆積土。

J層　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト層。黄褐色（10YR5/6）砂質シルトの小ブロックが多量に混じる。1～3㎜大の細礫を多量、炭片を少量含む。土坑4の埋土。



第29図　断面実測図

3．遺構

調査地の北約1/3は近代の撹乱を受けており、遺構は検出できなかった。調査地の南側に遺構は集中する。遺構は第4層上面と第5・6層上面の2面で検出した。第4層上面では溝4条、第5・6層上面では井戸1基、土坑4基、溝2条、ピット18を検出した。以下、各遺構ごとに説明を記す。

第4層上面の遺構

溝1（第30図）

調査地西側で検出した。南北方向に伸びる溝である。溝2、4を切っているので最も新しい時期の遺構と考えられる。幅2.1m、深さ0.4mを測る。溝内より日本製陶器、土師器などが出土。出土遺物より溝の時期は16世紀後半と考えられる。

溝2（第30図）

調査地北側で検出した。東西方向に伸びる溝である。溝4が埋った後に開削する。幅0.6m、深さ0.1mを測る。溝内より土師器、輸入磁器などが出土。出土遺物から溝の時期は16世紀と考えられる。

溝3（第30図）

調査地北側で検出した。東西方向に伸びる溝であり、調査地内からはじまる。幅0.6m、深さ0.1mを測る。溝3より遺物は出土していないが、溝1と同一面から切り込んでいることから時期は16世紀と考えられる。

溝4（第30図）

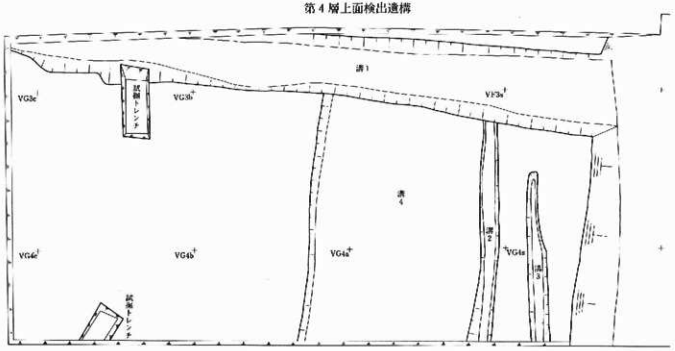
調査地中央で検出した。東西方向に伸びる溝である。北肩は溝2によって切られる。幅6.1m、深さ0.2mを測る。溝内より土師器、瓦器、須恵器、輸入磁器、日本製陶器などが多量に出土。出土遺物より溝の時期は16世紀と考えられる。

第5・6層上面の遺構

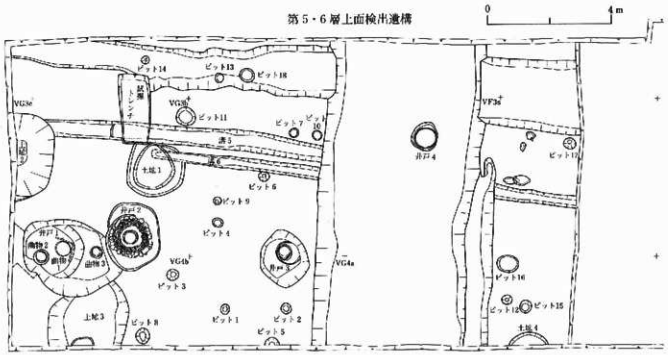
井戸1（第31図）

調査地南東で検出した。北側部は井戸2によって切られており、西側部では土坑3を切る。井戸1は上面形が楕円形を呈し、南肩が2段で落ちる。底の部分で井筒と考えられる曲物を3ヶ所で検出した。井戸3基が切り合っていると考えられるが前後関係は不明である。曲物1は2段が残っており1段目が径30cm、2段目が径38cmを測る。曲物1内より瓦器、土師器、輸入磁器などが出土。曲物2は1段が残っており、径35cmを測る。曲物より上部に竹のタガが1段残っており、本来は桶枠を使用していたのを廃絶時に抜き取ったと考えられる。曲物2内より土師器などが出土。曲物3は1段が残っており、径49cmを測る。曲物の上部にはL字形に組んだ角材を配する。角材は凹形の枘を穿って、片側を挿入する。本来は方形を呈していたと考えられる。また、角材の周囲に2本の杭が打たれていた。曲物の上部には井筒の一部があったと考えられる。曲物3内より瓦器、土師器などが出土。井戸1は長径3.3m、短径2.4m、深さ1.5m

第４層上面検出遺構



第５・６層上面検出遺構



第30図　遺構実測図

を測る。曲物1～3内より出土した遺物は、ほとんど時期差がないことから短期間に掘り変えられたと考えられる。井戸の時期は13世紀後半と考えられる。

井戸2（第31図）

調査地南東で検出した。井戸1の北肩を切っているので井戸2が新しいと考えられる。楕円形を呈する掘方に上部は瓦積み、下部は曲物を井筒として使用する。瓦は逆円錐形になるように組み、上部で径1.3m、下部で0.7mを測る。瓦の長辺が内側に向くように積み上げている。主に丸瓦、平瓦を転用する。下部の曲物は3段あり、1段目が径38cm、2段目が径42cm、3段目が径46cmを測る。井戸の掘方は長径2.2m、短径1.7m、深さ1.4mを測る。井戸内より瓦器、土師器、須恵器、輸入磁器などが出土。出土遺物より井戸の時期は13世紀後半と考えられる。

井戸3（第31図）

調査地中央で検出した。楕円形を呈する井戸であり、2段で落ちる。曲物は4段が使用されており、1段目が径37cm、2段目が径40cm、3段目が径44cm、4段目が径51cmを測る。井戸の掘方は長径1.9m、短径1.5m、深さ1.3mを測る。井戸内より瓦器、土師器、輸入磁器などが出土。出土遺物より井戸の時期は13世紀後半と考えられる。

井戸4（第31図）

調査地中央で検出した。上部は溝4によって削平を受けており、溝底で井戸の上面を検出した。円形を呈しており、竹のタガが4段残っている。本来、桶が井筒に使用されていたのが、廃絶時に抜き取られたものと考えられる。径0.9m、深さ0.6mを測る。井戸内より土師器などが出土。出土遺物から井戸の時期は14世紀末と考えられる。

土坑1（第30図）

調査地南側で検出した。円形を呈する土坑であり、2段で落ちる。土坑1は径1.8m、深さ0.7mを測る。土坑内より瓦器、土師器などが出土。出土遺物より土坑の時期は14世紀初めと考えられる。

土坑2（第30図）

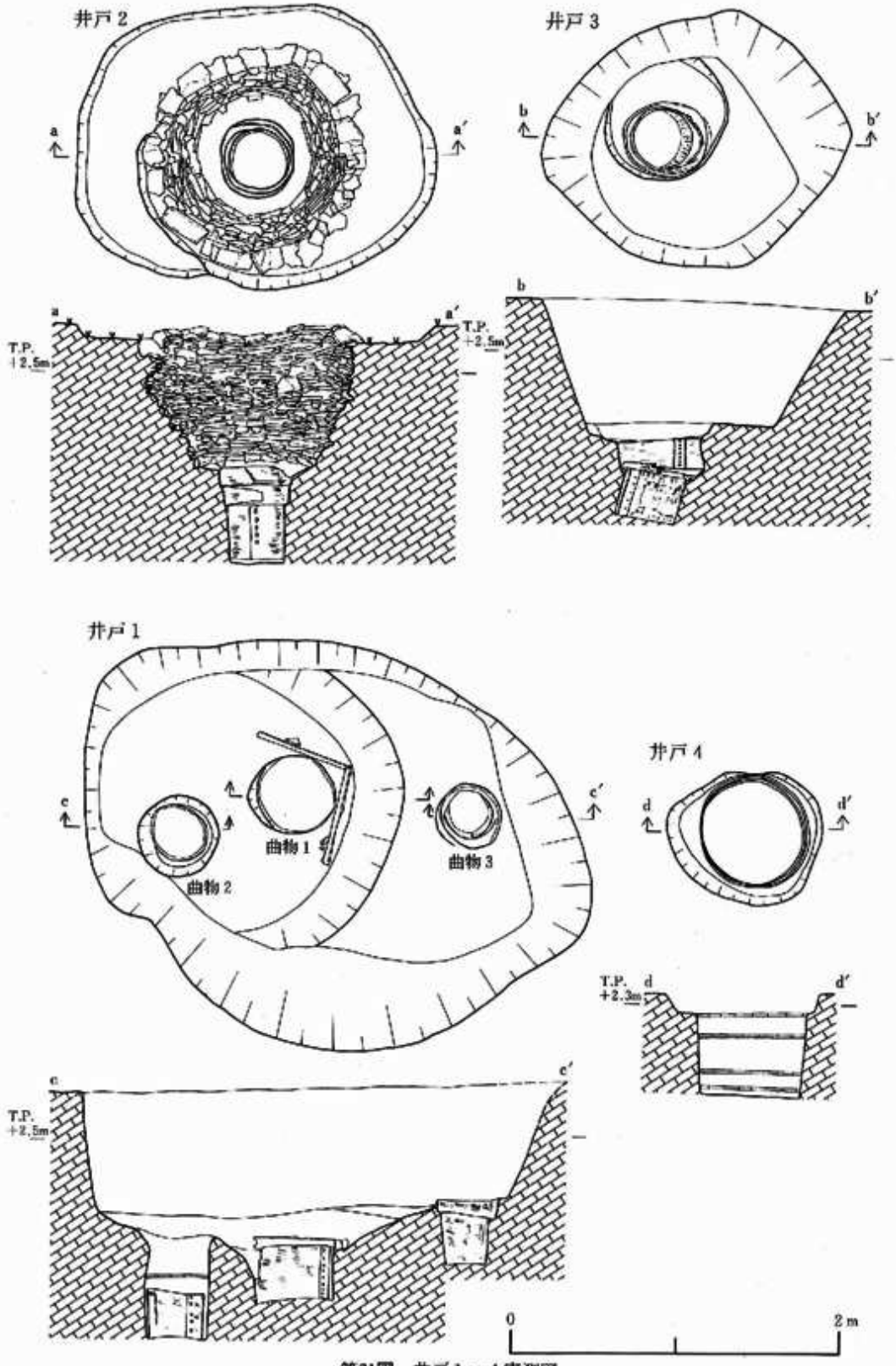
調査地南側で検出した。遺構の約1/2は南の調査地外に伸びる。円形を呈し、径2.8m、深さ1.0mを測る。土坑内より瓦器、土師器、輸入磁器などが出土。出土遺物より土坑の時期は14世紀初めと考えられる。

土坑3（第30図）

調査地南側で検出した。土坑3の西肩は井戸1によって切られている。東側の一部が調査地外にある。楕円形を呈し、2段で落ちる。径2.5m、深さ0.8mを測る。土坑内より黒色土器、瓦器、土師器、須恵器などが出土。出土遺物より土坑の時期は14世紀と考えられる。

土坑4（第30図）

調査地北側で検出した。遺構の大部分は東の調査地外にある。円形を呈し、径1.3m、深さ0.2mを測る。土坑内より土師器皿、瓦器椀などの細片が出土。出土遺物より土坑の時期は13世紀後半～14世紀初めと考えられる。



第31図　井戸1～4実測図

溝5（第30図）

調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に伸びる溝である。南側は土坑5によって切られている。また、南側には伸びておらず、溝4の途中で消滅する。幅0.6m、深さ0.4mを測る。溝内より土師器皿、瓦器椀などの細片が出土。出土遺物より溝の時期は14世紀と考えられる。

溝6（第30図）

調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に伸びる溝であり、幅0.3m、深さ0.1mを測る。溝内より土師器皿、瓦器椀などが出土。出土遺物より溝の時期は14世紀と考えられる。

ピット1～18（第30図）

合計18のピットを検出した。円形及び楕円形を呈し、径が0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mを測る。ピットは柱穴と考えられるが建物の規模は不明である。ピット内より土師器皿、瓦器椀などの細片が出土。出土遺物より遺構の時期は13世紀後半～14世紀初めと考えられる。

4．出土遺物

古墳時代～近世に至る遺物が出土した。古墳時代の遺物は埴輪がある。奈良時代～近世に至る遺物は土器、瓦、土製品、石製品がある。中世の遺物は遺構内から出土したものが多かったが、遺物包含層よりも出土した。以下、各遺物について説明を記す。

1）．土器

井戸1（第32・33図）

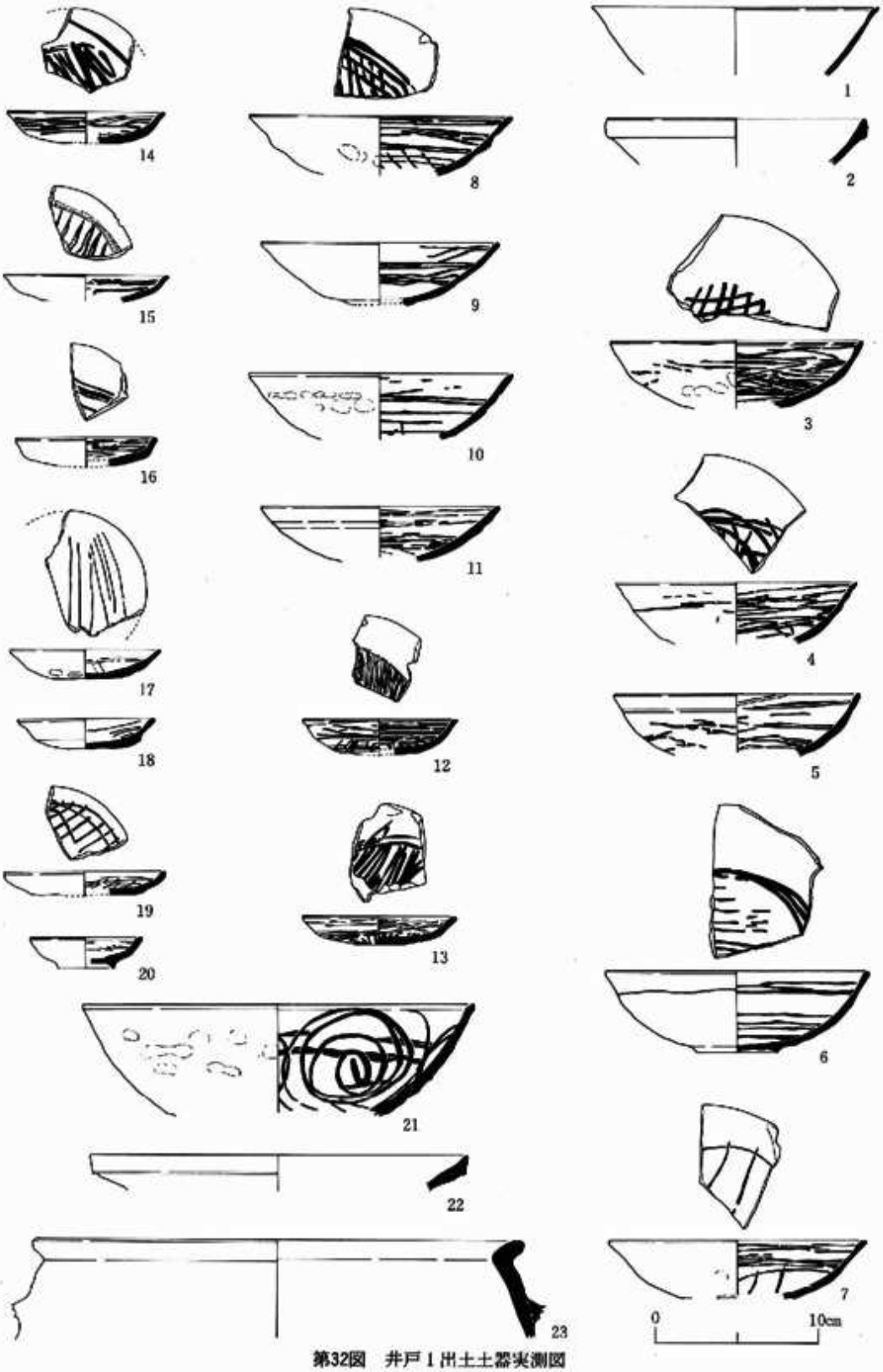
井戸1の掘方内より輸入磁器、瓦器、須恵器、土師器が出土した。

輸入磁器は白磁椀（1・2）がある。体部が逆ハ字形に開き、口縁部がゆるく外反するもの（1）と玉縁状を呈するもの（2）がある。

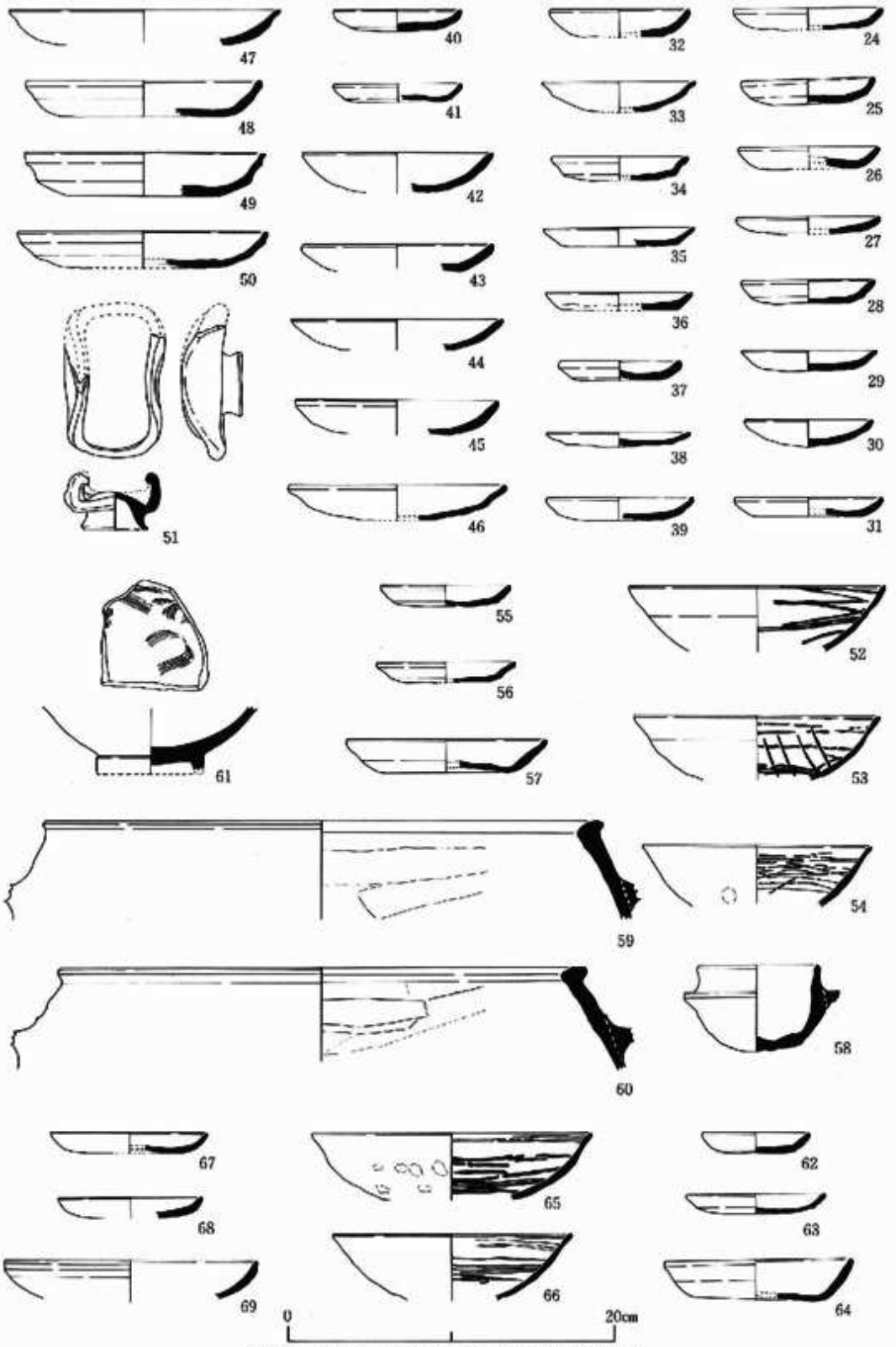
瓦器は椀（3～11）、皿（12～19）、小型椀（20）、鉢（21）がある。3～6は体部内面をやや密、外面を切れ切れのヘラミガキ調整する。見込み部は3が斜格子、4が平行線の暗文を施す。高台は貼り付け高台であり、断面形が三角形を呈する。7～11は体部外面を指押え、内面を粗いヘラミガキ調整する。3～6に比して体部が浅い。高台は貼り付けであり、ほとんど消滅気味である。見込み部は斜格子や平行線の暗文を施す。平行線を施すものが多い。皿は丸底に近い平底の底部より口縁部がゆるく外反するもの（12～17・19）と底部と体部の境に段がつくもの（18）がある。見込み部は平行線（12・13・16・17・19）と連続山形文（15）の暗文を施す。20は小型椀である。平底の底部より体部が外上方へ伸びる。高台は貼り付け高台であり、断面形が台形を呈する。体部外面はナデ、内面は粗いヘラミガキ調整する。21は鉢である。体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する。体部外面は指押え、内面は粗いヘラミガキ調整の後、渦巻状の暗文を施す。見込み部は平行線の暗文を施す。

須恵器は捏鉢（22）がある。体部が逆ハ字形を呈し、口縁端部が面をもつ。東播系の土器である。

土師器は羽釜（23）、皿（24～50）、箸置き（51）がある。23は口縁部が短く外反し、口縁端



第32図　井戸1出土土器実測図



第33図　井戸1、曲物1・2・3出土土器実測図

部が丸く終わる羽釜である。皿は小皿（口径10cm未満、以下省略）、中皿（口径10～12cm、以下省略）、大皿（口径12cm以上、以下省略）がある。24～41は小皿であり、口縁部が内弯するもの（24～30）、内弯した後、内側へ肥厚するもの（31・32）、外反するもの（33～41）がある。42～50は大皿であり、口縁部が内弯するもの（42～45）、外反するもの（46～48）、二段で外反するもの（49・50）がある。すべて褐色系（土師器皿は色調を褐色系と白色系で示す。以下省略）である。57は箸置きであり、口縁部の2ヶ所を強く内側へ折り曲げる。高台は貼り付け高台であり、高く逆ハ字形に開く。

井戸1〈曲物1〉（第33図）

曲物1より瓦器、土師器、輸入磁器が出土した。

瓦器は椀（52～54）がある。体部は浅い。体部外面は指押え、内面はヘラミガキ調整する。見込み部は平行線の暗文を施す。

土師器は皿（55～57）、ミニチュア羽釜（58）、羽釜（59・60）がある。皿は口縁部が外反するものであり、小皿（55・56）と大皿（57）がある。すべて褐色系である。58は体部が球形を呈し、口縁部が外上方へ伸びた後、ゆるく外反するミニチュア羽釜である。鍔は貼り付けており、断面形が三角形を呈する。体部外面には多量の煤が付着し、二次焼成による剥離痕が認められる。59・60は口縁部が短く外反する羽釜である。

輸入磁器は白磁椀（61）の底部があり、見込み部に櫛描きによる文様を施す。

井戸1〈曲物2〉（第33図）

曲物2より土師器が出土した。

土師器は皿（62～64）がある。小皿は口縁部が内弯するもの（62）と外反するもの（63）がある。64は大皿であり、口縁部が外反した後、内側へ肥厚する。すべて褐色系である。

井戸1〈曲物3〉（第33図）

曲物3より瓦器、土師器が出土した。

瓦器は椀（65・66）があり、体部は浅い。体部外面は指押え、内面は粗いヘラミガキ調整する。

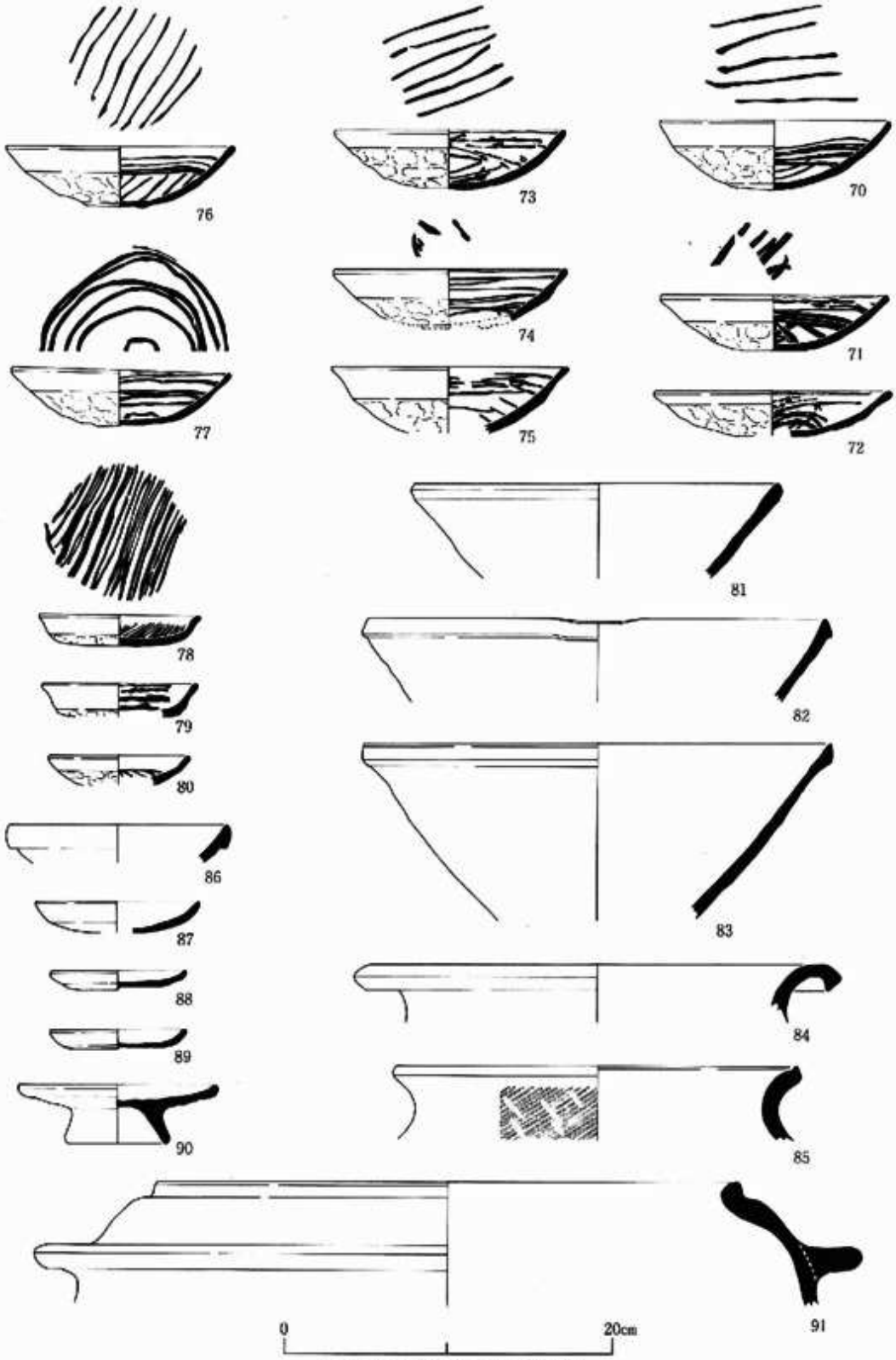
土師器は皿（67～69）があり、口縁部が内弯する。67・68は小皿であり、69は大皿である。すべて褐色系である。

井戸2（第34図）

井戸2より瓦器、須恵器、輸入磁器、土師器が出土した。

瓦器は椀（70～77）と皿（78～80）がある。椀は体部が浅く、高台の粘土紐が部分的に切れるものがある。70～76は体部外面を指押え、内面を粗いヘラミガキ調整する。見込み部は平行線の暗文を施す。77は70～76と同形態であるが、体部内面に6条の渦巻状の暗文を施す。78～80は皿であり、口縁部が外反するもの（78・79）と内弯するもの（80）がある。見込み部は平行線の暗文を施す。

須恵器は捏鉢（81～83）と甕（84・85）がある。捏鉢は体部が逆ハ字形に開き、口縁端部が



第34図　井戸2出土土器実測図

やや丸く終わるもの（81）と面をもつもの（82・83）がある。82は片口部が残る。すべて東播系の土器である。甕は口縁部が下方へ折れ曲り、口縁端部が面をもつもの（82）と口縁部が外反し、口縁端部がやや内側へ肥厚するもの（85）がある。85は体部外面に細い平行のタタキを施す。84は風化が著しく調整法は不明。

輸入磁器は白磁椀（86）がある。体部が逆ハ字形に開き、口縁部が玉縁状を呈する。

土師器は皿（87～89）、台付皿（90）、羽釜（91）がある。皿は小皿があり、口縁部が内弯するもの（87）と内弯した後、口縁端部が内側へ肥厚するもの（88・89）がある。すべて褐色系である。90は台付皿である。高台は貼り付け高台であり、高くハ字形に開く。皿部はゆるく外上方へ伸び、口縁端部が内側へ肥厚する。褐色系である。91は球形の体部より、口縁部が上方へ短く外反する羽釜である。鍔は水平方向に伸びる。

井戸3（第35図）

井戸3より瓦器、輸入磁器、土師器が出土した。

瓦器は椀（92・93）があり、92は体部が浅く、93はやや深い。体部外面は指押え、内面はヘラミガキ調整する。

輸入磁器は白磁椀（94）の底部がある。高台は低く削り出しており、断面形が台形を呈する。

土師器は皿（95～99）、甕（100）、杯（101～103）がある。甕と杯は平安時代の土器である。皿は小皿と大皿がある。小皿は口縁部が内弯するもの（95・96）と外反するもの（97）がある。大皿は口縁部が内弯するもの（98）と短く外反するもの（99）がある。すべて褐色系である。100は球形の体部より、口縁部が外折する甕である。口縁端部はやや内傾する。101～103は平底の底部より体部が外上方へ大きく開く杯である。体部外面は指押え、内面はナデ調整する。

井戸4（第35図）

井戸4より土師器と瓦器が出土した。

土師器は小皿（104・105）がある。104は深い椀状を呈し、口縁部がわずかに外反する。105は平底の底部より体部が大きく逆ハ字形に開く。104は白色系、105は褐色系である。

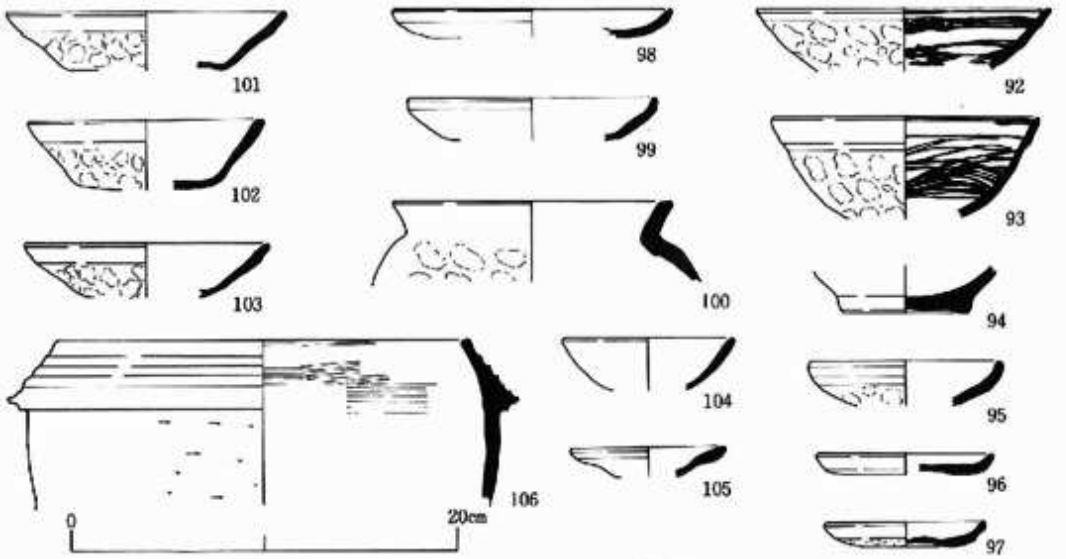
瓦器は羽釜（106）がある。上方へ伸びる体部より口縁部が内傾する。口縁部外面に3条の段がつく。体部外面はヘラケズリ、内面はハケメの後ナデ調整する。

土壙1（第36図）

土壙1より土師器と瓦器が出土した。

土師器は皿（107～116）がある。小皿は口縁部が内弯するもの（107～109）と外反するもの（110～112）がある。中皿は口縁部が内弯するもの（113・114）と外反するもの（115・116）がある。111・113は白色系、他は褐色系である。

瓦器は皿（117・118）と椀（119・120）がある。皿は丸底に近い平底の底部より、口縁部が外反する。117は体部内外面をナデ調整で終る。118は体部内面をヘラミガキ調整する。119・120は体部の浅い椀である。体部外面は指押え、内面は粗いヘラミガキ調整する。



第35図　井戸３・４出土土器実測図

土坑２（第36図）

土坑２より土師器、瓦器、輸入磁器が出土した。

土師器は小皿（121～128）がある。口縁部が内弯するもの（121～123）と内弯した後、口縁端部が内側へやや肥厚するもの（124～126）と外反するもの（128）がある。すべて褐色系である。

瓦器は椀（129～135）と皿（136・137）がある。129は椀の底部である。高台は貼り付け高台であり、逆ハ字形に開く。見込み部は斜格子の暗文を施す。130は風化が著しく調整法は不明。131～135は体部が浅い椀である。体部外面は指押え、内面はやや粗いヘラミガキ調整する。136・137は丸底に近い平底より、口縁部がゆるく外反する椀である。体部内外面はナデ調整で終る。

輸入磁器は青磁椀（138）があり、口縁部が上方へ伸びる。

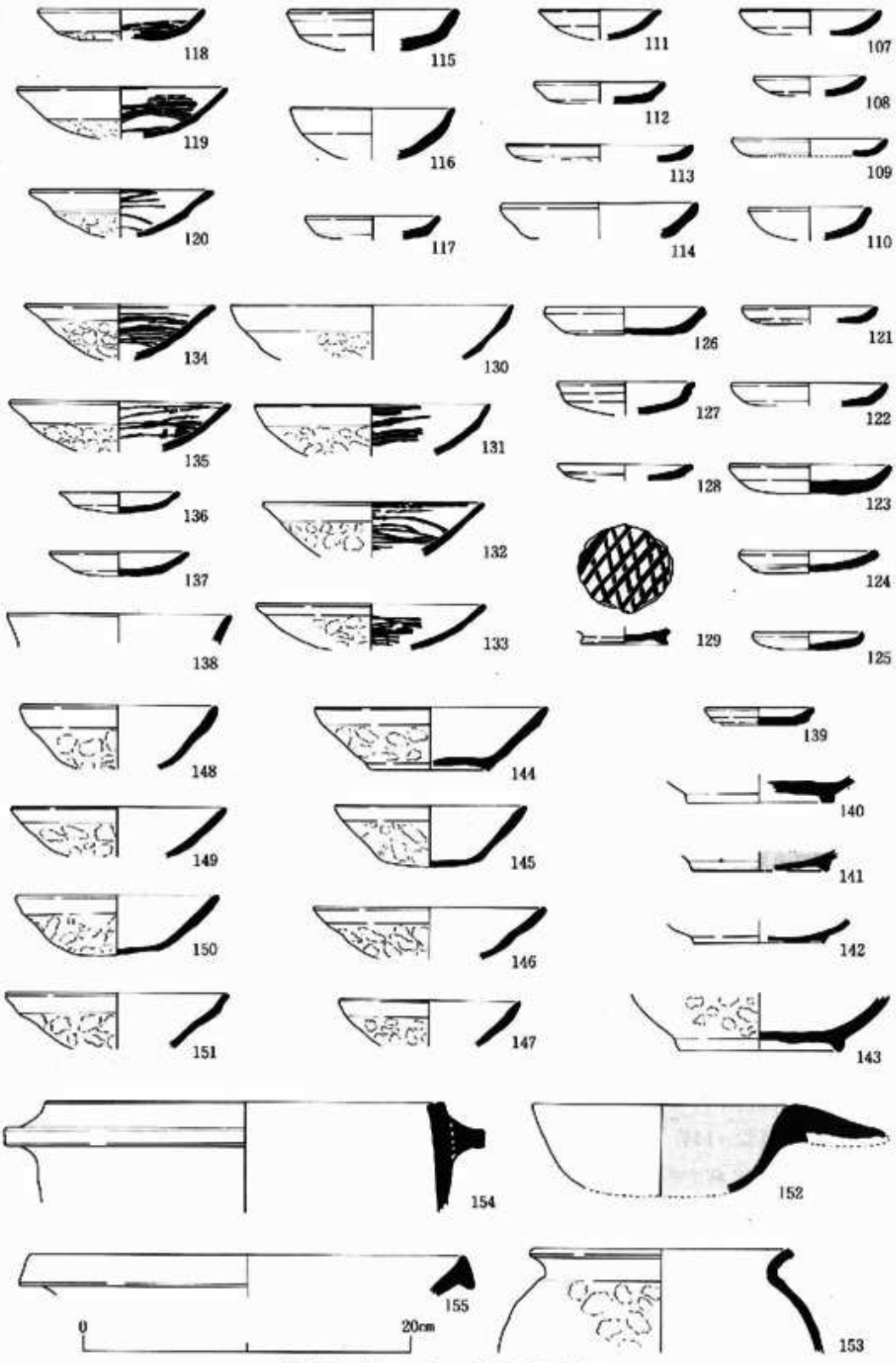
土坑３（第36図）

土坑３より土師器、瓦器、黒色土器、須恵器が出土した。

土師器は皿（139）、杯（142～151）、甕（153）、羽釜（154）がある。杯と甕は平安時代の土器である。139は小皿であり、口縁部がゆるく外反する。褐色系である。杯は貼り付け高台を有するもの（142～144）と高台の付かないもの（145～151）がある。平底の底部より体部が外上方へ大きく開く杯である。体部外面は指押え、内面はナデ調整する。153は球形の体部より、口縁部が強く外反する甕である。体部と口縁部の境にはヨコナデ調整による明瞭な稜が残る。154は体部が上方へ伸び、口縁端部が凹む羽釜である。口縁部直下に水平方向に伸びる鍔がつく。

瓦器は椀（140）の底部がある。高台の断面形が台形を呈する。

黒色土器は椀（141）と把手付鉢（152）がある。平安時代の土器である。141は椀の底部で



第36図　十坊1・2・3出土土器実測図

あり、断面形が三角形の貼り付け高台がつく。内黒である。142は体部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる把手付鉢である。口縁部直下に棒状を呈する把手がつく。内黒である。

須恵器は捏鉢（155）がある。逆ハ字形に開く体部より、口縁部を下方へ拡張する。東播系の土器である。

溝4（第37・38図）

溝4より土師器、瓦器、須恵器、日本製陶器が出土した。

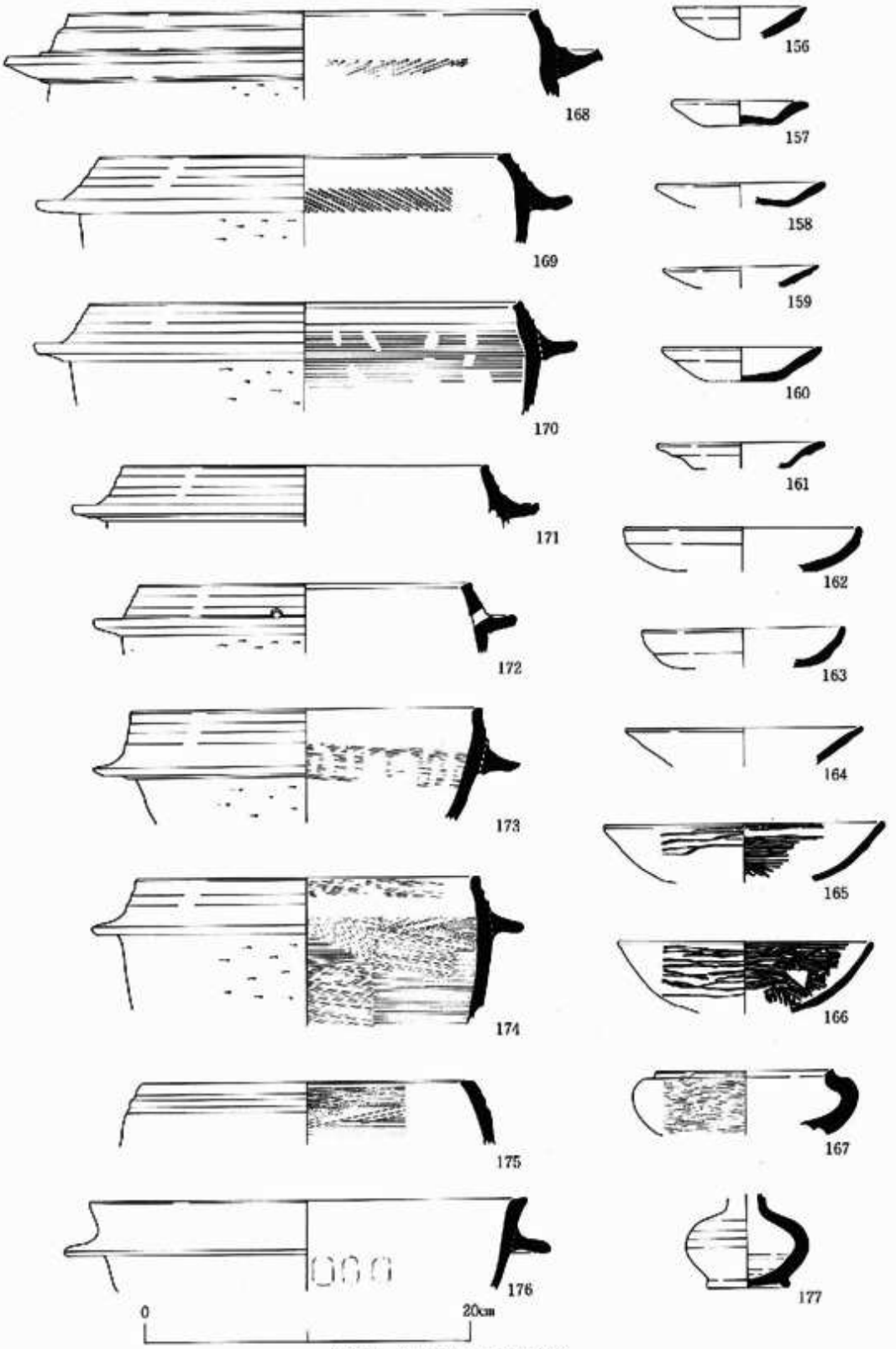
土師器は皿（156～164）と羽釜（176）がある。156～160は小皿、161は中皿であり、体部が逆ハ字形に大きく開く。大皿は口縁部が内弯するもの（162・163）と体部が逆ハ字形に大きく開くもの（164）がある。156・160・164は白色系、他は褐色系である。176は体部が上方へ伸びる羽釜である。鍔はやや下方へ伸びる。

瓦器は椀（165・166）、香炉（167）、羽釜（168～175）、摺鉢（188）、火舎（190～192）がある。165・166は体部がやや深い椀である。体部外面を粗いヘラミガキ、内面をやや密なヘラミガキ調整する。見込み部に165は斜格子、166は平行線の暗文を施す。167は扁球形の体部より口縁部が内傾した後、上方へ伸びる香炉である。外面は密なヘラミガキ、内面はナデ調整する。168～174は口縁部外面に3条～4条の段がつく羽釜である。体部外面はヘラケズリ、内面はハケメかハケメの後ナデ調整する。172は口縁部に焼成後の小円孔を1孔穿つ。175は口縁部外面に2条の沈線を施す羽釜である。188は体部が逆ハ字形に開き、口縁端部が面をもつ摺鉢である。体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整する。体部内面には4条のおろし目が残る。190は球形の体部より、口縁部が水平に折れ曲る火舎である。口縁部直下に2条の凸帯、その下に円孔を穿つ。底部の3ヶ所に獣足を施す。191は口縁部が内弯する火舎である。体部外面に菊花状のスタンプ文を施す。192は長方形ないしは方形を呈すると考えられる火舎の脚部である。

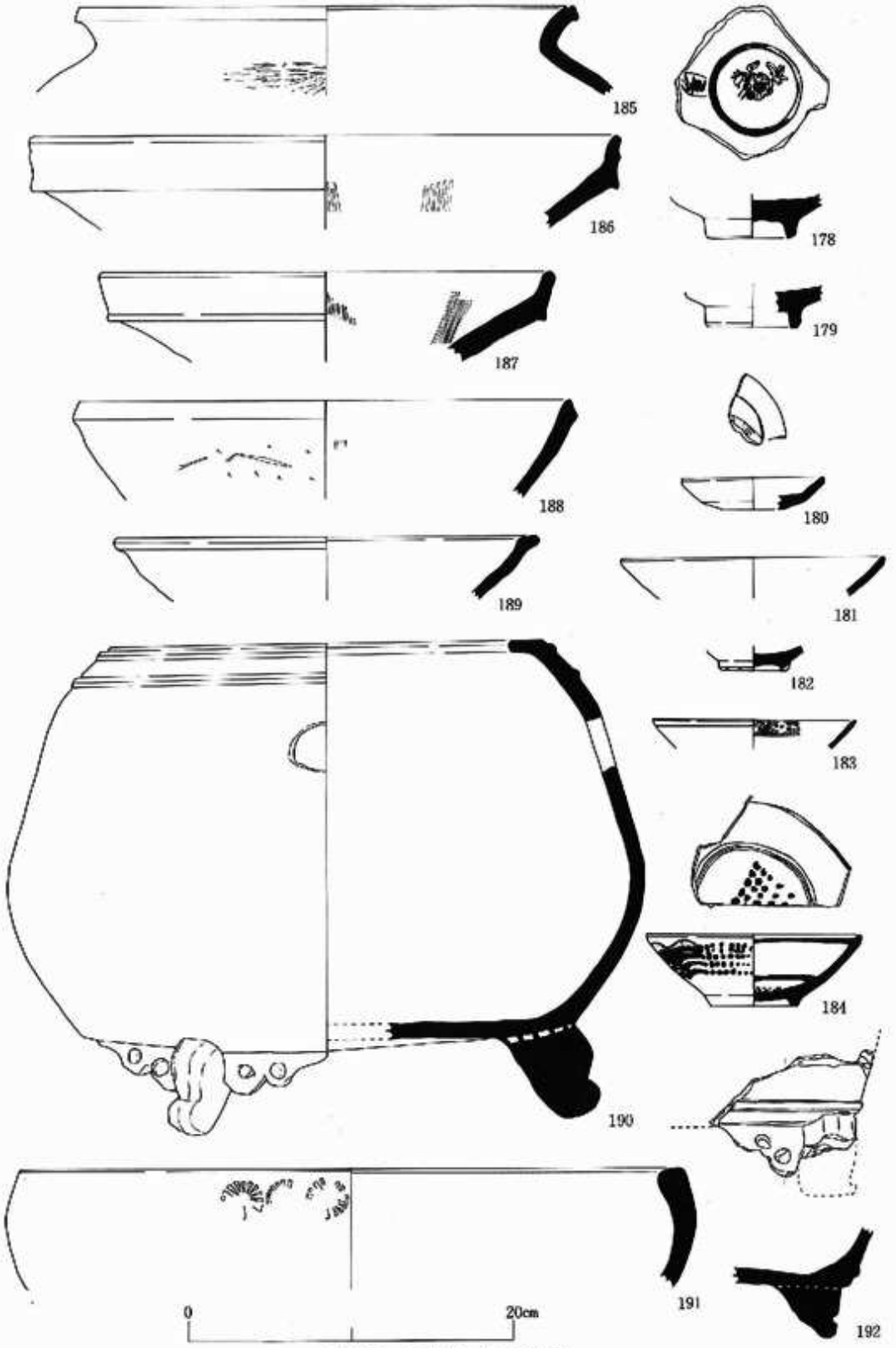
須恵器は壺（177）と甕（185）がある。壺は平安時代の土器である。177は平底の底部より体部が上方へ開いた後、内傾する壺である。口縁部は上方へ伸びる。高台は断面形が台形を呈し、ハ字形に開く。185は張りのある体部より口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部内面には1条の沈線を施す。体部外面はタタキ、内面はナデ調整する。

輸入磁器は青磁椀（178・179）、皿（180）、白磁椀（181・182）がある。178・179は高台が高く、下方へ伸びる青磁椀の底部である。178は見込み部にヘラ描きによる花状の文様を施す。180は平底の底部より、体部が外上方へ開く青磁皿である。見込み部に櫛描きによる文様を施す。181は体部が逆ハ字形に開く白磁椀である。182は白磁椀の底部であり、高台の4ケ所に山形の切り込みを入れる。

日本製陶器は染付椀（183・184）、備前焼摺鉢（186・187）、瀬戸焼鉢（189）がある。183・184は体部が逆ハ字形に開く染付椀である。内外面に絵柄を描き、色調は藍色を呈する。186・187は逆ハ字形に開く体部より、口縁部を上方へ幅広く拡張する摺鉢である。体部内面におろし目を施す。189は体部が外上方へ大きく開き、口縁部が外反する鉢である。内外面に釉を施し、色調が黄褐色を呈する。



第37図　溝4出土土器実測図



第38図　溝4出土土器実測図

溝1（第39図）

溝1より日本製陶器と瓦器が出土した。

日本製陶器は備前焼摺鉢（193）、天目茶椀（195）、椀（196）がある。193は口縁部を上方へ幅広く拡張する摺鉢である。口縁端部外面に2条の沈線を施す。195は体部が外上方へ開いた後、上方へ伸びる天目茶椀である。口縁部は外反する。釉の色調は暗茶褐色を呈する。196は体部が外上方へ伸びる椀である。

瓦器は羽釜（194）がある。口縁部は内傾し、口縁端部が凹む。鍔は外上方へ伸びる。体部外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整する。

溝2（第39図）

溝2より土師器と輸入磁器が出土した。

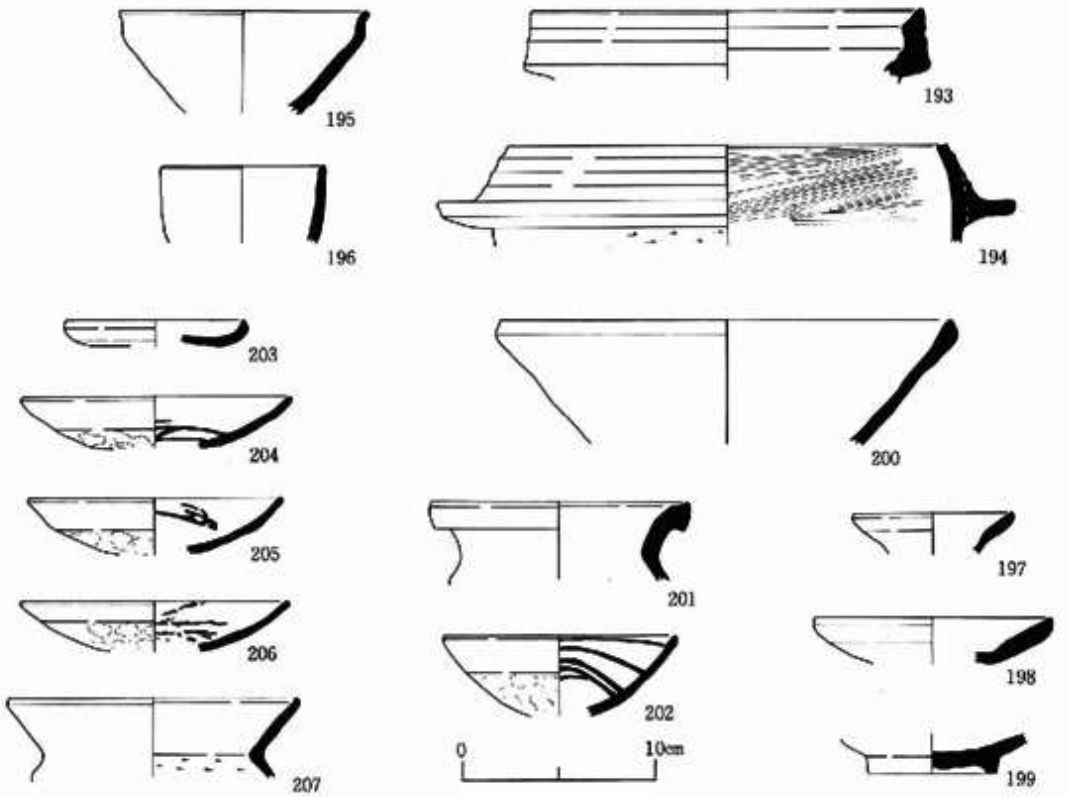
土師器は皿（197・198）がある。197は小皿、198は大皿であり、体部が大きく逆ハ字形に開く。すべて褐色系である。

輸入磁器は白磁椀（199）の底部がある。高台は高く、下方へ伸びる。断面形は台形を呈する。

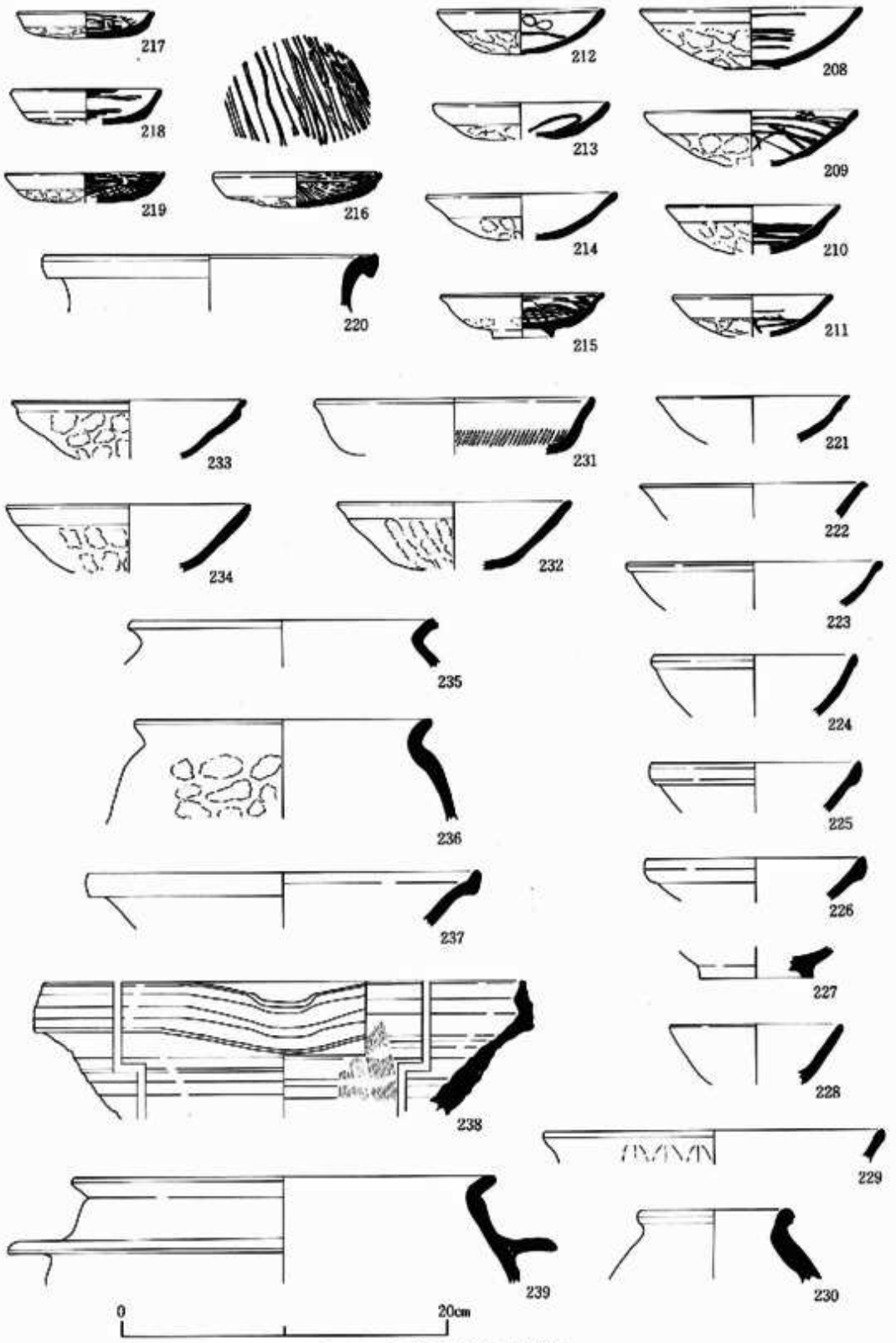
溝5（第39図）

溝5より瓦器が出土した。

瓦器は甕（201）と椀（202）がある。201は口縁部が大きく外反し、口縁端部が上方へつま



第39図　溝1・2・5・6出土土器実測図



第40図　包含層山土上器実測図

み上げ気味に終る甕である。202は体部の浅い椀である。体部外面を指押え、内面は5条の渦巻状の暗文を施す。

溝6（第39図）

溝6より土師器と瓦器が出土した。

土師器は皿（203）と甕（207）がある。甕は庄内期のものである。203は口縁部が内弯する小皿である。褐色系である。207は球形の体部より、口縁部がくの字形に外反する。口縁端部は内側へ肥厚する。体部外面はナデ、内面はヘラケズリ調整する。

瓦器は椀（204～206）があり、体部が浅い。体部外面は指押え、内面は渦巻状の暗文を施す。

包含層（第40・41図）

包含層より瓦器、輸入磁器、日本製陶器、須恵器、土師器が出土した。

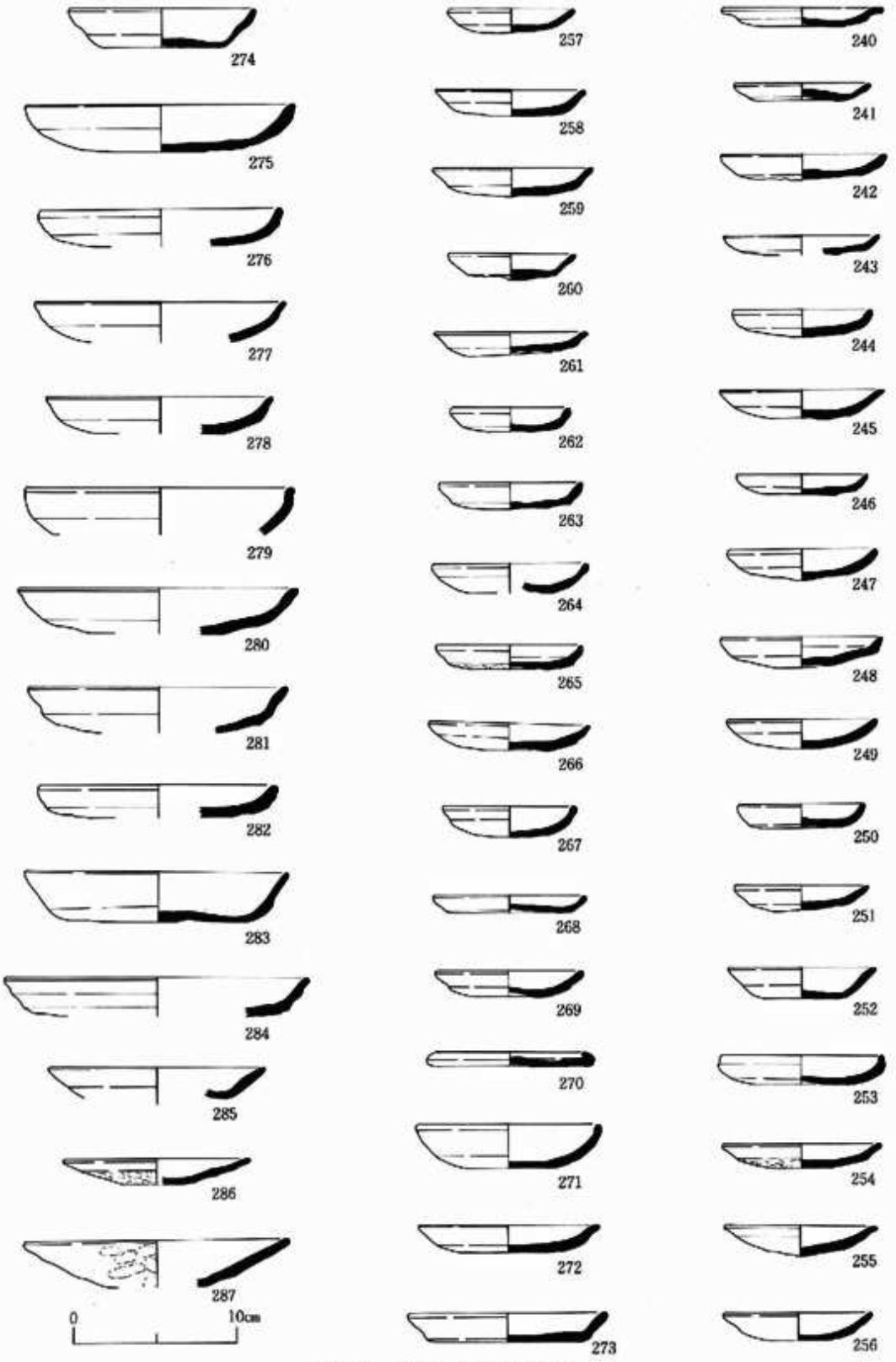
瓦器は椀（208～214）、台付皿（215）、皿（216～219）、甕（220）がある。208はやや深い体部を呈し、断面形が台形の高台を貼り付ける。209～214は体部が浅く、高台は消滅する。体部外面は指押え、内面は渦巻状の暗文を施す。215は浅い体部より、口縁部がゆるく外反する台付皿である。高台は貼り付け高台であり、断面形が三角形を呈する。体部外面はナデ、内面ヘラミガキ調整する。見込み部は斜格子の暗文を施す。216～218は皿であり、口縁部が外反するもの（216・217）と内弯するもの（218・219）がある。体部外面はナデ、内面はヘラミガキ調整する。見込み部は216が平行線、219が斜格子の暗文を施す。220は口縁部が上方へ伸びた後、短く外反する甕である。口縁端部はつまみ上げ気味に終る。

輸入磁器は白磁椀（221～227）と青磁椀（228・229）がある。白磁椀は口縁部がゆるく外反するもの（221・222）、端部がわずかに玉縁状を呈するもの（223・224）、端部が太い玉縁状を呈するもの（225・226）がある。227は白磁椀の底部である。228・229は体部が外上方へ伸びる青磁椀である。229は体部外面にヘラ描きによる蓮弁文を施す。

日本製陶器は備前焼壺（230）と擂鉢（238）がある。230は内傾する体部より、口縁部が短く外反する壺である。口縁端部は丸く終る。238は逆ハ字形に開く体部より、口縁部を上方へ幅広く拡張する擂鉢である。口縁部外面に3条の沈線を施す。片口部が残る。

須恵器は捏鉢（237）がある。逆ハ字形に開く体部より、口縁部を上方へ拡張する。口縁部内面に稜がある。東播系の土器である。

土師器は杯（231～234）、甕（235・236）、羽釜（239）、皿（240～287）がある。杯と甕は奈良～平安時代の土器である。231は平底の底部より体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する杯である。口縁端部を内側へ巻き込む。体部内面に放射状の暗文を施す。232～234は体部が逆ハ字形に大きく開く杯である。体部外面を指押え、内面をナデ調整する。甕は球形の体部より口縁部が外反し、口縁端部が面をもつもの（235）と丸く終るもの（236）がある。皿は小皿（240～269）、中皿（270～274）、大皿（275～287）がある。小皿は口縁部が外反した後、口縁端部を内側へ巻き込むもの（240）、内弯するもの（241～253）、外反するもの（254～264）、底部と体部の境に段がつくもの（265～269）がある。270は平底の底部より口縁部が内側へ強



第41図　包含層出土土器実測図

く内傾する。中皿は口縁部が内弯するもの（271）、外反するもの（272）、底部と体部の境に段がつくもの（273・274）がある。大皿は口縁部が内弯するもの（275・276）、外反するもの（277～280）、底部と体部の境に段がつくもの（281～283）、口縁部が2段で外反するもの（284）がある。285・286は体部が逆ハ字形に大きく開く大皿である。245は白色系、他は褐色系である。

2）．瓦（第42図）

瓦は平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、飾り瓦が出土した。遺構内と遺物包含層より出土したが、特に、井戸2は井筒に瓦を転用していたので量が多い。

288は偏行唐草文軒平瓦である。顎は削り出しの広い段顎である。外区は上帯に珠文を施す。下帯は剝離して不明であるが、若江遺跡から出土している同型式の瓦は鋸歯文で飾る。内区は連続波状の茎から2本づつの蕨手が派生した形をとるが、2蕨手の1本は上下の外区境界線より派生した形をとる。平瓦凹面は布目痕を残し、一部がヘラケズリを施す。凸面は板ナデによって仕上げる。溝4より出土。白鳳時代。

289は均正唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎である。瓦当部は断面形が四角形の低い周縁をめぐらす。唐草文は天地逆の型である。平瓦凹面は布目痕を残し、凸面はナデによって仕上げる。井戸2の瓦積み井筒より出土。奈良時代。

290は瓦当部をほとんど欠損するが、均正唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎である。瓦当部は断面形が四角形の低い周縁をめぐらす。瓦当部に界線を有する。平瓦凹面は布目痕を残し、凸面はナデによって仕上げる。井戸2より出土。平安時代。

291・292は同型式の均正唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎である。瓦当部は断面形が四角形の周縁をめぐらす。平瓦凹面は布目痕、凸面は縄目痕をのこす。291は井戸2の瓦積み井筒、292は溝4より出土。平安時代。

293は唐草文軒平瓦である。凹凸面とも剝離のため詳細は不明。包含層より出土。

294～296は巴文軒丸瓦である。294は左廻りの三巴文を内区に配し、外区は連珠をめぐらす。295・296は外区の連珠のみが残る。296は界線をめぐらす。294は井戸1、295・296は溝4より出土。平安時代。

297は飾り瓦の部分であり、詳細は不明。溝4より出土。

3）．土製品（第42図）

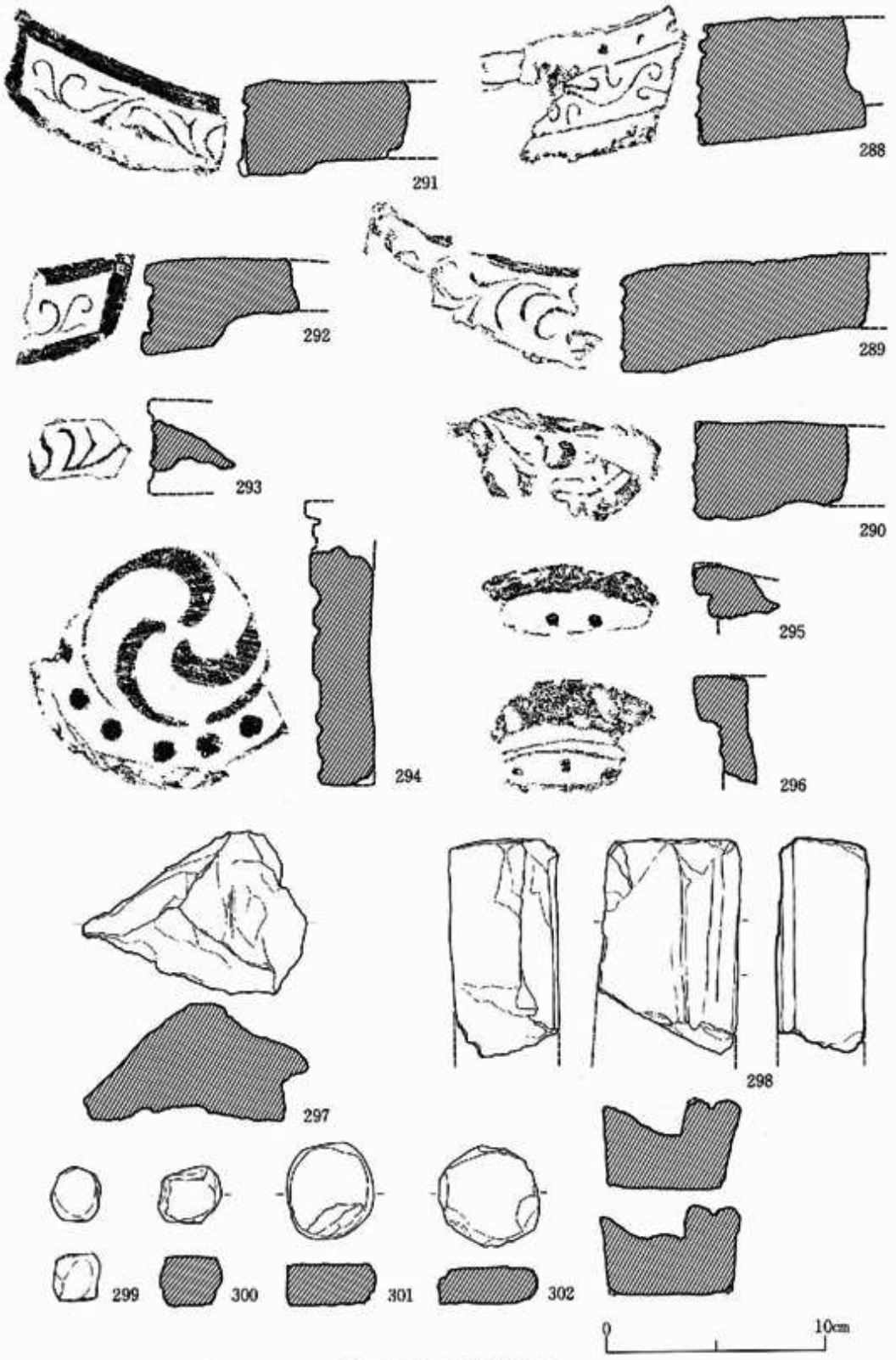
土製品は長方形を呈する土製品と円板状土製品がある。

298は長方形を呈する土製品である。幅広の一面に凹部と1条の溝を有する。井戸2の瓦積み井筒より出土。

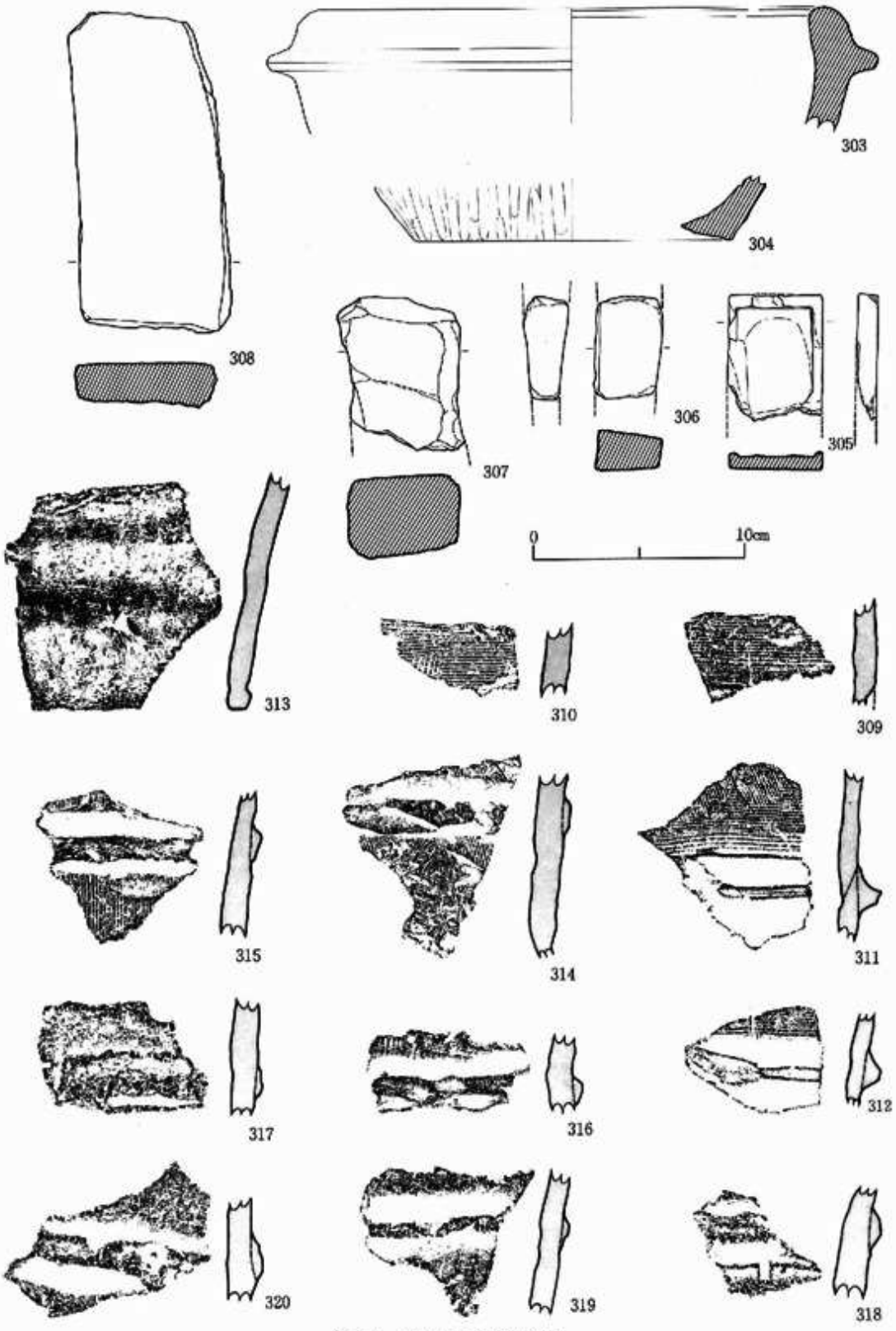
299～302は円板状土製品である。瓦を転用しており、周辺を丸く打ち欠いた後研磨する。径は大小あり、299が2.5cm、302が4.7cmを測る。299は井戸2、300は井戸1、301は溝2、302は溝4より出土。

4）．石製品（第43図）

石製品は滑石製鍋、硯、砥石が出土した。



第42図　瓦・土製品実測図



第43図　石製品・埴輪実測図

303・304は滑石製鍋である。303は外上方へ伸びる体部より口縁部が内弯する。口縁端部は丸く終る。鍔は体部より薄くつくられ、やや下方へ伸びる。304は底部であるが、二次加工によって中心部が薄くなる。外面には縦方向の粗いケズリ痕が顕著に残る。包含層内より出土。

305は小型の硯である。海部を欠損する。陸部は使用による磨り減りが著しく、上縁近くまで凹む。溝4より出土。

306～308は長方形を呈する砥石である。306・307は四面に使用による磨り減りが認められる。308は一面のみを使用する。306・307は包含層、308は溝4より出土。

4）．埴輪（第43図）

埴輪は5世紀末～6世紀中の時期のものが出土した。すべて円筒埴輪である。309～312はタガの高い埴輪であり、断面形が台形を呈する。外面は横方向のハケメ、内面はナデかハケメの後ナデ調整する。313～320はタガの低い埴輪であり、断面形が台形ないしは三角形を呈する。外面は縦方向のハケメかハケメの後ナデ調整する。内面はナデかハケメの後ナデ調整する。310・314・315・318は溝4、312・313は井戸2、他は包含層より出土。

Ⅳ．まとめ

第28次調査では中世～近世の遺構、遺物を検出した。今回の調査で得られた知見を列記してまとめとしたい。

1．若江遺跡は若江寺、若江郡衙、若江城を中心として、中世～近世の集落を含む遺跡であることが知られている。当遺跡は若江本町・若江北町・若江南町一帯に広がっており、若江寺、若江城関連の遺構、遺物は若江北町・若江南町より多く見つかっている。特に大阪・東大阪線（旧四条・長堂線）の拡幅工事に伴って堀や建物跡が発見され、若江城の全貌が明らかになりつつある。また、当地点では若江城関連の遺構以外に中世集落に伴う建物跡や井戸なども多く見つかっており、ほぼ中心に位置すると考えられている。今回の調査地点は大阪・東大阪線より北約200mに位置する。調査では中世の集落に伴う井戸、土坑、溝、柱穴などが検出された。当地点は若江遺跡の北限と考えられ、中世の集落が広範囲に及んでいたことが明らかになった。

2．今回の調査で検出した中世の遺構は第5・6層より掘り込まれていた。第5層は層厚が約20cmを測る整地層である。整地層内には中世より古い時期の遺物を多く含み、古墳～平安時代のものが認められた。今回の調査地点で古墳～平安時代の遺構が検出されていないことから、整地を実施した際に古墳～平安時代の遺物包含層を運んできたものと考えられる。第27次調査の際にも同時期の遺物包含層が整地に使用されていたことより明らかである。整地は13世紀代におこなわれたと考えられる。

3．今回の調査地は約1/3が近代の削平を受けていたが、南側約2/3は良好な状態で遺構が残っていた。検出した遺構は第4層で溝、第5・6層で井戸、土坑、溝、柱穴がある。第4層は近世、第5・6層は中世の遺構面であることを確認した。中世の遺構は狭い調査範囲内では

あるが井戸が多く認められた。土坑とした中にも井戸の可能性のあるものがある。井戸1・2、土坑3は切り合った状態で検出されたが、井筒内より出土した土器は13世紀後半のものである。各井戸の使用期間は短かったと考えられる。廃棄された井戸の隣りに新らたな井戸を掘削していたことがうかがえるが、これは当地点が良質な水を得ることができる所であったことが推測できる。

4．若江遺跡周辺では曲物、土釜、桶側、瓦などを井筒として使用した井戸が今日までの調査で検出されている。今回の調査で検出した井戸2は、上部が瓦積み、下部が曲物を井筒とするものである。瓦積みの井戸は従来より知られており[6]、瓦を垂直の状態で積み上げているのが特徴である。井戸の時期は16世紀より古くならないと考えられている。今回の調査で検出した井戸2は瓦積みの方法に差異が認められる。従来の井戸が垂直に積み上げ、内側が整然とした円形を呈するのに対して、井戸2は逆円錐形に組まれている。下部で径が小さく、上部に向かって径が大きくなる。また、瓦は長辺をすべて内側に向けて積み上げられており、内側は整然とした円形ではなく、やや多角形にちかい状態である。井戸2の時期は出土遺物より、これまでに知られていたものより古く、13世紀後半に比定できるものである。

5．今回の調査地より5世紀末～6世紀中の円筒埴輪が出土した。当地点は瓜生堂・岩田遺跡と隣接する。両遺跡では同時期の埴輪が出土することが知られているが、特に瓜生堂遺跡の上層では質、量ともに多く、埴輪出土の中心部分と考えられる。今回、調査地点より出土した埴輪は整地の際に近辺より移動したものと考えられる。瓜生堂[5]・岩田遺跡[6]を中心とした埴輪分布の南限と考えられる。

注

① 荻田昭次・桑原正明「布施周辺の考古遺物」『河内文化』第8号　1962年

② 大阪・東大阪線拡幅工事に伴う調査は第4・10・12・14・17・20・24・25・26・27次調査がある。

③ 財団法人東大阪市文化財協会　『若江遺跡第27次調査報告書』　1987年

④ 下村晴文　『若江寺・若江城跡』　東大阪市教育委員会　1975年

⑤ 芋本隆裕　『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』　東大阪市遺跡保護調査会　1979年

⑥ 福永信雄　「岩田遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』　東大阪市遺跡保護調査会　1975年

発掘調査にあたっては多くの人達のご協力をいただいている。記して感謝の意を表します。
有山淳司　長峰繁己　安井誠次　藤本隆　木田けい子　平井多美子　今井喬子　清水美香　高須明美
高岡史子　新谷久美子

弥刀遺跡第５次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

昭和38年、弥刀小学校の校舎建設の際に多数の須恵器が発見された。荻田昭次氏によって紹介されたこれらの須恵器はいずれも古墳時代に属するものであり、出土地周辺に集落跡の存在を推定しうる資料となった。この集落跡は地名を冠して友井遺跡と呼称されたが、現在では遺跡範囲を広くみて弥刀遺跡と改称されている。

弥刀遺跡の発掘調査は、昭和47年に弥刀小学校の校舎増築工事に伴ってはじめて実施された。その結果、平安時代～鎌倉時代の曲物枠井戸が４基検出され、同じ時期のピット、土坑などの遺構が検出された。井戸は、出土土器の型式より平安時代後半に属するものと鎌倉時代に属するものとに分けられるが、井戸の規模や構造などに時期差を認めることはできない。これらの遺構は遺構面上に遺物包含層を欠く点および遺構面上の地層が江戸時代以後の客土層とみられる点などを理由として、後世に整地・削平を受けたものと考えられる。

出土遺物は、この客土層内に２次的に含まれる平安時代～江戸時代の土器が大半で、これに遺構内出土の平安～鎌倉時代の遺物が加わるが、なかでも井戸の底より出土した完形の黒色土器や瓦器の椀、木製櫛などは井戸の祭祀に伴うものとして注目に値する。いっぽう、遺構発見の端緒となった古墳時代の遺物については、平安～鎌倉時代の遺構面の下に堆積する砂層内に流れ込んだ状態で少量みられただけであって、当初予測したような遺物包含層は確認できなかった。

その後、弥刀公民分館の建設工事に伴う第２次調査あるいは弥刀小学校の増築に伴う第３次調査、下水道建設に伴う第４次調査などが実施され、遺構は検出されなかったが鎌倉時代～江戸時代の遺物が出土している。これらの調査結果より、弥刀遺跡は平安時代～江戸時代に至る集落跡を中心として、古墳時代の集落跡をそのなかに含むものであることが知られるようになった。

さらに、弥刀小学校の南東約200mに位置する近鉄弥刀変電所内でも、かつて奈良時代の人面墨書土器が１点出土したと伝えられている。今回の調査対象地はこの人面墨書土器出土地点の南に隣接し、古墳時代～江戸時代の遺跡が複合すると考えられる地点である。第５次調査は㈱三山による共同住宅建設計画にもとずいて、工事予定地内で試掘調査を実施した結果、中世の土器を含む地層が検出されたことから事前に発掘調査を行うものである。(1)

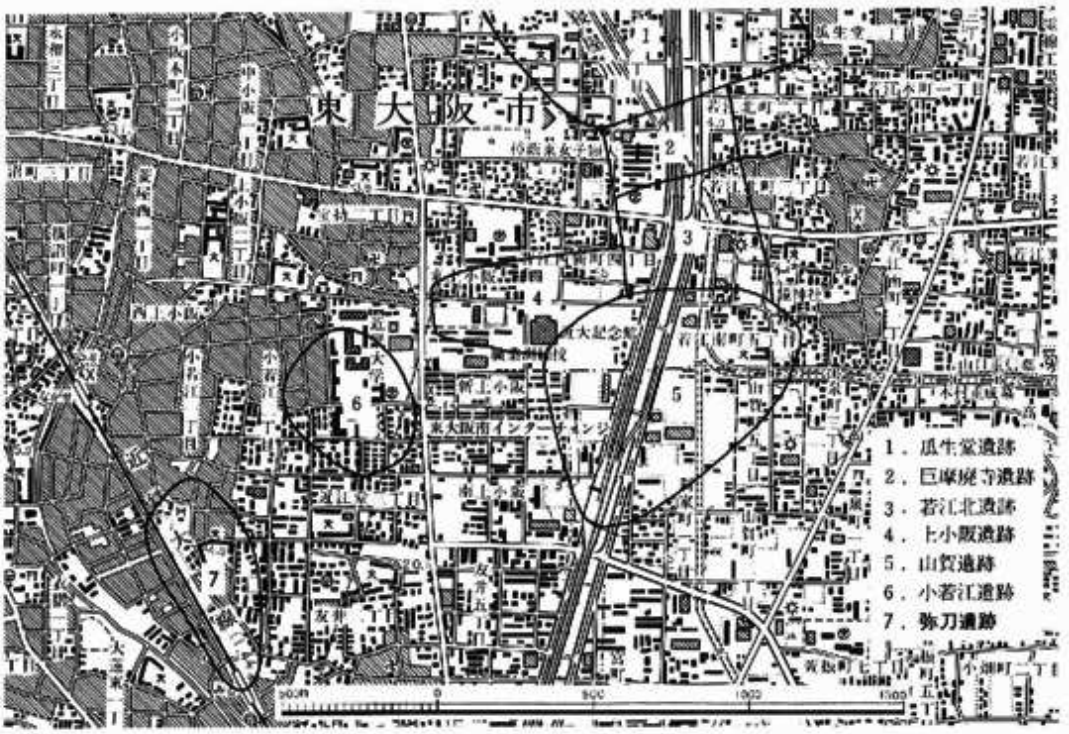
第５次調査地（西より）

II. 位置と環境

弥刀遺跡は河内平野の西部を北流する長瀬川の右岸、東大阪市近江堂～友井にある。遺跡は長瀬川の前身である古大和川によって形成された自然堤防上に立地し、その位置は現在の友井近江堂の集落と重なりあった関係にある。

江戸時代の宝永元年（1701）に行なわれた大和川付替え工事によって、古大和川は両岸の堤防を崩した土によって埋められ、中央部に現在の長瀬川の小流を残すだけとなった。この大工事によって河内平野北部の水害は減少し、土地利用のうえでも木綿栽培の盛行などの変化をもたらせた。こうして古大和川の流れは地表からその姿を消したが、旧流路内に堆積した砂層を通して伏流する流れは付替え後も存在し、友井集落ではこの伏流水を水源として竹樋によって引水された水道施設が発見されている。

さて、大和川付替えによる堤防の切崩し工事によって、弥刀遺跡の所在する自然堤防はその上部を整地・削平されたとみられる。これまでの調査によって検出された遺構にその上部を削平されたものがあること、遺構のみい出されない地域であっても客土層内に多数の中世土器が含まれていることなどはこのことを示すものである。また、遺跡内を縦断する近鉄大阪線の敷設工事によっても遺跡付近はかなり整地されたようであって、客土層には近代以後の瓦や染付を含むものがある。



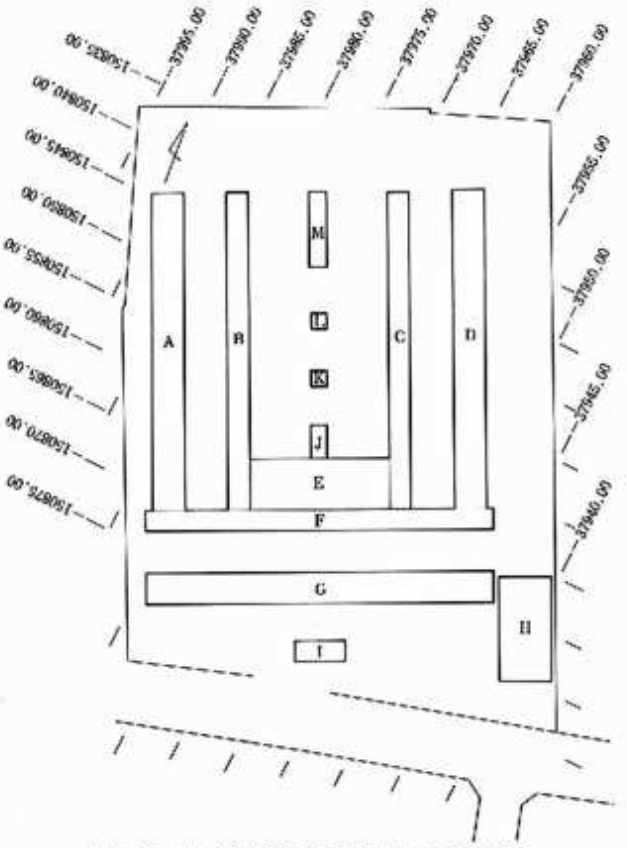
第44図　弥刀遺跡位置図

III. 調査の概要

第５次調査は共同住宅の建設で遺跡が破壊される部分を対象として実施した。すなわち、基礎杭列の範囲に調査用トレンチを設定し、A～M地区と呼称した。各トレンチの位置は国家座標上の位置を示す５ｍメッシュ杭（座標杭）によって明示され、各トレンチで検出される遺構の位置関係が実測図で正確となるようにした。

発掘は、盛土および第１層耕土までの約40cmを機械により掘削し、第２層以下を人力により掘削した。第２層下面と第３層下面では精査を行なって遺構の検出に努めた。第４層は湧水が激しいことから、各地区に１～２ヶ所の小トレンチを設定して地表下約２ｍまで遺物の有無、層相などを確認した。

調査の結果、以下の基本層序を確認し、調査地全域の各層より遺物が出土した。また、A・D・F・H・L・Mの各地区では数は多くないが遺構も検出された。



第45図　弥刀遺跡第５次調査トレンチ配置図

１．層序

弥刀遺跡第５次調査地で基本的に認められる地層は次のとうりである。

第１層：暗灰黄色（2.5Y5/2）粗粒砂混じり粘土質シルト層。耕作土で厚さ約15cmを測る。

第２層：明褐色（7.5YR6/2）粗粒砂～中粒砂混じり粘土質シルト層。近代以後の遺物を含む。厚さ約40cmを測る。

第３層（U）：灰褐色（５YR5/2）あるいは赤褐色（５YR4/6）中粒砂～細粒砂混り粘土質シルト層。鎌倉時代～江戸時代の遺物を含む。厚さ30～40cmを測る。

第３層（L）：灰褐色（５YR4/2）粘土質シルト～細粒砂層。第３層（U）より漸移、平安時代～江戸時代の遺物を含む。厚さ約30cmを測る。

第４層：明褐灰色（５YR7//1）粗粒砂層。古墳時代～平安時代の遺物を含む。厚さ１ｍ以上を測る。

これらの地層のなかで遺物を比較的多く含む第２層は、層相および出土遺物の時期幅より明治時代以後の客土層とみられ、この層の次に遺物を多く含む第３層（U）は同様な理由より江戸時代の客土層とみられる。人為の加わっていない堆積層としては第３層（L）と第４層とをあげうるが、この２層より出土した遺物の量は少ない。

２．遺構

第３層（L）上面において井戸、柱根・柱穴、溝、落ち込みなどの遺構が検出された。これらの遺構はその上を第３層（U）によって覆われているものと第２層によって覆われているものとに分けうるが、遺構内出土土器より両者は共に江戸時代に属することが知られる。遺構を覆う地層の違いは、おそらく第３層（U）が地点によっては削平を受けて失われたためであろう。

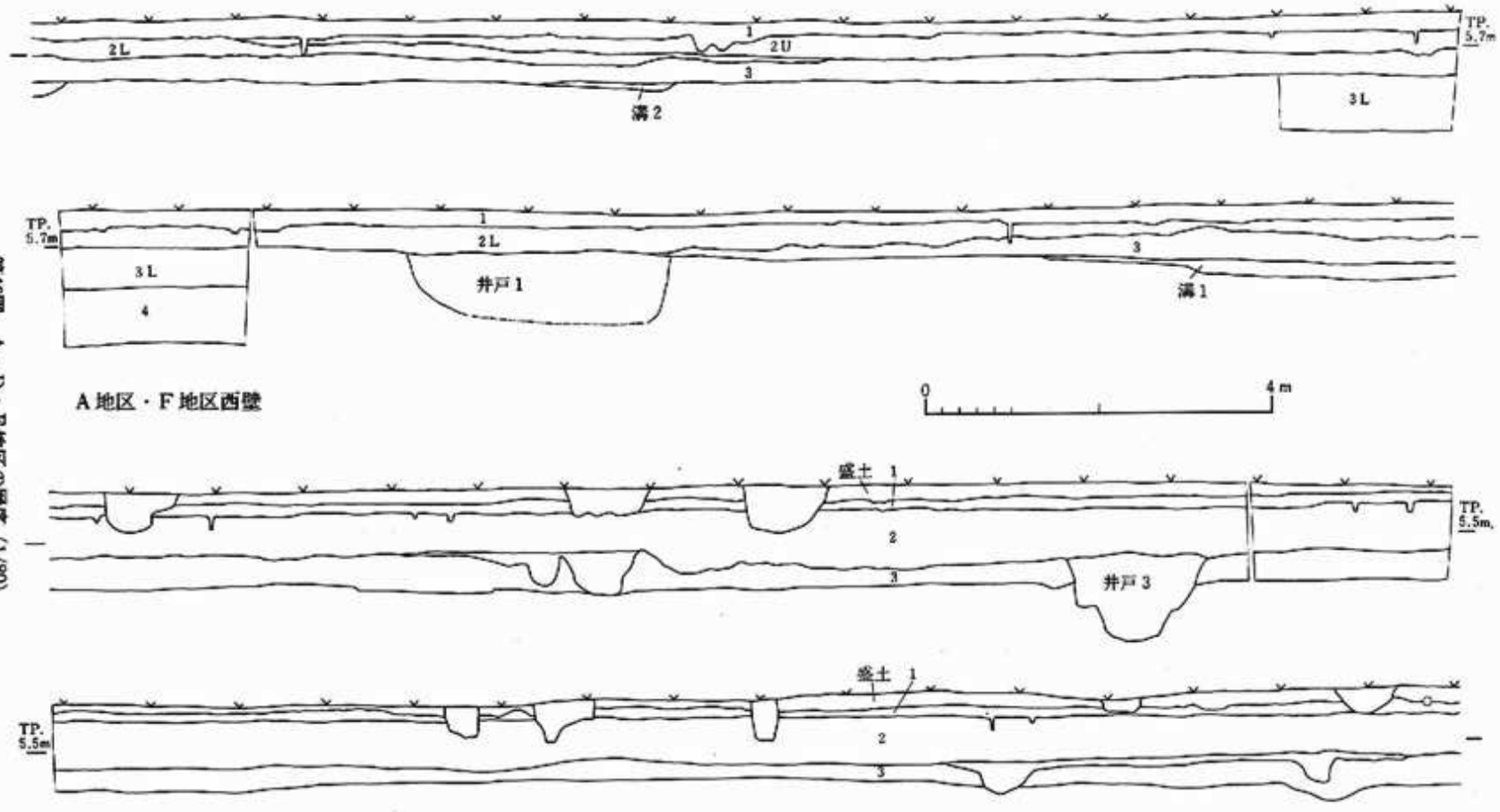
井戸は調査地の西と東に分布し、合計６基が検出された。このうち井戸枠を残すものは１基だけであって、他の５基はすでに井戸枠を抜き取られた井戸跡である。井戸枠をもつD地区の井戸（井戸４）は桶枠を上下２段に重ねた型式で、上部の井戸枠の直径約60㎝、下部の井戸枠の直径約50㎝を測る。この井戸の深さは約1.1ｍを測る。この井戸の構築は、桶枠の大きさにみあう掘形（遺構面で直径約70㎝）を掘り、竹のタガ２条で締めつけた下段の桶枠を据え、掘形との隙間を埋土で固めたのち、上段の桶枠を同様な方法で据付けたものと思われる。上段の桶枠はその上部が腐って失なわれ、また桶のタガもはずれているが、桶の型式に下段との差異はないとみられる。井戸内からは江戸時代の平瓦・大甕の胴部片などが出土したことから、使用された時期を知ることができる。

井戸跡とみられる他の５基については、抜取り跡の直径に大小が認められる。大きいものでは井戸６のように直径約４ｍを測るものも認められるが、いずれの井戸跡からも桶枠に使われる竹のタガの残欠が出土したことから、使用時の姿は井戸４と類似するものであったと思われる。時期も各井戸跡から出土した少数の土器片より江戸時代と考えられる。

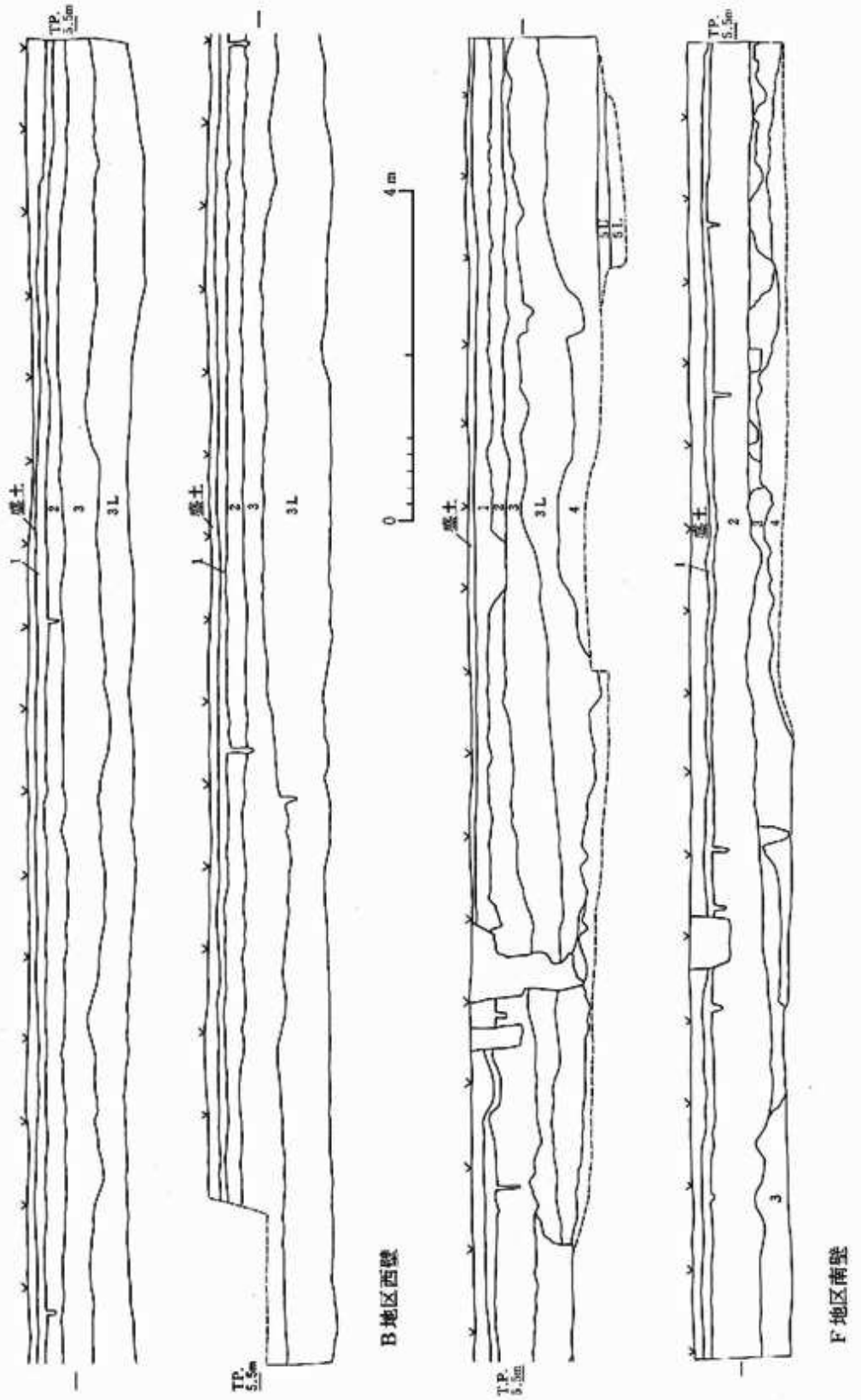
柱穴はA地区とD地区、柱根はD地区でそれぞれ検出された。その数は多くないが、これらの柱穴・柱根は掘立柱建物を構成するものと思われる。D地区の柱根は南北方向の柱通りが認められるものであって、別の柱通りが西に隣接するC地区で検出されないところから、この建物はD地区とその東側に復原することができる。この建物の時期は柱根の掘形内で検出された染付片により江戸時代と考えられる。

溝はA地区で南北方向に平行する２条、D地区で東西方向の１条がそれぞれ検出された。A地区の２溝は、１ｍ～1.5ｍの間隔で平行し、東側の溝１は幅約80㎝・深さ30㎝を測り、西側の溝２は幅約40㎝・深さ20㎝を測る。D地区の溝（溝４）は幅約80㎝・深さ30㎝を測る。これらの溝内より江戸時代の瓦・陶器などが少数出土しただけである。この他L地区でも弧状を呈する江戸時代の溝状遺構が検出されている。

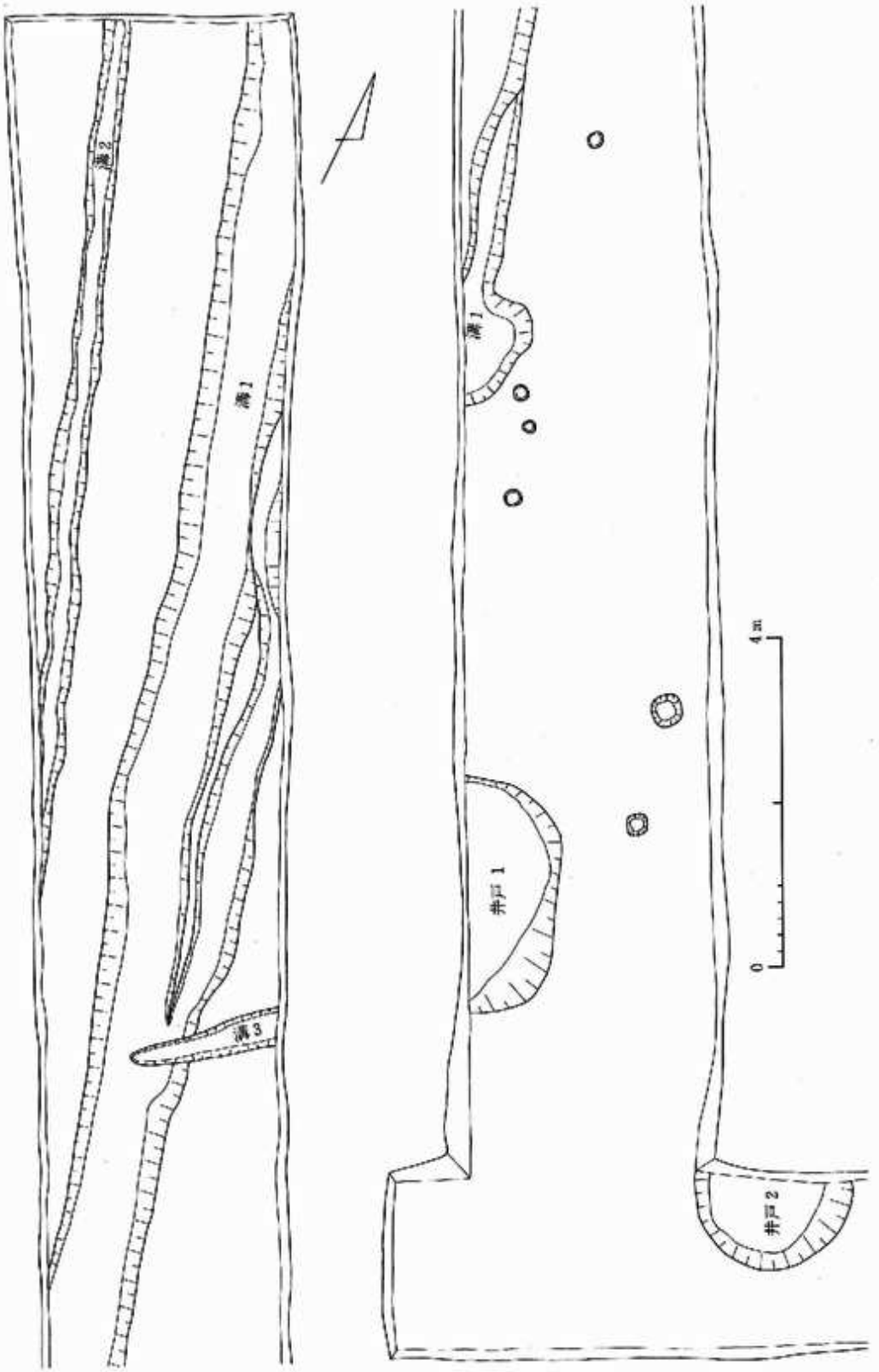
落ち込みはM地区で検出された直径約３ｍ・深さ約１ｍを測る池状の遺構で、そのなかに堆



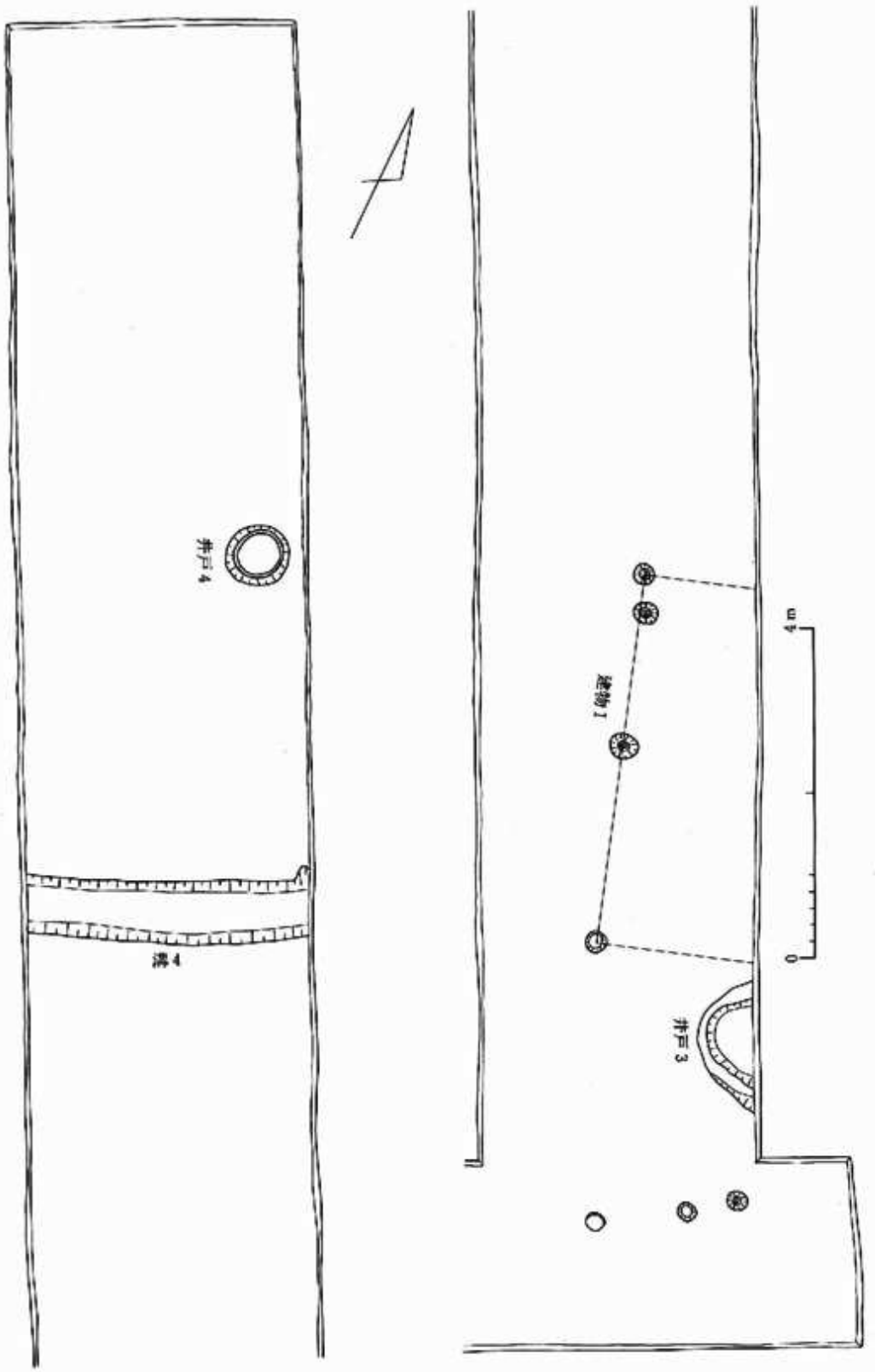
第46図　A・D・F地区の層序（1/80）



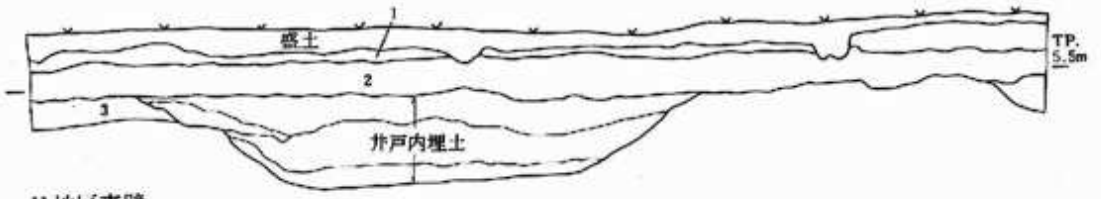
第47図　B地区・F地区土層断面図（1/80）



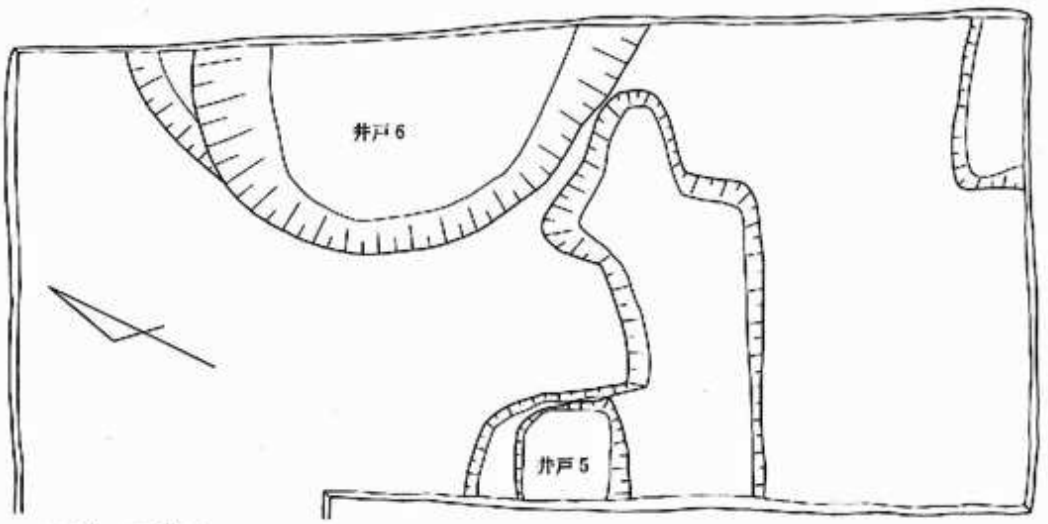
第48図　A地区・F地区平面図（1/80）



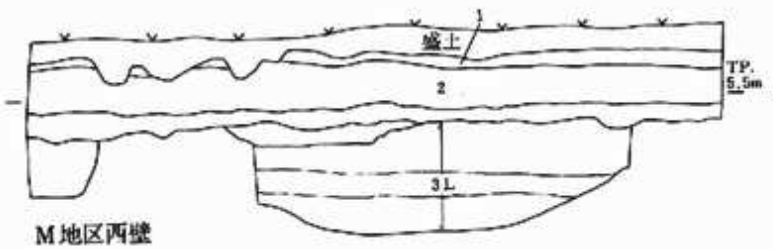
第49図　D地区・F地区平面図（1/80）



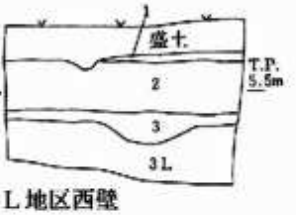
H地区東壁



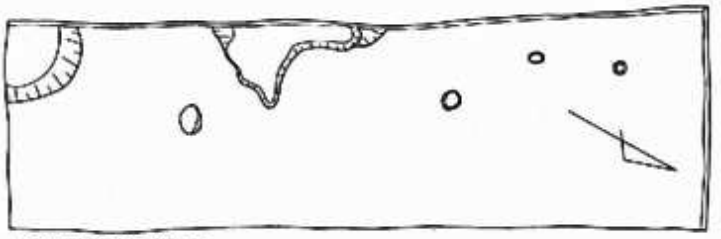
H地区第2層下面



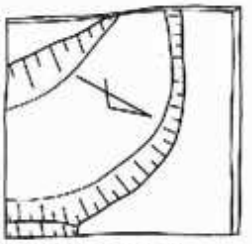
M地区西壁



L地区西壁



M地区第3層下面



L地区第3層下面

第50図　H・L・M地区の層序と遺構

積した青灰色粘土層より江戸時代の平瓦が多数出土した。

古大和川の自然堤防上に分布するこれらの遺構からは、この地が井戸や溝、池などの水利施設をもつ耕作地であって、その一角に作業場としての掘立柱建物をもつ景観が考えられる。

3．出土遺物

出土遺物は井戸枠を除くとすべて土器である。

第4層出土土器　古墳時代～平安時代の土器である。古墳時代に属するものとしては土師器甕1と須恵器坏身3があげられる。1は「く」の字に外反する口縁の端部が内面に肥厚し、胴部内面をヘラで削る布留式の特徴をもつ。口縁端部の肥厚が丸いことから布留式のなかでも比較的古い4世紀末頃のものとみられる。3は坏身の立ち上がり部が極端に短く内傾する特徴より7世紀前半と考えられる。奈良～平安時代に属するものとしては土師器甕2・4・8、製塩土器5、羽釜11・12、杯6・7などがあげられる。2・4は胴部最大径が口径を大きく上廻り、8は口縁が胴部最大径を上廻る。口縁端部を内側に巻き込む奈良～平安時代の特徴を有する。5は赤褐色を呈し、外面よりも内面を丁寧に調整した土器である。外面をユビオサエ、内面をヘラ掻きで仕上げ、器形が筒形を呈する特徴より製塩土器と考えられる。羽釜11・12は褐色を呈し、胎土中に角閃石を含むいわゆる河内の土器である。器形が奈良時代に多い長胴形よりも球形胴に近いところから、これらは平安時代前半のものと思われる。杯6・7は器表面をナデ仕上げにし、口縁部が外に傾く平安時代初めのものである。

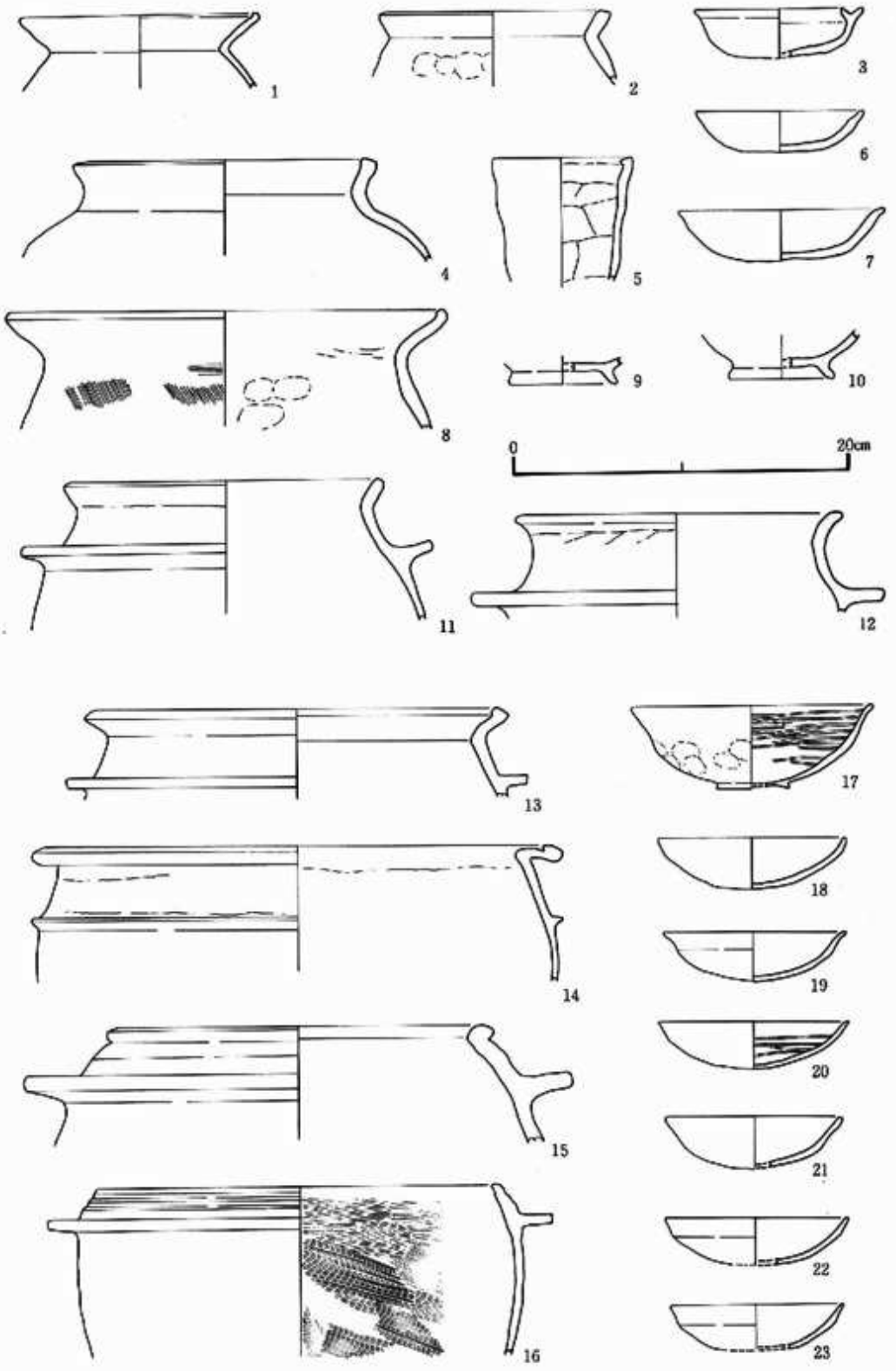
第3層（L）出土土器　黒色土器・瓦器・土師器小皿などがみられる。9・10はいわゆる内黒で、「ハ」の字形の高台をもつ平安時代中頃の土器である。瓦器・土師器小皿は細片であるが、器形より鎌倉時代の可能性が大きいものである。

第3層（U）～第2層出土土器　瓦器椀・土師器小皿・羽釜・摺鉢・甕などが多数出土した。瓦器椀は高台が退化したものが大半を占める。そのなかで17は高台を残す数少ないものの一つで、型式より12世紀頃のものと思われる。18～23・42～52は高台が消失し、器高も低くなった14世紀頃のものと思われる。瓦器椀が消滅する直前の型式であろう。

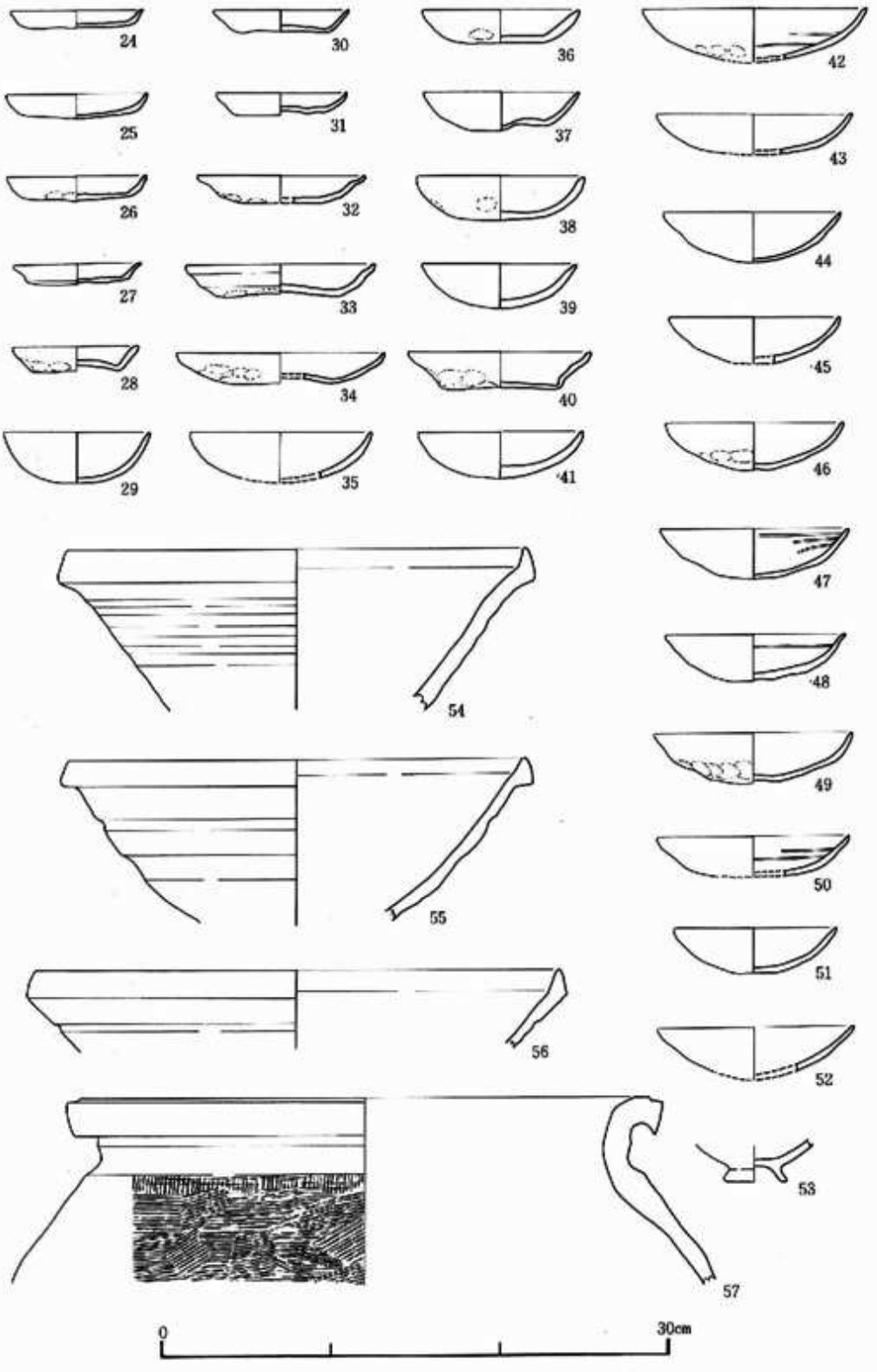
土師器小皿24～28・30～34・36・40、土師器椀29・35・37～39・41はいずれもユビオサエにより仕上げた土器である。器形で分けるとすれば、土師器小皿にはヨコナデによって口縁が外反するもの27・28・32・33・40が多く、そのなかに口縁端部がつまみ上げられたものも認められる。他に、成形時のオサエによって底部が凹むいわゆるヘソ皿が認められる。

羽釜には土師質13～15と瓦質16とがある。土師質には口縁端部を内側に巻き込むもの13・14と口縁端部を外側に肥厚させるもの15とがある。瓦質の羽釜は内傾する口縁部の外面に2条の凹線を施すもので、内面全体に細かいヨコハケ調整が行われている。

54～56は陶質の摺鉢で、口縁端部をヨコナデによってつまも上げる特徴をもつ。他に瓦質の大甕が1点出土した57。口径36.6cmを測るこの大甕は胴部外面にタタキ目を残す特徴から、室町時代に兵庫県西南部で生産されたものとみられる。



第51図　出土土器（1）


24
30
36
42
25
31
37
43
26
32
38
44
27
33
39
45
28
34
40
46
29
35
41
47
54
48
49
55
50
51
56
52
53
57
0
30cm

第52図　出土土器（2）

以上の土器のなかに、D地区の井戸３・H地区の井戸５・M地区の落ち込み内より平瓦と丸瓦が多数出土した。平瓦は側縁面に鉛直方向のヘラ切り痕が認められる。丸瓦は玉縁を有するもので、凹面には布目と粘土板から素地を切り離す際の横筋がみられる。これらの特徴は江戸時代の平瓦・丸瓦に共通して認められるものである。

Ⅳ．まとめ

弥刀遺跡第５次発掘調査より得られた知見は以下のようにまとめることができる。

1．層序と出土遺物の年代よりみて、第５次調査地の北隣（近鉄弥刀変電所敷地）でかつて出土したとされる奈良時代の人面墨書土器はおそらく第４層より出土したものと思われる。第４層出土の土器はいずれも２次的な堆積であったが、近くに奈良時代の集落跡が存在する可能性はある。

2．本調査地の遺構は第３層（L）が堆積した上に形成されているが、その時期は遺構内出土土器より江戸時代に属することが知られる。

3．弥刀小学校内でこれまで検出されている平安～鎌倉時代の遺構と本調査地の遺構は共に古大和川の自然堤防上に営まれたものとみられ、これらの集落跡は南北に長く連なっていた可能性がある。

4．江戸時代の宝永年間に行なわれた大和川付替え工事に伴って、本調査地一帯は大規模な整地が実施され、旧河道周辺の全域に客土層が形成される。

5．この整地と客土層の形成で変化した土地は綿作に利用されたと考えられる。おそらく付近一帯の景観は大蔵永常の著した「綿圃要務」に描かれた新田風景と似たものであろう（第53図）。

6．調査地内で検出された江戸時代の遺構はこの綿作のための水利施設（井戸・溝・落ち込

第53図　「綿圃要務」に描かれた新田での綿作風景

み）および農作業小屋的な建物と考えられる。

7．近代になって近鉄大阪線の敷設に伴って再び整地が行われたとみられ、江戸時代の遺構面の一部削平と新たな客土層（第2層）が形成されたと思われる。

註

1）．発掘および整理作業には、出射祥司・田原義広・堀田博隆・廣瀬晴信・美並慶久・柳瀬久美子・太田圭子の補助員諸氏が参加した。

西岩田遺跡第11次発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

東大阪市西岩田一帯は、地表に土器片が散布することから遺跡の存在がかねてより予測されていた。昭和40年、水道管埋設によって須恵器・土師器が出土したことでこの予測は確かめられ、昭和46年には下水道管渠築造に伴って西岩田遺跡で最初の発掘調査が実施された。

発掘の結果、古墳時代中頃の建物跡・井戸などの遺構、古墳時代から歴史時代の遺物が検出された。このうち注目すべきは、出土土器のなかで近畿地方の古墳時代初頭の土器型式＝庄内式～布留式古段階と吉備地方の同じ頃の土器型式＝酒津式とが同じ地層より出土するという事実であった。これによって、庄内式の甕に顕著に認められる胴部内面をヘラで削る技法は吉備地方からの影響であることが証明され、西岩田遺跡の名は庄内式と酒津式とが共伴する遺跡として一躍知られるようになった[1]。

第１次調査以後、ガス管や水道管の埋設あるいはマンション建設などに伴って調査が実施され、古墳時代初頭の径13mを測る円形周溝遺構、上層より６世紀の掘立柱建物・溝などが検出された。また、府道中央環状線内で近畿自動車道の建設に伴う発掘調査が昭和54年３月～56年９月に大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによって実施された結果、自然河川より多量の庄内式～布留式土器が出土し、また下層より畿内第Ⅴ様式土器と鍬・鋤・楯など各種の木製品とが出土した[2]。

これらの調査によって、西岩田遺跡は南北に約500mひろがること、弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期の３時期からなること、遺構としては古墳時代後期に掘立柱建物・井戸・溝などの集落関係遺構を認めるが、このうち弥生後期と古墳前期については多量の遺物に比較して検出された遺構の数がすくないこと、遺物としては前記した土器のほかに畿内第Ⅴ様式に伴う木製品も豊富であること、などが明らかとなった。

今回実施することとなった第11次調査は、関西電力㈱による電線地中化工事に伴って府道中央環状線西側の歩道部分を幅1.1m・深さ2.3mで長さ約500mにわたって掘削される計画に伴うものである。この調査予定地は、昭和53年に同じく中央環状線歩道部分でガス管と水道管の埋設に伴って発掘した第４・５次調査地[3]のすぐ東に接するという位置にあるために、既応のデータに基いて遺物包含層と遺構の分布をある程度事前に予測することができた。

そのため、調査は遺構および遺物包含層が分布するとみられる区間（調査予定地の中間部分約150mの範囲）を重点的に精査することとし、その他の区間については人力による発掘と機械掘削時の立合とを併用して調査を行なうこととした。また、調査予定地内に一ヶ所設けられる人孔部分（幅2.7m・長さ9.1m・深さ5.2m）については、弥生時代中期以前の堆積環境を調べるために地層下5.2mまですべての堆積層を調査の対象とすることとした。

II. 遺跡の立地環境

西岩田遺跡は河内平野のほぼ中央に所在する。都市化以前の付近一帯は、標高3m前後の水田のなかに水田よりも0.5mほど高くなった畑が点在する景観がひろがっていた。この畑は水田の土を掻きあげて造られたことから掻揚田（かきあげた）と呼ばれ、主として大和川付替後の近世後半期に綿を栽培するために造り出されたものとされている。遺跡発見の契機となった遺物の散布は、比較的埋没深度の浅い古墳時代後期の遺物包含層がこの掻揚田の造成の際に削り取られたために生じたものと思われる。

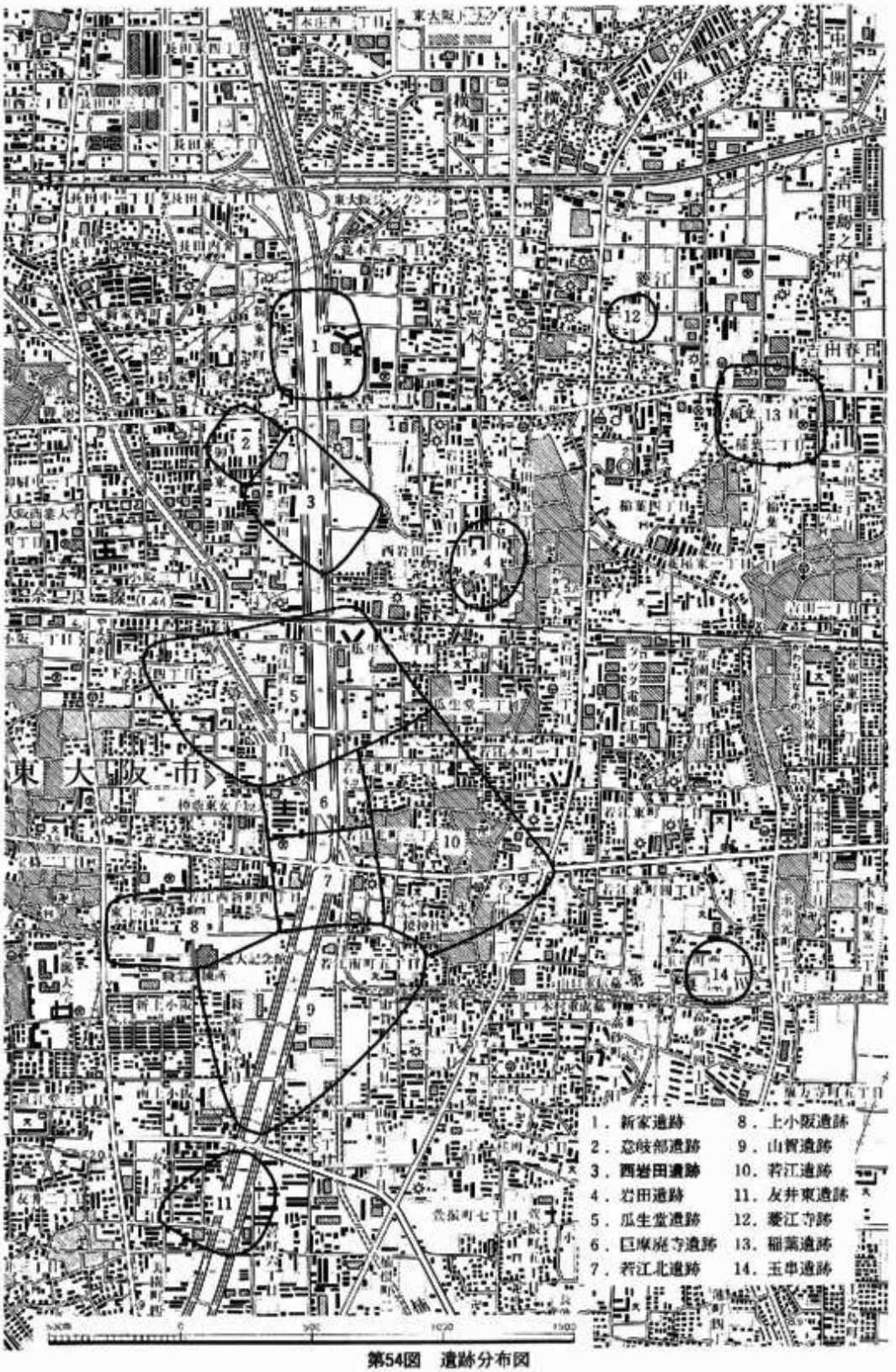
さて、西岩田遺跡が存在した弥生時代後期～古墳時代後期の周辺環境については、現在と大きく違うことが梶山彦太郎・市原実両氏による古地理図から推定することができる[6]。すなわち、旧大和川によって形成された三角州上に位置する西岩田遺跡は、弥生時代中期以前は河内潟の満潮時汀線より下位にあったこと、弥生中期末以後海水面の若干の低下と旧大和川による急激な沖積作用とによって陸化がすすみ、河内湖の水域と広い干潟を前面にのぞむ微高地上に集落が形成されたこと、などが知られる。出土遺物に漁具である土錘が多いという事実は、西岩田の人々が農業のほかに漁業にも携っていたことをあらわし、また出土土器のなかに占める非河内産土器の割合の大きさは土器に入れられた各地の物がこの地を中継地として頻繁に交易されたことをうかがわせる。

ところで、西岩田遺跡が発展した時期とみられる弥生時代後期～古墳時代前期の地層は、厚さ1.5mを超える砂層で占められている。この砂層は短い期間に堆積したものであることから、西岩田遺跡は溢水にしばしば見舞われていたと推定されてよい。溢水は、多くの場合砂層を形成すると同時に、下面を侵蝕する作用も合わせ持つものである。西岩田遺跡において弥生後期～古墳前期の遺構があまり検出されない理由の多くは、こうした溢水による侵蝕作用によると考えられる。

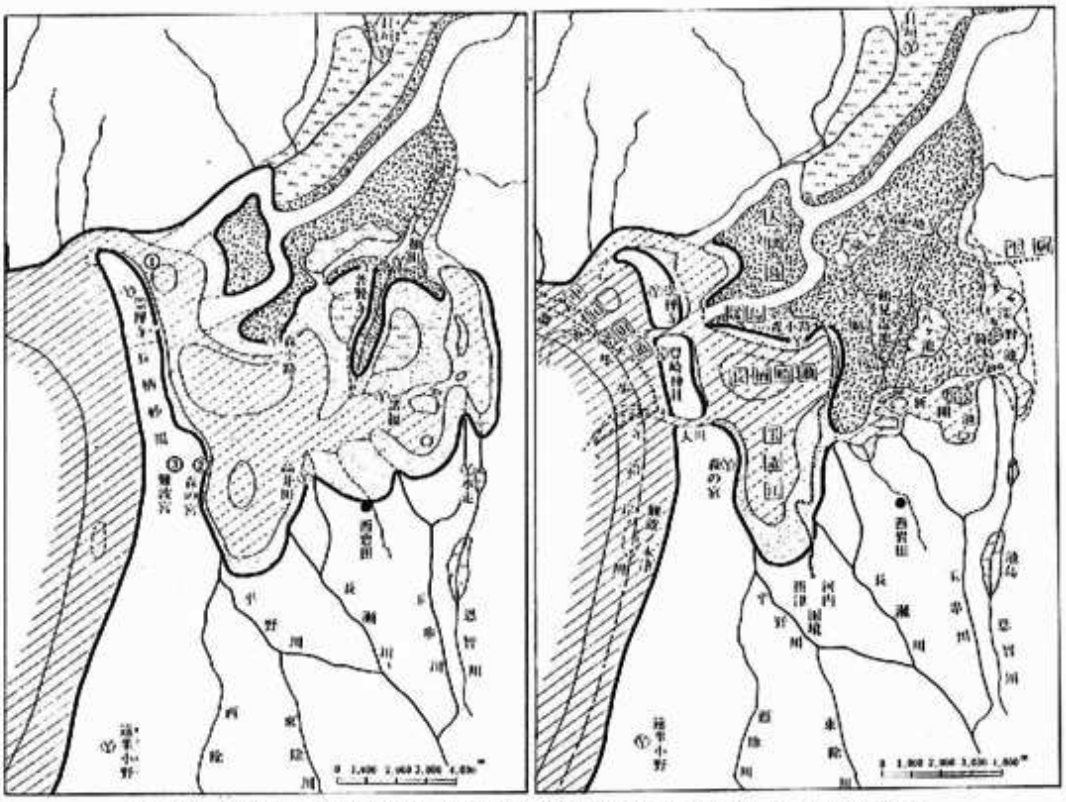
いっぽう、西岩田遺跡の南約1kmに位置する若江遺跡や山賀遺跡では、同じ時期とみられる水田遺構が遺存する。水田遺構を覆う地層は砂層であるが、比較的穏やかに堆積したとみられ、層厚も薄いことから溢水による侵蝕はさほど大きくなかったことを示している。このような堆積層と遺構の遺存状態から推察する限り、河口に位置する西岩田をとりまく自然環境は南の若江北や山賀より不安定であったといいうる。木製農具の出土より西岩田周辺で農業が行われていたことは確実であるが、農村的な南の集落に比較すれば、半農半漁でそして水上交通の拠点として物資の集散など経済活動も西岩田では大きな役割を占めていたと考えられるのである。

西岩田遺跡周辺の自然環境が安定するようになるのは6世紀以後とみられるが、これは6世紀代の遺物を含む地層が水田面下30～50cmで検出され、またその間の地層が堆積速度の遅い粘土層であることによる。しかしながら、6世紀いご中河内北部の集落は、その数と規模が共に減少し、西岩田遺跡もまた6世紀末で衰退したことが知られている。

こうした衰退をひき起こした原因としては、集落立地の条件の変化によると考えられるが、


東大阪市
1．新家遺跡
2．意岐部遺跡
3．西岩田遺跡
4．岩田遺跡
5．瓜生堂遺跡
6．巨摩廃寺遺跡
7．若江北遺跡
8．上小阪遺跡
9．山賀遺跡
10．若江遺跡
11．友井東遺跡
12．菱江寺跡
13．稲葉遺跡
14．玉串遺跡

第54図　遺跡分布図



第55図　河内湖１の時代（左）、河内湖２の時代（右）における西岩田遺跡の位置
原図は梶山彦太郎・市原実1985による

自然環境の変化とりわけ河内湖東南部が旧大和川の沖積作用によって陸化したことが、水上交通路の拠点であった西岩田の地理的環境に変化を生じたものと推察される。すなわち、大阪湾から畿内中心部（大和および南河内北部）への交通路は、古墳時代前期まで河内湖から中河内北部で旧大和川筋へ入って南下するルートと河内湖南部より中河内南部で旧大和川筋に入って東進するルートの２つがあったが、古墳時代中頃からは河内湖東岸の後退と共に中河内北部経由ルートが衰退して中河内南部経由ルートが主となった。また、大阪湾に面した難波津へ直接上陸するルートも中河内南部経由ルートと併存し、７世紀以降は最も主要なルートとして整備されたと考えられる。交通路と地域の変遷過程において、中河内北部は大阪湾から内陸への主要ルートから最初にはずれる地域であって、その結果かつての利便性を失ったこの地域は経済活動も鈍って社会的な地盤沈下の現象をきたしたと考えられるのである。古墳時代前期までは畿内中心部への玄関に位置していた西岩田遺跡は６世紀にはすでに文化的中心より離れた一地方の半農半漁の村へと質的に変化していたのであろう。とすれば、西岩田遺跡の変遷は河川の沖積作用によって交通路が変化し、その結果それまで栄えた港湾都市が衰退するという世界史上しばしば認められる事例の一つに加えることができるのである。

III. 調査の概要

昭和63年１月13日、調査地北端の意岐部交差点より西岩田遺跡第11次調査を開始した。調査は盛土部分（地表下約1.5mまで）を機械によって排除した後、四周を矢板で囲んだ状態で行われたが、工事の都合によって一度に調査できる区間の長さが最大約12mに限られたために、総延長約500mの調査地を40以上の区間に分けて一区間毎に調査を実施した。また、一区間の調査終了後ただちに電線保護のための管路埋設工事が実施されたことなども加わって、調査期間は当初の予定を大幅に延びて、昭和63年５月31日の終了まで約５ヶ月を費した。[5]

１．層序

今回の調査により検出された層序は以下のとうりである。

第１層：暗青灰色（５B3/1）粘土層。耕作土で厚さ約10cm。一段高い掻揚田の部分では認められない。

第２層：オリーブ灰色（５GY4/1）粘土層。瓦器椀と土師器の破片を少量含む。厚さは水田部分で10～30cm。掻揚田部分で約60cm、掻揚田部分では明黄褐色（10YR6/8）を呈する。

第３層：暗褐色（7.5YR3/4）部分的には青灰色（５PB5/1）を呈する細粒砂混じり粘土層。土師器・須恵器の破片を多数含む古墳時代中期～後期の遺物包含層。厚さ20～30cm。この層の下面にて以降を検出。

第４層：明黄褐色（10YR6/8）細粒砂層。この層の下部は青灰色を呈する。庄内式～布留式土器の２次的に堆積したものを含む。そのなかには磨滅の認められない完形品ないしはそれにちかい土器もある。

以上の地層は調査地のほぼ中間点に位置する東大阪市立公害監視センター前を中心として南北に約100mの範囲に認められる。その他の区間では、第３層が欠落し、第２層が厚さを増し（40～50cm）で第４層に続く。第４層は無遺物のシルト層に変化し、涌水が激しくなる。

次に、遺跡の中心部よりやや南に位置する地点に設けられた人孔部分の調査によって第５層から第17層までの地層を確認した。

第５層：明オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土質シルト層。この層は植物遺体（ヨシ）と灰の薄層およびシルトラミナをあいだに挟む。厚さ約１cm。

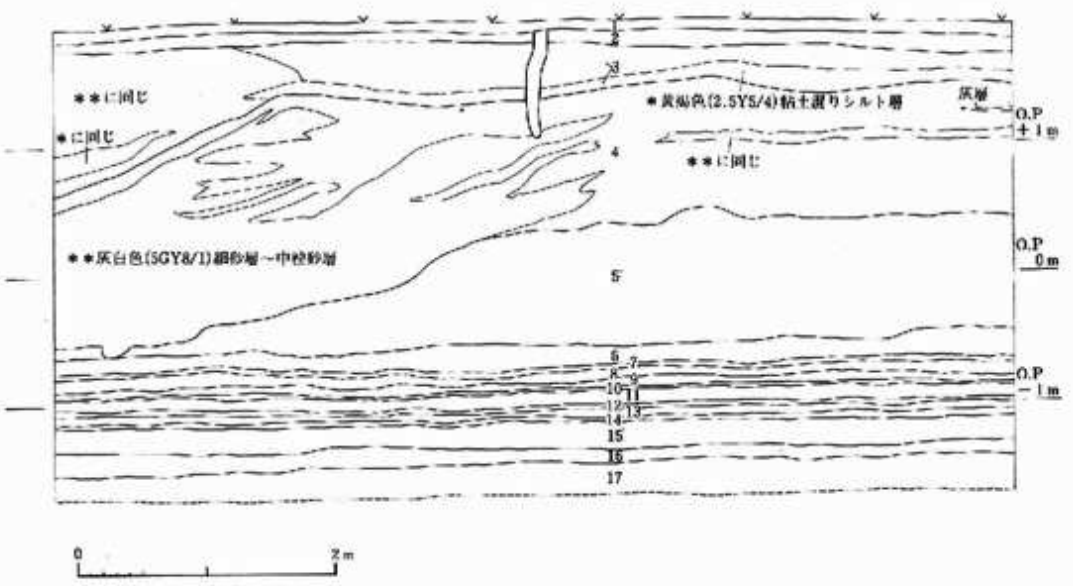
第６層：灰色（５Y5/1）植物遺体混じり粘土層。厚さ約20cm。

第７層：灰褐色（7.5YR4/2）で植物遺体を多量に含む粘土層。厚さ約５cm。

第８層～第16層：灰色（５Y5/1）植物遺体混じり粘土層と黒褐色（7.5YR3/1）で植物遺体を多量に含む粘土層の互層。全体の厚さ約70cm。

第17層：黒褐色（7.5YR3/2）粘土層。厚さ30cm以上。次の地層との境は未検出。

第５層から第17層はいずれも無遺物で、沼沢地のような環境を示す堆積層である。地表下約



第56図西岩田遺跡第11次調査地（人孔部分）の層序

5.2mまで掘削。

2．遺構

工事による掘削は人孔部分を除くと地表下2.3m程であったために、第4層が高度を下げる調査地の北部と南部では、遺構の有無を発掘調査によって確認することができなかった。遺構が検出された地点は、第4層の上面が高度を上げて微高地状を呈し、その上に第3層が堆積する前記した範囲である。

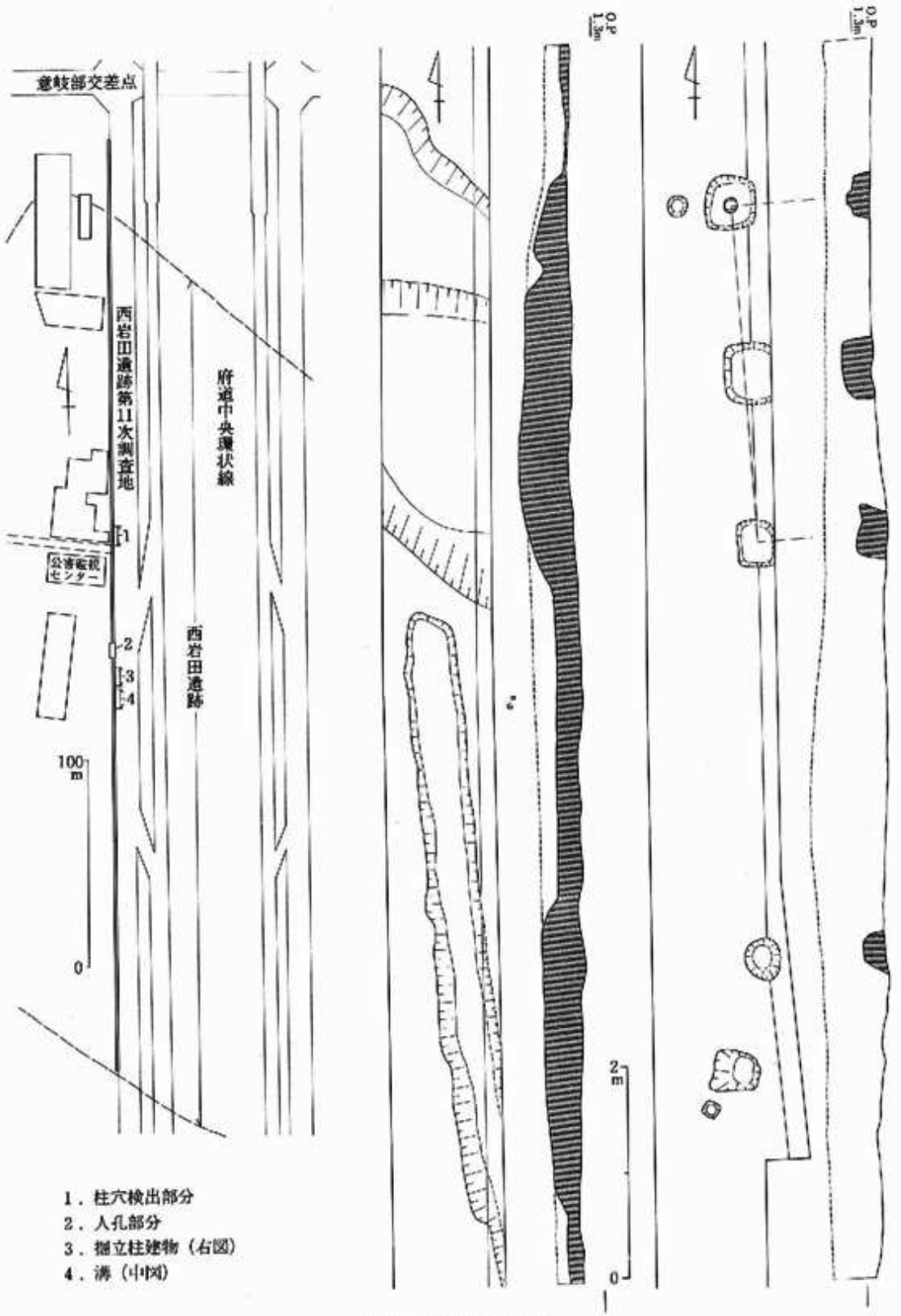
しかしながら、今回の発掘では遺構面が既設のガス管や電話線などでかなり撹乱を受けているために、全体として検出された遺構の数はきわめてすくなかった。そのなかで主な遺構としては、掘立柱建物と溝があげられる。

掘立柱建物

古墳時代後期の遺物包含層分布域の北部と南部でそれぞれ掘立柱建物の柱穴とみられる遺構を検出した。このうち南部で検出したものは一辺40～50cmの隅丸方形を呈する掘形をもつ柱穴3個によって南北2間の柱通りが復原できる。柱間がそれぞれ1.6mを測る柱列をもっていたとみられる建物のプランは、調査面積が限られているために明らかでないが、本調査地の西に隣接する第4・5次調査地において柱穴は未検出であることから、建物は東へとのびる可能性がある。柱穴の深さは20～30cmであることから、これらの柱穴はいくらか削平されたものと思われる。柱穴内から須恵器・土師器が出土したが、時期を限定することはできなかった。古墳時代後期に含まれるとみられる程度である。

溝

上記の掘立柱建物の南で2条の溝を検出した。1条は南東から北西方向の幅約4m・深さ0.4



第57図　検出された遺構

mを測るものであり、他の1条は南北方向に幅0.6m・深さ0.2mを測るものである。溝内より時期を限定できる遺物は出土しなかったが、溝内堆積土が第3層であることから古墳時代後期の遺構と考えられる。

その他の遺構としては、第2層の下面において中世の耕作に伴うとみられる等間隔の溝（幅約50cm・深さ約10cm）があり、またいわゆる鋤溝も第2層下面のところどころで認められるが、これらは深さ5cm以下の浅いものである。

3．出土遺物

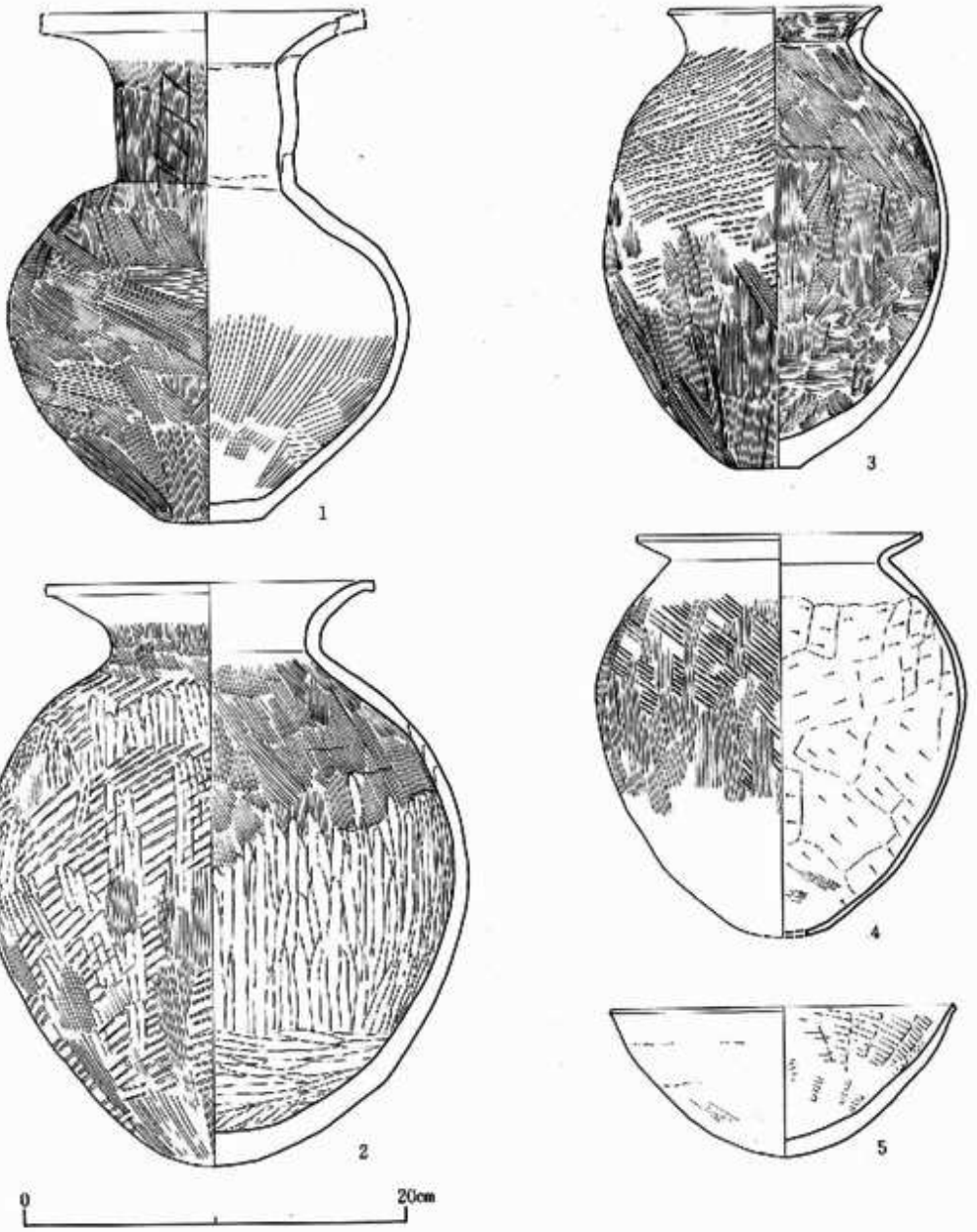
第3層と第4層より合わせてバスケット約30杯の土器・土製品が出土した。出土遺物の量は調査面積に比較すると少量であるが、これは調査地内で撹乱を受けた部分がかなりの割合を占めていたことに加えて、人孔部分を除くと地表下2.3mまでの発掘では遺物を含む第4層はその上部の調査にとどまったためである。

層位別に出土遺物をみると、第3層からは布留式新段階の土師器と6世紀代の土師器・須恵器が出土した。しかしながら、これらの大半は細片の状態であるために器形を明らかにしうるものはすくない。いっぽう、第4層からは庄内式～布留式古段階の壺・甕・鉢・高杯・台付鉢・小型器台などが出土し、とりわけ人孔部分では庄内式の広口壺・甕・鉢2～5などが良好な状態で出土した。また、2次堆積で磨滅しているが、弥生時代中期の壺片もわずかながら出土している。以下に、観察結果を記す土器のうち6～10・15・20・22・27は第3層より出土し、その他は第4層より出土したものである。

第4層出土土器・土製品（第58～60図）

広口壺1・2・23・24　1は肩の張る球形の胴部と直立するやや長めの頸部より外折する口縁部を有する器形。底部は平坦面を有するが、この土器を据えることはできない。平底より丸底へ移行する過渡期の形態とみられる。頸部が長い点は第V様式の長頸壺の伝統をひくものと思われる。口縁端部を欠くが、おそらくヨコナデによる面をもつだけで拡張あるいは施文は加えないものであろう。制作手法は、外面全体をタテハケメ。内面は頸部をナデ、胴部をタテハケメ、口縁をヨコハケメで調整する。ハケメの原体は内面と外面とで違い、内面に目の粗いもの（4本／cm）、外面にはこれより目の細かいもの（6本／cm）が使用されている。この広口壺の頸部外面にはヘラ記号文が相対する位置に描かれている。いずれも平行するタテ線をひき、その上に斜線4本を等間隔でひいたものである。その意味は不明であるが、こうした記号文も全体の器形と同じく第V様式の伝統と考えられる。にぶい橙色（5YR7/4）を呈し、胎土には長石・角閃石・雲母・くさり礫などが含まれている。

2はやや丈高の球形胴に短く外反する口頸部を有する器形。底部は平底の名残りであるわずかな平坦面を残すが、ほとんど丸底にちかい尖り底である。口頸部は頸部と口縁部の境が不明瞭で、頸部の立ち上がりが広口壺としてはきわめて短いという特異なもの。口縁端部は無拡張、無文であって、ヨコナデにより面取りされた端面がわずかに下方に肥厚する程度。製作手法は、



第58図　第4層出土土器

胴部外面を右上がりのタタキメの上に底部から放射状にタテハケメ（5本／cm）、胴部内面をタテハケメの上にタテヘラミガキで調整する。頸部は外面タテハケメ、内面はヨコハケメの上をナデにより調整する。ハケメ原体は胴部内外面は同一であるが、頸部には目の間隔は同様で条痕の浅いものが用いられている。この広口壺は全体にぶ厚いつくりで、器厚は胴部上半で0.8cm、胴部下半～底部では1.0～1.8cmに達する。淡黄色（2.5Y8/3）を呈し、胎土には長石が多量に含まれている。

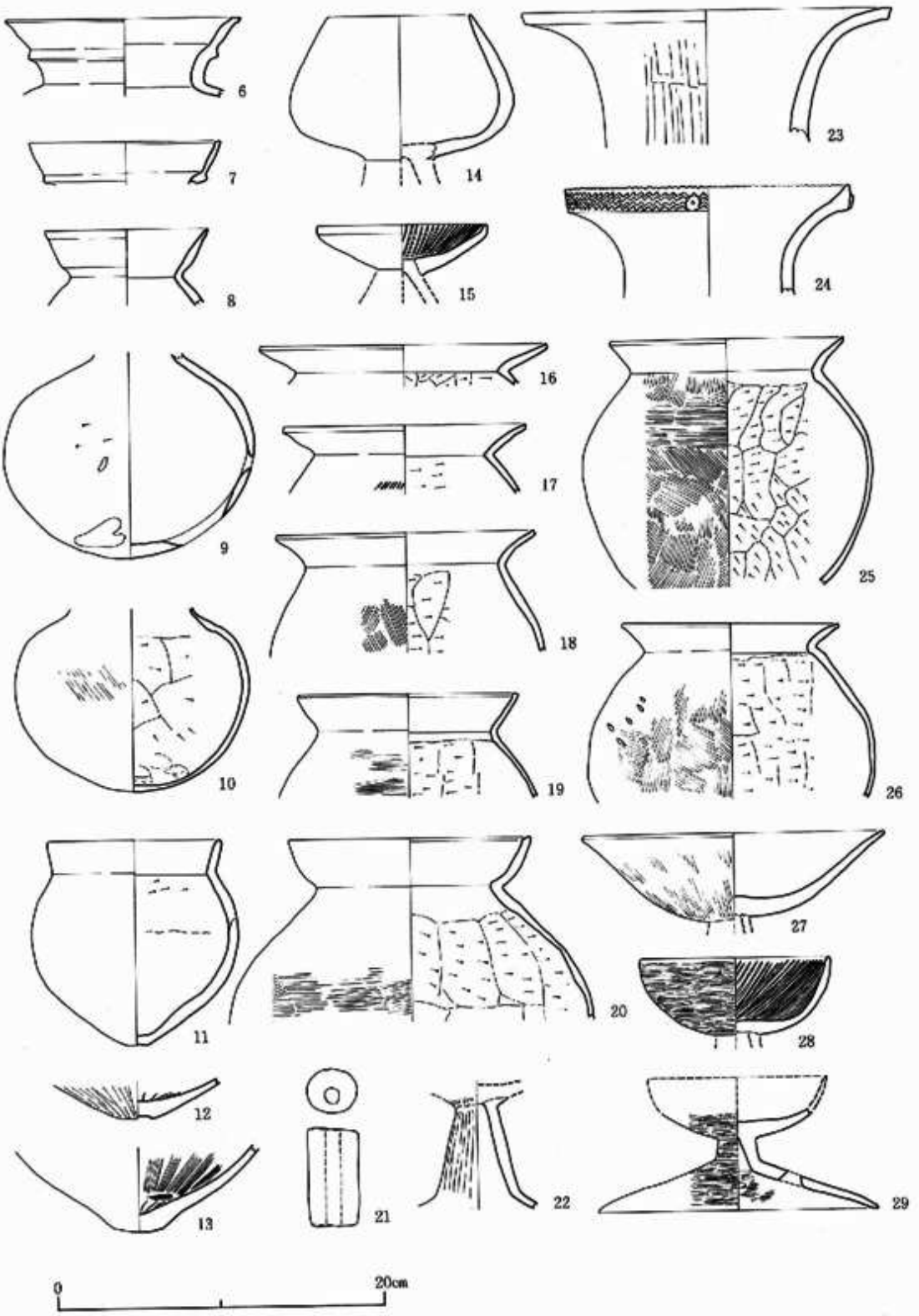
23・24は胴部を欠くもので、共に直立する頸部よりゆるやかに外反す口縁部を有する器形で

ある。23は口縁端部か無拡張・無文。24は口縁端部が上方に肥厚し、周縁に刻目を施し、端面に櫛描波状文と貼付円形浮文をもつ。櫛描波状文は回転台を使わずに櫛原体（4本／cm）を動かせてジグザグの波状を描いたものである。製作手法は23の頸部外面にタテ方向の板ナデを認めるだけで、他の部分は不明瞭であるがナデ仕上げと思われる。23は灰黄色（2.5Y6/2）を呈し、胎土に石英・長石を含む。24は橙色（5YR7/6）を呈し、胎土にクサリ礫を多量に含む。

甕3・4・11～13・16～19・25・26　3はやや細長い球形の胴部に短く外反する口縁部を有する。底部は広口壺1と同じく平坦面をもつが土器を据えることができないものである。この土器は胴部や口縁部などの形状において第V様式の甕に類似し、胴部外面に目の粗い右上りのタタキメ（2.5本／cm）を残す点においても第V様式的といいうる。相違としては、底部が前記したように平底から丸底への過渡的なものであること、第V様式の甕では顕著に認められる分割成形痕（多くの場合タタキメ主軸方向の違いとして胴部の下部に認められる）が明瞭でないこと、庄内式の甕と同じく底部から放射状のタテハケメをみること、などがあげられる。製作手法は胴部内面をきわめて目の細かいタテあるいはヨコハケ（16本／cm）、外面をタタキメののちタテハケで調整する。外面のタタキメは口縁部にも認められることから、口縁部の成形にもタタキが用いられたことが知られる。内面のハケメは一度の調整によるもので、原体は外面と同じである。この甕は第V様式の特徴を残してはいるが、全体としてみれば庄内式期のものと考えられる。なお、この甕には煤の付着がみられないところから、煮沸には用いられていないこと、また底面から胴部下半に黒斑を有するところから、土器を焼く際には何らかの支えにより地面に立てた状態であったことも知られる。灰白色（7.5Y8/2）を呈し、胎土には長石・石英が多量に含まれている。

4は肩の張る球形の胴部より「く」の字に外反する口縁部を有する。底部は丸底である。口縁端部はヨコナデによって上方に肥厚し、上端は稜となっておわる。庄内式の甕に特徴的ないわゆるつまみ上げの口縁端部である。製作手法は胴部外面にタテハケメ、胴部内面にヘラケズリを認めるが、詳細に観察すると外面のハケメの下に部分的ではあるが左上りのタタキメ（4本／cm）が認められる。しかし、底部から胴下部（胴部の1/3程度の範囲）にはタタキメ・タテハケメともみられず、ユビナデの痕だけが認められる。この部分はもともとタタキメ・タテハケメを行なわなかった可能性があり、その場合は胴下部の製作に型造り法が用いられたものと思われる。使用痕跡である煤の付着は底面より肩部に著しいところから、炎の外炎部分が底部にあたる程度に土器を浮かせて煮沸されたことが知られる。この甕は器形・製作手法ともに庄内式の特徴をもつものであるが、灰白色（2.5Y8/2）を呈し、長石・石英を多く含む胎土より明らかに非河内産であることが知られる。

16・17は14と同じく「く」の字に鋭く外反する口縁部をもち、胴部内面をヘラ削りした庄内式の甕であるが、角閃石・雲母を多量含む生駒西麓産の胎土で製作されたものである。口縁端部がつまみ上げ状に肥厚する点も4と同様。しかし、胴部内面のヘラ削りが口縁部との境よりはじまること、そのために口縁部と胴部の境には稜をもつこと、胴部外面のタタキメ（17のみ



第59図　第4層・第3層出土土器

確認、5本／cm）は右上がりであること、などは相違としてあげうる。16は褐色（10YR4/4）、17は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。

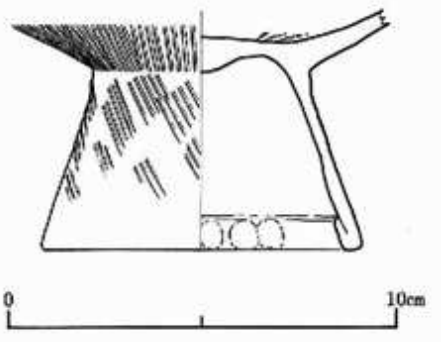
18・25・26は上記した庄内式の甕と比較すれば、胴部外面にタタキメがみられずに全面ハケ調整であることや口縁端部の肥厚が丸みをおびていることなどの点で次の布留式を指向している。しかし、典型的な布留式の甕よりも口縁部の外反角度が鋭い点で古い要素が認められるものである。胴部外面のハケメは口縁直下より肩部にかけての範囲ではタテハケメの上にヨコハケメが重なるという特徴がみられ、肩部以下ではタテあるいはナナメのハケメだけで調整されている。胴部内面のヘラ削りは口縁部との境よりもやや下から行なわれる。そのため口縁部と胴部の境に稜はない。26の胴部外面にはヘラ先による刺突が6個認められ、また18・26の外面全体に黒色塗付物による被膜が認められるが、これらの特徴も布留式にしばしばみられるものである。18は灰色（5Y5/1）、25は灰黄色（2.5Y7/2）、26は灰白色（2.5Y8/1）を呈し、胎土にはいずれも石英・長石が多く含まれている。

19は胴部から口縁部への立ち上がりの角度と口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部へ内面に丸い肥厚部をつくり出す特徴などから、典型的な布留式前半期の甕とみられる。胴部外面には肩部以上にヨコハケメ、内面には口縁部との境のやや下よりはじまるヘラ削りが認められる。外面に黒色塗付物も付着している。明褐色（7.5YR7/2）を呈し、石英・長石・くさり礫などを含む。

11は尖り底の胴部から直立ぎみに立ち上がる短い口縁部をもつ小型の甕。軟質であるために調整痕はほとんど残されていないが、胴部内面にわずかにヘラ削りの痕をみることができる。器壁は0.6～0.9cmと厚めで、ヘラ削りの効果はあまり認められない。この甕は尖り底をもつことから庄内式に否定されよう。煤の付着はない。淡赤色（2.5YR7/4）を呈し、胎土には石英・長石を多く含み、くさり礫もみられる。

12・13は尖り底を呈する底部で、このうち13は煤が付着することから甕の底部とみられる。12は内面・外面ともヘラ掻きの痕がみられ、13は内面に放射状のタテハケメ（12本/cm）がみられる。共ににぶい黄色（2.5Y6/3）を呈し、胎土には石英・長石多数と雲母・角閃石が含まれる。

台付甕（第60図）「ハ」の字形を呈する脚台部の上に胴部をつくり付けた台付甕であって、その形態および製作手法の特徴より東海地方を中心に分布するS字状口縁台付甕の破片とみられる。S字状口縁台付甕は、独特の口縁形態のほかに、胴部外面に目が粗くかつ条痕の深いタテハケメを有すること、脚台裾端部の内面が肥厚すること、全体に砂粒を多く含みそして薄く作られていること、などの特徴をもつ。出土した台付甕は、口縁部を欠き胴部もその大半を欠損するものであるが、残存部分に上記の特徴が顕著に認められることから、東海地方からの搬入品と考えられる。



第60図　東海系台付甕（1/2）

この台付甕は別々に成形した胴部と脚台部を接合し

たものとみられる。これは脚台部内面が胴部に移行する部分に、接合時にナデつけた痕が顕著に残され、またナデによって胴部外底面よりはみ出した粘土が脚台の中空部分に突起を生じていることによる。このナデは接合部の外面にもとうぜん行われたと考えられるが、外面は胴部に下から上へのハケメ（５本/㎝）、脚台部にも同じ原体による斜めのハケメが行われたために、粘土のはみ出しなどの接合痕は残されていない。外面のハケメはその条痕よりみて、胴部では器表の粘土を掻き取るように強く行なわれ、脚台部では凹凸をならす程度にかるく行なわれたようである。胴部内面はヘラ状のものによる調整痕がみられるが、最終的にはナデによって平滑に仕上げられている。脚台部は成形段階より明らかに薄く作られている。裾端部を内側に折り返して補強するという特徴も薄い器厚によって生じたものであろう。脚台部内面の調整はナデ仕上げで、裾端部内面の肥厚部分にのみユビオサエの痕がみられる。河内の土器では必ず認められる裾部のヨコナデは、この台付甕においては内面・外面ともにみられない。この土器には、使用痕として胴部内面にこげつき、胴部外面に煤の付着が認められる。灰褐色（7.5YR6/1）を呈し、胎土には多量の砂粒と共に石英・雲母が含まれている。

鉢５　半球形を呈する丸底の鉢。粗製であるために製作方法を知るうえで好資料となるものである。すなわち、この鉢の製作には外型の使用が推定される。理由としては、外面に調整痕が認められず、器表面に粘土がある程度乾いた状態でひき伸ばされた際に生じるひび割れが無数に認められること、粗製であるわりには半球形の形状は整っており、口縁は正円弧を呈すること、内面には底面を中心に指でおさえた痕がみられること、などをあげうる。外面の一部に粘土紐の痕跡かとみられる横方向のしわをみることから、この鉢を製作するにあたっては外型に粘土を押しつける際に粘土塊からではなく、粘土紐を輪積みした状態を型のなかでつくったのち指で押さえて成形した可能性が指摘できる。外型からの取出しは、粘土が乾燥すれば収縮によって自然に外型より離れたと推定されるが、口縁部の調整手順よりみて型のなかで口縁部をヘラで切り整えたのちに取出し、内面をヨコハケメで調整したものと思われる。その結果、口縁端部にはヘラ調整時に外側へ粘土がはみ出した部分と、ヨコハケメにより内側から押された粘土が上面にはみ出した部分とが認められる。この鉢は広口壺２・壺３・４と共伴したが、庄内式の時代に外型成型技法の使用を示す貴重な資料となるものである。灰白色（2.5Y8/1）を呈し、胎土に長石・石英が多く含まれている。

台付鉢14　腰部が張り出したワイングラス状の形態を有する。脚部は欠損している。軟質で器表面が剥離しているために調整痕など製作手法は不明である。浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には雲母・長石・クサリ礫などが含まれている。

高杯28・29　椀状の杯部を有する高杯である。28は脚部を欠き、29は杯上半部を欠く。いずれも胎土に砂粒が目立たない精製土器である。28は内面に斜線の暗文を施す。外面はヨコヘラミガキののち黒色塗付物を施している。29の杯部は外面ヨコヘラミガキ・内面ナデ、脚部は外面ヨコヘラミガキ・内面ヨコハケメ（14本/㎝）により調整されている。椀状の杯部に大きく裾がひろがる脚部をもつこの高杯は庄内式期に属するものである。28・29ともに橙色（５Y

R6/8）を呈し、胎土には雲母・石英の微粒が含まれている。

小型器台15　皿状の受部と円錐形の脚台部よりなる小型器台で、受部のみが脚台部より剝離した状態で出土した。剝離部分を観察した結果、受部と脚台部は乾燥状態の違う状態で接合されたことが知られ、おそらく先に成形された脚台部の乾燥をまって受部が成形されたとみられる。受部は口縁部が短かく上方に立ちあがる形態。内・外面ともナデ調整を行ない、内面はそのうえに暗文状のヘラミガキを施している。形態および暗文状ヘラミガキより庄内式末期～布留式古段階のものと考えられる。浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、精良な胎土を使用している。胎土には石英・雲母・角閃石・くさり礫などの微粒が含まれている。

土錘21　円柱形を呈する土錘で、主軸に沿って中心に径1㎝の貫通する円孔が穿たれている。この円孔は焼成前に片方の面より棒を挿入して穿ったものとみられ、貫通した出口にはみ出した粘土を掻き取った痕がある。重量は70ｇを計る。この土錘は貫通孔に縄を通して漁網の縁に多数を縛りつけて用いたと推定される。西岩田遺跡ではこの種の土錘の出土例が多い。灰色（５Ｙ4/1）を呈し、胎土には石英・長石の微粒が含まれている。

第三層出土土器

小型壺６～10　６は２段に外反するいわゆる二重口縁壺の口縁部である。胴部は欠損するが球形・丸底のものが付くと思われる。口縁端部が内面にわずかに肥厚し、肥厚部分がやや下向きである点は布留式後半期の特徴を示している。にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には石英・長石多数と雲母・閃石が含まれている。

７・８はいわゆる小型丸底土器と呼称されるもののなかで、体部をハケメ調整するやや粗製の土器の一群に含まれる。このうち７は二重口縁を有し、口縁端部がやや下向きに肥厚する特徴をもつ。８は外上方に開く直口口縁を有し、ヨコナデによって外面がやや外弯する特徴をもつ。これらの特徴から、７・８は布留式後半期に否定される。７は浅黄橙色（10YR8/4）、８は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には長石・雲母・角閃石・石英が含まれている。

９・10は口頸部を欠く球形の胴部である。９は頸部の径が小さい直口の口頸部をもつものと思われる。胴部の中ほどと下部には、３カ所に内面からの打ち欠きによって穿たれた不定形な小孔がみられるが、これら複数の小孔が意味するところは明らかでない。10は比較的径の大きい口頸をもつとみられる。胴部外面を斜めのハケメ、内面をヘラ削りで調整する特徴は前記した小型丸底土器７・８の胴部と共通するとみられることから、10の口頸部も同様の形態かと推定される。９は橙色（５YR6/6）、10はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土に石英・長石・雲母・角閃石が含まれている。

甕20　大きく肩が張り出した球形の胴部に外弯する口縁部を有する。口縁端部は内面がやや下向きに肥厚する。肥厚部分の上面に内傾面をもつこの口縁形態より、この甕は布留式後半期に否定される。製作手法は胴部外面にヨコハケメ（６本/㎝）、胴部内面にヘラ削りをみるが、内面のケズリは均一でないために器厚が薄い部分と厚い部分を生じている。灰白色（10YR8/2）を呈し、胎土に長石・くさり礫が多く含まれている。

高杯・22・27　27は平坦な杯底部よりゆるやかに角度を変えて外上方にのびる杯口縁部を有する。外面は全体にタテハケメ（8本/cm）が行なわれ、内面はナデ仕上げとみられる。器形・調整方法より布留式後半期のものと思われる。22は、杯口縁部27と接合することはできないが、同じ型式に属する高杯の脚部である。脚柱上面には杯底部より剥離した痕が残され、杯底部との接合部に補強された粘土が脚柱部上縁をとり巻いている。この補強部分の表面にタテハケメが残されているが、これは杯部外面の調整として行なわれたものである。脚柱部は中空で、外面はタテヘラミガキ。内面はしぼり痕を回転ヘラ掻きによって消している。27は橙色（5YR7/6）、22は浅い橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には共に石英・長石が多く含まれている。

Ⅳ．まとめ

西岩田遺跡第11次調査によって明らかになったことを以下に列記する。

1．今回の調査は幅1.1mで深さ2.3mまでという限られた条件のもとで行なわれ、また既設の地下埋設物などで撹乱された部分も多かったために、検出できた遺構はきわめてすくなかった。遺構としては古墳時代後期の掘立柱建物の一部と大小合わせて2条の溝を検出したにとどまる。これらの遺構は第4層明黄褐色細粒砂層を遺構面とするものであって、遺構内に第3層暗褐色細粒砂混り粘土層が堆積したものである。出土遺物が多い第4層の下面からは遺構を検出することができなかった。

2．西岩田遺跡の遺物包含層は、東大阪市立公害監視センター前を中心として、南北約100mの範囲で認められ、またこの範囲のなかに第4層上面が微高地状に高まる範囲も含まれている。西岩田の集落は南東から北西へのびると予測されるこの微高地上に営まれたことや、西岩田遺跡の北西に隣接する意岐部遺跡についても同じ頃に共通する微高地上に立地していた可能性があることなどが指摘できる。

3．出土土器よりみた地層の堆積時期については、第4層が庄内式から布留式前半期、第3層が布留式後半期から古墳時代後期と判断される。歴史時代の地層からはほとんど遺物が出土しないことから、西岩田遺跡の集落は古墳時代後期の終り頃に衰退したと考えられる。歴史時代以後は堆積層自体もきわめて薄く、河川管理などによって周辺の環境は安定していたことが窺われる。

4．出土遺物は比較的少量であったが、第4層からは完形に復元できる状態の土器が数点出土した。そのなかには第Ⅴ様式の器形・手法をとどめるもの、たとえば広口長頸壺に類似するもの1、タタキ技法を駆使した広口壺2、甕3などが認められる。いっぽう、これらと共に出土した甕4は、胴部外面上半にタタキメを残すが下半部にタタキメが認められないところから、その製作にはタタキ技法と共に「下半部外型作り成形技法」[30]が用いられたとみられる。そして、この型作り成形技法の使用を明らかに示すものが鉢5である。この鉢は、壺あるいは甕の成形第1段階として作られた未成品に内面ハケ調整を加えただけで成品としたものとみられ、またこうした器形が未成品段階では多数存在したことを示唆するものである。この土器を成形第1

段階とみなした場合、甕あるいは壺の胴部下半部よりもこの未成品はかなり小さいことが知られる。おそらく器高の比率で表わせば胴部の1/4～1/5程度とみてよいであろう。このことを布留式甕に行なわれたとされる型作り成形の範囲と比較すれば、庄内期における型作り成形技法は胴下半部のほぼ全体を型作りで行なう布留期よりも限定的な使用にとどまっていたといえよう。丸底で内面ヘラ削りを行なう庄内甕の初期のものには、底部ちかく（胴部の1/5ほど）にタタキメ主軸方向の違う部分があって、第Ⅴ様式甕と同様の製作方法による成形第1段階をもつことが知られる。今回知られた型作り成形品はその大きさからみて、初期の庄内甕で認められた成形第1段階と同様のものをタタキ成形でなく型作り成形によって行われていたことを示唆するものである。これはタタキ技法から型作り成形技法への移行が庄内式期において、1第Ⅴ様式的な製作原理によるタタキ技法の隆盛＝タタキ成形による成形第1段階の縮少、2小型化した成形第1段階に型作り成形技法の採用と発達した胴部タタキ成形技法の維持、3型作りによる成形第1段階の大型化とタタキ成形部の縮少という段階で変遷したと考えられる。タタキ技法から型作り成形への転換を研究するうえで、西岩田遺跡より今回出土した型作りによる鉢のもつ意義は大きい。

5．東海地方からの搬入品とみられるS字状口縁台付甕が1点出土した。S字状口縁台付甕はその形態が弥生時代後期欠山式の頃に出現し、近畿地方の庄内式～布留式古段階に相当する元屋敷式期に形態が整い、とりわけその新しい段階においてS字状口縁台付甕b類として定型化すると共に数量が急激にふえ、東西各地に伝播したとされている[7]。畿内に多数が搬入されているのもb類で、東大阪市域で出土した5例のうち鬼塚[8]・若江[9]の各1例がこれに相当し、また西岩田出土の3例のうち6世紀代に下る2例をのぞく1例もこのb類を模倣した河内産とされている[10]。今回出土した台付甕も器壁が薄いことやハケメの特徴・脚台部の形などから、これらと同様にb類に属するものであろう。なお、脚台部の出土は東大阪市内ではじめてであり、畿内においても数少ない例としてあげられる。

註

1）「西岩田遺跡－中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査概報－」　中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会　1971

2）「西岩田－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－」　(財)大阪文化財センター　1983

3）「瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報」　『(財)東大阪市文化財協会年報』1983年度　1984

4）梶山彦太郎・市原実　「続大阪平野発達史」　古文物学研究会　1985

5）発掘調査には山射祥司・木村和成・阪口徳一・田原義広・堀田博隆・廣瀬晴信・美並慶久・吉村達也、遺物整理には太出圭子・坂稲輝美・西尾珠美・柳瀬久美子の補助員諸氏が参加した。

6）井上和人　『「布留式」土器の再検討』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1982　P69～P70

7）大参義一　「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』　1968　P31

8）亭木隆裕　「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報1』　1975　P14～15

9）阿部嗣治　「若江遺跡出土のS字状口縁土器」『調査会ニュース』No.18　東大阪市遺跡保護調査会　1981　P10

10）註2）に同じ　P162

瓜生堂遺跡発掘調査概報

Ⅰ．調査に至る経過

昭和40年、府道中央環状線沿いの瓜生堂１～２丁目と若江西新町１～２丁目において工業用水道管埋設工事が行なわれ、掘り上げられた土のなかから弥生土器・石器・木器など多数がみつかり、続いて武器形青銅祭器である銅戈の刃先部分も発見された。また、昭和41年に第２寝屋川の開削工事が行なわれた際には、弥生時代の組み合わせ式木棺や土器棺が検出され、この地点の北西約300mでは弥生時代前期の遺物包含層が検出された。遺物が発見された各地点において工事の合間を縫って採集・調査が行なわれたところ、多量の土器・石器が出土すると共に通常の状態では残りにくいとされる木製品や骨角製品・動植物遺体などが良好な状態で遺存することが判明し、瓜生堂遺跡は弥生時代前期の遺跡であることが明らかとなった。これらの結果をうけて大阪府教育委員会の指導のもとに最初の発掘調査が第２寝屋川開削部分で実施され畿内第Ⅰ～第Ⅱ様式の上記遺物と柱穴・貝層などが検出された[1]。以上の調査・採集活動はそのご本格化する低湿性遺跡の重要性と発掘方法を体得するうえではたした役割は大きい。

その後、昭和45年より幹線下水道の築造工事に伴う発掘調査を行なうために瓜生堂遺跡調査会が組織され、以後９年間にわたってこの調査会を担当する多くの調査が実施された。

調査による主な成果としては、第１に方形周溝墓の構造とその性格を明らかにしたことがあげられる[2]。古墳発生以前にまわりを溝で囲む方形の墓が存在することは他遺跡の例によりすでに知られていたが、この種の墓に高さ1.5mもの盛土が存在することや盛土内に木棺・土壙・土器棺など複数の埋葬主体をもち、遺存する人骨より家族墓であることなどは瓜生堂例によってはじめて知られた。これらは弥生社会の研究に貴重な資料となるものである。

いま一つの成果は、地層ごとに採取された花粉化石によって瓜生堂遺跡周辺の古環境を復原しようとする試みが行なわれたことである。とりわけ弥生時代中期の遺物包含層を覆う厚い砂層の堆積について、弥生人の森林破壊と気候変化とによってひき起こされた大洪水によるものとする安田喜憲氏の仮説[3]は、方法的な問題を含めた異論も提示されてはいるが、低湿性遺跡の発掘調査に地質・動植物遺体・花粉などの自然科学研究者を加えることが不可欠であるとの常識を定着させるきっかけとなった点において評価される。

昭和53年から55年にかけて、中央環状線内の近畿自動車道建設予定地において実施された発掘調査は、大阪府教育委員会と(財)大阪文化財センターにより遺跡内を南北に縦断する恰好で行なわれた。瓜生堂遺跡では最も大規模なこの調査によって、方形周溝墓群の南北へのひろがり、掘立柱建物あるいは竪穴式住居などの集落の跡、完形の大阪湾型銅戈をはじめ多種多様な遺物などが検出されている[4]。今回、倉庫建設が計画された地点は、その東に近畿自動車道関連の調査地、西と南には下水道関連の調査地が隣接するという位置にあたるところから、調査前より、墓や建物の検出が確実視されていた地域である。発掘調査はこれまでの調査成果を踏ま

えて計画・立案され、ほぼ予測したとうりにすすめられたのである[69]。

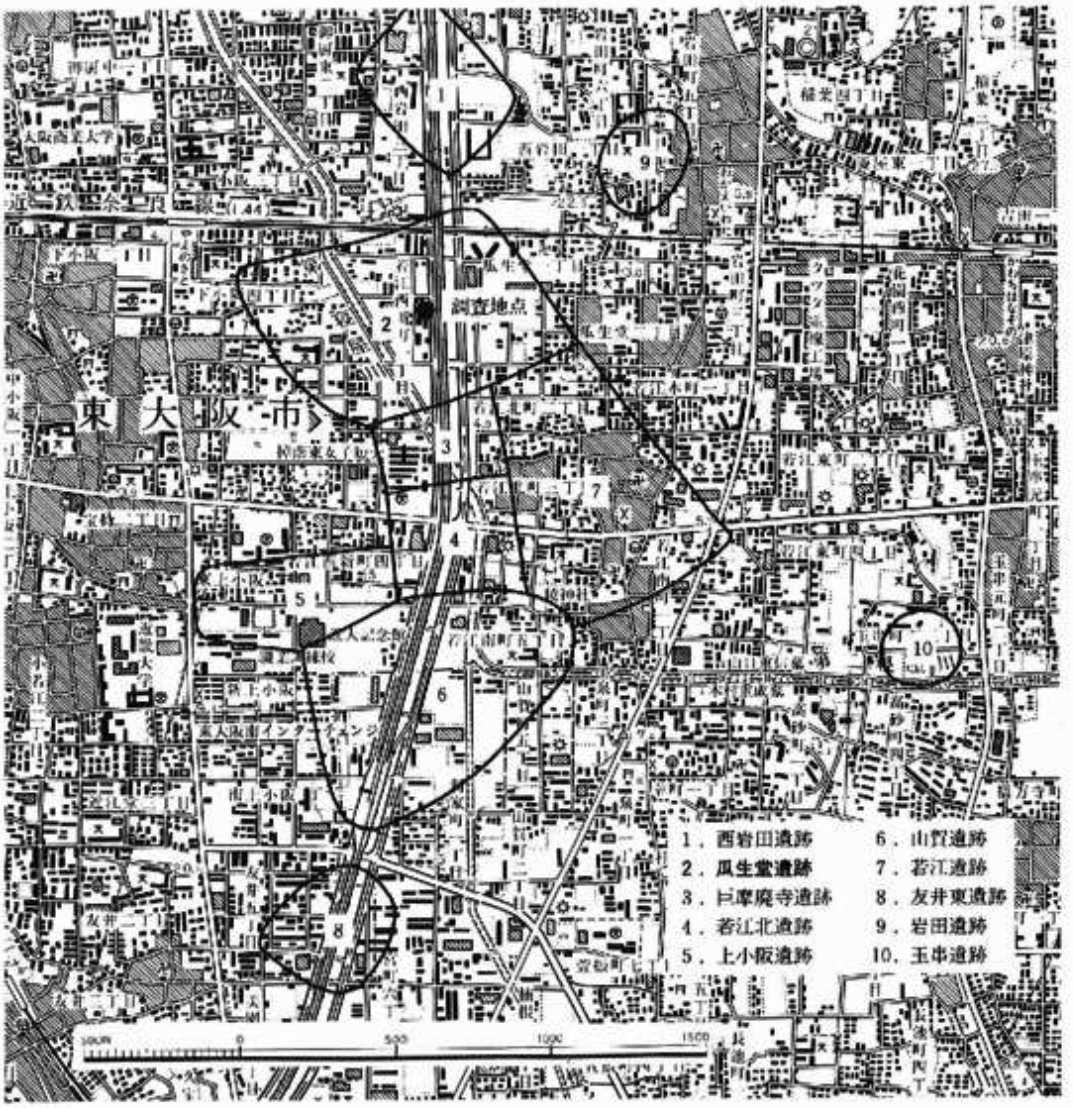
II. 位置と環境

瓜生堂遺跡は東大阪市瓜生堂～若江西新町に所在する。旧大和川の沖積平野上の位置するこの遺跡は弥生時代を中心として古墳時代や奈良時代の集落跡を含み、その範囲は東西約1.2km・南北約0.9kmを測ると推定されている。この遺跡の南に連接する巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡などでも同じく弥生時代の集落遺構が検出されているところから、これらの諸遺跡を含む一帯は弥生時代における畿内有数の人工稠密地域であったと推定される。

さて、これらの弥生時代集落が存在した今から約2000年前の河内には、現在の河内平野とは異なる古地形が形成されていた。すなわち、生駒山地と上町台地との間には、縄文時代より存在する浅海域が潟湖の形態で残り、これに南方から注ぎ込む旧大和川によって三角州がしだいに北へとひろがりつつあった。三角州の先端は瓜生堂遺跡の北方、現在の近鉄奈良線あたりで潟湖の汀線と接していたと推定されているが、この汀線は干潮時には2～3km北方まで退いて広い干潟が現れたと考えられている[60]。瓜生堂遺跡はこうした潟湖ちかくの三角州上で生活が営まれ、ヨシなどの生い茂る後背湿地をひらいて水田としたものと思われる。

瓜生堂遺跡が最も栄えた弥生時代中期の遺構はこれを覆う遺物包含層と共に地表下約1mに埋れている。遺跡を埋積する地層は砂層と粘土層との互層で、これは溢水により比較的短い期間に堆積した地層とみられる。弥生時代の集落は、この溢水堆積層を境に上層すなわち弥生時代後期になると瓜生堂遺跡内とその周辺に分散し、前代の集村から散村へとその形態が大きく変化している。この変化をひき起こした要因が中期末に発生した自然環境の激変すなわち大洪水[47]によるものかどうかは議論の分かれるところであるが、その後調査された巨摩廃寺遺跡や若江北遺跡において中期末～後期初めの遺物が多数検出された[48]結果、瓜生堂の集落解体後も周辺に人々が移り住みうる環境であったことが明らかとなった。

古墳時代になっても、ひき続き溢水による砂層と粘土層が堆積し、そのなかに2次的に堆積した土器が含まれていることから、小規模な集落は営まれ続けたようであるが、この地域の中心地は三角州の北進によって瓜生堂の北約500mに弥生後期以後出現した西岩田遺跡へと移動したとみられる。西岩田遺跡はその西側に隣接する意岐部遺跡と共に湖岸汀線の後退によって、弥生時代の瓜生堂遺跡と同じ地理的条件＝水上交通の利便性により発達したと考えられる。いっぽう、瓜生堂遺跡では5世紀末～6世紀中頃にかけて円筒埴輪や形象埴輪がところどころでまとまって出土すること[50]、近畿自動車道建設に伴う調査で巨摩廃寺遺跡や山賀遺跡から小型の方墳が検出されていること[51]などの事実が明らかになってきた。おそらく大阪市の長原古墳群[52]と同様の小型方墳を主とする平野部の群集墳が存在したのであろう。長原古墳群の場合、古墳は約200年後の奈良時代に水田開発によって墳丘を削平されたことが知られており、瓜生堂周辺でも同様のことが考えられる。また奈良時代には、掘立柱による建物群が遺跡内の西・南・東の各所において検出されており、『若』と墨書した土器片も出土したことから近くに若江郡衙が



第61図　遺跡分布図

存在するとの指摘[25]もある。

中世以後の瓜生堂については、南東約700mを中心とする若江遺跡の周辺部として水田地帯となり、江戸時代の大和川付替え後には綿作地帯へと変遷した。綿を栽培するために水田よりも0.5～1m高い畑＝掻き揚げ田が多数造成され、今日にもその痕跡が各所に残されている。掻き揚げ田の造成は水田部分を削平して集めた土を盛りあげるという、大規模な圃場整備であった。瓜生堂遺跡において古墳の痕跡がほとんど認められないことや奈良時代の建物跡が水田部分よりも畑地の下でよく遺存していること、などの点は掻き揚げ田造成の影響が大きいと思われる。

III. 調査の概要

東西約23m・南北約10mを測る調査地の四周に鋼矢板を打設し、地表下約1.8mまでの盛土を機械で取り除いたのち人力による発掘調査を実施した。昭和61年10月14日より同12月13日にかけて発掘を行い、その後出土遺物の整理作業を行なった。発掘の結果、地表下約5mまでに14枚の地層の重なりを確認し、各層ごとに遺構・遺物の有無、堆積状態などを精査した。検出された遺構については、国家座標系にもとずいて実測図を作成し、また出土遺物については調査地内に設置した5m方格の座標杭により明示された地区（調査地東南隅を起点として千鳥式にA～R地区と呼称）ごとに取り上げた。

1．層序

第1層：現在の水田耕土。層厚約15cm。

第2層：青灰色（5BG6/1）粘土層。層厚約20cm。

第3層：明褐色（7.5YR5/6）砂混り粘土層。下部は中粒砂～細粒砂とマンガンの集積を認める。層厚約20cm。奈良～平安時代の土器を少数包含。

第4層：灰白色（5Y7/1）～明黄褐色（10YR6/6）細粒砂～シルト層。層厚約30cm。5世紀末～6世紀初頭の須恵器を少数包含。

第5層：灰白色（2.5GY8/1～5Y7/1）細粒砂混じり中粒砂層。層厚は調査地の東側で約10cmと薄く、西側にむかってしだいに厚くなって約60cmとなる。

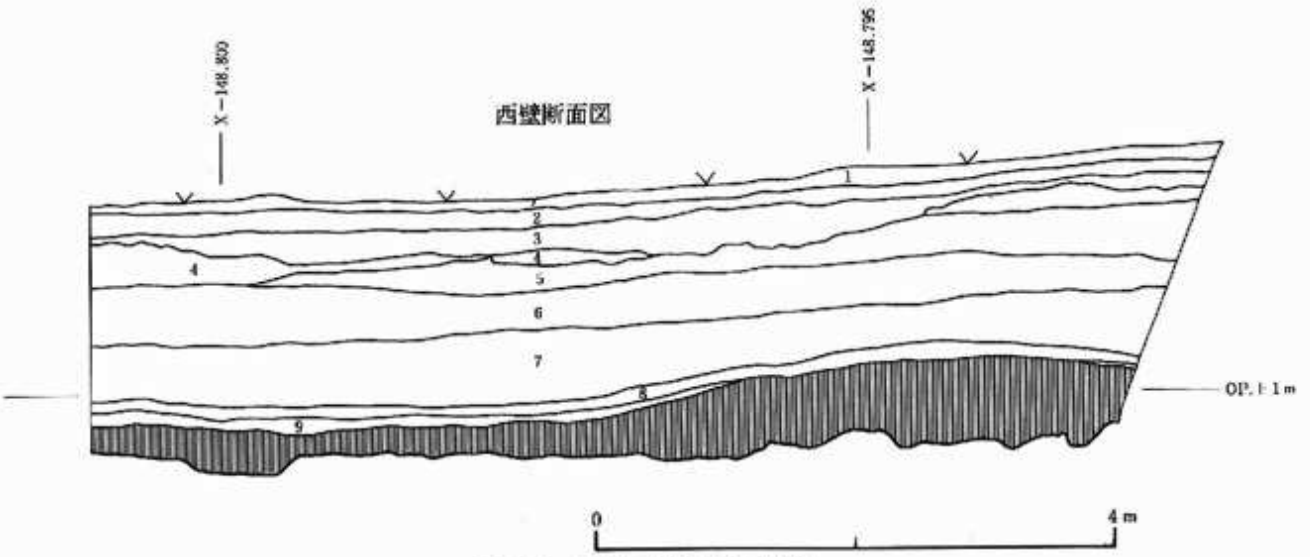
第6層：緑灰色（10G5/1）粘土層。下部はシルト質粘土層に漸移。最上部は暗青灰色（5PB4/1）粘土薄層と明青灰色（5PG7/1）粘土薄層との互層となる。層厚は第5層とは反対に西側で薄く約10cm。東へむかうにつれて厚くなり東端部で約50cmとなる。

第7層：オリーブ灰色（7.5GY5/1）シルト～細粒砂層。層内に灰白色（7.5Y8/2）粘土薄層と灰色（10Y6/1）粘土薄層とを挟む。層厚は調査地中央部で厚く約90cm、東と西ではこれより薄く40～50cmとなる。この層の堆積により、第8層以下の地層でみられる起伏はほぼ平坦となる。庄内式～布留式土器が2次的な堆積により少数出土。

第8層：オリーブ灰色（5GY5/1）粘土層。上部は植物遺体を含むシルト質粘土層に漸移。50cm前後の高低差をもつ古地形にしたがって層厚約10cmで調査地全域を覆っている。

第9層：暗オリーブ灰色（5GY3/1）～黒色（N2）粘土層。第8層と同様の堆積状態を示すが、植物遺体および微細な炭片を多数含むもの。層厚約10cm。

第10層：黒色（N2）～オリーブ黒色（5GY2/1）細粒砂～中粒砂混じり粘土層。土色は上部が黒く、下部はオリーブ色が強くなる。調査地の北部では、この層の中程に含まれている灰や微細な炭片の薄層を境として、第10層を上部（U）・下部（L）とに区分しうるが、灰や炭の薄層が検出されない地域では第10層を明確にU・L2層に細分することはできなかった。今回検出された遺構の一部には第10U層下面において検出され



第62図　調査地西壁断面図（1/60）

たものがある。大半を占める第10L層下面の遺構との時期差については、両者共に第Ⅳ様式土器を含むことから、その差は小さいと思われる。層厚はU・L両層合わせて40～50cmを測る。

第11層：上部は浅黄色（5Y7/3）中粒砂層。下部は明青灰色（5BG7/1）細粒砂～シルト層。調査地中央部における層厚約40cm。上面は遺構の構築と整地の繰り返しにより凹凸となる。

第11層以下の地層は弥生時代中期以前の堆積状態および遺物包含層の有無を確認するために、調査地中央部のトレンチ（幅2m・長さ4m）において検出した。いずれも無遺物である。

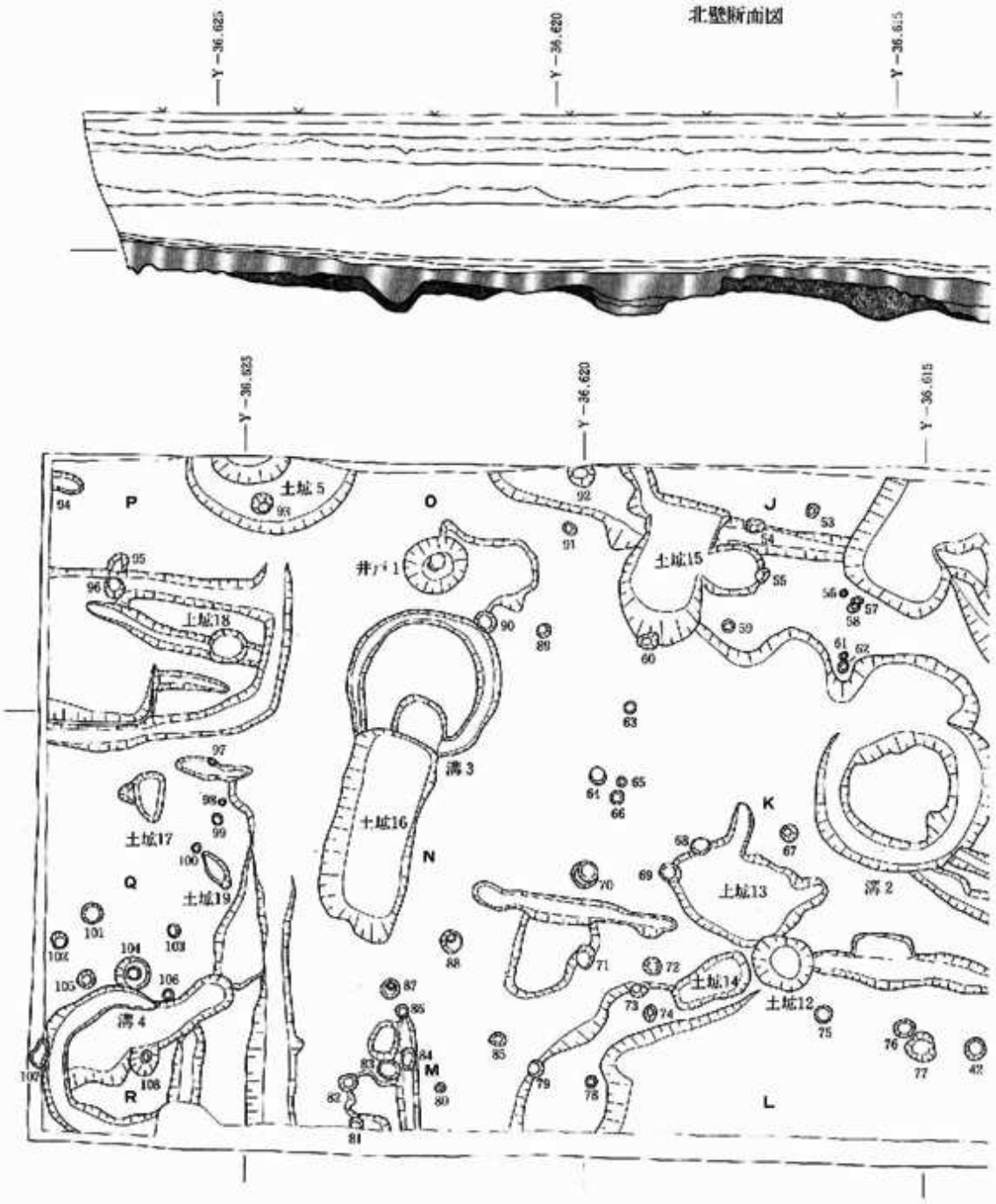
第12層：灰オリーブ（7.5Y5/2）シルト質粘土層。層厚約20cm。

第13層：上部は灰白色（7.5Y7/1）細粒砂層。下部は細粒砂薄層を挟む灰色（7.5Y5/1）シルト層。両方合わせて層厚40～60cm。

第14層：灰褐色（10YR4/1）粘土層。層内に黒褐色（10YR3/1）植物遺体混じり粘土薄層を挟む。層厚50cm以上。地表下約7mで涌水が激しくなり、以下の地層は確認できなかった。

2．遺構

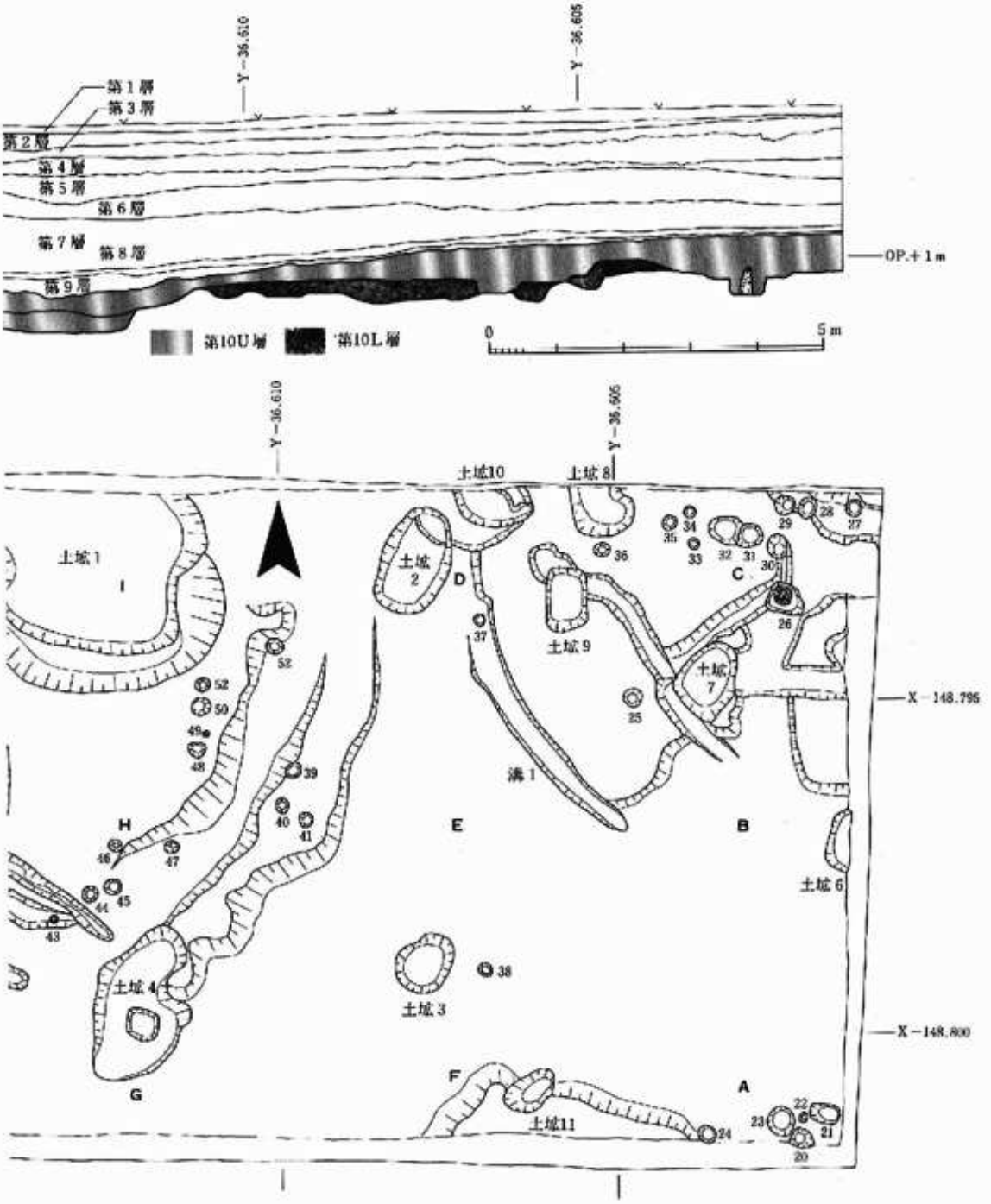
今回検出された遺構としては、掘立柱の柱根、柱穴状ピット、井戸、土坑、溝などがある。このうち一部のピット・土坑は第10U層下面で検出されたが、大半の遺構は遺構面が第10U層下面か第10L層下面か不明のまま第11層上面において検出されたものである。今回の調査地は掘立柱の柱根や井戸が存在するところから集落域に属することが知られるが、この集落は東の近畿自動車道予定地と西の下水道小阪ポンプ場とにおいて検出された2つの方形周溝墓群の間に挟まれた位置にある。



第63図　瓜生堂遺跡調査地平面図・北壁断面図（1/100）

掘立柱の柱根

柱穴内に遺存する柱根が2例検出された。1例はC地区の北壁内で検出された直径約20cm・残存長約50cmを測るもの。この柱根は柱の沈下を防ぐために、下部に隅丸方形を呈する礎板状の部分が削り出されている。礎板は原木から柱を削り出す際に、幹の太い部分を利用して造り出したとみられ、一辺約35cm・厚さ約25cmを測る。深さ約40cmの柱穴に据えられたこの柱根による建物のプランは不明であるが、おそらく掘立柱の平床あるいは高床の建物と推定される。瓜生堂遺跡の建物には礎板や根がらみを有する例がこれまでも知られていたが、いずれも別材



を組み合わせたものであり、一木からの削り出しによる礎板は今回がはじめてである。材は広葉樹。

他の1例はJ地区の北壁内で検出された直径約20cm・残存長約10cmを測るもの。この柱根には礎板や根がらみはなく、手斧で切断した状態のものが柱として使われている。上部はかなり腐朽するなど遺存状態は上記のものよりわるい。広葉樹を使用。

ピット

調査地の全域より直径15～50cmの円形あるいは隅丸方形のピットが検出された。その数88を

かぞえる。これらの多くは柱穴とみられるが、建物のプランを復元することはできなかった。ピットのなかには深さ10cm以下の浅いものが多数含まれていること、遺構とは考え難い段や凹みも多いことなどから、柱列が復元できない理由は人為的な整地により痕跡の失なわれた柱穴が多いためと考えられる。第4表にこれらの形状や計測値をまとめておく。

井戸

直径・深さ共に約90cmを測る素掘りの井戸がO地区北壁内で検出された。平面円形を呈するこの遺構は、形態と底より水差形土器が出土したことから井戸と判断したが、湧水がないことや水の汲み上げにより生じる壁面の崩落などが認められないことなどの点は、実際に井戸としてどの程度使用されたか疑問の残るところである。井戸内は第10U層と同様の黒色細粒砂～中粒砂混り粘土が充填されている。井戸の使用された時期は水差形土器の特徴より第Ⅳ様式の時代と考えられる。

土坑

形態の違う大小さまざまな土坑が検出された。土坑内出土遺物に破片の状態となった土器多数を含むことからゴミ捨場とみられるもの、底が湧水層に達することからもとは井戸であった可能性をもつものなどがあるが、土坑の多くは用途が不明である。ここでは用途の推定が可能なものについて記述し、その他は第4表で形態・計測値などをまとめて記述することとする。

土坑1　I地区で検出された大型の土坑。一部は調査地外にのびるために全体の形は明らかでないが、検出部分は東西および南北が約4mで深さ0.9mを測る隅丸方形を呈し、これに東西約1.5m・南北約2m・深さ0.7mを測る長方形の付属部分が西側に接続している。あるいは別々の土坑であるともみられるが、切り合い関係を認めることはできなかった。埋土はいずれも第10U層と同じである。出土遺物は隅丸方形部分に多く、とりわけ埋土の上部より第Ⅳ様式の大型器台2点のほか壺や台付鉢などがまとまって出土した。また、埋土下部からは完形の手網枠1点とモモなどの植物遺体が出土した。これらの遺物は土坑内に廃棄されたものと考えられ、土器類がいずれも台Ⅳ様式前半の型式とみられることから、一括して捨てられものにより短期間に土坑は埋れたと考えられる。ところで、この土坑の南肩部分において台付細頸壺が完全な状態で出土したが、これは廃棄物とは考え難いものであって、何らかの儀礼的意味をもつと考えたい。この土坑の底が砂層に達し、湧水も多いことを合わせ考えると、あるいは井戸であったものが壁面崩落などでこのような姿となったことも考えられる。

土坑2　南北約1.6m・東西約0.9m・深さ0.6mを測る隅丸方形の土坑でD地区北壁内において検出された。土坑内の北部には深さ0.3mのテラス部分がある。このテラス部と他の部分との境には横木がわたされ、遺物はこの横木より南から出土した。出土遺物はいずれも破片となった第Ⅳ様式土器で、これらは廃棄されたものと思われる。

土坑3　直径0.8m・深さ約0.3mを測る円形の土坑。E地区で検出。この土坑は浅いが、底の砂層より激しい涌水をみることから井戸であった可能性はある。土坑内の埋土は第10U層と同じで、そのなかから破片の状態となった第Ⅳ様式土器が少数出土した。

土坑4　南北約2.4m・東西約1.4m・深さ0.2mを測る不整形な楕円形の土坑。D～H地区で検出。土坑中央部の底には一辺0.4m・深さ0.1mの方形ピットがあって、その底は涌水層である砂層に達している。このピットのなかに遺物は含まれていなかったが、土坑内上部より第Ⅳ様式の壺上半部が出土した。

土坑5　検出部分は半円形を呈するが、半分は調査地外に続く。全体の形は径約2.5mの円形と推定される。土坑内は深さ0.1mの平坦なテラス部を縁にもち、中央部は円形と推定されるピットがさらに0.4mの深さで落ち込んでいる。この円形ピットの底は粘土層内にとどまるために、涌水は多くない。円形ピットを含む土坑内からは第Ⅳ様式土器の破片・木片・植物遺体などが出土した。なお、土坑のテラス部で柱穴状のピットが1個検出されたが、これは土坑掘削以前のものである。

溝

溝1　南東から北西にむかう弧状の溝をD～E地区で検出した。幅約40cm・深さ約15cm・現存長約5mを測るこの溝は、両端がしだいに浅くなっておわっているが、これは削平による消滅とみられ、もとの形は半円弧あるいは環溝であった可能性もある。この溝の用途は明らかでないが、環溝であれば円弧の内側で検出された掘立柱の柱根との関連たとえば建物の周囲を囲む区画溝や排水溝のようなものかもしれない。構内に水流による堆積層は認められず、第10U層と同様の土で埋れている。第Ⅳ様式土器が出土。

溝2～4　いずれも溝の外径部分の直径が2.5mほどの小環溝である。H～K地区で検出された溝2は、北側の外周部分を一部削平された幅約0.5m・深さ約0.15mを測るもので、この環溝で囲まれた内側は外側よりも約5cm低い。溝3・4も同様の遺構であって、溝3は幅約0.3m・深さ約0.2m・外径約2.3mを測り、溝4は幅約0.4m・深さ約0.4m・外径約2.3mを測る。これらの環溝は上部をいくらか削平されているとみられ、環溝の内側が小竪穴となっていた可能性をもつものであるが、その用途については全く不明である。

その他の溝　調査地内の各所より、上面を削平されて断片となった溝が多数検出された。全体の形状・用途などはいずれも不明である。これらの溝のなかで、O～P地区で検出された東西溝4条と南北溝1条とからなる遺構は、あたかも畑の畝と鋤溝の組み合わせを想起させる形態である。その用途を断定することは難しいが、可能性の一つとして集落内における畑の存在をここに考えておきたい。

第4表　土坑・ピット計測値一覧表

番号	種類	地区	形	平面の寸法m（現は現存値）	深さm	備考	番号	種類	地区	形	平面の寸法m（現は現存値）	深さm	備考
1	土坑	I	不定	5.5×現3.0	0.9	涌水・土器・木器	6	〃	B	—	0.9×現0.4	0.15	
2	〃	D	隅丸長方	1.6×0.9	0.6	土器	7	〃	C	楕円	1.2×0.9	0.15	
3	〃	E	円	径0.8	0.3	涌水	8	〃	D	不定	0.9×現0.8	0.2	
4	〃	G・H	不定	2.4×1.4	0.3	中央に方形ピット 涌水	9	〃	〃	長方	1.0×0.6	0.3	
5	〃	O・P	円？	2.5×現1.1	0.5	中央に円形ピット	10	〃	〃	不定	1.1×現0.6	0.25	

番号	種類	地区	形	平面の寸法m (現は現存値)	深さm	備考
11	〃	F	楕円	0.8×0.5	0.3	
12	〃	K	円	径0.8	0.3	第10U層下面で検出 炭・炭多量
13	〃	〃	不定	1.6×1.4	0.2	
14	〃	〃	楕円	1.2×0.6	0.2	
15	〃	J	不定	2.2×2.2	0.4	
16	〃	N	長方	3.1×1.3	0.2	
17	〃	Q	不定	0.7×0.7	0.15	
18	〃	P	円	径0.5	0.25	
19	〃	Q	楕円	0.6×0.3	0.15	
20	柱穴状ピット	A	円	径0.35	0.33	
21	〃	〃	長方	0.46×0.28	0.21	
22	〃	〃	円	径0.15	0.12	
23	〃	〃	円	径0.44	0.22	
24	〃	〃	円	径0.25	0.11	
25	〃	C	円	径0.28	0.15	
26	〃	〃	方	0.56×0.46	0.45	柱根残存
27	〃	〃	円	径0.25	0.14	
28	〃	〃	〃	径0.31	0.33	
29	〃	〃	〃	径0.29	0.25	
30	〃	〃	〃	径0.35	0.4	
31	〃	〃	〃	径0.36	0.26	
32	〃	〃	〃	径0.45	0.28	
33	〃	〃	〃	径0.16	0.1	
34	〃	〃	〃	径0.18	0.08	
35	〃	〃	〃	径0.2	0.25	
36	〃	D	〃	径0.2	0.13	
37	〃	〃	〃	径0.17	0.12	
38	〃	E	〃	径0.2	0.15	
39	〃	〃	〃	径0.22	0.21	
40	〃	〃	〃	径0.23	0.1	
41	〃	〃	〃	径0.2	0.15	
42	〃	G	〃	径0.32	0.3	第10U層下面で検出
43	〃	H	〃	径0.1	0.08	
44	〃	〃	〃	径0.24	0.14	
45	〃	〃	〃	径0.24	0.26	
46	〃	〃	〃	径0.19	0.12	
47	〃	〃	〃	径0.2	0.13	
48	〃	〃	〃	径0.24	0.13	
49	〃	〃	〃	径0.09	0.08	
50	〃	I	〃	径0.28	0.17	
51	〃	〃	〃	径0.21	0.07	
52	〃	〃	〃	径0.23	0.06	
53	〃	J	方	0.18×0.17	0.11	
54	〃	〃	〃	0.26×0.21	0.1	柱根残存
55	〃	〃	円	径0.22	0.12	
56	〃	〃	〃	径0.08	0.15	
57	〃	〃	〃	径0.16	0.04	
58	〃	〃	〃	径0.17	0.1	
59	〃	〃	〃	径0.18	0.16	
60	柱穴状ピット	〃	〃	径0.3	0.17	
61	〃	〃	〃	径0.12	0.11	
62	〃	〃	〃	径0.17	0.12	
63	〃	〃	〃	径0.18	0.06	
64	〃	K	〃	径0.26	0.19	
65	〃	〃	〃	径0.14	0.1	
66	〃	〃	〃	径0.2	0.16	
67	〃	〃	〃	径0.25	0.25	径0.11mの柱痕
68	〃	〃	〃	径0.29	0.22	
69	〃	〃	〃	径0.3	0.21	
70	〃	〃	〃	径0.39	0.22	径0.28mの柱痕
71	〃	〃	〃	径0.33	0.28	
72	〃	〃	〃	径0.25	0.13	
73	〃	〃	〃	径0.24	0.16	
74	〃	〃	〃	径0.24	0.08	
75	〃	〃	〃	径0.24	0.17	
76	〃	〃	〃	径0.28	0.1	
77	〃	〃	〃	径0.44	0.07	
78	〃	L	〃	径0.17	0.17	
79	〃	M	〃	径0.26	0.2	径0.17mの柱痕
80	〃	〃	〃	径0.15	0.11	
81	〃	〃	〃	径0.18	0.11	
82	〃	〃	〃	径0.26	0.2	
83	〃	〃	〃	径0.32	0.25	
84	〃	〃	〃	径0.32	0.18	
85	〃	〃	〃	径0.26	0.2	
86	〃	N	〃	径0.19	0.22	
87	〃	〃	〃	径0.27	0.21	
88	〃	〃	〃	径0.34	0.18	径0.14mの柱痕
89	〃	O	〃	径0.2	0.21	
90	〃	〃	〃	径0.34	0.26	
91	〃	〃	〃	径0.2	0.12	
92	〃	〃	〃	径0.4	0.08	
93	〃	〃	〃	径0.3	0.24	
94	〃	P	楕円	現0.46×0.25	0.29	
95	〃	〃	〃	現0.3×0.26	0.12	
96	〃	〃	円	径0.31	0.23	
97	〃	Q	〃	径0.11	0.09	
98	〃	〃	〃	径0.1	0.06	
99	〃	〃	〃	径0.18	0.11	
100	〃	〃	〃	径0.13	0.09	
101	〃	〃	〃	径0.31	0.24	
102	〃	〃	〃	径0.27	0.2	
103	〃	〃	〃	径0.19	0.25	
104	〃	〃	〃	径0.5	0.36	径0.19mの柱痕
105	〃	〃	〃	径0.26	0.12	
106	〃	〃	〃	径0.16	0.14	
107	〃	R	不定	0.42×0.26	0.37	
108	〃	〃	楕円	現0.58×0.42	0.35	

3．出土遺物

第10層下面の遺構内および遺物包含層である第10層より弥生時代中期の土器が多量に出土し、多数の石器と少数の木器も共伴した。これらの遺物は、土器の特徴より中期後半に属するとみられる。とくに遺構内出土土器の多くは第Ⅳ様式に属するとみられ、櫛描簾状文がこの時期まで残る中河内地方の地域色を示すものである。また、土器の胎土においては、角閃石を多量に含むいわゆる生駒西麓産と石英・長石を多量に含む灰白色の非河内産とは容易に識別できるが、他に石英・長石を多数含むとともに少数ながら角閃石・雲母を含むものがあって、在地産か搬入品か容易に識別し難いものがある。そこで観察結果を記述するにあたっては、生駒西麓産・非河内産を除く上記の特徴をもつ胎土を非生駒西麓産として扱うこととする。なお、文中の土器でとくに、記述のないものの胎土は生駒西麓産である。

遺構内出土土器（第4～7図）

井戸1、土坑1・2・7・13、溝2などの遺構より実測可能な土器が出土した。出土量においては土坑1が多量でかつ完形に復元できる良好な資料を含んでいる。その他の遺構出土土器はいずれも少数であるが、なかには井戸底部より水差形土器完形品だけが1点出土した遺構もある。

土坑1出土土器（第4～6図）　広口壺・台付細頸壺・水差・台付鉢・甕・器台などの器種がある。

広口壺は漏斗状の口頸部を有し、口縁部端を下方に拡張する有文の壺2～4・8、直立する頸部より外折する口縁部を有する無文の壺1・2、受口状口縁をもつ壺5などがみられる。3・4は口縁部内面に波状文、頸部に凹線文、胴部に波状文と直線文を施文する点で共通する。口縁端部に3は波状文、4は凹線文を施し、4の口縁端部はヨコナデによって内面に肥厚する。3は非生駒西麓産、4は非河内産である。8は3・4と同様の器形であるが、頸～胴部に簾状文を施すという相違点をもつ。口縁端部と口縁内面に波状文、頸～胴部に簾状文帯を重ね、その下に波状文を施す文様構成は特異なもの。簾状文はプレス間隔が長い退化形態であって、最下部の簾状文はほとんど直線文化している。文様の組合せに波状文を加える点も、明らかに簾状文本来の文様構成が崩れた結果と考えられる。胴部内外面に目の細かいタテハケメが行なわれ、ヘラミガキは認められない。胎土は生駒西麓産。1・2は口縁端部が上方あるいは上下に肥厚し、胴部から頸部の外面に目の粗いタテハケメを行なうもので、口頸部に煤が付着している。灰白色を呈する非河内産。5は壺4、大型器台13・14などとともに土坑上部で押潰された状態で出土した。口頸部はこれらより離れて土坑の外から出土した。おそらく大型器台の上に据られていたものが転倒した際に口頸部と胴部とか離れたと考えられる。この壺の口縁部外面に凹線文、胴部と頸部の境にはヘラ刻目を施した貼付凸帯を有する。胴部外面に左上りのタタキメ（2.5本/cm）＋タテヘラミガキ、胴～頸部内面に斜め方向のハケメ（8本/cm）を認める。にぶい黄橙色を呈し、胎土に長石・石英を多量に含む。

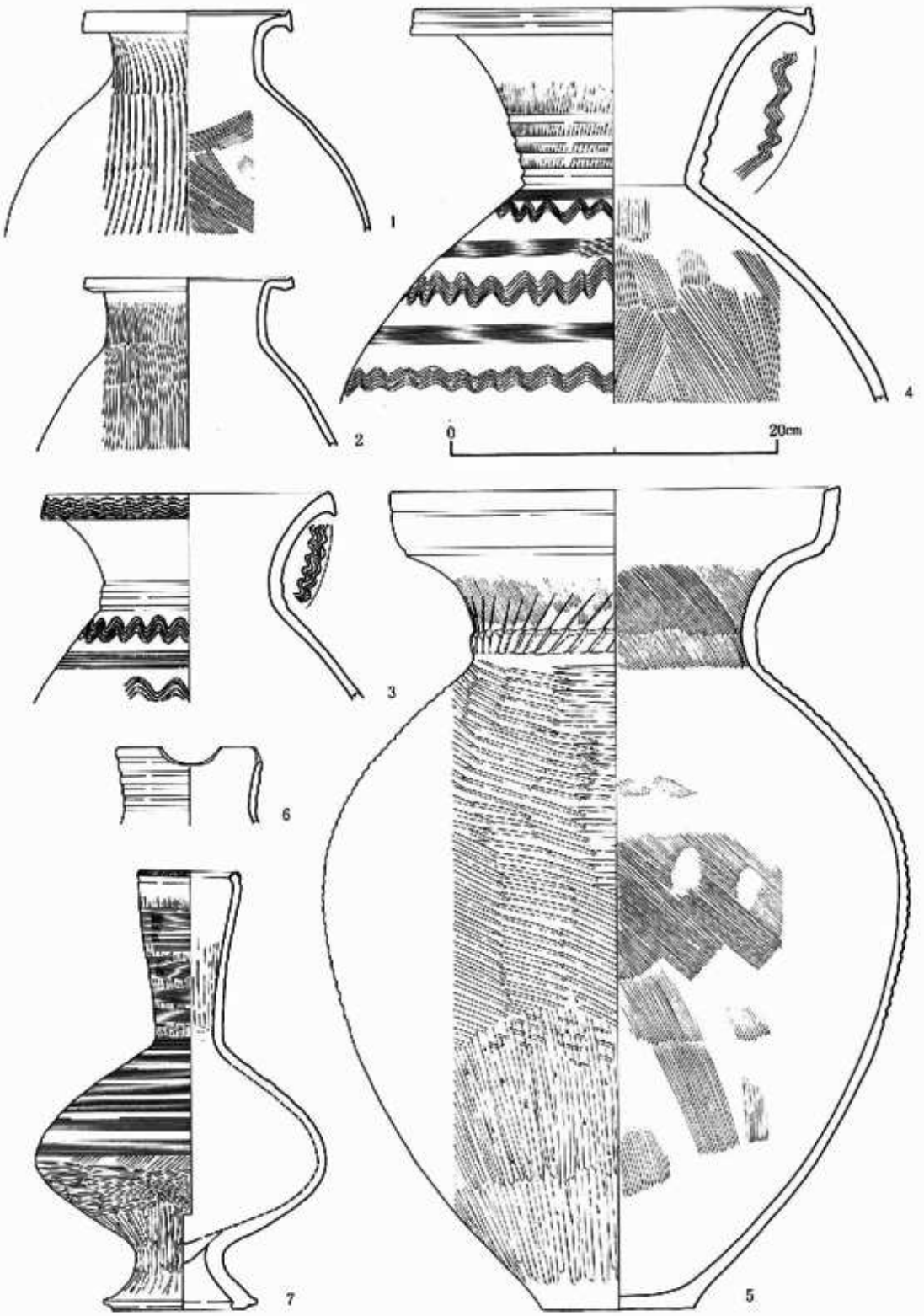
台付細頸壺7は完形品で土坑南肩部より出土した。細長い口頸部、腰の張る胴部に「ハ」の字形の低い脚台部が付く。口縁端部はやや内傾し、外面に刻目文と凹線文を施す。頸～胴部はタテハケメの上に12条の直線文を施し、胴下半～脚台はハケメの上にヘラケズリ＋ヘラミガキを行なう。胴～脚台部は連続成形され、内面に円板を充塡している。浅黄橙色を呈し、胎土に長石・石英を多量に含む。

水差6は口頸部に凹線文を多数施すもの。口縁端部の一部を弧状に切取る特徴をもつ。灰白色を呈する胎土は非生駒西麓産。

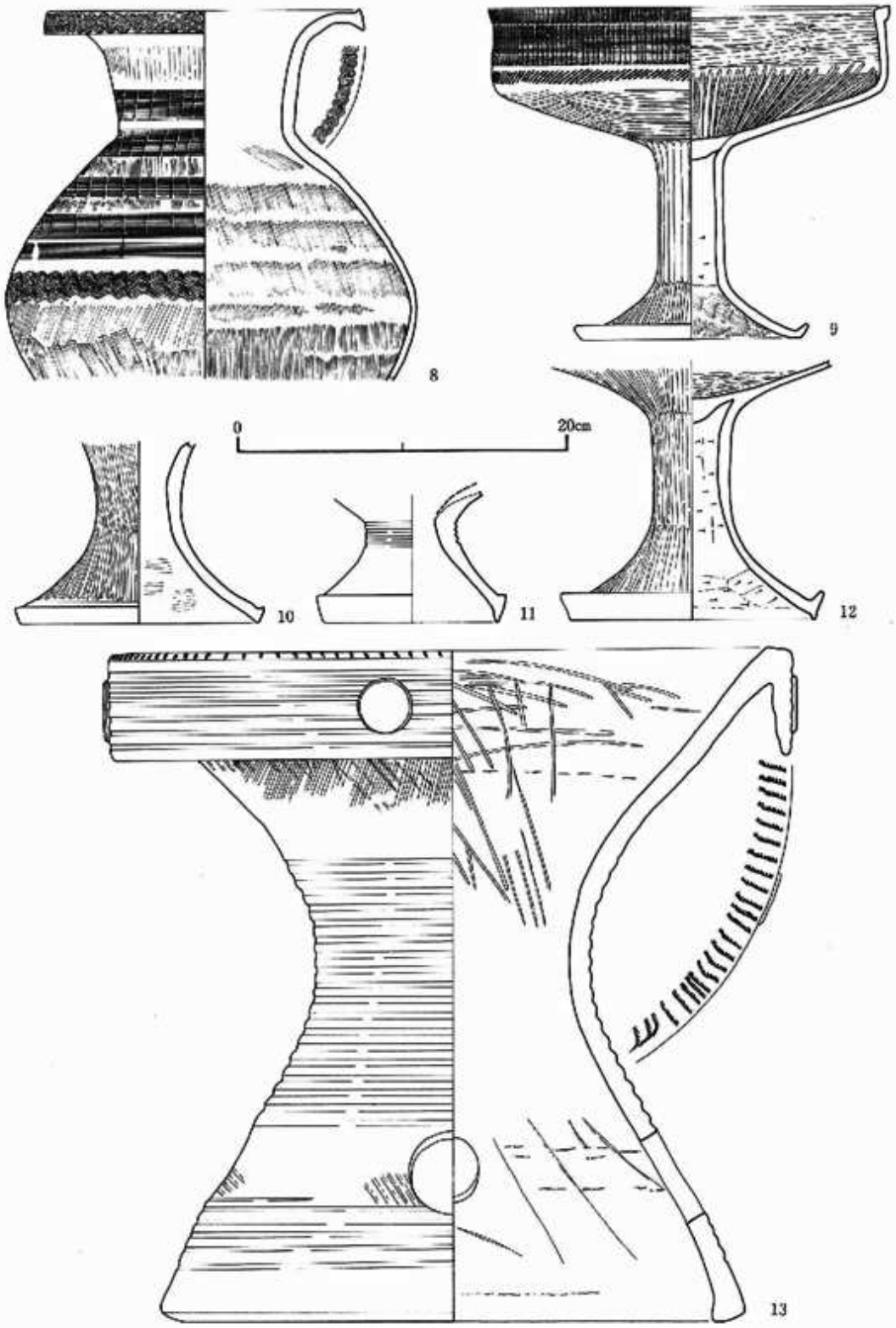
台付鉢9は簾状文を施す鉢に高い脚部が付くもの。鉢部は段状口線をもち、腰の張る形態。口縁～体部にブレス間隔の短い簾状文を3帯施す。3帯のうち上2帯は幅の広い原体（2.4cm）を用い、最下段は列点状に斜行する簾状文である。外面下半と内面上半にヨコヘラミガキ、内面下半にタテハケメののち、放射状ヘラミガキを行なう。外面下半は弧状のヘラミガキを一本ずつ丁寧に施したもの、内面下半は暗文状のヘラミガキである。脚部は中空の長い脚柱部と低い張り出す裾部よりなり、外面ヘラミガキ、脚柱内面ヨコヘラケズリ、裾部内面ナナメハケメを行なう。鉢部と脚柱部の境には円板充塡が認められる。脚部11は「ハ」の字形の低脚で、脚上縁に櫛描直線文を施すもので、器形より台付鉢と判断される。灰色を呈し、胎土に長石・石英が多量に含まれている。脚内面に円板充塡の剥離痕が認められる。この他の脚部10・12については台付鉢が高杯かのいずれかとみられる。

甕は「く」の字形に外反したのち端部がそのまま面をもっておわるもの15と、端部をつまみ上げるようにヨコナデして上端が肥厚するもの16・17とがある。内外面ハケメ調整によるとみられるが、15は外面風化のため不明。16・17は外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。15内面は目の粗いタテハケメ。16・17のハケメは内外で違う。

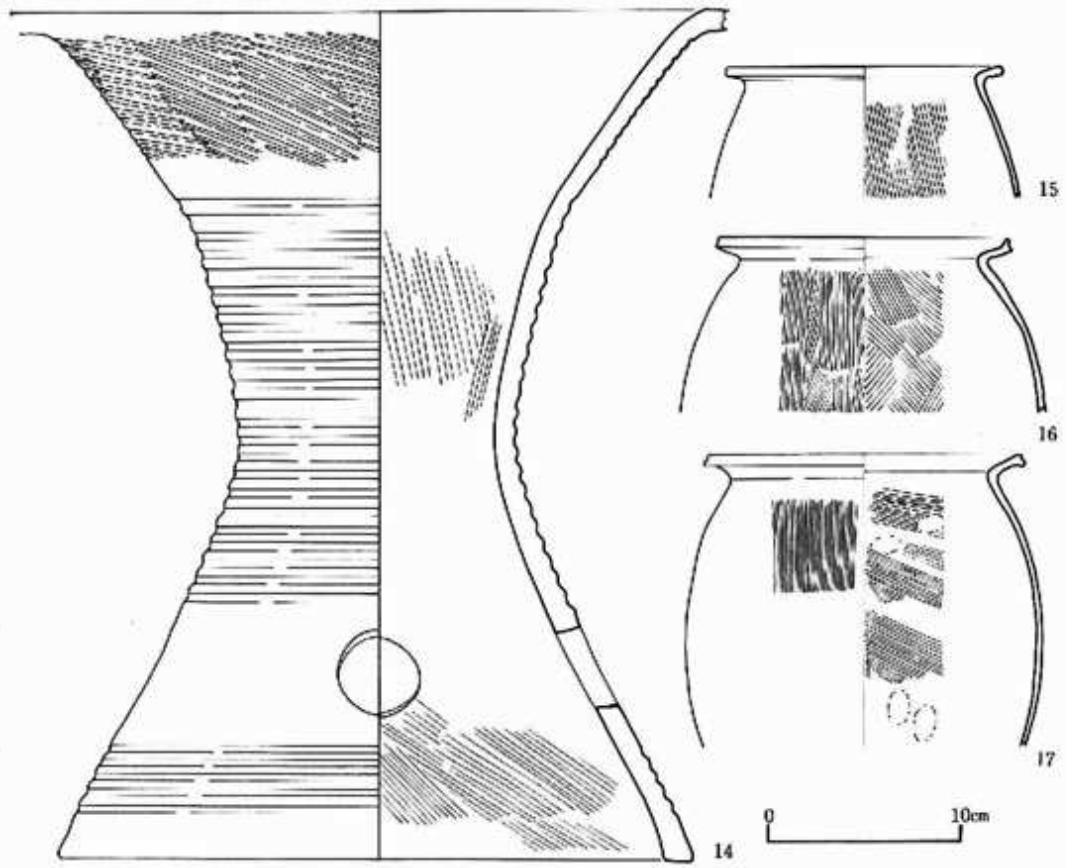
器台13・14は上下にゆるやかにひろがり、器体中位がくびれる大型器台。13は器高40.9cm・口径部41.6cmを測る。口縁端部を下方に大きく拡張して多条の凹線文を施し、その上に円形浮文を貼付けるとともに口縁部内面には櫛状工具による刺突列点文をめぐらせている。体部はくびれ部を中心として広い範囲に凹線文を施し、内弯しつつ裾部にいたる。体部下半には4方向に円形の透し穴が穿たれ、裾部にも凹線文が施されている。凹線文の施されていない体部外面には左上りのタタキメが認められ、その上をタテハケメにより調整している。内面は主としてナデ調整により平滑にされ、部分的にあらいヘラミガキも認められる。灰白色を呈す。胎土は非生駒西麓産。14は口縁の拡張部分を欠損するが13と同様の大型器台である。器高43.8cm・裾径32.8cmを測り、13よりも丈高の形態を呈する。体部にはくびれ部を中心とする広い範囲に凹線文が施され、円形透穴をはさんで裾部にも施文されている。体部上位に左上りのタタキメ（2.5本/cm）が明瞭に残る。内面に目の粗いナナメハケメ（2～3本/cm）がみられる。この器台のタタキメ及び胎土は広口壺5と類似する。13と14は土坑1上部より広口壺4・5と一括出土したところから、これらはセットとして使用されてものと考えられ、胎土が類似する広口壺4と器台13、胎土およびタタキメが類似する広口壺5と器台14の組合せをいちおう推定して



第64図　土坑1出土土器1（1/4）



第65図　十坑1出土土器2（1/4）



第66図　土坑1出土土器3（1/4）

おきたい。

井戸1・土坑2・7・13・溝3出土土器（第67図）　井戸1底部より出土した水差1は器体中位に最大径を有する球形の胴部と直立する短い口頸部よりなる完形品。肩部に横型把手が付き、把手に面する口縁端部には弧状の刻込みをもつ。口頸部全体に凹線文を施すが、胴部は無文。胴上半部に水平方向のタタキメ＋タテハケメ、下半部はその上にヨコヘラミガキを施す。内面は胴下半部にナナメハケメ、その他はナデ調整。胴下半部外面に煤が付着し、煮沸されたことが知られる。灰白色を呈する胎土は非生駒西麓産。井戸1からは他に、受口状口縁部に凹線文、胴部との境に貼付凸帯文を有する広口壺19と無文の広口壺20とが埋土内より出土した。

甕28・鉢29は土坑2より出土した。甕28は口縁部が短く外反し、最大径が器体中位にある。器厚が薄く、外面ヘラミガキ、内面ナデ仕上を基本として調整する。鉢29は体部から口縁部に内弯しつつ漸移し、口縁端部は内面に肥厚する。口縁～体部外面に凹線文を施す。体部下半をタテヘラミガキ、内面をヨコハケメにより調整する。

水差21は土坑7より出土した。腰の張る重心の低い胴部より短い口頸部に漸移する形態。横型把手が半環状に付き、口縁端部には弧状の刻込みをみる。口縁～腰部に合わせて11帯の簾状文を施し、口縁の内と外にそれぞれ刻目文を施している。口頸部の4帯の簾状文は刺突列点状

に左回りに斜行し、胴部の7帯は右回りに丁寧に行なわれている。いずれも文様帯間にヘラミガキを施す。内面は胴部ナナメハケメ、口頸部ナデ調整による。全体に器厚2～3㎜の薄い土器である。

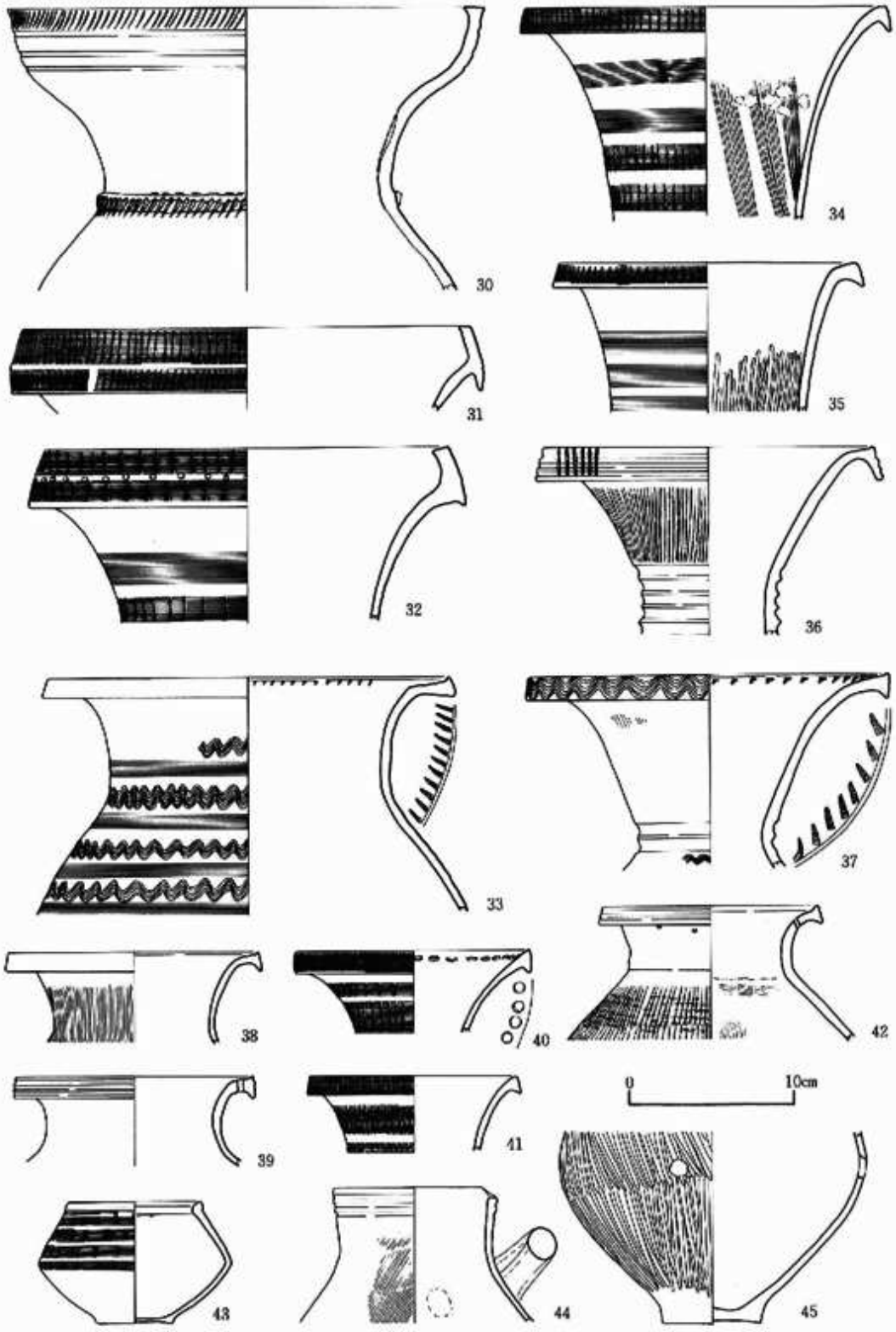
甕26・27・台付鉢25は土坑13より出土した。甕25は口縁端部がヨコナデによって上方に肥厚し、最大径が器体中位にある。胴部外面はタテハケメ＋ヘラケズリ、内面はタテハケメを行なう。甕27は「く」の字に外反する口縁部。胴部外面はタテヘラミガキ、内面はナデを主体として一部ヨコヘラミガキを行なう。台付鉢25は短く立上る口縁部に列点状の斜行簾状文と列点文を施す。外面調整はタテヘラミガキ＋部分的なヨコヘラミガキ、内面は体部にタテヘラミガキを行なう。

広口壺24・把手付台付鉢23・高杯脚部22は溝3で囲まれた落込み内より出土した。広口壺24は受口状口縁を有し、凹線文を口縁端部ちかくに1条、頸部との境に2条施す。内外面ともに目の粗いヨコあるいはナナメハケメを行なう。把手付台付鉢23は「ハ」の字形の低脚台の上に把付コップ形の体部が付くものである。把手部は剝離痕のみが残る。口縁～体上部と脚台裾部に凹線文を施す。体部と脚台部との境に円板充填を見る。外面全体にヘラミガキ、内面はナデにより調整する。

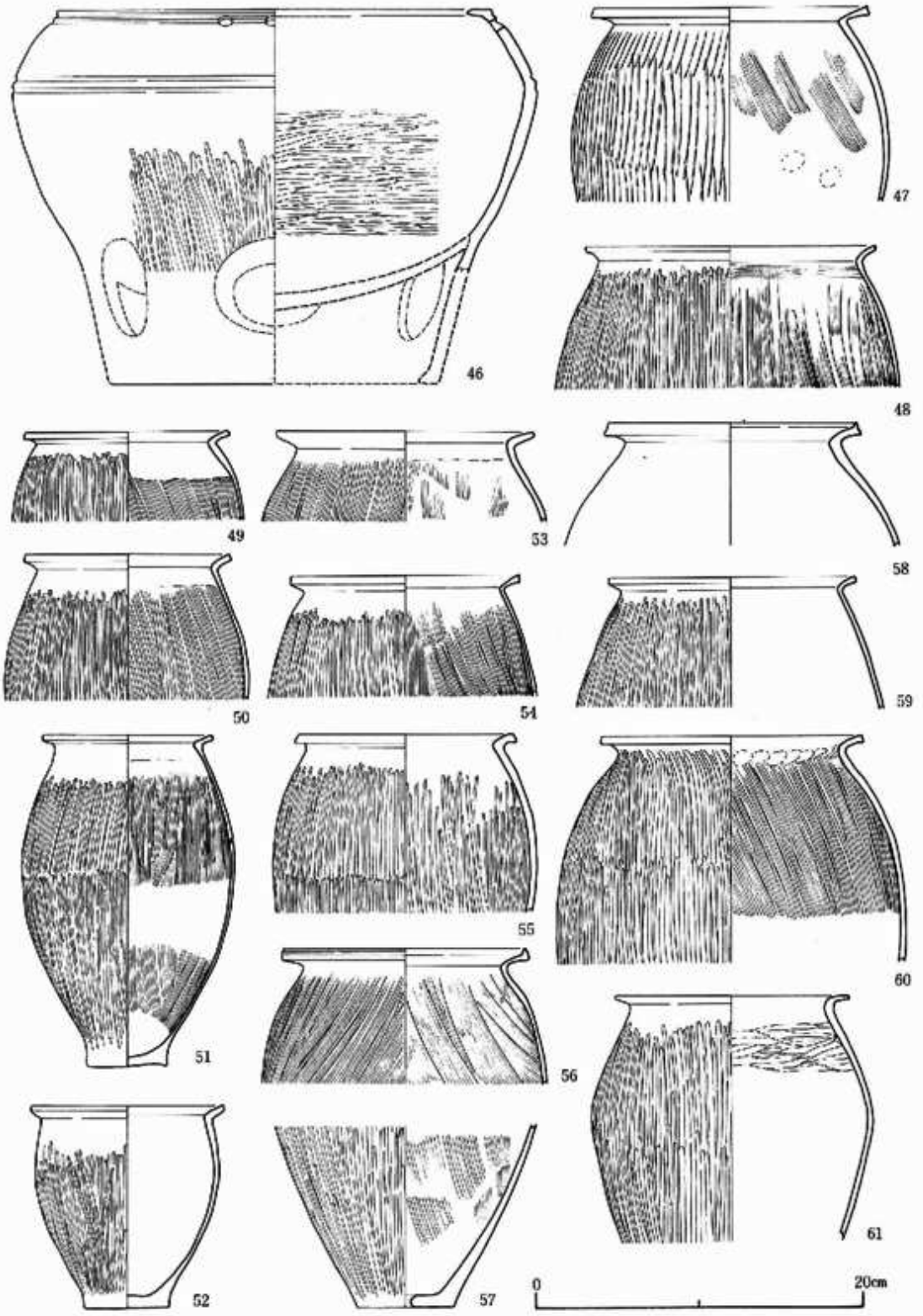
遺物包含層（第10層）出土土器

広口壺・無頸壺・台付無頸壺・水差・甕・高杯・台付鉢・鉢などの器種が認められる。広口壺には漏斗状の口頸部を有し、口縁端部を拡張する形態であって、文様として簾状文を主に用いるA類31・32・34・35・40・41、漏斗状の口頸部と下方に拡張する口縁端部を有し、細くくびれた頸部に凹線文を施すB類36・37、受口状口縁を有し、頸部と胴部の境に刻目凸帯を貼付けるC類30、直立する頸部より外反する口縁部を有し、上下に肥厚する口縁端部は無文かあるいは凹線文の施文をみるD類38・39・42、直立する頸部より外折する口縁部を有し、口縁部内面に刺突列点文、頸～胴部に直線文と波状文を交互に施すE類33などがある。このうち広口壺A類は口縁端部の形状により、端部を下方にのみ拡張するAa類と端部を上下に拡張するAb類とに分けられる。広口壺Aa類には口縁部内面に円形浮文を貼付けたものもみられる40・口頸部の文様は簾状文を重ねるもの40・41と直線文と簾状文を組合せるもの34・35とがある。広口壺Ab類には口縁端部に2帯の簾状文をもつ。文様帯間に棒状具による刺突列点文をもつものもある32。頸部には直線文と簾状文の組合せをみる。広口壺B類はいずれも灰白色を呈する非河内産上器で、頸部の凹線文に加えて口縁端部にも凹線をもつもの36と口縁端部に波状文を施すもの37とがある。口縁部内面に刺突列点文を施すことも特徴の一つにあげられる。36は口縁端部の凹線文と直交して部分的にヘラ沈線帯を重ねているが、これはこの種の広口壺にしばしば認められる棒状浮文を簡略化したものである。広口壺C類属する30は口縁部にヘラ斜線文と凹線文を施す。胎土は角閃石を多量に含む生駒西麓産。広口壺D類は外面のススの付着が認められる。口縁端部に凹線文を施すものは端部が上下に肥厚し、口縁部に紐綴じ孔が穿たれている39・42。煮沸に使われたこの種の壺の調整はハケメを基本とするが、成形の際に左上りの

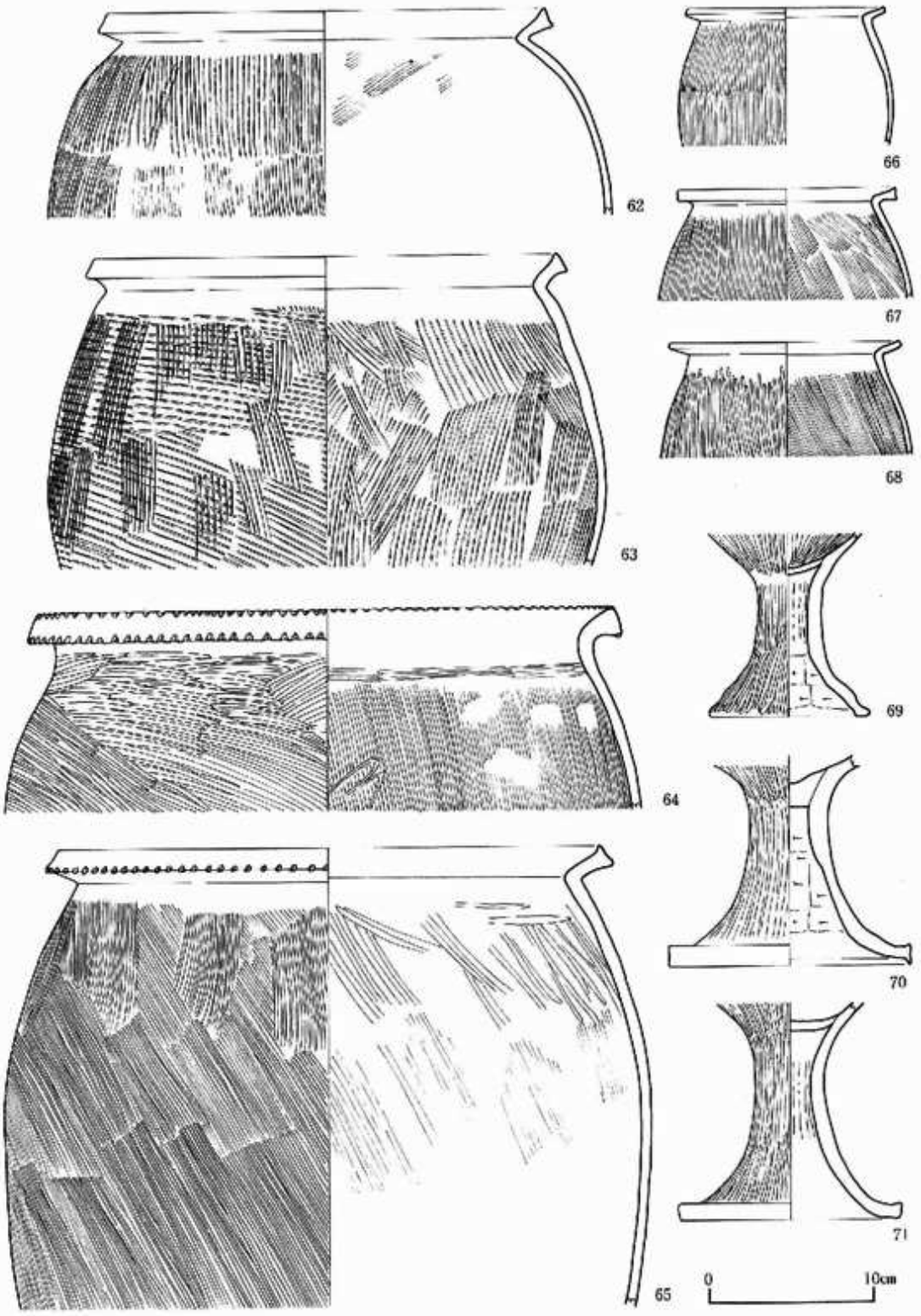
第67図　遺構内出土土器4（1/4）



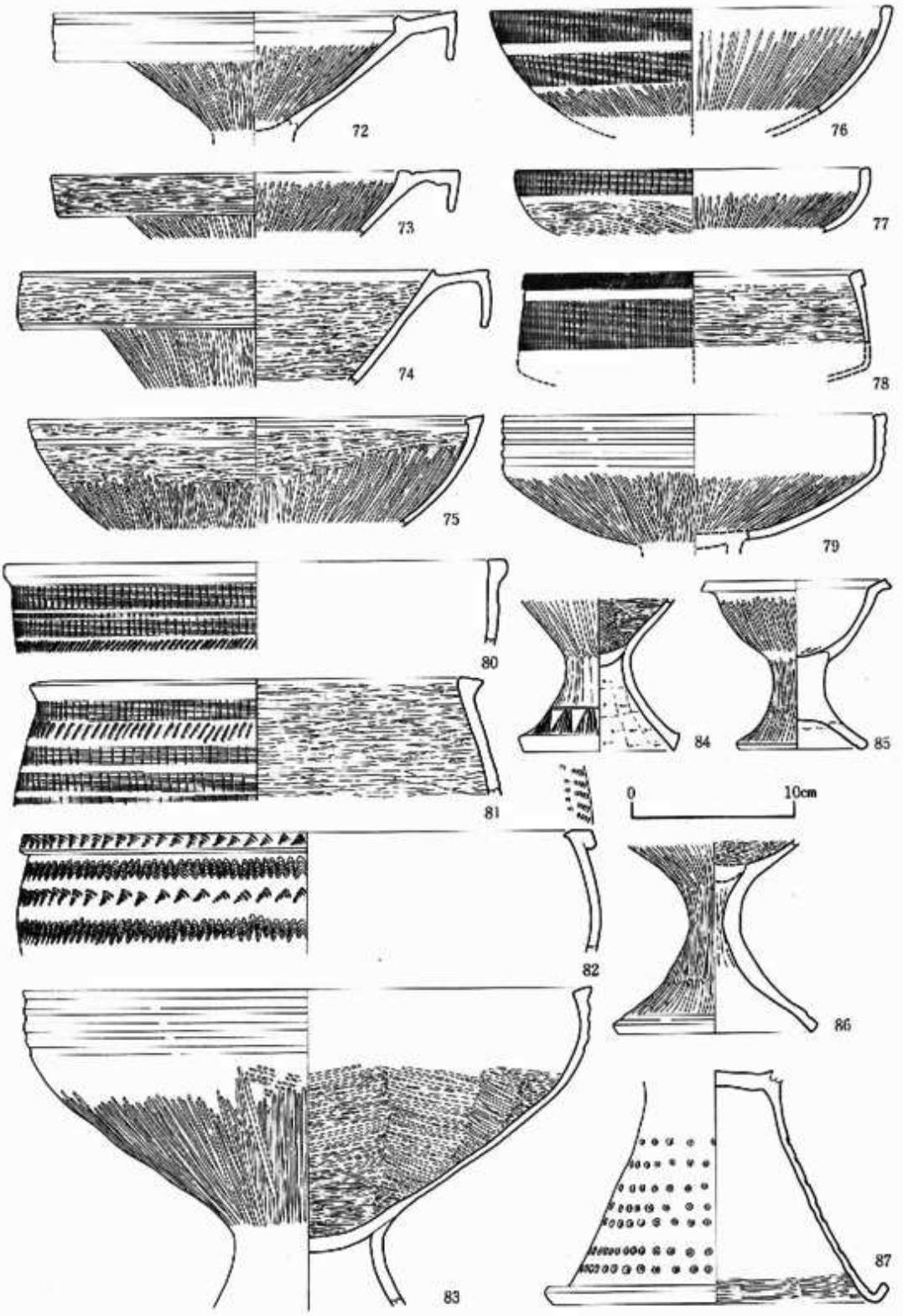
第68図　遺物包含層（第10層）出土土器1（1/4）



第69図　遺物包含層出土土器2 (1/4)



第70図　遺物包含層（第10層）出土土器３（1/4）



第71図　遺物包含層出土土器4（1/4）

タタキメを行なうものもある。42の胎土は灰白色を呈する非河内産。広口壺E類33は凹線文を認めないが、口縁部内面に刺突列点文、頸～胴部に波状文と直線文を交互に施す特徴は広口壺B類と共通する。胎土も灰白色を呈する非河内産である。

無頸壺43は器高7.4cm・最大径11.7cmの小型品。段状口縁を有し、体部上半にプレス間隔の比較的長い簾状文を施す。口縁下に蓋を紐綴じするための小孔が穿たれている。淡黄色を呈し、非生駒西麓産の胎土。

水差44は断面円形の横型把手を有し、口縁部に3条の凹線文を施す。43と同様の非生駒西麓の胎土。

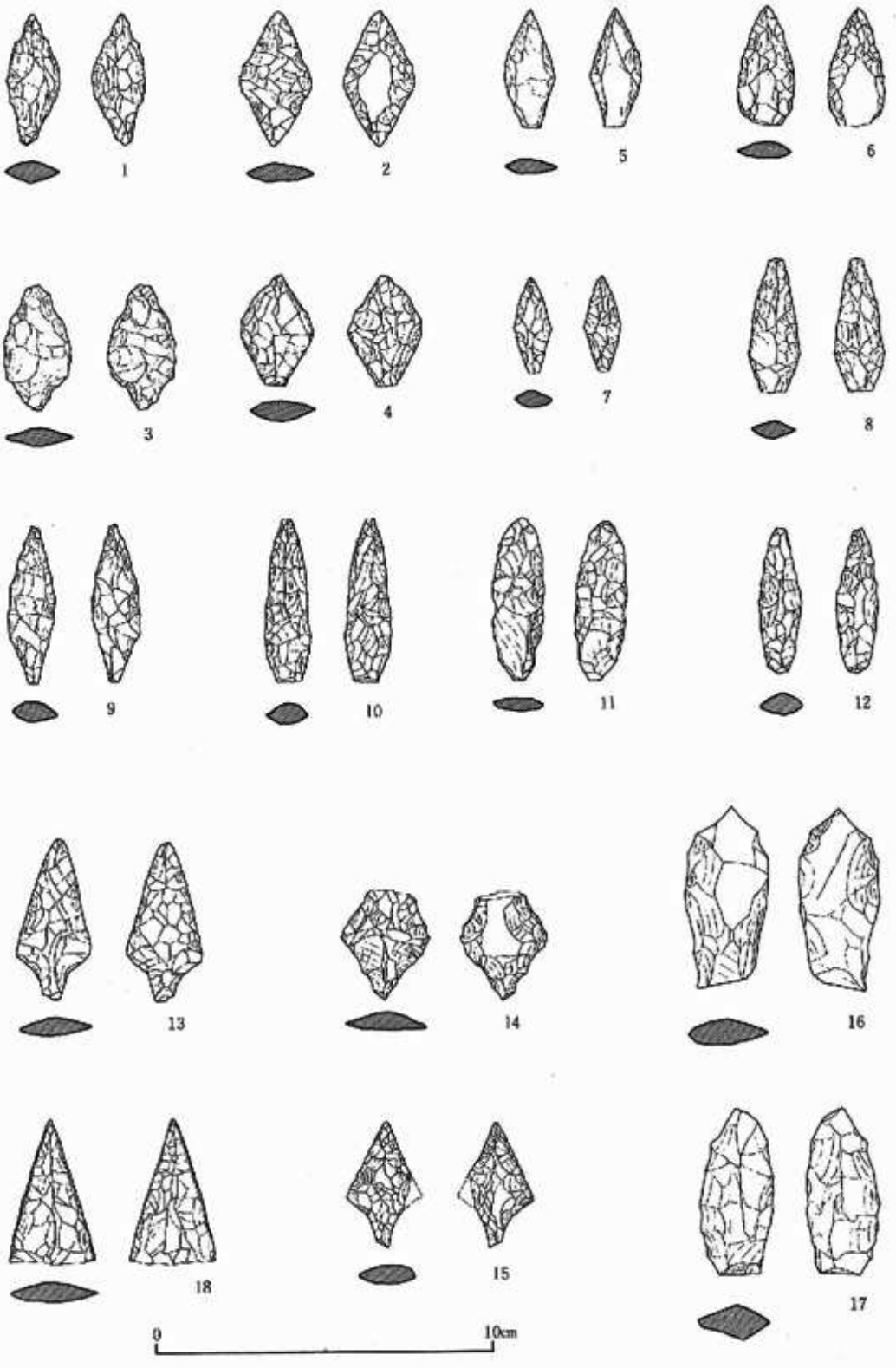
46は脚台上部に円形透穴の一部が残ることから台付無頸壺であることが知られる。体部は脚台部より連続して外上方にひろがり、最大径部より口縁部が内弯する。口縁端部は内面にむかって水平にのび先端は鈍い稜となっておわる。口縁部と体部の最大径部に各2条の凹線文を施す。口縁部に蓋の紐綴じ孔を2孔一対で穿っている。内外面ヘラミガキ仕上げ。黄橙色（2.5YR8/8）を呈し、非生駒西麓産の胎土。

中・小型甕は外面ヘラミガキで仕上げるもの48～52・54・55・57・59～61・68、外面ハケメ調整のもの53・56・47・66・67に分けられる。口縁部の形態は「く」の字形に外反し、端部に面をもつか丸くおわるかのいずれかが多い。端部を上方につまみ上げて、外面に凹線を施すものもある56。胎土は角閃石を雲母を多量に含む生駒西麓産が大部分を占める。外面に目の粗いタテハケメをみる47は石英と長石多量で雲母・角閃石少量の非生駒西麓産の胎土。

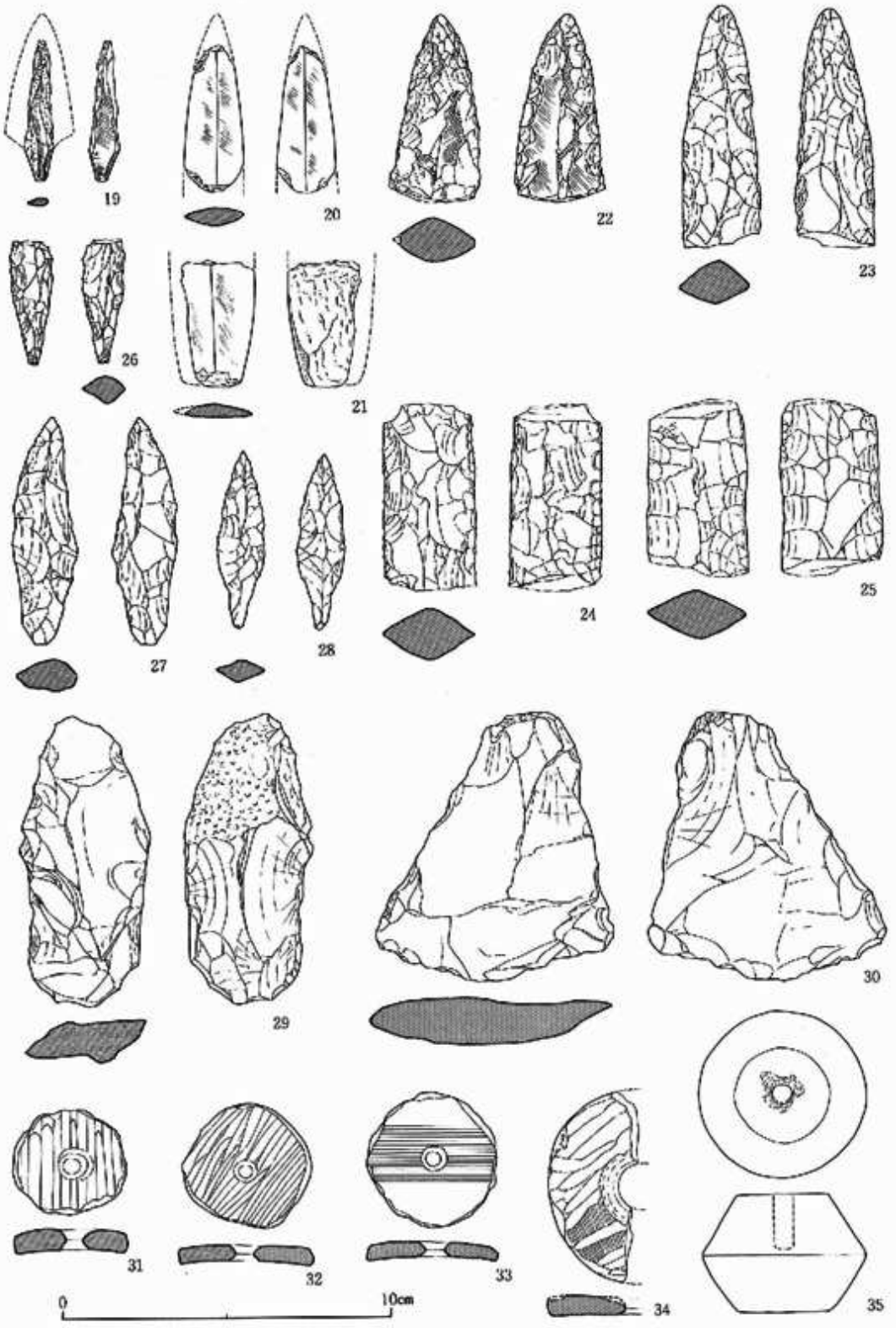
大型甕はハケメ調整のもの62・65、左上りのタタキメ＋ハケメ調整のもの、ヘラミガキ仕上げのもの64などがある。口縁端部はいじれもい上下に肥厚する形態。64の口縁端部には上下にヘラによる刻目が施されている。62は灰白色（2.5Y8/1）を呈する非河内産の胎土、63は灰白色5Y7/1を呈し、非生駒西麓産の胎土。

高杯には、水平口縁の端部が下方に垂下するA類72～74、椀状杯部を有するB類75～77、杯口縁部が立上るC類79に分けられる。高杯A類は口縁端部の拡張部に2条の凹線文をもつもの72・74と無文のもの73とがあり、いずれも内外面をヘラミガキで仕上げている。74は灰白色（2.5Y8/2）を呈し、非生駒西麓産の胎土。高杯B類には口縁端部が内面に肥厚し、口縁部外面に一条の凹線文を施すもの75と口縁部外面に1～2帯の簾条文を施すもの76・77とがある。いずれも内外面を丁寧なヘラミガキ仕上げ。浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈し、74と同様の非生駒西麓産胎土。高杯C類79は口縁部外面に4条の凹線文を施す。形態は第V様式高杯の祖型と考えられる。

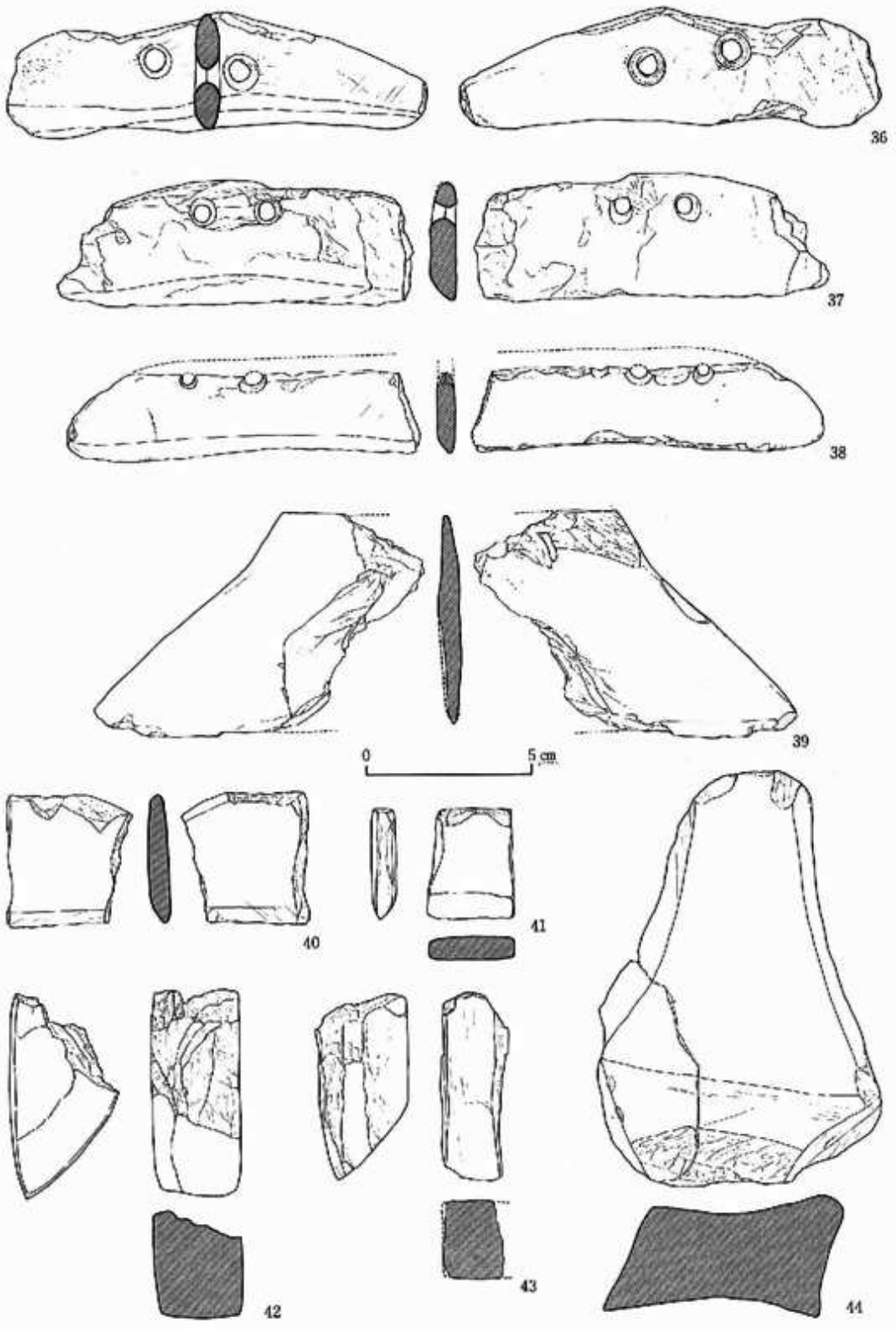
有文の鉢あるいは台付鉢には段状口縁を有し、腰部の張るA類78・80～82、単純口縁の椀状鉢部を有するB類83がある。鉢A類のうち80・81は体部上半に簾状文と刺突列点状の斜行簾状文を施し、82は口縁～体部上半に扇形文と波状文の交互施文、口縁部上端に刺突列点文を施す。82の胎土は非生駒西麓産。B類の台付鉢83は口縁部外面に4条の凹線文を施す。内外面ともにヘラミガキにより仕上げるが、体部外面には部分的に左上りのタタキメも認められる。



第72図　打製石器実測図（1/2）



第73図　打製石器・磨製石器・上製品実測図（1/2）



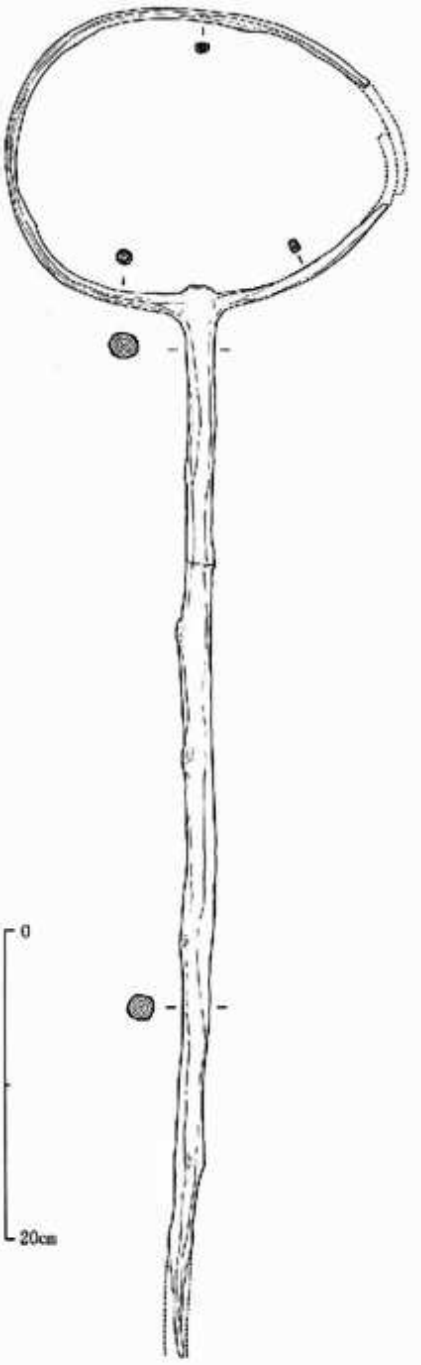
第74図　磨製石器実測図（1/2）

無文の台付鉢は器高10.4cmの小型品。外反口縁を有する鉢部と中実の脚柱を有する脚台部からなり、外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を行なう。

脚台69～71・84・86・87のなかで、84は有文の台付鉢B類、87は有文の台付鉢A類の脚台とみられる。84の裾部にヘラ描き鋸歯文、87の外面全体に竹管押圧文を施している。87の裾部内面の調整は目の粗いヨコハケによる。84の胎土は非生駒西麓産。その他の脚台については、高杯と台付鉢の両方を含むと思われる。いずれも脚上部に円板充塡が認められ、69・70・86の内面にはヘラ削りが行なわれている。

出土石製品・土製品・木製品

石鏃（第72図1～17・第72図19）　19は凸基有茎式の磨製石鏃。基部は残るが鏃身の周縁は欠損。鏑はなく全体に扁平な作りである。1～4は凸基無茎式の打製石鏃。1・3・4は厚手で剝離調整の粗いもの。2は長さ4cm・幅2cmを測る完形品。薄手で細かい周縁調整を施す。一面の中央に大剝離面を有する。5～14は凸基有茎式。5・7～10は細長い鏃身をもつ。5は両面に大剝離面を残す。8・9は粗い剝離調整を施す厚手のもので、8の鏃身中央に鏑が通る。10は細かな周縁調整を施した薄手のもので基部を欠く。11は未成品。長さ4.7cm・幅1.5cmを測る。6・13は幅広の凸基有茎式。ともに細かい周縁調整を施す。6は基部欠損。13は大型で長さ4.7cm・幅2.2cmを測る。12は中央の鏑が突出する厚手の凸基無茎式で溝、出土。14・15は三角形の鏃身をもつ凸基有茎式。14の調整は粗く、15は細かい調整を施す。未成品16は大剝離面を残す。17は鏑が通る厚手の未成品。12を除く石鏃は第10層出土。

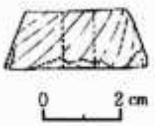


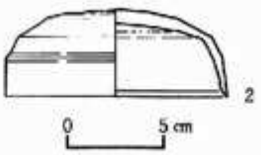
第75図　手網枠実測図（1/5）

石槍（第73図18・第73図22～25）　18は鋭い先端を残し、細かい縁辺剝離によって鋸歯縁を作り出した薄手のものである。22は両面に剝離調整を加えたのち、局部磨製を施したもの。先端は使用により鈍化しているところから楔などへの転用が考えられる。23も同じく先端に使用痕を有する。槍身24・25は断面菱形で中央に鎬が通る。24は細かい剝離調整を両縁に施す。いずれも第10層出土。

磨製石剣（第73図20・21）　基部21と先端部20とが出土した。断面杏仁形で中央に鎬が通る。基部の側縁および基端は握り部とするために刃潰しあるいは面取りを施している。第10層出土。

石錐（第73図26～28）　26は使用により先端部が欠損するが、明瞭な鎬が通る断面菱形の穿孔部をもつ。28は石鏃に類似するが、両面とも中央に突出する鎬を作り出して断面菱形を呈するところから石錐と考える。27は同様な形態の石錐未成品であろう。いずれも第10層出土。





第76図　上層出土遺物

不定形石器（第73図29・30）　29は一面に自然礫面を残す尖頭器状の石器。基部は調整によって円基状となる。30は三角形の頂部を欠く形態で両面に剝離痕をもつ。ともに第10層出土。

石庖丁（第74図36～38・40）　36は身幅の狭い半月形直線刃の形態。刃は片刃でかなり磨滅している。紐孔は直径約0.7cmの大きいものが2cmの間隔で穿孔されている。37・38も半月形直線刃形態で片刃を研出す。紐孔は直径約0.5cmで紐孔間は約1.5cmを測る。37は土坑1その他は第10層出土。

大型三角形石庖丁（第74図39）　全体の形状は截頭三角形を呈し、頂辺が凸出する。頂部の紐孔は欠損により不明。刃は両刃で薄く研出されている。土坑5出土。

扁平片刃石斧（第74図41）　刃幅2.6cm・長さ3.4cm・厚さ0.7cmを測る小型のもの。両側縁に着装用の刳込みがみられる。

柱状片刃石斧（第74図42・43）　42は刃幅2.4cm。刃の研出痕が明瞭に残る。刃の磨滅は認められない。破損部に2次的な焼痕がある。43は刃部と側縁の一部だけが残る。刃幅は不明であるが身の断面形よりみて42よりも小型のものと思われる。

砥石（第74図44）　もともと直方形であったとみられるが、表裏は使用によって凹面となり、両側面もまた変形が著しい。和泉砂岩製とみられる。

土製円板（第73図31～35）　31～33はいずれも土器片を転用した紡錘車。表面にヘラミガキや櫛描文が残されている。円板状を呈するが、周縁の整形はあまり丁寧でない。31・33は打欠き面をそのまま残し、32は打欠いたのち磨くが正円形ではない。中心部に紡軸を通すための孔が両面より穿たれている。34も土器片転用の円板であるが、直径約6cmの大型品で中心に径

1.3cm以上の円孔をもつことから発火具の舞錐に装着されたものと思われる。35は算盤玉形を呈し、直径5cm・厚さ3.6cmを測る。土器片転用ではなく土製品として製作されたものであるが、焼成前に穿たれた中心の孔は未貫通である。孔の周囲にみられる剥離は使用痕。この土製品の用途は不明であるが、何かの軸受けかもしれない。35は土坑1、その他は第10層より出土した。

手網枠（第75図）　長さ68cm以上の柄の先に自然の枝分かれ部分を利用した26cm×20cmの楕円形網枠を有するもの。いわゆる玉網である。木芯をもつ柄は直径約1.9cmの細かいもの。網枠部分は枠木となる細枝に削り痕が認められる。楕円形に曲げた細枝は欠損部分において紐で縛って枠としたと推定される。樹種は不明であるが広葉樹。土坑1の下部より出土した。

上層出土遺物（第76図1・2）

2は第4層出土の須恵器杯蓋。直立する口縁部とやや丸みをもった天井部とからなる。口縁部と天井部の境に稜をもつ。天井部には全体の4/5に左回りの回転ヘラ削りを施している。5世紀末あるいは6世紀初頭のものとみられる。1は第3層内より2次堆積の状態で出土した石製紡錘車。断面台形を呈し、直径4cm・厚さ1.5cmを測る。中心に両面穿孔の径0.7cmの円孔。側面に渦巻状の斜線文を線刻している。緑色の石材を使用。

Ⅳ. まとめ

1．今回の調査地は、従来の調査結果より方形周溝墓分布域に属するものとみられていたが、掘立柱の柱根や井戸の存在より集落の一部であることが明らかとなった。東に約15m・西に約20mにおいて、それぞれ方形周溝墓が検出されているが、いずれも弥生中期後半の遺構であるところから、瓜生堂遺跡における墓域と建物分布域（居住域）は明確な一線で画されることなく隣接した位置にひろがっていったことが推定される。この状況は第2号方形周溝墓をはじめとする多数の周溝墓とともに掘立柱建物と竪穴住居の跡が検出された小阪ポンプ場内の調査結果とも一致する。

2．今回検出された遺構のなかで溝1～4のような円形周溝は小阪ポンプ場内で検出されたSD07・08と類似する。なかでも直径2.5mほどの小環境溝である溝2～4は、SD07・08とよく似ており、溝で囲まれた内部が溝の外よりも10センチ前後低い小竪穴状を呈する特徴からは、簡単な上屋をもつ貯蔵穴のような性格が示唆される。

3．掘立柱の柱穴は調査地内の全域より100個以上検出されたが、建物プランあるいは柱通りを復原できるものを見い出すことが難しい。これは遺構面がシルト～中粒砂の崩れやすい土質であることにより、建替えなどの際に簡単に整地・削平が行なわれたためであろう。

4．土坑も多数検出されたが、そのなかには遺構として意識的に掘ったものかどうか疑わしいものも多い。土坑1は埋土の上部より大型器台2個体と広口壺2個体が押潰された状態で出土したが、これらの土器は器台と広口壺がセットとして置かれていたものと思われる。土坑南肩部より出土した完形の台付細頸壺とともに、土坑を埋める際の祭祀に使用された可能性が指

摘できる。

5．井戸1底部より出土した完形の水差もまた、水とかかわる祭祀の存在が示唆されるものである。鬼虎川遺跡の第4次調査においても同様の素掘り井戸の底より第Ⅳ様式に属する無文の水差が1点出土している[30]。瓜生堂・鬼虎川の2例はともに涌水が少なく、また井戸としての使用による壁面の崩落なども認められなかったことから、この種の素掘り井戸は日常的な飲料水確保とは別の目的で掘られ、きわめて短い期間使用されただけで水汲み用に使われた水差とともに埋戻された可能性が指摘できる。

6．出土土器は、遺構内および遺物包含層（第10層）ともに第Ⅳ様式主体と考えられる。とりわけ土坑1出土土器は一括資料とみられ凹線文を施した広口壺・水差・器台と簾状文を施した広口壺・台付鉢、無文の広口壺、台付細頸壺が同時期であることを明らかに示している。すなわち、簾状文を施した2点の土器のうち広口壺は簾状文本来の組合せでは考え難い波状文とともに施文され、口縁部の形態や口縁内面にも波状文を施す特徴など凹線文土器分布域の影響を強く受けていることが知られる。台付鉢もまた簾状文原体に幅広のものを使用し、ブレス間隔と櫛目が細かく、櫛の条痕が浅いという特徴をもつが、この特徴は台付無頸壺において知られている第Ⅳ様式末あるいは第Ⅴ様式最古の簾状文と同様である[31]。つまり土坑1出土土器に施された簾状文は退化がかなり進んだ段階のものといいうるのである。いっぽう、凹線文を施した土器についても大型器台や受口状口縁を有する広口壺に左上りの明瞭なタタキメを残すこと、受口状口縁広口壺にみられる貼付凸帯に斜線状の刻目が施されていることなどの点で、この種の土器では新しい部類に属すると考えられる。細頸壺に「ハ」の字脚台が付くことも加えると土坑1出土土器の時期は第Ⅳ様式を前後に2分した場合、後半期に比定されるのである。

7．石器のなかでは石鏃・石槍など武器の出土数が比較的多く、石斧など工具の数は少ない。これは第Ⅳ様式の時代には工具の鉄器化がかなり進行していたことを示しており、大型蛤刃石斧の消滅にとりわけ明瞭に表わされている。これに対して、第Ⅳ様式における多数の石製武器は高地性集落の出現とともに畿内～瀬戸内一円で集落間の緊張が高まったことを示すものとされ、瓜生堂も同様の情況下におかれていたことが推定できる。

8．木器として手網枠1点が出土した。自然の枝分かれを利用した網枠部分が長径26cmの楕円形を呈する手網は類例のほとんど知られていないものであり、弥生時代の手網に大小各種のものがあることを示している。

9．掘立柱の柱根は基部に径約50cmの礎板状部分を削り出している。こうした柱根は瓜生堂ではこれまでにもしばしば知られており、柱根の下に別木を組合せて根がらみとしたものや礎板を有するものの割合は畿内の弥生遺跡のなかでもとくに高いことが知られる。

註

1） 「瓜生堂遺跡」『河内古代遺跡の研究』 花園高校地歴部 1970

2） 「瓜生堂遺跡－中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査概報－」 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971

「瓜生堂遺跡II」 瓜生堂遺跡調査会 1973

「瓜生堂遺跡III」 瓜生堂遺跡調査会 1981

3）安田喜憲 「瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析」『瓜生堂遺跡II』 瓜生堂遺跡調査会 1973

4） 「瓜生堂－近畿自動車道吹田天理線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－」 （財）大阪文化財センター 1980

5） 発掘調査には熊山龍一・西川和正・村田行生・山形勝三、整理および報告書作成には太田圭子・久保恵里子・佐野留口子・澤田礼子・森由里子・羽田野香・広瀬晴信・宮澤秀子・柳瀬久美子の補助員諸氏が参加した。

6）梅山彦太郎・市原実 「続大阪平野発達史」 古文物学研究会 1985

7） 註3）に同じ

8） 「巨摩・瓜生堂－近畿自動車道吹田天理線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」 （財）大阪文化財センター 1982

「若江北－近畿自動車道吹田天理線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」 （財）大阪文化財センター 1983

9） 「瓜生堂上層・皿池遺跡」 東大阪市遺跡保護調査会 1980

10） 注9）「巨摩・瓜生堂」および「山賀（その4）－近畿自動車道吹田～天理線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」 （財）大阪文化財センター 1984

11） 「長原－近畿自動車道吹田～天理線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」 （財）大阪文化財センター 1978

12） 「瓜生堂II－中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査報告書－」 瓜生堂遺跡調査会 1973

13） 「瓜生堂遺跡III」 瓜生堂遺跡調査会 1981 P137

14） 「鬼虎川遺跡調査概要1」 東大阪市遺跡保護調査会 1980

15）亨木隆裕 「畿内第V様式」『弥生文化の研究』第4巻 1987 P92～94